

# 京都府遺跡調査報告書

第 26 冊

内里八丁遺跡 I

1999

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1



内里八丁遺跡遠景（南西から）



A地区第3遺構面（上層水田跡：南西から）



A地区上層水田跡（南から）



B地区井戸 S E 04 (南から)

## 序

京都府八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂に所在する、内里八丁遺跡に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第26冊として、ここに刊行いたします。

内里八丁遺跡の発掘調査は、第二京阪自動車道路(京都南道路)建設に伴い、建設省および日本道路公団の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、昭和63年度から平成5年度までの6年間にわたって実施致しました。各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』に掲載してきたところであります。

本書は、各年度の概要報告で果たせなかった詳細な事実の報告を行うとともに、それらの諸事実を分類・集成し、考察を加えたもので、これをもって記録保存の責務を果たしたものと考えます。

刊行にあたりましては、建設省および日本道路公団には現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会・八幡市教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに助言を頂くことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の古代集落遺跡や水田遺構研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成11年12月

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 樋口 隆康

## 例 言

1. 本書は、京都府八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂に所在する内里八丁遺跡の報告書であり、遺跡を南北に貫く防賀川の左岸で調査を実施したA・B地区を対象としている。なお、これ以外の地区については、『内里八丁遺跡』Ⅱとして平成12年度に報告書の刊行を予定している。
2. 内里八丁遺跡は、第二京阪自動車道路建設(京都南道路)に伴い、日本道路公団と建設省の依頼を受けて、発掘調査を実施したものである。現地調査の期間は、昭和63年度の試掘調査に始まり、平成10年度までの11年間を要した。このうち本書で報告するA・B地区については、建設省の依頼を受けて昭和63年度から平成5年度までの6年間で現地調査を実施したものである。
3. 現地調査および本報告書にかかる経費は、建設省近畿地方建設局ならびに日本道路公団大阪建設局が負担した。
4. 本書に掲載した遺構図は第6座標系を用い、方位は全て座標北をさす。
5. 写真撮影は、遺構を各年度担当者と一部を調査第1課資料係主任調査員田中 彰が、遺物写真は田中 彰が行った。
6. 執筆分担  
竹原一彦-----第1章、第3章-1-1~3、第3章-2、第3章-3-3・4  
                  第3章-4-2、第3章-5、第5章-1  
森下 衛-----第2章、第3章-1-4、第3章-3-1・2・5  
                  第3章-4-1、第4章、第5章-2
7. 本報告書の作成は、各年度の担当者の協力のもとに、調査第2課第3係主任調査員竹原一彦と調査第1課資料係調査員森下 衛が行い、編集は調査第1課資料係調査員河野一隆の協力のもと、竹原・森下が行った。
8. 本書に掲載した遺物・写真・図面などは当分の間、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが保管している。

# 本文目次

第1章 序説	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の体制	3
第2章 位置と環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	4
第2節 遺跡の歴史的環境	5
第3章 検出遺構	
第1節 弥生時代後期後半～古墳時代初頭	9
1. 水田跡 2. 方形周溝墓ほか 3. 溝 4. 土器溜まり	
第2節 古墳時代中期末～後期初頭	16
1. 竪穴式住居跡	
第3節 飛鳥時代～平安時代	17
1. 竪穴式住居跡 2. 掘立柱建物跡 3. 柵跡 4. 溝 5. 井戸	
6. 土坑 7. 土器溜まり	
第4節 平安時代末～鎌倉時代	23
1. 掘立柱建物跡 2. 井戸	
第5節 鎌倉時代以降	24
第4章 出土遺物	
第1節 出土遺物の概要	26
第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期	27
1. 器種分類 2. 出土遺物	
第3節 古墳時代中期末～後期初頭	36
1. 器種分類 2. 胎土からみた分類 3. 出土遺物	
第4節 飛鳥時代～平安時代	36
1. 器種分類 2. 胎土からみた分類 3. 出土遺物	
第5節 平安時代末～鎌倉時代	53
1. 井戸S E03出土土器 2. 包含層出土遺物	

第6節	石器・石製品-----	55
第5章 総括		
第1節	水田遺構-----	56
第2節	弥生時代後期末～古墳時代初頭の出土遺物と遺構の変遷-----	61

## 挿 図 目 次

第1図	内里八丁遺跡調査区配置図-----	2
第2図	調査地周辺遺跡分布図-----	6
第3図	器種分類図(1)-----	28
第4図	器種分類図(2)-----	29
第5図	器種分類図(3)-----	30
第6図	S D40出土遺物-----	32
第7図	器種分類図(4)-----	38
第8図	器種分類図(5)-----	39
第9図	器種分類図(6)-----	40
第10図	井戸 S E 02出土横櫛-----	50

## 表 目 次

第1表	内里八丁遺跡調査組織-----	3
第2表	内里八丁遺跡水田跡観察表-----	57
第3表	内里八丁遺跡出土遺物観察表-----	63

## 図 版 目 次

図版第1	遺構平面図(1)
図版第2	A地区上層水田跡平面図
図版第3	A地区上層水田跡A種稲株痕分布図

- 図版第4 A地区上層水田跡B種稻株痕分布図  
図版第5 上層水田跡稻株痕分布状況図(1)  
図版第6 上層水田跡稻株痕分布状況図(2)  
図版第7 上層水田跡稻株痕分布状況図(3)  
図版第8 A地区上層水田跡稻株痕実測図  
図版第9 下層水田跡A種・B種稻株痕およびC種小穴断面図  
図版第10 遺構平面図(2)  
図版第11 方形周溝墓・埋葬主体部実測図  
図版第12 竪穴式住居跡実測図  
図版第13 遺構平面図(3)  
図版第14 A地区検出遺構平面図  
図版第15 B地区検出遺構平面図  
図版第16 掘立柱建物跡実測図(1)  
図版第17 掘立柱建物跡実測図(2)  
図版第18 掘立柱建物跡実測図(3)  
図版第19 掘立柱建物跡実測図(4)  
図版第20 掘立柱建物跡実測図(5)  
図版第21 掘立柱建物跡実測図(6)  
図版第22 掘立柱建物跡実測図(7)  
図版第23 掘立柱建物跡実測図(8)  
図版第24 井戸実測図  
図版第25 土器実測図(1)  
図版第26 土器実測図(2)  
図版第27 土器実測図(3)  
図版第28 土器実測図(4)  
図版第29 土器実測図(5)  
図版第30 土器実測図(6)  
図版第31 土器実測図(7)  
図版第32 土器実測図(8)  
図版第33 土器実測図(9)  
図版第34 土器実測図(10)  
図版第35 土器実測図(11)  
図版第36 土器実測図(12)  
図版第37 土器実測図(13)  
図版第38 土器実測図(14)

- 図版第39 土器実測図(15)
- 図版第40 土器実測図(16)
- 図版第41 土器実測図(17)
- 図版第42 土器実測図(18)
- 図版第43 土器実測図(19)
- 図版第44 土器実測図(20)
- 図版第45 土器実測図(21)
- 図版第46 土器実測図(22)
- 図版第47 土器実測図(23)
- 図版第48 土器実測図(24)
- 図版第49 土器実測図(25)
- 図版第50 土器実測図(26)
- 図版第51 瓦類拓影図(1)
- 図版第52 瓦類拓影図(2)
- 図版第53 石器・石製品実測図
- 図版第54 (1)調査前遺跡遠景(南から) (2)調査前遺跡遠景(北から)  
(3)A地区表土掘削風景(北西から)
- 図版第55 (1)A地区上層水田跡検出作業風景(南東から)  
(2)A地区上層水田39水田面検出作業風景(西から)  
(3)A地区上層水田跡全景(南東から)
- 図版第56 (1)A地区上層水田跡(南東から) (2)A地区上層水田57～59(南から)  
(3)A地区上層水田跡稲株痕調査風景(南から)
- 図版第57 (1)A地区上層水田跡東部(北から)  
(2)A地区上層水田61南東部土器出土状況(東から)  
(3)A地区上層水田跡洪水砂内土器出土状況
- 図版第58 (1)A地区上層水田跡稲株痕 (2)上層水田跡稲株痕  
(3)上層水田跡稲株痕(白色ペイント・東から)
- 図版第59 (1)A地区上層水田33稲株痕調査風景(南から)  
(2)水田33稲株痕調査風景(南から)  
(3)水田33稲株移植列(南から)
- 図版第60 (1)A地区稲株痕測量調査風景(南東から)  
(2)上層水田57～60稲株痕測量調査状況(南西から)  
(3)上層水田跡雨後滞水風景(南東から)
- 図版第61 (1)A地区下層水田跡畦畔検出状況(南から) (2)A地区下層水田跡全景(南東から)  
(3)A地区下層水田跡南西部(東から)

- 図版第62 (1) A地区下層水田跡77~84(東から) (2) A地区下層水田跡82~88(北東から)  
(3) 上層・下層水田に残る稲株痕
- 図版第63 (1) A地区上層水田跡畦畔断面(西から)  
(2) A地区上層水田53東畦畔検出作業風景(北から)  
(3) A地区東壁土層断面(西から)
- 図版第64 (1) B地区南東部水田跡(南から) (2) B地区南西部水田跡(南東から)  
(3) B地区水田跡土器溜まり S X 10(南から)
- 図版第65 (1) A地区上層水田跡稲株移植列 (2) A地区上層水田跡稲株痕(左:A種 右:B種)  
(3) 同上稲株痕断面
- 図版第66 (1) A地区上層水田跡稲株痕A種 (2) A地区上層水田跡稲株痕A種・C種小穴  
(3) 同上稲株痕断面
- 図版第67 (1) A地区上層水田跡稲株痕B種 (2) 上層水田跡稲株痕B種  
(3) 上層水田跡稲株痕B種・C種(中央)
- 図版第68 (1) 上層水田跡稲株痕A種断面 (2) 上層水田跡稲株痕A種  
(3) 同上稲株痕断面
- 図版第69 (1) A地区上層水田跡C種小穴 (2) 同上小穴断面  
(3) A地区上層水田跡C種小穴断面
- 図版第70 (1) A地区上層水田面に残る足跡 (2) 同上足跡完掘状況  
(3) A地区上層水田跡に残る足跡と稲株痕A種
- 図版第71 (1) A地区第2遺構面全景(北から) (2) A地区溝S D 37~39全景(北から)  
(3) 溝S D 39土師器高杯出土状況(北から)
- 図版第72 (1) A地区第2遺構面方形周溝墓調査風景(北西から)  
(2) 方形周溝墓全景(南から)  
(3) 方形周溝墓埋葬主体部 S X 11(南から)
- 図版第73 (1) B地区埋葬主体部 S X 12全景(南から) (2) B地区土器溜まり S X 05(南から)  
(3) B地区土器溜まり S X 09(南から)
- 図版第74 (1) B地区土器溜まり S X 07調査風景(西から)  
(2) B地区土器溜まり S X 07(北から) (3) B地区土器溜まり S X 08(東から)
- 図版第75 (1) B地区竪穴式住居跡 S H 02全景(南西から)  
(2) 竪穴式住居跡 S H 02竈内遺物出土状況(南東から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H 03全景(南東から)
- 図版第76 (1) A地区第1遺構面全景(南から) (2) A地区第1遺構面全景(北から)  
(3) A地区掘立柱建物跡 S B 01~04全景(南から)
- 図版第77 (1) A地区掘立柱建物跡 S B 04(東から)  
(2) 掘立柱建物跡 S B 03(東から)

- (3)掘立柱建物跡 S B02(東から)
- 図版第78 (1) A地区掘立柱建物跡 S B01(東から)  
 (2) A地区第1遺構面(北から) (3) A地区掘立柱建物跡 S B05(東から)
- 図版第79 (1) B地区第1遺構面北部(南から) (2) B地区掘立柱建物跡 S B19(南西から)  
 (3) B地区 S D53遺物出土状況(北から)
- 図版第80 (1) B地区掘立柱建物跡 S B10・14・15全景(南から)  
 (2) B地区掘立柱建物跡 S B07・08全景(西から)  
 (3) B地区掘立柱建物跡 S B20全景(東から)
- 図版第81 (1) B地区掘立柱建物跡 S B14(南から)  
 (2) B地区掘立柱建物跡 S B15(東から)  
 (3) 掘立柱建物跡 S B15柱穴断面(西から)
- 図版第82 (1) A地区第1遺構面井戸 S E02全景(南から)  
 (2) 井戸 S E02遺物出土状況(南から) (3) B地区井戸 S E04全景(南から)
- 図版第83 (1) B地区井戸 S E03遺物出土状況①(西から)  
 (2) B地区井戸 S E03遺物出土状況②(西から)  
 (3) B地区井戸 S E03遺物出土状況③(西から)
- 図版第84 (1) B地区第1遺構面須恵器托出土状況(東から)  
 (2) 同須恵器托出土状況(南から) (3) B地区第1遺構面土坑 S K11(北から)
- 図版第85 (1) B地区第1遺構面全景(南から) (2) 同島島遺構(南から)  
 (3) B地区掘立柱建物跡 S B06(南から)
- 図版第86 出土遺物(1)
- 図版第87 出土遺物(2)
- 図版第88 出土遺物(3)
- 図版第89 出土遺物(4)
- 図版第90 出土遺物(5)
- 図版第91 出土遺物(6)
- 図版第92 出土遺物(7)
- 図版第93 出土遺物(8)
- 図版第94 出土遺物(9)
- 図版第95 出土遺物(10)
- 図版第96 出土遺物(11)
- 図版第97 出土遺物(12)
- 図版第98 出土遺物(13)
- 図版第99 出土遺物(14)
- 図版第100 出土遺物(15)

- 图版第101 出土遺物(16)  
图版第102 出土遺物(17)  
图版第103 出土遺物(18)  
图版第104 出土遺物(19)  
图版第105 出土遺物(20)  
图版第106 出土遺物(21)  
图版第107 出土遺物(22)  
图版第108 出土遺物(23)  
图版第109 出土遺物(24)

# 第1章 序 説

## 第1節 調査の経緯

今回報告する内里八丁遺跡の発掘調査は、一般国道1号(第二京阪道路)建設に先立って実施されたものである。第二京阪道路は、京阪間の新たな広域幹線ネットワークの形成を目的として計画された、京都市と大阪府門真市とを結ぶ総延長約30kmの自動車専用道路であり、日本道路公団が施工するものである。また、京都南道路は、第二京阪道路に併設される一般道(国道1号線バイパス)であり、建設省によって施工されることになった。この第二京阪道路と京都南道路の開通によって、交通量の増加による慢性的な京阪間の交通渋滞緩和を目指し、計画されることになった。

道路建設ルート上の発掘調査対象となる埋蔵文化財包蔵地は、これまでに京都府域(約8.8km)において11遺跡が周知されている。北から順に、久世郡久御山町では市田齊当坊遺跡・佐山遺跡・佐山尼垣外遺跡の3遺跡、八幡市では上津屋遺跡・内里八丁遺跡・新田遺跡・女谷横穴・荒坂遺跡の5遺跡、京田辺市では新田遺跡・荒坂横穴・荒坂古墳状隆起の3遺跡が含まれ、これらの遺跡が発掘調査の対象となった。

当調査研究センターでは、建設省(昭和63～平成5・10・11年度)・日本道路公団(平成6～11年度)の依頼を受け、昭和63年から継続してルート上の発掘調査を実施した。

ここでは、内里八丁遺跡の過去の調査成果を簡単にふりかえることとする。

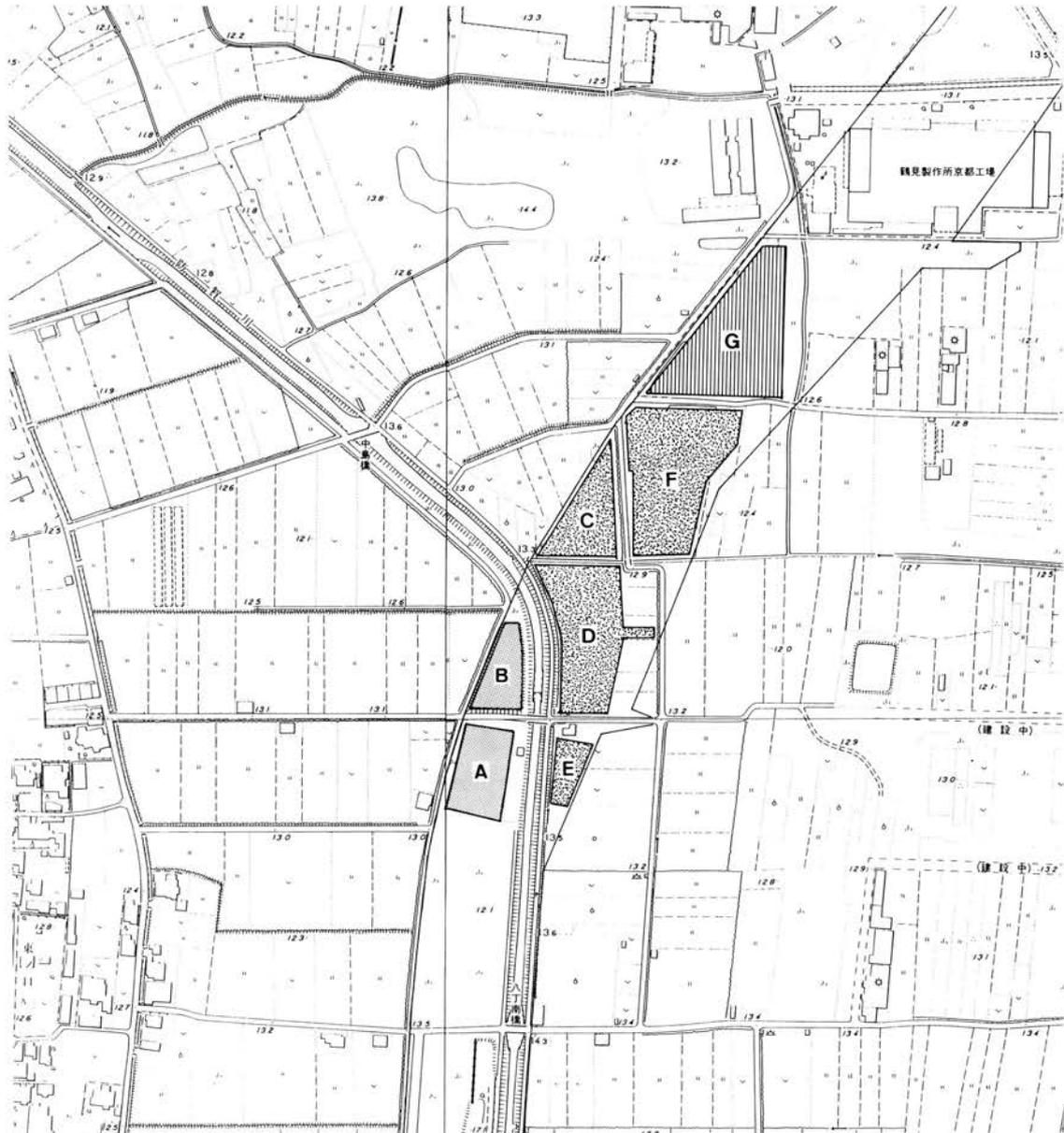
昭和63年度(平成元年2月1日～3月8日) 八幡市内里の今福・内垣内地区で、内里八丁遺跡の範囲確認の試掘調査を行った<sup>(注1)</sup>。調査の結果、調査地は木津川の旧河道に相当し、中世～近世遺物を少量含むシルト層を検出したが、遺構の検出はみられなかった。

平成元年度(平成元年5月18日～平成2年2月27日) 八幡市字内里小字八丁・中島・日向堂地区で内里八丁遺跡の試掘調査を実施した<sup>(注2)</sup>。

調査対象地内の13か所に幅約3mの試掘トレンチを設けた。第1～8トレンチで木津川旧河川部の土層堆積を確認する。第6・9・11トレンチからは溝などの遺構を検出した。防賀川の東側第12トレンチで島島の一部を検出した。

遺構の検出をみた第6・9・11・12トレンチは、面的調査の対象とした。現地は農道・幹線水路・防賀川によって分割され、南から北方向に順次A～Cの調査地区名称を与えた。同年度後半、A地区で第1遺構面の面的調査を開始した。

平成2年度(平成2年4月17日～平成3年2月27日) A地区で第1遺構面と第2遺構面の調査を実施した<sup>(注3)</sup>。第1遺構面から掘立柱建物跡4棟・井戸跡・溝を検出する。第2遺構面から方形周溝墓1基・溝を検出した。第2遺構面下ではさらに遺構面が存在することも確認した。



第1図 内里八丁遺跡調査区配置図

平成3年度(平成3年4月16日～平成4年1月10日) A地区第2遺構面と第3遺構面の調査を行った。<sup>(注4)</sup>第2遺構面では、新たに掘立柱建物跡1棟を検出した。第3遺構面では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の水田跡と、水田面に残る多数の稲株痕を検出した。第3遺構面の下層にも水田跡(第4遺構面)が存在することを確認した。

平成4年度(平成4年4月23日～12月18日) A地区第4遺構面の調査を実施した。<sup>(注5・6)</sup>同調査区での調査終了後、B地区での発掘調査を開始した。A地区第4遺構面では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の水田跡と多数の稲株痕を検出した。

B地区では第1遺構面の調査を行った。平安時代後期から鎌倉時代の遺構面であり、掘立柱建物跡1棟・井戸・鳥畠を検出した。

平成5年度(平成5年5月20日～平成6年2月10日) B地区第2・3遺構面の調査を実施

(注7) 第2遺構面は飛鳥時代～平安時代に属する遺構面であり、掘立柱建物跡19棟・井戸・溝などを検出した。第3遺構面は弥生時代末～古墳時代の遺構面で、A地区下層水田跡に対応する水田跡・墓・土坑などを検出した。

内里八丁遺跡のうち、防賀川以西のA地区とB地区の発掘調査を終了した。

## 第2節 調査の体制

内里八丁遺跡発掘調査における調査組織は、以下のとおりである。

第1表 内里八丁遺跡調査組織

調査年度	原因者	調査主体者	調査責任者	事務局	調査担当 責任者	調査担当
昭和63年度	建設省	福山敏男	荒木昭太郎	田中秀明	中谷雅治 杉原和雄	調査第3係長 小山雅人 調査員 三好博喜
平成元年度	建設省	福山敏男	荒木昭太郎	山本 勇	中谷雅治 杉原和雄	調査第3係長 小山雅人 調査員 荒川 史
平成2年度	建設省	福山敏男	堤圭三郎 松坂寛支	小林将夫	中谷雅治 安藤信策	調査第3係長 小山雅人 調査員 竹原一彦
平成3年度	建設省	福山敏男	松坂寛支	小林将夫	中谷雅治 安藤信策	調査第3係長 小山雅人 調査員 竹原一彦
平成4年度	建設省	福山敏男	城戸秀夫	佐伯拓郎	中谷雅治 安藤信策	調査第3係長 小山雅人 調査員 竹原一彦 調査員 筒井崇史
平成5年度	建設省	福山敏男	城戸秀夫	佐伯拓郎	中谷雅治 安藤信策	調査第3係長 小山雅人 調査員 竹原一彦

### 調査協力者（順不同・敬称略）

佐原 眞・工楽善通・寺沢 薫・深澤芳樹・金原正明・日野 宏・高谷好一・阿部健一・古川久雄・田中耕司・高橋 学・井上智博・後藤信義・入江正則・藤原宏志・柳瀬昭彦・西田健彦・森本 徹・中野益男・服部共生・小林秀典

### 調査参加者（順不同）

滝脇喜充・塚本映子・中原昌弘・東 高志・新庄一秀・田中悦子・柳田剛史・高野由美子・俵 智子・浜中邦弘・脇田友子・木下智保・岩永篤彦・牧田佳子・寺本智美・古川誓二・岡村忠志・森田千代子・奥平廣子・与十田節子・福田玲子・北村 猛・古城悟志・古谷哲也・今 芳也・近藤和枝・後藤尚規・榛村昌樹・遠山光嗣・中尾友子・中岡和男・西村華子・樋野祥子・福田倫子・福田美枝・本田 香・山岡邦章・山内基弘・山中道代・山下敬子・伊藤こず江・北山貴美子・平松久和・坂東哲也・眞弓拓也・永澤拓志・有働一哉・豊田拓也・山端紀明・前田 稔・菅谷友一・中前幸子・高島明日香・永濱寛子・中村幸子・由水ゆう子・福島美保・羽生夕紀子・吉田 幸・富安容子・谷本和歌子・与十田麗子・栃木道代・平井真由美・辻井和子

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里から上奈良に所在する。

八幡市は、京都府南部の大阪府との府境に位置する。山城盆地の西南部にあたり、その市域は、西～南部が石清水八幡宮が鎮座する男山から連なる丘陵部、東～北部が木津川によって形成された沖積平野によって構成される。内里八丁遺跡は、このうち市域北東部の平野部に位置する。

遺跡の北東、約4kmには、かつて淀川流域の遊水池として機能した巨椋池が存在した。山城盆地南半部を北流する木津川は、長い歴史の中で、これに流入したり分離したりと、その流路を時代とともに変化させてきた。そして現在の木津川は、内里八丁遺跡の北東部で大きく流れを西方へ変え、北西方向へ流れた後、宇治川そして桂川と合流し淀川となるが、これは明治以降、流路の付け替えなどにより安定した流路が人工的に構築されて以後の姿である。木津川は、こうした長い歴史の中で、その流域縁辺部に自然堤防と呼ばれる微高地を多数形成してきた。これらは、幾たびも繰り返されたその流路の変遷に伴い、流域の各所に複雑に分布している。しかも、中・近世以後の多量の土砂の堆積作用によって、すでに地表下に埋没し、その痕跡を確認することが困難なものも多い。

こうしたなかで、現在の八幡市北東部の平野部においては、一帯がほ場整備されるまでの地形図や空中写真によって、木津川旧流路やこれによって形成された自然堤防が比較的明瞭に確認される。これによると、一帯は現在のところ比較的平坦な水田地帯となっているものの、かつては付近を流れていたと思われる木津川をはじめとする大小の河川の痕跡や、これらによって形成された自然堤防が随所に認められる。そして、内里八丁遺跡が、現在では水田下に埋没している自然堤防上に立地していることも容易に確認されるのである。この遺跡の立地する自然堤防の形成に関して、最も注目される旧河道は、旧蜻蛉尻川と称される現防賀川の西側を、これに平行して走る河道の痕跡である。この旧河道は、現水田畦畔からすれば幅50m近くある大規模なもので、木津川の旧流路と考えられている。

旧河道の痕跡を地形図等から復原すると、現岩田集落の南東部で木津川から分岐し、一旦西方へ蛇行気味に流れた後、ほぼ直角に北方へ流れを変え、内里集落の東側を北上する。その後、上奈良集落の南側で再び西方へ直角気味に折れ、戸津集落の北側で北上する流れと、西方へ向かう流れとに分岐する。このうち、一方は川口集落付近からさらに北流するもので、もう一方はそのまま男山丘陵東麓付近まで西流し、北へ折れて旧淀川へ流入していたものと考えられる。

こうした旧河道によって形成された自然堤防は、現在では水田下に埋没しているものも多いが、平地部に点在する現集落や数多くの集落遺跡の分布からおおまかに復原することができる。すな

わち、その東岸部では、岩田・上奈良・下奈良・二階堂などの現集落、そしてこれらを結ぶように、西岩田遺跡・内里八丁遺跡・上奈良遺跡・上奈良北遺跡・出垣内遺跡・今里遺跡・下奈良遺跡などが帯状に分布しており、これらが明らかに自然堤防上に立地していることが確認される。また、西岸部でも内里・戸津などの現集落と、これに一部重複して新田遺跡・内里五丁遺跡・戸津遺跡などが分布し、東岸部と同様のことが確認されるのである。このように、八幡市北東部の平地部の地形は、上記の旧河道によって大きく二分され、ここに分布する数多くの集落遺跡も両岸に形成された自然堤防と深く結びついて立地しているといえる。

さらに注目される点として、この旧河道を境に、東岸の岩田・上奈良・下奈良の集落が、かつては久世郡に属していたとされることが上げられる。近年の南山城地域の古代条里制に関する研究<sup>(注8)</sup>においても、古代久世郡と綴喜郡との郡境が男山丘陵の先端付近から東方へいくと、上記の旧河道に沿うように復原されている。こうした見解に従えば、旧河道西岸の新田遺跡・内里五丁遺跡・戸津遺跡などは古代山城国綴喜郡有智郷に、東岸の内里八丁遺跡をはじめとする各遺跡は久世郡水主郷および那羅郷に属していたこととなる。

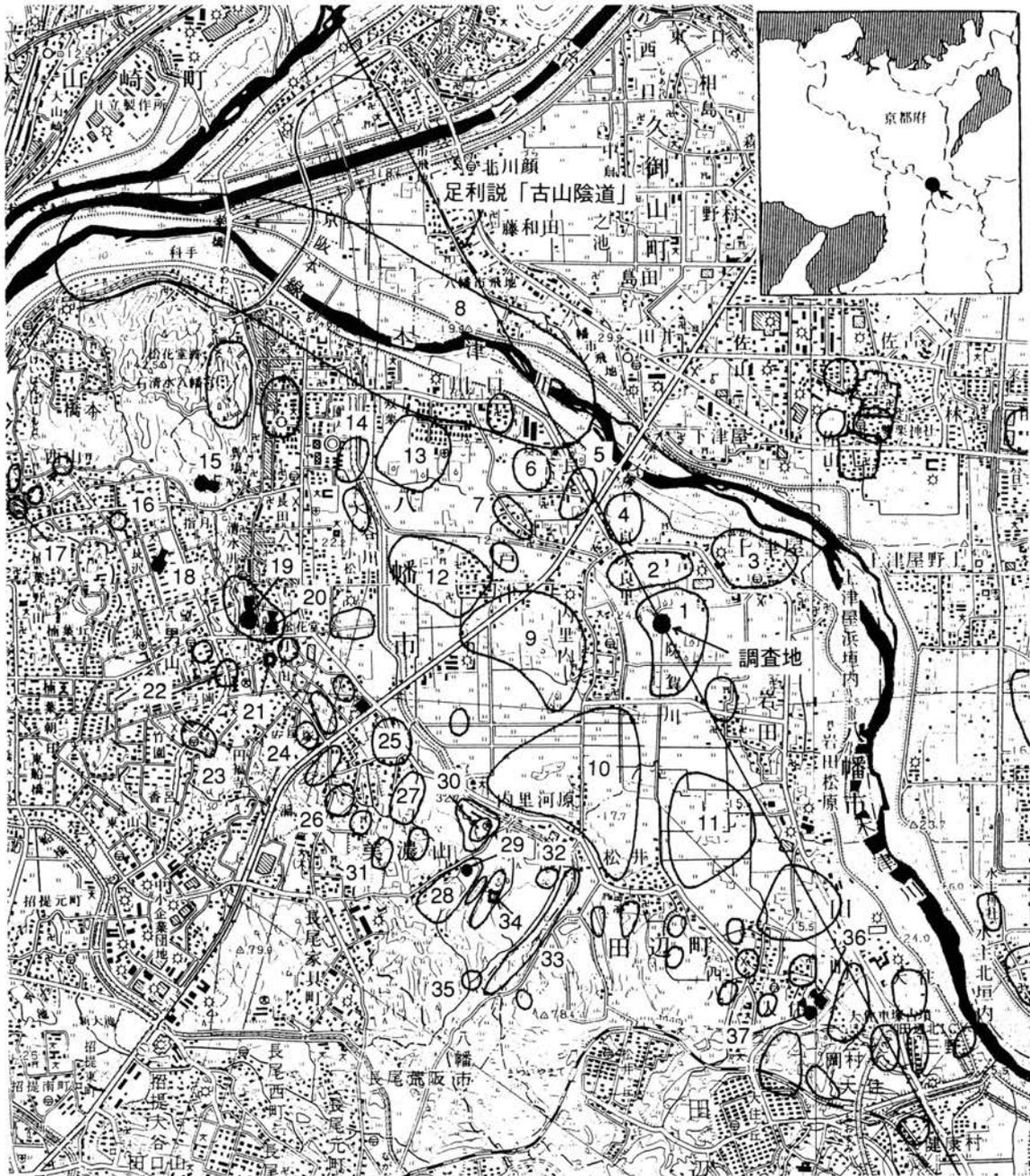
## 第2節 遺跡の歴史的環境

内里八丁遺跡をめぐる歴史的環境に関しては、第1図に周辺の主要な遺跡を示している。その概要は、八幡市域西～南部を構成する丘陵部およびその裾に形成された台地部に、古墳をはじめとする墳墓や弥生～古墳時代の集落跡、さらには古代寺院などが分布し、その一方で市域の東～北部を構成する平野部においては、先述したように木津川旧河道の縁辺に形成された自然堤防を利用して、弥生時代から中世にいたる時期の集落跡が広範囲に分布する、というものである。

では以下に、これらのうち主なものを時代を追って概述することにする。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は発見例が無いに等しい。かろうじて、荒坂遺跡や西ノ口遺跡でナイフ形石器が、金右衛門垣内遺跡で縄文時代後期の石錘が、それぞれ明確な遺構を伴わず単独で出土しているにすぎない。これらは丘陵部に立地する遺跡であり、今後の調査例の増加により、丘陵部においてこうした時期の集落跡が発見される可能性は高いといえるだろう。

弥生時代になると、集落は低地部へも及んできた。内里八丁遺跡G地区において行われた調査では、前期末から中期初頭段階の竪穴式住居跡1基をはじめ、多量の土器片が出土している。中期段階には、金右衛門垣内遺跡(集落跡)・幸水遺跡(方形周溝墓群)・井の元遺跡(甕棺墓)などが認められる。金右衛門垣内遺跡は、古くからその存在が確認されてきた、南山城地域でも中核的な弥生時代中期の集落跡である。近年発掘調査が行われた幸水遺跡は、金右衛門垣内遺跡に近接して所在し、ほぼ同期の方形周溝墓群が確認されたことから、集落跡とこれに対応した墳墓として一体をなすものと捉えられるに<sup>(注9)</sup>いたっている。後期の遺跡としては、丘陵部に分布する幣原遺跡・西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・中の山遺跡・南山遺跡などに加え、平野部の木津川河床遺跡、そして今回報告している内里八丁遺跡などがある。前者には、いわゆる高地性集落と呼ばれてきた



第2図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |            |              |            |           |           |
|------------|--------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 内里八丁遺跡  | 2. 上奈良遺跡     | 3. 上津屋遺跡   | 4. 上奈良北遺跡 | 5. 出垣内遺跡  |
| 6. 下奈良遺跡   | 7. 今里遺跡      | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 内里五丁遺跡 | 10. 新田遺跡  |
| 11. 魚田遺跡   | 12. 戸津遺跡     | 13. 河口扇遺跡  | 14. 嶋遺跡   | 15. 石不動古墳 |
| 16. 西山廃寺   | 17. 平野山瓦窯    | 18. 茶臼山古墳  | 19. 西車塚古墳 | 20. 東車塚古墳 |
| 21. 志水廃寺   | 22. 中の山遺跡    | 23. 幣原遺跡   | 24. 南山遺跡  | 25. 幸水遺跡  |
| 26. 西ノ口遺跡  | 27. 金右衛門垣内遺跡 | 28. 本郷遺跡   | 29. 王塚古墳  | 30. 狐谷横穴群 |
| 31. 宮ノ背遺跡  | 32. 女谷古墳群    | 33. 荒坂横穴群  | 34. 美濃山廃寺 | 35. 荒坂遺跡  |
| 36. 大住車塚古墳 | 37. 大住南塚古墳   |            |           |           |

ものが多く、枚方市側の平野部を意識した丘陵部に点在する。中でも、近年調査が行われた備前遺跡では、平坦部の無い丘陵斜面に設けられた7基の竪穴式住居跡が確認され、従来から丘陵上に立地することで高地性集落と一括されてきた上記の集落跡をその立地条件等から細分すべきことを再認識させるものであった。<sup>(注10)</sup>一方後者の2遺跡は、木津川が形成した自然堤防上に立地する集落跡である。木津川河床遺跡は後期末から古墳時代前期頃を主体とするもので、内里八丁遺跡は後期後半から古墳時代へと連綿と続く集落遺跡である。特に内里八丁遺跡では、後述するように、集落跡・水田跡・墳墓が確認されている。

古墳時代に至ると、丘陵部に多くの古墳が築かれた。前期後半を主体に築かれたとされる石不動古墳・八幡茶臼山古墳・西車塚古墳・東車塚古墳、さらに京田辺市域の大住車塚古墳・大住南塚古墳などは、南山城地域の木津川西岸を代表する前方後円(方)墳である。特に、西車塚古墳・東車塚古墳、大住車塚古墳・大住南塚古墳は2基が東西に並び築かれており、ともに一定地域を二世代にわたって治めた首長墓としての様相を示している。また、八幡茶臼山古墳からは、九州の阿蘇石で作られた石棺が出土しており注目される。これらに続く首長墓としては、巨大な粘土郭が確認され、前期末～中期初頭に位置付けられている方墳のヒル塚古墳や、大型円墳(前方後円墳の可能性もあり)である美濃山王塚古墳などが築かれたが、中期後半を境に首長墓とみられる大型墳は認められなくなる。

後期になると、一般的にみられる横穴式石室を内部主体とする古墳は、当地域には無い。これに対し、八幡市南部から京田辺市にかけての地域は、横穴墓の分布が、顕著に認められる点で大きな特色を示す。横穴墓は、10基前後が群をなして築かれたものが多く、いわゆる後期群集墳に代わるものと理解される。市域には、狐谷横穴群・荒坂横穴群・美濃山横穴群・女谷横穴群などが確認されている。なお、こうした墓制は、当地へ移住したとされる隼人との関連が指摘されている。

一方で、こうした各期の古墳の造営主体となった集落跡に関しては、不明な点が多い。弥生時代後期末から継続して集落が営まれている、内里八丁遺跡などでの調査例はあるが、現在のところ、これ以外に良好な集落遺跡は確認されていないといった状況である。

飛鳥～平安時代の状況を考える場合、まず考慮に入れて行かねばならないのが、先述のとおり、平野部の西側が綴喜郡、東側が久世郡と、木津川の流路によって分かれていたことである。こうした古代の行政区分が、さらに古墳時代以前の地域的なまとまりを反映している可能性もあり、ここで内里八丁遺跡の歴史的環境を現在の八幡市域のみに限って記述したことは、これを十分に表現できていない可能性もある。

さて、飛鳥時代の遺跡としては、まず、古代寺院が注目される。現八幡市域には美濃山廃寺・志水廃寺・西山廃寺の3か寺が確認されている。このうち、志水廃寺・西山廃寺は、調査によって堂・塔が確認され、7世紀後半～末頃には創建されていたと考えられている。また、ともに近接して瓦窯跡も確認されている。一方、美濃山廃寺は、藤原宮を前後する時期の軒瓦の出土は確認されているものの、遺構としては掘立柱建物跡の一部が検出されたにすぎず、寺院跡かどうか

を含めて不明な点が多い。これら3か寺は、いずれも市域南～北辺の丘陵部から裾付近に立地するものであり、当時の有力者が平野部ではなく、丘陵裾部に居住していた可能性を示唆している。ただし、これらを結ぶライン上に古山陽道が想定されており、こうした交通路との関連で古代寺院が集中的に建立されたことも想定する必要があるだろう。これらに対し、内里八丁遺跡においても、7世紀後半・8世紀後半の2時期の古瓦が出土している<sup>(注11)</sup>。これが寺院跡に伴うものである可能性は低いと判断しているが、こちらは古山陰道が付近を通過するように復原されており、上記3か寺を含め、古瓦が出土する遺跡と古代交通路との関連は、十分注目すべきものといえるだろう。また、このほか、摂津四天王寺へその創建瓦を供給した平野山瓦窯の存在も重要である。

飛鳥時代から平安時代の遺跡としては、内里八丁遺跡のほかでは、内里五丁遺跡や上奈良遺跡・荒坂遺跡などで、建物跡などが確認されているにすぎない。このうち、内里八丁遺跡に関しては、上記のように、古瓦の出土をはじめ、古山陰道ではないかと考えられる道路状遺構や大型の建物跡などが検出されており、古山陰道に関連した公的施設の可能性もある。また、内里八丁遺跡を含め、その北に位置する上奈良遺跡は、その地名が示すように奈良園の所在地としての指摘があるほか、過去の調査では則天文字を初めとする多くの墨書土器が出土しており、これも単なる一般集落とは考え難い面を持っている。さらに、荒坂遺跡では、一辺1mに及ぶ方形の掘形を有する大型の掘立柱建物跡が数棟確認されている。残念ながら時期を特定する出土遺物に欠け、詳細を検討することはできないが、やはり単なる一般集落とは異なった要素をみる。このように、数少ない当時期の遺跡に関する調査例であるが、そのいずれもが単なる一般集落の様相を示すものでは無いといった状況である。

平安時代には石清水八幡宮が創建された。これ以降、八幡市の中心をなすのは、その門前町として発展した現在の市街地部分である。一方で市域の北東部をしめる平野部の大半は、八幡宮領としての荘園となる。内里八丁遺跡の位置する一帯も、先の古代奈良園を引き継いだ中世奈良荘の一部に相当していたと考えられ、11世紀後半には八幡宮の荘園となっていた。そして、これ以後、遺跡周辺の景観は耕作地化が急激に進み、現在とほぼ同様な景観へとかわった。すなわち、一帯に認められるいわゆる条里地割は、中世を中心に形成されたものの可能性が高く、また木津川流域に顕著に認められる島島の造成も、鎌倉時代後半頃から開始されはじめたようである。

## 第3章 検出遺構

弥生時代～中・近世に至る、3～4面の遺構面を調査し、水田跡・墓・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝・柵列など、多数の遺構を検出した。

### 第1節 弥生時代後期後半～古墳時代初頭

#### 1. 水田跡

調査では、A地区で2面(第3・4遺構面)、B地区で1面(第3遺構面)の遺構を検出した。

##### (1) A地区上層水田跡(A地区第3遺構面・図版第2)

**水田遺構** A地区第3遺構面で検出したもので、海拔11m付近に位置する。水田は小区画水田であり、68枚を検出した。水田跡は暗茶褐色粘質砂をベース土とし、その直上を20～30cmの厚さの洪水砂(淡黄灰色細砂)が覆っていた。各水田面の海拔高による微地形観察によれば、北東側の水田5・6・11・12と南西部の水田26・36・43・44が高位置を占め、中央の水田23付近が逆に低位置となる谷状地形が観察される。また、谷筋となる水田3と水田60では、南端に位置する水田60が北端の水田3より高所となり、南東から北西方向にゆるやかに下がる傾斜が読みとれる。

検出した各水田面の海拔高は、東の水田6・12で約11.2m、対する西側の水田36では約11.0mを測る。また、谷筋にあたる水田跡のうち最も低い水田面は調査地北側の水田3であり、海拔高は約10.8mを測る。谷筋中央部の水田23では海拔高は約10.8m、東南端の水田60では10.9mである。全体的には、集落の立地する北東側微高地からゆるやかに南西方向に下る地形の中に、北東から南西方向に下がる小規模な谷状地形が存在し、水田が築かれている。

検出した水田畦畔は、断面形が半円形の蒲鉾形を呈し、水田土壌(暗茶褐色粘質砂)と同一の土によって形成されている。水田畦畔の構築状況を確認すべく各所で断面観察を行ったが、水田と畦畔の土壌に顕著な差が認められず、水田土壌と畦畔の分離自体もできなかった。水田畦畔は、下端部の幅が30～40cmの規模を測るものが大部分を占めるが、中には水田27・28の北側畦畔にみるように、70cmの幅を測るものも存在する。また、高さについては、畦畔の頂部と水田面の比高差が7～12cmの範囲に集中する。多くの畦畔は通例の小畦畔と呼ばれるものである。水田27・28の北側畦畔は、幅において約2倍の規模ながらも広範囲におよばず、規則性もみられない。このような状況から、大規模区画に伴う大畦畔とは考えがたく、水田27・28の北側畦畔も小畦畔の一部と判断する。

今回検出した水田畦畔の分布状況で特徴的な事例は、谷状地形を横断する東西方向の畦畔に認められる。谷状地形を横断する畦畔は直線的に配置されるが、直行状況にある谷筋と平行する畦畔の動きは1～2枚の水田を介した後、寸断もしくは小規模な横方向のズレを生じさせている。

谷筋にあたる水田3南畦畔と、水田50南畦畔の約38mの間に8本の畦畔が直線的に横断し、9列の東西方向の水田列が形成されている。この直線的な谷横断畦畔の配置状況は、水田への湛水を目的としたものであり、通年にわたってほぼ固定化して存在したと判断される。一方、南北方向の畦畔は、東西方向に長大となった水田の仕切りを目的とした畦畔であり、耕作毎に作り替えられていた可能性が高く、配置状況に流動性が高い畦畔であったとみられる。また、谷地形を横断する畦畔は、仕切り畦畔に比べ幅・高さがやや大きく造られる傾向にある。

畦畔によって区画された水田の基本形は四辺形であるが、畦畔がゆるやかな円弧を描く例もあり、水田21・22・27・49など、不整な四辺形を呈する水田跡も認められる。特に谷地形の西側縁辺部で谷に接する部分では、水田26・36・43・44に連なる東側の畦畔が谷に向かって大きく東に張り出す状況が看とれる。これらの水田跡は、特に不整な四辺形を呈し、水田44にみる扇形状の水田跡も認められる。このような不整形な水田跡は、谷の狭窄部分となる谷地形の西端部に集中している。当初より地形的制約を強く受けていたことを示す事例であろう。水田跡には、水田37・38・45・46、水田38・39・46・47に代表される方形区画水田が隣接し、畦畔の列びが漢字の由来でもある「田」字形を呈する状況もみられる。検出した水田跡の多くは長方形を呈しているが、このような「田」字形の水田跡は谷状地形の狭窄部に認められた。

検出した水田跡の形状は長方形を呈するものが大多数を占め、主軸の方向性は2方向に大別できる。検出状況でみるかぎり、おおよそ東西方向主軸と南北方向主軸の水田跡とに分かれる。東西方向主軸の水田は、ゆるやかながらも傾斜地形のある谷状部に築かれる。対する南北方向主軸の水田は、ほぼ平坦な地形を中心に営まれている。南北方向主軸の水田は調査地南部に集中し、水田49～51の南側畦畔、水田40・48・51の東側畦畔、水田35の南側畦畔を結ぶラインが主軸変換線となっている。

この水田主軸変換線から南側には、整然と並ぶ水田跡が広がる。また、主軸変換線の北側においても、谷状地形の最上部では、水田49～51にみる3枚のほぼ同規模・同形状の水田が、東西方向に横一列に配置される。この3枚の水田跡は、谷状地形に配置された起点的性格をもつ水田とみられる。水田54～59の6枚の水田跡は、長軸を南北方向に揃えて東西方向に整然と並ぶ状況にある。調査地以南の状況は不明であるが、水田の配置からみて広範囲に整然とした水田跡が広がる状況にあり、ほぼ平坦な地形が続いているとみてよかろう。整然とした水田跡の配置は、先述の調査地南部以外にも北東部を中心に認められる。水田10・11～30・31はいずれも東西主軸の水田であり、規模・形状に大差が認められない。このような水田跡の在り方は、斜面地であっても同一規格の意識下で水田を営もうとした結果とみてよかろう。

検出した水田跡でみると、水田自体の規模は小規模である。水田1枚が検出できた中で、最大規模の水田跡は水田33であり、約33m<sup>2</sup>の面積を測る。逆に最小規模の水田跡は約9m<sup>2</sup>の面積でしかない水田29である。調査地内で検出した水田跡の規模では、およそ13m<sup>2</sup>前後と26m<sup>2</sup>前後の面積をもつ2群に分かれる。前者の水田跡としては水田28・37・45・46などである。後者の水田跡では水田9・10・23・49・51などがあげられる。今回検出した水田跡では、2枚に分かれる可能性

も残る水田22(約65m<sup>2</sup>)や、規模不明ながらも水田33をしのぐ水田も一部に存在する。規模・形状に規格性が認められる水田跡の分布状況からみて、1枚の水田規模は大きな水田でおおむね50～60m<sup>2</sup>程度と推測する。

水口 畦畔には一部で途切れる部分が存在し、これを「水口」と考える。今回検出した68枚の水田跡では、水口3か所が確認された。水口1は調査地南西の水田49と水田54の間に、水口2は北東端の水田61と水田62の間に、水口3は北部東端の水田20と水田64の間に存在した。いずれの水口も水田間の小畦畔を30～50cmの長さで切り取る状況にある。確認された水口は、水田全体からみれば、きわめてわずかであり、この水口で各水田に水を供給する役割を担っていたかについては疑問が残る。

調査地の北東部を中心に掘削を進めていた初期段階には、水田跡の存在がわからず、畦畔を削平した経緯もあって畦畔の高まりはすでに失われた状況にある。水田4～6・10・11にかけての畦畔は、水田面に残る土壌変化(酸化鉄の分布状況)から、かろうじて畦畔の痕跡が読みとれた。調査の不手際で失った畦畔に水口が存在した可能性もあるが、全体の状況を見る限りその可能性は低いと判断する。

稲株痕(図版第8) 調査地全域の水田面と畦畔上から、稲株痕と判断する無数の小穴群を検出した。水田と畦畔の土壌である暗茶褐色粘質砂上面(水田面)には7cm前後の円形・楕円形の小穴が存在した。この小穴に関しては埋土の内容から3種に大別することができた。このうちの2種(A種・B種)の小穴は、稲株痕と判断する。残る1種(C種)は稲株痕とは異なると判断した。

稲株痕A種 水田上を覆った洪水砂と同じ黄灰色砂が充満した小穴をA種とした。小穴は、規模において直径5～7cm・深さ5～7cmの範囲に集中している。深さについては2～3cmの比較的浅い小穴や、12cmを測る深い例も認められたが、相対的には少数例であった。水田面をていねいに削り、小穴の平面形を確認した結果、小穴の周縁部分が輪花状に凹凸を繰り返している状況が確認できた。また、周縁部の凹凸は、穴の周壁部の観察によって、下方に向かってわずかにのびることが確認できた。このような輪花状の凹凸は、分枯した植物茎の集合部分(株)の周縁形状と酷似する。このような状況から、輪郭が輪花状を呈する小穴については稲株痕と判断した。平面形は円形に近い形状を示すものが多いが、楕円形・不定形を示す例も存在している。

小穴は、水田面に対し垂直もしくはやや斜行する状況にある。穴自体の直径は下端まで同一幅を維持する例もあるが、多くは深くなるにつれて幅を減じる傾向にある。また、穴の中程で急激に幅が狭まり、階段状を呈する例も確認できる。断面観察による底面形は平坦でなく、丸みをおびて終わる例がほとんどである。また、底部中央付近に凹凸が認められる例も多数存在する。

小穴埋土を観察した結果、多量の洪水砂中にわずかながら水田土壌が柱状に含まれていることが確認できた。小穴の埋土中に含まれた水田土壌は、直径5～10mm×長さ数cm程度であり、深くなるにつれて先細り状況にある。また、位置関係では小穴の中央付近に多く存在し、単体で存在する例も認められるが、多くの場合数か所に分散して存在する。この小穴内に認められた柱状の水田土壌は、稲株内に取り込まれた土壌が残ったものと判断してよからう。

稲株痕B種 B種稲株痕とした小穴は、規模・形状においてA種稲株痕と特に異なるものではない。A種・B種の差は、その小穴内の土質の差によって分けている。A種稲株痕の埋土が洪水砂であるのに対し、B種は粘性の強い砂(水田土壌に酷似)が主体を占め、部分的に洪水砂が含まれる状況にある。色調もA種稲株痕の洪水砂が黄灰色であるのに対し、B種は暗緑灰色系・暗黄灰色系など数種の色調変化が観察される。

小穴C種 水田面には、稲株痕とみるA種・B種と様相が大きく異なる小穴が存在し、調査の便宜上この小穴をC種とした。穴の埋土は他の稲株痕2種と異なり、黒茶褐色粘質土が充満する。平面形はほぼ正円形であり、穴の周縁部はなめらかでA種・B種にみられた輪花状の周縁はもたない。また、深さも10~25cmと深い傾向が強く、途中で屈曲する事例も確認された。このような状況から、このC種とした小穴については、蟹等の甲殻水性動物の巣穴の可能性が高い。

稲株痕としたA種・B種の小穴は、調査地全域に広く分布し、水田面以外に畦畔上にも多数存在する。分布の傾向では、水田面・畦畔とも分布状況に偏りがなく、ほぼ均質的な分布状況がうかがえる。この稲株痕は1,800m<sup>2</sup>の調査範囲内に70,000点を超える分布状況にある。調査地内で平均的な稲株痕の分布と判断した水田39では、1m<sup>2</sup>の中にA種とした小穴は30~35点、B種とした小穴が7~10点を数えた。補足として、C種小穴は分布にばらつき傾向があり、平均化できないが、1m<sup>2</sup>中に1~2点とみてよからう。

稲株痕の分布状況(図版第3・4)は、整然とした水稻苗の移植(田植え)の実施が伺えない状況にある。巨視的にみても雑然とした分布状況がみてとれる。しかし、雑然とした分布状況の中に、アトランダムながら苗の移植列(図版第59・65)が多数読みとれる。水田面と畦畔に関わりなく、20cm前後ではほぼ等間隔を保った小穴が、約80cmの範囲で円弧を描く流れが存在する。この移植列に決まった方向性は見いだせない。このような状況から、苗の移植自体は、畦畔を含めた水田域全体を、一定間隔で不規則ながらも空間を埋める意識のもとで実施されていたと判断する。

小穴については200例ほどを断ち割り、完掘(小形スプーンを使用)してサンプル調査を行った。

## (2) A地区下層水田跡(A地区第4遺構面・図版第1)

A地区の第4遺構面は、海拔10.7m付近に存在する。畦畔によって区画された水田跡は部分的な検出であったが、27枚の水田跡を検出することができた。この遺構面の基盤土である水田土壌は暗灰色シルトであった。微地形にみる暗灰色シルト面は、調査地中央付近から東側がゆるやかに上がり、中央以西はほぼ水平に近いが、西北方向にやや下がる傾斜が認められる。調査区の西部域から、洪水砂によって埋没した水田と畦畔を検出した。調査地の中央部から東側には水田畦畔が存在せず、暗灰色シルト層が調査地内全域に広がっている。水田畦畔と水口を検出したが、水路などの遺構は存在しない。また、暗灰色シルト面には全域にわたり稲株痕が分布する。

**水田遺構** 水田に伴う遺構としては、畦畔と水口を調査地北西部と南西部で検出した。畦畔は、上層水田に伴う畦畔と大差なく、下端幅約30cm・高さ約15~20cmの規模を測る。水田土壌と同質土によって築かれているが、畦畔部分の土壌はやや明色を呈している。断面観察の結果、畦畔自体は水田土壌を盛り上げて築かれたことが判明した。水田1枚を完全に検出することができな

ったが、畦畔によって区画された水田は、西北部と西南部では様相が大きく異なっている。西北部検出の畦畔は、上層水田と同様な規模・形状であることから、方形を意識した南北方向に長軸を取る小区画水田と考えられる。

一方、調査地西南部で検出した畦畔は東西方向に直線的に延び、東西に狭長な水田が、南北方向に整然と並ぶ。畦畔の間隔は、北側の水田76～83の間が約2mの間隔であるのに対して、南端付近の水田84～87では約1mの間隔で配置されている。東西畦畔に直交する仕切り畦畔が、一部にしか存在しないことから、水田は当初から東西に細長い小区画水田であったとみられる。

**水口** 今回検出した下層水田跡では、4か所の水口と判断する畦畔の途切れを確認した。いずれの水口も小畦畔を切る状況にある。

西南部検出の水田76・79・80・88では、水田の東側を画する南北畦畔が認められる。畦畔の一部が途切れることから、この地点を水口と判断している。水田76では東端部の2か所に水口が設けられている。水口4は東北隅部の北畦畔に、水口5は東南隅部の東畦畔にある。また、水田79では東北隅部に水口6が、水田80では東南隅部に水口7があり、それぞれ水田の角に水口が設けられた状況にある。

**稲株痕** 調査区全域で、上層水田跡でも検出した小穴が広範囲に分布している。小穴の埋土は一律でなく、上層水田検出の小穴と同様に、A～Cの3種類に大別できた。小穴の分布状況は、A種・B種の検出密度が下がり、逆にC種がやや増加する傾向にある。

小穴内の埋土は、グライ土壌の影響からか、暗青灰色・暗緑灰色系の色調となり、粘性も強い傾向にある。

C種小穴には、上層水田面から続くものも含まれていると判断する。小穴内の埋土はさらに暗色が強い傾向にあり、粒子の細かい黒色もしくは灰黒色シルトである。

**足跡**(図版第70) 今回の発掘調査の中で、中世以前の人々の足跡と認識できるものが、調査地中央付近2か所で検出することができた。下層水田面に残った成人の足跡であり、左足・右足の各1例のみの検出であった。検出した足跡は歩行痕跡(連続歩行)に直接的に関連したものではなく、爪先の形状も異なり、検出地点も離れることから別人の可能性もある。左足跡は、21.0cmの長さを測る。足跡の主軸方向は爪先側が南東を向く。水田面に残る足跡内に充満した洪水砂を、ていねいに除去した結果、北側の「かかと」部分が約5cmと深く沈み込んでいる状況にあった。対する南側の爪先部は約2cmと浅い状態である。中央部の「土踏まず」については深さ約1cmときわめて浅く終わっている。爪先の形状は、親指先端と小指側先端部がほぼ真横にのび、大きく外側に張り出す形状がみられる。また、爪先部分の深さは親指側が小指側に比べ約1cm深い状況にある。親指と小指を結ぶ先端ラインは足の軸線に対してほぼ直交する。足跡の形状から、水田面に足が接する時点で「かかと」側に過度の重量がかかり、足が離れる時点で親指付近に蹴りの圧力が加わったとみられる。とくに親指部分の形状では、外方向に若干滑った形跡が看取できる。

足跡はB種稲株痕を切っていたが、ほぼ同一場所にA種稲株痕も存在した。A種稲株痕にみる足跡との関係は、穴を埋める洪水砂に格段の変化がみられないことから、同一時期のものと判断

してよかろう。洪水以前に足跡が付いたことは明らかであり、足跡に荒れた状況がないことは足跡と洪水にさほど時間差がないと判断される。また、洪水の時点で、A種稲株痕については株が残っていた可能性が高いと判断する。

右足跡は全長約22.5cmを測る。爪先の親指と小指のラインは左足例と異なり、軸線に対して斜行し、親指側が長い形状を呈する。この右側足跡でも、足跡埋土を切るA種稲株痕が存在した。

### (3) B地区水田跡(B地区第4遺構面・図版第1)

**水田遺構** 海拔10.8m付近で約13枚の水田遺構を検出した。いずれも部分的な畦畔の検出であり、各水田の規模・形状については不明な点が多い。水田土壌は暗灰色のシルト系微砂であり、調査区南部域から洪水砂(淡黄灰色細砂)の堆積によって埋没した水田畦畔(小畦畔)を検出した。洪水砂は、畦畔を検出した調査区南部に厚く堆積していたが、中央以北では明らかな洪水砂の堆積は認められなかった。遺構面も南から北方向にゆるやかに上っていくことから、調査区中央以北は水田化されなかった微高地域とみられる。

主畦畔とみる長く伸びた畦畔が南北方向であることから、水田自体も南北に細長い形態であったと推測される。東部で検出した畦畔は直線的であるのに対し、南西部検出の南北畦畔は北端部で東側に大きく張り出している。微高地の縁辺部に位置すると判断され、地形的制約を受けたことから、円弧を描く主畦畔が作られたと判断する。

検出した畦畔は寸断状態であり、1枚の水田跡を認識できない状況にあって、水田99はかろうじて水田の隅3か所が把握できた。水田99は南北方向に伸びる長方形水田であり、約10.8㎡の規模とみられる。

**水口** B地区では4か所の水口を検出した。北西部の水田89～91の水田では南端部で連続状態の水口2か所(水口9・10)が認められる。西部では水田92・93を画する南北畦畔の北端部に水口11、東部では水田98・99間に水口12がそれぞれ1か所存在する。水口の規模に大小があり、水口9・10が約20cm、水口11・12で約1.3mにわたって畦畔が切られている。

**稲株痕(図版第9)** 水田面にはA種・B種の小穴が存在した。稲株痕の分布密度は1㎡に10数株程度であり、A地区検出の水田跡に比べて格段に低い密度であった。また、稲株痕は畦畔検出範囲全域に分布することはなく、畦畔検出地点の周辺の数か所で、小規模範囲に存在する程度である。個々の稲株痕跡は直径5cm・深さ4cm前後であり、A地区検出の稲株痕と格段の変化は認められない。

なお、第4遺構面の調査を終えた段階で、下層確認の調査を実施した。調査に当たっては、調査区中央部に幅2mのトレンチを設定した。第4遺構面下30～40cmで、A地区の第4遺構面(下層水田跡)に対応する可能性のある、暗灰色シルト層を確認した。掘削に伴って、第4遺構面水田土壌から庄内併行期の甕の破片が少量出土したが、深い土層中に遺物の包含はみられなかった。また、畦畔・稲株痕など、水田跡の存在を示す痕跡が暗灰色シルト上面で確認できないことから、以後の拡張調査をすることなく調査を終えた。

## 2. 方形周溝墓ほか(図版第11)

**方形周溝墓 S X 11・S D 40** A地区西北部で検出した。東西7.8m・南北5.5mの規模で方形に巡る周溝(S D 40)とその中央付近で検出した埋葬主体部(S X 11)からなる。周溝は南辺部の南半部を後世の攪乱によって欠失するが、溝幅は北側で約0.8m、東側で約1.2mを測り、深さは約30cmである。埋葬主体部は、木棺直葬で、長さ(南北)約3.7m・幅(東西)約1.4mの長方形の掘形を有し、深さ約20cm分が遺存していた。墓壙底はほぼ水平で、掘形内には全長約3m・幅約0.6mの木棺の痕跡を確認した。周溝によって区画された墓の主軸は、N10°Eを示すが、主体部はほぼ北を向く。副葬品は認められなかったが、墓壙掘形内から少量の土器片が、また周溝埋土中から小型の壺・鉢・高杯・甕などが出土した。

**埋葬主体部 S X 12** B地区中央やや西寄りで検出した。長さ約4.7m・幅約1m・深さ約20cmを測る長方形の土坑であるが、その検出状況から、上記の方形周溝墓と同じく、当地に営まれた墳墓の埋葬主体部と考えている。掘形の主軸は、ほぼ真南北方向を向く。掘形底面は平坦で、掘形埋土には木棺の存在を示す土色変化が認められた。長方形を呈する木棺の規模は、長さ約4.2m・幅約0.7mであった。掘形内から土師器の小片が少量出土したが、年代を確定するにいたっていない。ただ、検出面の状況などから、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃のものとして推測する。

## 3. 溝(図版第10)

**溝 S D 37** A地区中央付近を南北方向に流れる素掘りの溝である。溝は調査地北東から一旦西流した後、その流れを大きく南に転じる。溝幅1m、深さは30cmを測る。溝の埋土中から弥生時代後期の土器片が出土しているが、検出面の状況から古墳時代前期の溝と判断される。

**S D 38** A地区北端で検出した素掘りの東西溝である。溝底はやや蛇行しながら東から西方向にゆるやかに下がる。溝幅は約1.2～1.6m・深さ約30cmを測る。出土遺物には土師器甕がある。

**溝 S D 39** A地区中央付近を北流する素掘りの溝であり、方形周溝墓の東に位置する。溝幅約2.6m・深さ約90cmを測る。溝は、11m前後でほぼ等間隔をもって、若干の屈曲を行いながら東から西方向にゆるやかに下る。この約11mの屈曲単位は、溝掘削段階での作業単位と判断する。溝底には白灰色系の砂が堆積し、この砂層中から布留式並行の壺・甕とともに管玉が出土している。溝の中層と上層には、暗褐色系の粘質砂が堆積し、壺・甕・高杯等の遺物が出土している。

## 4. 土器溜まり(S X 04・05・07～10・図版第73・74)

A地区南部において、下層の水田上に堆積した洪水砂中(海拔約11.2m付近)から土器群が出土した。出土した土器は、おおむね弥生時代後期末葉から古墳時代初頭(いわゆる庄内期～布留期並行)のものと考えられ、完形品もしくは大型破片が目についた。土器群の周辺では、これを取り込む遺構の検出につとめたが、堆積土に大きな変質は認められず、最終的に性格不明の土器溜まりと認識せざるをえなかった。

**土器溜まり S X 04** B地区の西北部で検出した。南北約4m・東西約3.2mの範囲に土器が集

中していたが、遺構として明確な掘形は確認できなかった。出土遺物は細片化しているものも多く、全体の形状のわかるものは少ない。

**土器溜まり S X 05** B地区の南東部で井戸 S E 04と重複するように確認した。S E 04の井戸枠部材を取り上げるために、その南側を掘り下げたところ、多数の土器が出土したものである。ただし、明確な掘形を確認することはできなかった。

**土器溜まり S X 07** B地区東南端付近で検出した。約2m四方の範囲から土器類がまとまって出土したものである。

**土器溜まり S X 08** S X 07の北西約11mに位置する。焼成後の円孔をもつ壺・台付き鉢・有孔鉢などが、およそ0.5m四方の範囲から出土したものである。

**土器溜まり S X 09** S X 08の北東約5mに位置し、約2m四方の範囲内から土器類がまとまって出土したものである。

**土器溜まり S X 10** B地区南西部で検出した。調査当初は、B地区第3遺構面で検出した水田畦畔と思われる土層内から土器類が出土したものと考えていたが、その後の土層の状況及び出土土器類の検討の結果、まとまった古式土師器(第62図3～10)が出土した。出土した土器は甕6点・無頸壺1点・有孔鉢1点である。畦畔内から甕が上下に重なった状態で出土したが、土器埋納の掘形は確認できなかった。土器溜まりは、東西方向に軸線を取り、全長2.15m・幅約0.6mの範囲に土器が集中している。

## 第2節 古墳時代中期末～後期初頭

この時期の遺構は、B地区第3遺構面(海拔約11.5m)で検出した。ただし、遺構としてはわずかであり、竪穴式住居跡を2基確認したにとどまる。

### 1. 竪穴式住居跡

**竪穴式住居跡 S H 02** 調査区南西部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡自体は近世溝 S D 41・43により大規模に削平されていたが、東側コーナー部とその周壁の一部がかりうじて検出できた。さらに、過去の概要報告で焼土坑 S X 03とした遺構は、住居跡の東北側壁の中央部に築かれた竈であることが判明した。竈から住居跡の東コーナーまで約2.2mを測る。竈が東壁の中央に位置するとみれば、住居跡は一辺約4.5mの規模と推定される。検出した周壁高は竈付近で約20cmを測る。住居跡の床面では、直径・深さがともに約30cmの円形の掘形を持つ柱穴を2か所で検出した。竈は上部が削平されていたが、馬蹄形を呈する下部が良好に遺存している。20cmほどの立ち上がりを残す竈の内壁面は焼土化し、焚き口付近の底面は特に焼け締まっている。竈内には、土師器丸底壺の完形品が口縁部を下に向けた状態で出土したほか、土師器甕の破片が多数認められた。

**竪穴式住居跡 S H 03** 調査区北端部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居跡の北西コーナーは後世の攪乱によって失われている。住居跡は一辺約3.0m、周壁高は床面から約20cmを測る。竪穴式住居跡 S H 02にみられた竈は存在せず、住居跡床面の中央やや東寄りに小規模な焼土

が認められた。また、焼土の周辺では、炭・灰の薄い堆積が認められた。床面では直径約30cm・深さ約20cmを測る柱穴跡3か所を検出した。出土遺物は乏しいが、床面の炭・灰層上から布留式併行期の高杯・甕体部の破片が出土している。

### 第3節 飛鳥時代～平安時代

A地区の第1遺構面およびB地区の第2・3遺構面で、この時期のものとして判断される竪穴式住居跡1基・掘立柱建物跡18棟・柵列1条・井戸2基・溝4条を検出した。

#### 1. 竪穴式住居跡(図版第12)

**竪穴式住居跡SH01** 地区北西部で検出した、方形で竈をもつ竪穴式住居跡である。東西約3.8m×南北約5.2mの規模を測る。また、検出した壁高は約20cmを測った。住居跡の北東隅に造り付けの竈を設けている。竈には住居から北東方向にのびる約1mの煙道が存在した。竈の焼成部は直径約60cmの範囲で特に焼け締まり、赤褐色で硬質化している。竈の底面上には炭・灰層が厚く広がり、土師器の長胴甕破片が多量に含まれていた。竈は住居床面よりやや上部に造られている。住居床面と竈の焼成面の高さは約5cmを測り、竈から住居の中央部にかけてゆるやかに下がる傾斜をもっている。

住居床面には屋根を支える4か所の柱穴跡が認められたが、それ以外にも幾つかの柱穴跡が存在することから、住居の建て替えが実施されていた可能性が高い。柱穴の内、竈に近い柱穴はやや西に偏って存在する。この偏りは竈前の作業空間との関連で生じたと判断する。竈の対角隅付近では住居壁が内側にやや張り出す状況が認められた。この張り出し部分が住居の出入り口とみられることも可能であるが、周囲に特に変化が認められないことから確定にはいたっていない。

#### 2. 掘立柱建物跡(図版第14～23)

**掘立柱建物跡SB01** A地区北東部で、後述するSB02・SB03・SB04とともに検出した。南北2間(3.3m：約11尺)・東西2間(3.3m：約11尺)の正方形の平面をなし、柱間は、いずれも1.65m(5.5尺)を測る。なお、中央やや西寄りに柱穴があり、総柱建物となる可能性が高く、倉庫跡と考えている。主軸はN2°Eである。

**掘立柱建物跡SB02** A地区北東部で検出した。南北2間(4.5m：約15尺)・東西3間(4.2m：約14尺)の総柱の建物跡で、倉庫跡と考えている。柱間は、南北が2.25m(7.5尺)等間、東西は西から1.5m(5尺)－1.2m(4尺)－1.5m(5尺)である。主軸方位はN1～2°Eで、掘立柱建物跡SB01とほぼ同一である。

**掘立柱建物跡SB03** A地区北東部で検出した。南北2間(約3.8m：13尺)・東西2間(約3.5m：11.5尺)の総柱の建物跡で、やはり倉庫跡と考えている。柱間は、南北が1.9m(6.5尺)等間、東西は1.7m(約6尺)等間である。主軸方位はN1～2°Wである。

**掘立柱建物跡SB04** A地区北東部で検出した。南北2間(約4.2m：14尺)・東西2間(約3.85m：13尺)の総柱の建物跡で、倉庫跡と考えている。柱間は、南北が2.1m(7尺)等間、東西は約

1.92m(6.5尺)等間である。なお、中央の柱穴は、やや西側に寄って認められる(西から1.8m:6尺)。主軸方位はN6°Wである。

**掘立柱建物跡S B05** A地区中央やや南寄りで検出した。南北2間(約3.25m:11尺)・東西3間(約4.8m:16.5尺)の東西棟建物跡である。柱間は、南北が1.63m(5.5尺)等間・東西約1.6m(5.5尺)等間で、主軸方位は、N6°Wで、掘立柱建物跡S B04と同一である。

**掘立柱建物跡S B07** B地区東半部で検出した。調査区の東側へ延びており全容は不明だが、南北3間(約6.8m)・東西1間(約2.4m)を確認した。柱穴掘形は、一辺が30cm前後の隅丸方形をなし、一部に径10cm前後の柱痕を認めた。柱間寸法は、南北約2.2~2.3m(7.5尺)・東西約2.4m(8尺)を測る。柱穴内から、黒色土器片や土師皿片などが出土した。主軸方位はN3°Wである。

**掘立柱建物跡S B08** B地区の東半部、上記のS B07の南側で検出した建物跡である。南北1間(約2.6m:8.5尺)・東西2間(約4.8m:8尺等間)分を確認したもので、柱穴の配置から2間四方の総柱の建物跡となる可能性が高い。柱穴掘形は、一辺30cm前後の隅丸方形で、深さ約15cmが遺存する。柱痕跡は、検出した6個のうち4個の柱穴で確認しており、径約10cm前後を測る。主軸方位はN2°Wを測る。

**掘立柱建物跡S B10** B地区の西半部で検出した東西棟の建物跡である。南北2間(約4.8m)・東西5間(約8.7m)を測る。柱穴掘形は、0.8m×1.2m程度の長方形をなすものが多く、深さは残りの良いもので約0.4m遺存するものもある(建物跡の西半部は大きく削平されており、柱穴の遺存状況は悪い)。柱痕跡は、確認できたものでは径約25~30cmを測る。柱間寸法は、南北が約2.4m(8尺)等間、東西は東から約1.65m(5.5尺)ー約1.8m(6尺)ー約1.8m(6尺)ー約1.8m(6尺)ー約1.65m(5.5尺)である。主軸方位はN1°Eである。

**掘立柱建物跡S B11** B地区の西半部、上記のS B10の北側で検出した建物跡である。南北2間(約4.5m)・東西2間(約4.5m)分を確認したが、東側が削平を受けており、本来はさらに東側へ延びていたものと考えられる。柱穴掘形は、一辺0.6m前後の方形または長方形をなし、深さは0.3m前後が遺存する。なお、南北柱列中央の柱穴は、0.3m×0.2mと小さい。柱痕跡は、ほぼすべての柱穴で確認され、径約0.2m前後を測る。柱間寸法は、南北は南から約2.4m(8尺)ー約2.1m(7尺)、東西は西から約2.4m(8尺)ー約2.1m(7尺)を測る。主軸方位はN5°Eである。

**掘立柱建物跡S B12** B地区東半部、先の掘立柱建物跡S B07の北西側に隣接して検出した建物跡である。建物跡の西半部が大きく削平されており、南北2間(約4.5m)・東西1間(約2.1m:7尺)分を検出したにとどまる。南北の柱間寸法は、南から約2.1m(7尺)ー約2.4m(8尺)を測る。柱穴掘形は一辺0.4m前後の方形をなし、深さは約40cmが遺存する。柱痕跡は、一部で確認でき、径約20cm前後を測る。主軸方位はN4°Eである。

**掘立柱建物跡S B13** B地区東半部、先の掘立柱建物跡S B08の西側で検出した総柱の建物跡である。S B12同様、建物跡の西半部を大きく削平されており、南北3間(約5m)・東西1間(約2.1m:7尺)分を検出したにとどまるが、東西は2間以上の倉庫跡であったと判断される。柱穴掘形は、一辺0.7m前後の方形で、深さは約30cmが遺存する。柱痕跡は、確認できたもので

径20cm前後を測る。南北柱列の柱間寸法は、約1.65m(5.5尺)等間である。主軸方位はN 8°Eである。

**掘立柱建物跡 S B 14** B地区西半部、先の掘立柱建物跡 S B 10の北側に接して(この建物跡の南辺柱列が S B 10の北辺柱列と重複する)検出した東西棟の建物跡である。南北2間(約4.5m)・東西5間(約8.9m)の建物跡と考えられるが、一部は削平によって失われている。柱間寸法は、南北は南から約2.1m(7尺)ー約2.4m(8尺)、東西は西から4間分が約1.65m(5.5尺)で、東端の1間分のみ約2.25m(7.5尺)を測る。なお、東端の柱穴は南東の1か所を確認したにすぎず、また柱間も広がっているため、東西4間(約6.6m)の建物跡と考えるべきかもしれない。柱穴掘形は、0.5m前後の方形をなし、柱痕跡は確認できたもので径約15cm前後を測る。主軸方位はN 2°Wである。なお、柱穴の切り合い関係から、掘立柱建物跡 S B 10に先行するものと判断された。

**掘立柱建物跡 S B 15** B地区の西半部、掘立柱建物跡 S B 11の北側で検出した建物跡である。南北4間(約6.9m)・東西1間(約1.8m)分を検出したものであるが、建物跡の大半が調査区外に延びているため、その全容は不明と言わざるを得ない。南北の柱間寸法は、南から約1.8m(6尺)ー約1.65m(5.5尺)ー約1.65m(5.5尺)ー約1.8m(6尺)を測り、中央の2間分がやや狭い。柱穴掘形は、一辺1m前後の方形をなし、深さは40cm前後が遺存する。確認できた柱痕跡は、径約30cmを測る。主軸方位は、N 1°Eで、先の掘立柱建物跡 S B 10とほぼ一致する。なお、本建物跡の南北柱列は、S B 10の東辺柱列と柱筋を通したように連なり、また柱掘形の規模などもこれに類似する。上記の南北柱列のうち、中央の2間分が短いといった点をも考慮すれば、本建物は南北に庇を付した東西棟建物と考え、S B 10と極めて密接な関係のもとに設けられたものと推測される。

**掘立柱建物跡 S B 16** B地区の西半部、掘立柱建物跡 S B 11の北側で検出した建物跡である。南北6間(約10.8m)・東西2間(約5.1m)の南北棟建物跡で、南北の柱間寸法は、南から約1.8m(6尺)等間、東西は、約2.55m(8.5尺)ー約2.55m(8.5尺)を測る。柱穴掘形は、一辺0.5m前後の方形をなし、深さは40cm前後が遺存する。確認できた柱痕跡は、径約0.2mを測る。主軸方位は、N 4°Wである。

**掘立柱建物跡 S B 19** B地区の西半部で検出した。南北5間(約11.4m)・東西2間(約1.8m)の南北棟建物跡である。南北の柱間寸法は、南から約2.4m(8尺)ー約2.55m(8.5尺)ー約2.25m(7.5尺)ー約2.1m(7尺)ー約2.1m(7尺)、東西は、約2.4m(8尺)ー約2.25m(7.5尺)を測る。柱掘形は、一辺0.5m前後の方形をなし、深さは20cm前後が遺存する。確認できた柱痕跡は、径約30cmを測る。主軸方位は、N 5°Wである。

**掘立柱建物跡 S B 20** B地区の南半部で検出した建物跡である。南北3間(約4.89m)・東西3間(約4.44m)の総柱建物跡である。南北の柱間寸法は、南から約1.65m(5.5尺)ー約1.65m(5.5尺)ー約1.65m(5.5尺)、東西は、約1.5m(5尺)ー約1.5m(5尺)ー約1.5m(5尺)を測る。柱掘形は、一辺0.5m前後の方形をなし、深さは20cm前後が遺存する。確認できた柱痕跡は、径約

20cmを測る。主軸方位は、N 5°Wである。

**掘立柱建物跡 S B 21** B地区の中央部で検出した建物跡である。東西5間(約7.5m)・南北2間(約3.75m)の東西棟建物跡である。柱間寸法は、東西が西から約1.35m(4.5尺)―約1.35m(4.5尺)―約1.2m(4尺)―約1.35m(4.5尺)―約2.25m(7.5尺)、南北は、約2.1m(7尺)―1.65m(5.5尺)を測る。東端の1間分が長く、廂もしくは土間として利用されていた建物と考えている。柱穴掘形は、一辺0.4m前後の方形をなし、深さは20cm前後が遺存する。確認できた柱痕跡は、径約10cmを測る。主軸方位は、N 2°Wである。

**掘立柱建物跡 S B 22** B地区の北端付近で検出した建物跡である。南北3間(約5m)・東西1間(約1.8m)分を検出した南北棟建物跡であるが、建物跡の大半が調査区外にのびているため、その全容は不明と言わざるを得ない。南北の柱間寸法は、南から約16.5m(5.5尺)―約1.65m(5.5尺)―約1.65m(5.5尺)を測り、東西は、約1.8m(6尺)である。柱穴掘形は、一辺30cm前後の方形をなし、深さは20cm前後が遺存する。確認できた柱痕跡は、径約10cmを測る。主軸方位は、N 1°Wである。

### 3. 柵跡

**柵 S A 01** B地区の北端付近で検出した。4個の柱穴が南北に約1.65m(5.5尺)等間で並んでいたことから柵列と判断したものである。柱穴掘形は、一辺40cm前後の方形をなし、深さは30cm前後が遺存する。確認した柱痕跡は、径約20cmを測る。主軸方位は、N 4°Wである。

### 4. 溝

**溝 S D 08** A地区第1遺構面で検出した素掘り溝である。溝は、調査地中央部のやや北東を南北方向に直線的に縦断する。溝幅約1.2m・深さ約40cmを測る。溝底レベルは南側が高いことから、北流する溝と思われる。溝の北への延長については、調査トレンチから外れることから不明である。溝内の埋土中から7世紀代の須恵器杯・蓋、土師器甕・鉢などが出土した。

**溝 S D 16** A地区第1遺構面の北端部で検出した東西方向の素掘り溝である。溝の上部は鳥畠に伴う水田で大きく壊されている。溝の南肩を検出したが、攪乱の影響で溝幅は不明である。溝の深さは検出面から約60cm程度を測る。溝埋土は砂と粘質土が互層に堆積し、中層部には拳大の円礫が少なからず含まれていた。出土遺物は多く、須恵器の壺・甕・杯・蓋・鉢など、土師器の甕・高杯・椀・皿・蓋、瓦類などが出土している。調査時点ではS D 08との切り合い関係が不明であったが、出土遺物の検討から、溝S D 08より後出する溝であることが明らかとなった。時期としては7世紀末～8世紀始め頃とみている。

**溝 S D 33** S D 08の西、14～17.8mの間隔を開けて、併走状況にある素掘り溝である。溝幅約1m・深さ約60cmの規模を測る。直線的にのびる溝は北端部でやや西にその流れを振る。溝の南端部は、中世以降の削平によって失われている。時期を示す良好な出土遺物はみられないが、位置関係・方向性から溝S D 08と同時期の可能性が高い。S D 08との間隔では北に行くほど間隔が

狭まる傾向にあるが、全体的には併走関係にあると判断される。

**溝 S D 45** B地区 S B 12の北側に位置し、調査区東端で北に折れる「L」字形の溝である。全長約8m・幅30～40cm・深さ10～20cmを測る。土師器片などが少量出土した。掘立柱建物跡 S B 12と方位をそろえており、これに伴う区画溝と考える。

**溝 S D 53** B地区のほぼ中央にある南北溝である。島畠に伴う水田および試掘トレンチによって削平されているが、北端を確認した。また、S D 53の延長はA地区で検出されていないため、同時期と考えられる東西溝 S D 16と直交する可能性が高い。したがって、S D 53は全長60m前後と推定される。また、幅3.0m以上・深さ0.5mを測る。溝底の最下層には炭層の堆積が認められ、少なからず遺物を含んでいる。溝の各層からは、飛鳥時代後半頃の須恵器杯身・杯蓋、土師器杯などが多量に出土した。溝の主軸方位はN 1° Eを測り、掘立柱建物跡 S B 10や S B 15の主軸に近い。

## 5. 井戸

**井戸 S E 02** A地区南西部で検出した奈良時代に属する方形の井戸跡である。掘立柱建物跡 S B 04の西7m付近で検出した木枠組みの井戸である。台形に近い方形掘形は、最大で東西約2.6m×南北約2.2mを測る。検出当初、井戸内の埋土と掘形の埋土が酷似していたことから、井戸内の埋土掘削時に掘形埋土も同時に掘削して調査を進めていた。調査を進めた結果、掘形中央からやや東に偏って、方形に組まれた木製井戸枠を検出した。検出した井戸枠はほぼ正方形を呈し、一辺は約0.86mの規模を測る。井戸枠は腐朽が著しく全容を把握できない。井戸枠の四隅に枠材が遺存していないことから、隅部枠材の仕舞いに関しては不明な点が多い。各面には厚さ約2cmの板材を縦位置で使用している。板材には規格性が無く、幅5～40cmの板材が使用されている。枠材の下端レベルが不揃いであることから、板材は打ち込まれた可能性が高い。4面の板枠材の固定には桟木が使用されたと判断するが、桟木自体は未検出である。井戸の完掘を行った結果、当初、井戸枠の下端面が井戸底とみていたが、井戸枠下端から約30cm下がって掘り鉢状に中央部がくぼむ井戸底を検出した。井戸底面の直上から須恵質の長頸壺・杯・甕体部、土師質の片口鉢が出土した。長頸壺と片口鉢は、ほぼ完形品であったが、ともに口縁部の一部を欠いている。また、杯は半截状態で出土し、甕は体部から上半部分を欠いている。これらの土器は一括性が高い出土状況を示し、土器自体も故意に破損したと考えられることから、井戸祭祀に関連する遺物と判断される。また、杯の底部外面には墨書が認められる。

**井戸 S E 04** B地区南東部で検出した四本柱縦板横桟止めの平安時代に属する井戸跡である。井戸の掘形は、方形で一辺約3.2m・深さ約2.6mを測る。井戸枠の遺存状態は非常によく、その構造を詳しく知ることができる。井戸枠は方形に生まれ、各面がほぼ東西南北を指向するように配置されている。井戸枠は、四隅に一辺16～21cmの角柱、または一辺約20cmの八角柱を配置し、四面の井戸枠には厚さ10cm前後の板材を使用している。枠材は縦位置に生まれ、各面内側の上下2か所で横桟が設けられている。井戸枠の基底部分には胴木がみられないが、各部材の下端レベ

ルはほぼ一定である。検出した井戸枠の上部は腐朽が進行し、やせ細るが、井戸底から1.5m付近までは特に良好な遺存状況にある。各面とも枠板材は井戸底から約1.9m分が遺存する。北面と東面の枠板には、幅約0.9mの1枚板をそれぞれ使用している。また、南面は幅約30cmの板材を3枚、西面には幅約15～20cmの板材6枚をそれぞれ使用している。平坦な井戸底には、拳よりやや小さい円礫が敷き詰められる。井戸底の中央には直径約50cm×深さ約12cmの曲物が埋設されている。

井戸内の埋土中から黒色土器碗・緑釉陶器皿・灰釉陶器・木製横櫛などが出土したほか、井戸掘形の埋土には土馬・墨書土器などが含まれていた。

この井戸は、枠材として使用された枠板の規模が特に傑出している。なかでも、全長2m以上×幅約0.9m×厚さ約10cmの巨大な1枚板が2枚使用されている。また、他の枠板も幅が15～30cmと狭いが、長さ・厚みともほぼ同一規模の板が使用されている。板材には幅・厚みに規格性があり、長さにおいても揃っていたものと推測される。井戸の枠材に使用するには十分過ぎる板材であることから、本来は建物に使用された板材であり、井戸枠に再利用されたとみてよからう。特に巨大な2枚の板材については、建物の扉に使用されていた部材と考えられる。

## 6. 土坑

土坑SK11 B地区中央東端で検出した土坑である。部分的な検出であり、土坑の東半部は調査地外に含まれる。円形に近い掘形とみるが、南北3.4m・深さ70cmを測る。土坑内から須恵器杯・土師器杯などが出土した。土坑はSB07に切られている。

土坑SK22 B地区で検出した不定形土坑である。全長約1.2m・深さ約0.3mの規模を測る。土坑内から須恵器・土師器などの遺物が出土した。

## 7. 土器溜まり

土器溜まりSX01 B地区中央やや北寄りで検出した深さ30cm前後を測る不整形な落ち込みである。落ち込み内からは、遺物とともに多量の焼土が出土している。火災の後始末をした土坑である可能性がある。出土遺物には、須恵器杯身・短頸壺などがある。なお、検出状況から溝SD53よりも新しい。

土器溜まりSX02 B地区掘立柱建物跡SB11とSB15の間で検出した土器溜まりである。明確な掘形を持たないが、南北約4.0m・東西約2.8mの範囲に土器が集中してみられた。須恵器・土師器が出土しているが、小片が多い。SX02直上の包含層より、金属製品(托?)を模倣したと思われる須恵器が出土している。

## 第4節 平安時代末～鎌倉時代

この時期の遺構はB地区の第1遺構面で検出した。掘立柱建物跡1棟と井戸3基がある。

## 1. 掘立柱建物跡

**掘立柱建物跡 S B06**(図版第23) 調査区中央付近で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡東半部は試掘調査時に失われ、建物跡西半部の桁行1間(約2m)×梁間2間(約3.6m)を検出した。桁行列の柱穴跡が試掘トレンチ以東に存在しないので、建物跡は桁行3間(約6m)と推定される。柱穴掘形は円形で、直径約30cm×深さ約20cmである。掘形内埋土は黄色砂質土で、埋土中から瓦器椀の破片が出土した。主軸方位はN9°Eである。

## 2. 井戸

**井戸 S E03**(図版第24) B地区北東部で検出した円形を呈する中世の井戸跡であり、東側の掘形の一部が調査地外に出ている。掘形はほぼ円形で、直径2.8~3.0mの規模を測る。井戸枠は遺存していないが、中央部での断面観察によって、直径約2.1mの規模を測る円形の井戸枠が存在したことが、井戸枠裏込め土の存在から明らかとなった。井戸枠の痕跡は上部から下方に向かって幅が減ることから、樽形の井戸枠が使用されていた可能性が高い。

井戸内部を検出面から約1.0m掘り下げた地点で底部穿孔を行った土師皿のほか、瓦器椀・瓦器皿と木製の曲物3点(直径約30cm)が出土した。土師皿は10~20cm程の堆積土を挟んで上下2面に分かれて出土した。土師皿は完形品の比率が高く、半裁品や破片は比較的少量の傾向がうかがえる。この土器群は、井戸を放棄する際の祭祀との関わりが注目される。上下2面の出土状況から、祭祀は最低2回は行われたとみている。上下2回の土師皿に時期差がないことから、祭祀の間隔は短期間であったと判断する。

調査中にトレンチ壁面が大きく崩壊し、その後の井戸底を目指す調査が危険となった。これ以上の井戸下層の調査は、堤防壁の崩壊を招く危険性をはらんでいることから、中層以下の調査は断念した。

**井戸 S E05** B地区北半部中央付近で検出した、不整形な円形を呈する中世の井戸跡である。すでに島島形成時点で上半部を削平されている。井戸枠は、断面観察でも痕跡を確認できないことから、素掘り井戸とみられる。軟弱地盤にほぼ垂直に穿たれることから井戸枠が存在した可能性も残る。井戸は直径約1.4m×深さ約1.7mの規模を測る。井戸の埋土は灰色系のシルトであり、井戸底から70cm付近に薄い有機物層を挟む。遺物の出土はわずかであったが、井戸底付近から瓦器椀の破片が出土した。

**井戸 S E06** B地区北部 S E05の東で検出した、中世に属する方形の井戸跡である。井戸の大部分は失われ、わずかに井戸底部分を検出するにとどまった。井戸枠の有無については不明である。井戸掘形は一辺約1.9m、深さは最も良好な西側で約30cmを測る。井戸底はほぼ平坦である。灰色系シルトの埋土中から瓦器椀・土師器の小破片が少量出土している。

## 第5節 鎌倉時代以降

この時期の遺構は、A・B地区の第1遺構面で検出した耕作地の痕跡である。当地一帯には、

島島と呼ばれる周囲より一段高くなった畑地が点在している。ここでは、こうした畑地の痕跡を主体として、その周囲に一段低く形成された水田部の状況をあわせて調査し、その形成時期並びにその後の変遷等の確認に努めた。調査では時間的な制約もあり、主に断面観察などを行うことによって実施した。

**島島1** A地区に存在する東西方向に長軸をとる島島である。調査時点では島島との認識が無く、B地区調査の進捗によってその存在を確認したものである。調査地北端のSD16上部の中世水田と、調査地南端の中世水田に挟まれた幅約60m間を島島とした。周辺の調査状況から、北に分布する島島群のうち、南西端に位置する島島と現時点では判断する。島島上には東西方向の溝・柵列が存在する。

**島島2** B地区で検出した2か所の島島のうち、西側の島島である。島島の長軸は南北方向をとる。島島の周囲は一段低く、あたかも幅広で浅い溝を開削するように、微高地を削り下げている。島島の北部は調査地外となるが、調査地内で南北約49m分の長さを検出している。島島上端での幅は約12mを測る。島島周囲の低地は、砂質の強い粘質土が堆積し、牛の足跡が多数認められ、水田として機能していたと判断される。島島2と島島3間は約7mの間隔を開ける。島島2の西にも微高地が残り、さらに島島が存在する可能性が高いが、わずかの検出であることから確定には至っていない。島島2の西の低地の幅も約7mを測る。島島上端と水田部の底面の比高差は約50cmを測る。

**島島3** B地区西端で検出した南北方向の島島である。島島南端は、島島2より南に約5m下がる状況にある。部分的な検出であり全容は不明である。長さ約49m・幅約7mを検出するにとどまった。

水田が営まれた島島周囲の低地部は、砂質の強い粘質土と薄い砂が互層に堆積している。断面観察によると、水田部分は土砂の堆積が進む過程で、その幅が増減する状況が認められた。堆積土の中には中世～近世の遺物が含まれていた。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 出土遺物の概要

A・B地区から出土した遺物は、整理箱にして約100箱ある。大半を占めるのは土器類(陶磁器類を含む)であり、ほかにはわずかに石製品(石鏃・石斧・石帯など)や古瓦などがある。いま、これらを時期別にみると、弥生時代後期末～古墳時代前期・古墳時代中期末～後期初頭・飛鳥時代～平安時代・平安時代末～鎌倉時代の4時期に大別される。この状況は、検出遺構にほぼ対応するところであるが、遺物量からすれば、整理箱にして、平安時代末～鎌倉時代が7箱、飛鳥時代～平安時代が30箱、古墳時代中期末～後期初頭が3箱、弥生時代後期末～古墳時代前期が60箱と、弥生時代後期末～古墳時代前期のものが圧倒的に多い。ただし、これは各遺物の個体の大きさなども大きな要因となっており、実際に出土遺物の多くを占めるのは、弥生時代後期末～古墳時代前期および飛鳥時代～平安時代のものである。

弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物としては、遺構の項でもふれたように調査区の最下層で検出した、水田跡を覆っていた洪水砂層をはじめとする砂質土層中から出土したものが、大半を占める。うち、B地区では、この土層を掘削中に土器溜まり状に土器類が集中して出土した部位を数か所確認したことから、SXの遺構番号を付して土器溜まり出土として取り上げ、これを報告している。ただ、この土層は遺構の埋土かどうかを極めて判別しにくかった面があり、土器溜まり出土としたものは、何らかの遺構中に含まれていた可能性もある。

古墳時代中期末～後期初頭に属する遺物は、B地区の竪穴式住居跡やその周辺の包含層から出土したものである。ただし、先述のように、量的にはきわめて少ない。なお、この時期の遺構群(集落跡)は、改めて報告を予定している本遺跡C～E地区、すなわち、今回報告しているA・B地区の東側に大きく展開をみせる。

続く時期は、飛鳥時代～平安時代としているが、出土遺物を細かくみれば、飛鳥時代～奈良時代(7世紀後半～8世紀後半)、平安時代(9～10世紀)の大きく2時期に大別される。うち、良好な出土遺物は、溝や土坑などの遺構から出土したものであるが、その多くは7世紀代を中心としたものに偏る。ここでは、検出遺構の主体が掘立柱建物跡であるといった状況を考慮し、これに包含層中から出土した飛鳥時代～平安時代の資料をあわせて提示した。掘立柱建物跡をはじめとする検出遺構の、所属時期を検討する材料とするためである。

平安時代末～鎌倉時代の遺物は、古墳時代中期末～後期の遺物とともに非常に少ない。これは、遺構の項でもふれたが、鎌倉時代後半期以降、一帯に形成された「鳥畠」の造成によって、この時期の遺物を含む良好な包含層が大幅に削平されたことに大きな要因があるものと思われる。遺構の遺存状況も悪く、辛うじてこの時期の遺物がまとまって出土した井戸SE03の資料を中心に

報告した。なお、時期的には、12世紀後半頃の資料であるが、井戸の廃絶時に何らかの祭祀的な行為がなされたらしく、非常に多くの土師器小皿が出土しているのを大きな特徴とする。

## 第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期

この時期の出土遺物には、土器類に加え、石製品などがある。石製品は、主に上層遺構面の調査時に他の時代の遺物に混在して出土しており、土器類の後に一括して報告する。

さて、土器群には、壺・甕・高杯・器台・鉢などがある。時期的には、先に述べたように弥生時代後期末～古墳時代前期までのものが認められる。中に土器溜まりとして取り上げた資料や遺構(溝)出土のものなどに、一定の一括性を期待しうるものも存在する。また、検出した水田面直上に認めた洪水砂層などから出土した土器群は、これが営まれた時期を知る上で大きな意味を有している資料である。こうした観点から、以下では、各遺構ならびに土器溜まり資料、水田上の洪水砂層、A・B地区それぞれの包含層資料とに分け、出土資料を報告する。なお、ここでは、まず器種毎に分類を行い、これに従って記述をすすめることとする。

### 1. 器種分類

壺(小型壺・小型丸底壺を含む)・甕・高杯・器台(小型器台を含む)・鉢(有孔鉢・台付き鉢を含む)がある。

壺 主に口縁部の形態からA～Iに分類した。またこのうち、壺AはA1～A3に、壺EはE1～E3にそれぞれ細分した。

A：二重口縁を有す広口壺である。

A1 直立気味の頸部と、一旦、大きく開いた後、屈曲して上段部が開く口縁部からなり、口縁端部をわずかに上方へつまみ上げる。

A2 内湾気味に立ち上がった頸部と、一旦、短く外反した後、屈曲して上段部が大きく開く口縁部からなる。

A3 一旦、短く外反した後、屈曲し、直線的に上外方へ立ち上がる口縁部を有す。

A4 直立気味の頸部から外反して立ち上がる口縁部をなすが、口縁部は屈曲後、あまり大きく開かない。

B：口縁部が筒状に立ち上がった後、大きくハの字状に開き、端部が上下に拡張される広口壺である。

C：口縁端部付近の小片を確認したのみだが、端部付近を下方に拡張する広口壺である。口縁部の内外面に櫛描き直線文・波状文などの装飾を施す。

D：外反して立ち上がる口縁部を有す広口壺。

E：上外方へ直線的に立ち上がる口縁部を有す直口壺。形態からE1～E3に細分した。

E1 球形の体部から口縁部が大きく立ち上がるもの。

E2 下膨れの体部から口縁部が立ち上がるもの。

E3 扁球状の体部から口縁部が立ち上がるもの。

F：口縁部は、一旦、筒状に立ち上がった後、ほぼ直角に屈曲して開き、再び直角に屈曲して立ち上がるもの。

G：口縁部が、一旦、「ハ」の字状に開いた後、屈曲して内傾して立ち上がるもの。

H：口縁部は、開き気味に立ち上がり、ゆるやかに屈曲し、内傾して端部へ至るもの。

**小型壺** 通常の壺に比べ小型に作られたミニチュア的な壺を小型壺とした。いずれも直立してのびる口縁部をもつ直口壺の範疇で考えられるものである。

**小型丸底壺** A～Cに分類した。

A：口径が体部最大径をうわまわるもの。

B：体部最大径が口径をうわまわるもの。

C：口縁部の立ち上がりが短い、やや大型品。

**甕** A～Eに分類し、さらに細分した。

A：弥生時代後期以来の伝統的な甕で、平底、楕円形の体部、くの字状に短く外反する口縁部からなる。体部外面にタタキを施し、内面はナデないしはハケ目で仕上げる。口縁端部の形態には、端部が丸くおわるもの(aタイプ)、上外方へかるくつまみ出すもの(bタイプ)、外方に面をなすもの(cタイプ)の三者がある。

B：外面体部には、非常に細かな叩きを、内面はヘラケズリを施し、口縁端部を上方へつまみあげるもの。いわゆる庄内式の甕である。

C：体部外面にハケ目を、内面にヘラケズリを施し、口縁端部を内側へ折りかえすもの。いわゆる布留式の甕である。

D：受口状口縁を有するもの。当遺跡で確認されるこのタイプは、体部外面にタタキを施す。

E：複合口縁を有するものを甕Eとして一括し、口縁部の形態からE1～E3に細分した。

E1 2段目の立ち上がりが短く、丹波方面の影響を受けたもの。体部外面にハケ目、内面にヘラケズリを施すものが多い。

E2 2段目の立ち上がりは大きく、山陰・北陸方面の影響を受けたものとする。外面には疑凹線を認めるものもある。体部外面にハケ目、内面にヘラケズリを施す。

E3 2段目の立ち上がりは内傾し、吉備方面の影響をもつ(ここでは搬入品を確認)。

**鉢** A～Dの四者がある。

A：突出した平底と上外方へ直線的に立ち上がる口縁部からなるもの。

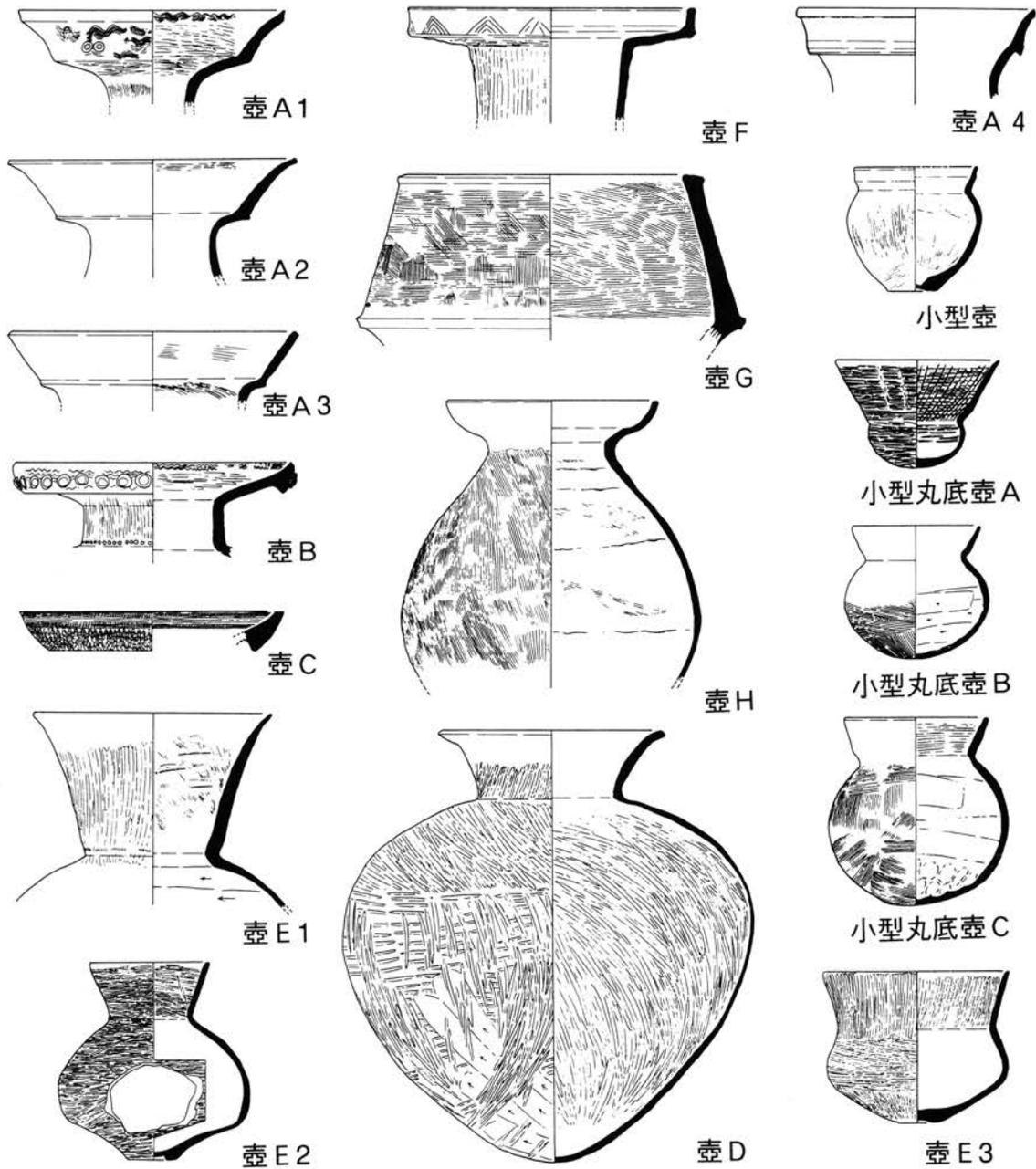
B：平らな底部から内湾気味に立ち上がる口縁部をもつもので、コップ状をなす。

C：扁球状の体部と複合口縁状からなるもの。

D：形態的にはCに近似するが、いわゆる、受け口状口縁を有するもの。

**台付き鉢** A～Cの三者がある。

A：椀形の体部に小さな脚台を付すもの。



第3図 器種分類図(1) 1/5

B：椀形の体部にハの字状に広がる脚台を付すもの。

C：複合口縁をもつ甕状の体部にハの字状に広がる脚台を付すもの。

有孔鉢(甑) A～Cの三者がある。

A：平らな底部から上外方へ直線的に立ち上がる口縁部を有するもの。

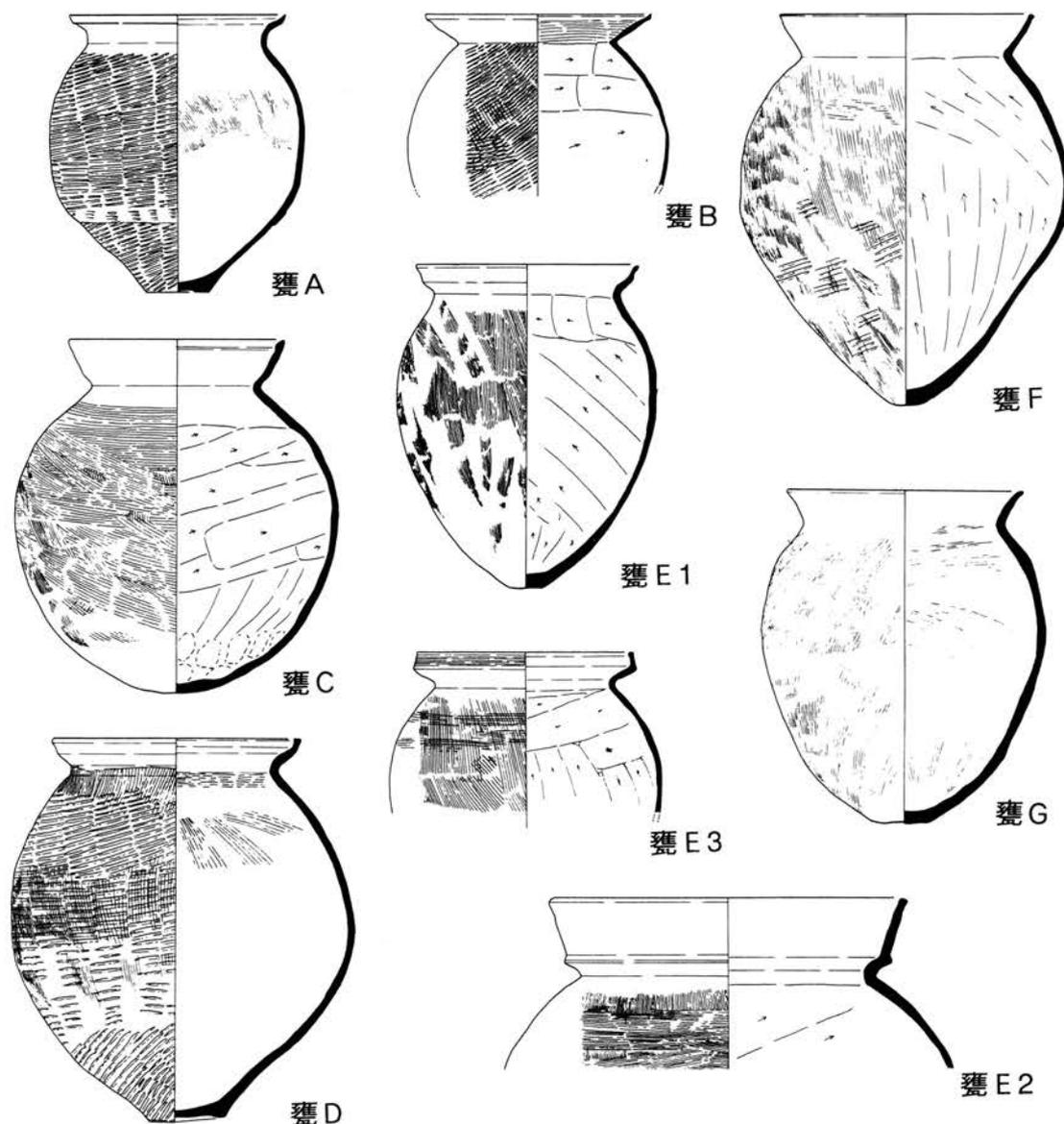
B：丸底で、やや内湾気味に口縁部が立ち上がるもの。

C：丸みのある底部から内湾して立ち上がる口縁部をもつもので、浅身の椀形をなすもの。

高杯 A～Gに分類した。

A：2段に広がる杯部を有するもの。

B：2段に広がる杯部を有するが、その屈曲部が突帯状の段をなすもの。



第4図 器種分類図(2) 1/5

C：杯部が、丸味のある底部からゆるやかに屈曲し口縁部へいたるもの。

D：杯部は、丸味のある底部と内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、碗形をなす。器壁は厚手である。

E：杯部は、底部から口縁部へ内湾気味に立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ上げる。底部と口縁部との境に、わずかな段を有する。

F：碗形の杯部をなし、口縁端部付近は、わずかに外反した後、短く上外方へ立ち上がる小さな複合口縁をなす。

G：杯部は、内湾気味に立ち上がった後、口縁端部付近が内傾する。

器台 A～Dの四者がある。

A：断面が「く」の字状をなし、「ハ」の字状に広がる脚部と直線的に広がる口縁部とからなるもの。



第5図 器種分類図(3) 1/5

- B：口縁部が、複合口縁をなすもの。  
 C：口縁端部が上下に拡張されるもの。  
 D：いわゆる装飾器台。

小型器台 A～Cに分類した。

- A：脚台部が中実のもの。  
 B：脚台部が中空で、口縁部が複合口縁状をなすもの。  
 C：脚台部が中空で、断面が「く」の字状をなすもの。

## 2. 出土遺物

### (1) B地区土器溜まり出土遺物

土器溜まりS X04(図版第26) 壺A 4(30)・D(31)・B(32)、甕A(33)、E 1(34)がある。

壺A 4(30)は、二重口縁をなすが、あまり大きくは開かず、屈曲部外面に粘土帯を貼り付けることで二重口縁状とする。口縁端部は外方に面をなす。甕A(33)は、口径16.6cm・器高18.3cmの小型品で、aタイプの口縁形態をなす。甕E 1(34)は、複合口縁上半が上外方へつまみ出され気味におわり、口縁部外面に擬凹線文を配す。北陸方面の影響を示すと考えられる(搬入品か)。

土器溜まりS X05(図版第25) 壺D(14)、甕E 1(17～19)、器台B(16)、小型器台B(15)がみられる。

壺Cは、体部上半から口縁部を残す。球形の体部から短く外反する口縁部を有し、内外面ともヘラミガキが多用される。18は、口径が体部最大径を上回るもので、体部外面にタタキ、内面下半にヘラケズリが施される。19は、口径17.6cm・器高24.8cmの大型品である。17は、口径13cm・器高14.6cmの小型品である。器台B(16)の複合口縁は、屈曲部上方がかなりつよく外傾する。小型器台B 1(15)は、上半部(受け部)の破片である。

土器溜まりS X07(図版第25) 壺E 3(3)・D(4)、甕A(5・6・7)・D(8)・G(9)、高杯A(13)、器台A(11・12)、鉢C(10)がある。

壺E 3(3)は、扁球状の体部の頸部はあまり狭まらず鉢状をなし、ヘラミガキ調整が多用される。壺D(4)は、短く外反気味に立ち上がる口縁部を有し、端部は上外方に面をなす。甕Aには、aタイプ(5・7)・cタイプ(6)の口縁端部の形態をなすものがある。5・7は体部が張り、球形をなす。甕Dは、体部外面にタタキを施した後、部分的にハケメを施す。鉢C(10)は、内外面ともヘラミガキを密に施しており、3の壺E 3とともに、特異な用途に使用された可能性がある。器台A(11・12)、高杯A(13)は、ともに近江(湖東)方面からの搬入品である可能性が高い。

土器溜まりS X08(図版第26) 壺E 2(35)、鉢B(38)、台付鉢A(39)・C(36)、有孔鉢B(37)がある。

ヘラミガキ調整で仕上げられる小型品が多く、日常生活に使用されたものというより、何らかの特別な用途に使用された感を強く受ける。なかでも、壺E 2(35)は、体部下半に最大径をもつ下膨れの体部を有し、東海方面によくみられる円窓状の穴を焼成後に穿っている。

土器溜まり S X 09(図版第26) 甕類が大半を占める。甕 A (21・22)・E 1 (20・23・24)・F (25)のほか、壺底部(27)、甕底部(26・28・29)を示した。

甕 A は、いずれも a タイプの口縁をなすが、21は球形の体部から外反する口縁の端部付近がやや内湾するものである。甕 E では、20が口縁27.2cmの大型品で、23は複合口縁上半部が外方へ強くつまみ出される。また、24は複合口縁上半部が直立気味に立ち上がるものである。甕底部として図示した26・28は外面にタタキを、29は外面にハケ目、内面にヘラケズリをそれぞれ施す。壺底部とした27は外面にヘラミガキを施す。

土器溜まり S X 10(図版第27) 小型壺(40・41)、甕 A (42)・D (43)・E 1 (44・45・47・48)、鉢 A (49)、有孔鉢 A (50)、甕底部(46)がある。

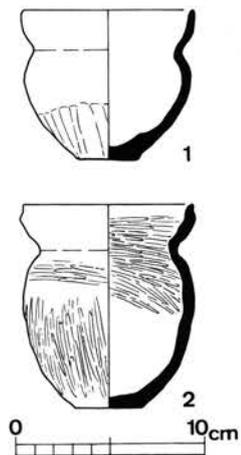
小型壺(40)は、やや開き気味に短く立ち上がる口縁部の端部近くがわずかに屈曲し、内傾気味におわる。口縁端部直下には一条の沈線をめぐらせている。小型壺(41)は、内傾気味に立ち上がる口縁部を有し、内外面ともヘラミガキで仕上げる。甕 A (43)は、ゆるやかに屈曲して外反する口縁部の破片で、a タイプの口縁形態をなす。甕 E では、44は複合口縁部の屈曲が明瞭で、屈曲部は突帯状に突出する。これに対し、45は屈曲がゆるやかとなる。また48は、丸底で卵形の体部を有し、口縁端部はやや膨らみ気味におわり、上外方に面をなす。体部外面上半にハケメの後、ヘラミガキを施す。

## (2) A 地区第 2 遺構面遺構出土遺物

方形周溝墓周溝(S D 40)(第 6 図) 小型壺(1・2)がある。小型壺(1・2)は、ともに、平底で、外反して短く立ち上がる複合口縁を有す。

溝 S D 39(図版第27) 壺 D (51)、甕 B (55)・C (56・57・61)・E 1 (58)、高杯 B (60)、小型器台 A (59)、小型丸底壺 B (52・53)・C (54)がある。

壺 C は、短く外反する口縁部をなすが、あまり大きくは開かない。甕 B (55)は淡黄褐色の胎土で、わずかにつまみ上げる口縁端部の外面には浅い沈線が一条めぐる。その形状は、播磨型の庄内甕とされるものに近い。甕 E (58)は、やや浅身の体部を有すと思われ、複合口縁の屈曲は明瞭で外面には擬凹線文が認められる。



第 6 図 S D 40出土遺物

## (3) 水田上洪水砂層出土遺物

A 地区水田直上洪水砂層出土遺物(図版第31) 甕 A (119)・E 1 (120・122~126・129)・E 2 (121)、器台 B (127)、有孔鉢 A (130)、蓋形土器(134・135)、高杯 A (132)・G (133)がある。また、このほか、甕体部(131)、器台脚部(128)、高杯脚部(136)を示した。なお、131・134・135は下層水田を覆う洪水砂層から出土したものである。

甕 A (119)は、c タイプの口縁を有すもので、口径17.2cm・器高15.1cmのやや扁平な器形をなす。甕 E 1 のうち、122・126は、複合口縁の上段が強く外傾する。甕 E 2 としての121は、複合口縁の上段部が大きく立ち上がり、端部付近をわずかに外反させる。外面には擬凹線文を配す。器

台B (127)は、複合口縁の屈曲は明瞭であるが、外面には擬凹線文は確認されない。甕体部として図示した131は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。器台脚台部の128は大型品で、接合部は確認されないが、127の下半部である可能性が高いものである。高杯脚台部の136は、底径11.1cmの小型品である。

B地区水田上洪水砂出土遺物(図版第28) 壺A 2 (64・65)・B 1 (63)・D (62)、甕A (66～68・75)・D (78)・E 1 (76・77)、有孔鉢A (80・81)、台付鉢A (82)、高杯A (83・85)・F (84)、器台A (87)・B (88)がある。またこのほかに、甕体部(67)、高杯脚部(86)、鉢D (79)を示した。

壺A 2は、小型品(64)と大型品(65)の二者がある。うち、64は口縁部上段が大きく外反してのびるのに対して、頸部が短く、鼓形器台の可能性もある。壺Bは、口縁部外面に円形浮文・櫛描波状文を、内面に櫛描波状文を施す。甕Aでは、aタイプ(66・68～70・74・75)、cタイプ(71)、bタイプ(72・73)の口縁形態をなすものがある。体部から底部の形態では、小型品の体部として図示した(67)では小さな平底になっている。また、68のように尖底気味のものもある。74は、体部外面に矢羽根タタキが施されている。甕E 1はいずれも小型品で、ヘラミガキが多用されている。76は複合口縁上段が内傾気味に立ち上がるもの、77は外反気味に立ち上がり、底部は尖底に近い。79は、上段が内傾して立ち上がる受け口状口縁を有し、肩部には櫛描直線文・刺突文が配される。近江系の影響を示すもので、搬入品の可能性が高い。有孔鉢Aには、体部外面をナデで仕上げるもの(80)とタタキを施すもの(81)がある。台付鉢(82)は、内湾気味に立ち上がる椀形の鉢に、短くつまみ出した程度の台部を付すものである。器台B (88)は口縁部を欠くが、屈曲部から立ち上がる痕跡を残す。高杯AおよびFは、ともに小型品で、85は、脚部下半があまり開かない。高杯脚台部として図示した86は、「ハ」の字状にひろくものであるが、端部付近が内湾気味となる。

B地区洪水砂上の茶褐色土出土遺物(図版第29) 壺C (91)・D (89・90)、小型壺(92)、甕A (94)・E 1 (95・97)・G (96)、高杯E (101)、鉢C (98～100)がある。またこのほか、壺体部(93)、高杯脚部(102)を示した。

壺C (91)は、口縁端部を下方に拡張し、外面に櫛描波状文・直線文を、内面に櫛描直線文を配する。90は、丸底で肩の張った体部と、外反して八の字状にひろく口縁を有する。ヘラミガキが多用されており、体部外面上半はタタキの後ヘラミガキ、下半はタタキの後ヘラケズリを施して、さらにヘラミガキで仕上げている。89は、短く直線的に立ち上がる口縁部を有す。小型壺(92)は、短く立ち上がる口縁部が、端部付近でわずかに屈曲し複合口縁状をなす。甕A (94)はbタイプの口縁を有する。甕E 1のうち、95は複合口縁上段が短く立ち上がるもので、体部内外面にハケメを施す。97は複合口縁の屈曲が明瞭なもので、体部外面にタタキの後ハケメ、内面にハケメを施す。98は口径35.8cmを測る大型品である。99・100は、口縁端部が上方に面をなすもので、体部外面にはタタキが施される。このほか、壺体部片の93は、小さな平底と丸みのある体部を有するもので、体部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリが施されている。また、高杯脚台部の102は「ハ」の字状にひろがる小型品である。

(4)包含層出土遺物

A地区包含層出土遺物(図版第30) 小型丸底壺B(103・104)、甕A(105・106・107)・B(109・110)・C(111~115)・E1(108)・E3(116)、有孔鉢C(117)があり、このほかに鶏形土製品(118)がある。

甕A(105・106・107)には、aタイプの口縁形態をなすもの2点(105・106)、bタイプの口縁形態をなすもの1点(107)がある。うち、106は口径12.7cmの小型品である。甕Bのうち、110は暗茶褐色の胎土を呈し、河内方面からの搬入品と判断される。また甕E3(116)は、吉備方面からの搬入品である。甕Cには、112のように、肩部に刺突文が認められるものがある。鶏形土製品(118)は、頭部から頸部そして体部の一部を残すものの、体部下半を欠失している。遺存高7.9cm、遺存部分での体部最大幅5cmを測る。全体に中空で、嘴部先端は0.5cm程度の円孔となる。頭頂部には鶏冠が張り付けられていたと思われるが欠損している。また、頭部には目は表現されていない。外面は、ヘラケズリによって形を整えたあと、軽くナデを施す。頸部内面にはシボリ痕が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、上半は褐色系が強くなっている。

B地区包含層出土遺物(図版第31~35) 壺A(146・147)・A2(148)・A3(151)・B(152)・D(149・150)・E1(142・143)・F(145)・G(153・154)・H(144)、小型壺(141)、小型丸底壺A(137~140)、甕A(155~170)・B(171~174)・C(175・176)・E1(178~184・186・187)・E2(185)、鉢A(188)・B(189~191)、台付鉢B(194・195)、有孔鉢A(193)、高杯A(196~199)高杯B(200)、C(201~204)・D(205)、器台B(207)・C(206)、装飾器台(215・216:脚部)、小型器台A(212)・B(213・214)がある。またこのほかに、甕底部(192)、台付き甕の脚台部(211)、高杯もしくは器台の脚台部(208~210)を示した。

146は、口縁端部外面に円形浮文・櫛描波状文、内面には櫛描波状文を配する。147は口縁端部付近の破片であるが、やはり外面に円形浮文・櫛描波状文、内面に櫛描波状文を配する。152は、外面に円形浮文・櫛描波状文、内面には櫛描波状文を配する。149・150は、いずれも短く外反する口縁部の破片で、うち149は口縁端部を上方へつまみ上げる。142は端部を内側へ肥厚させる。その他の壺(壺F・G・H)はそれぞれ少量ずつが認められたにすぎない。壺H(148)は下膨れの体部からゆるやかに屈曲する二重口縁状の口縁部が立ち上がる特異な形態をなす。壺G(153・154)は口縁端部の破片(153)と、これと同一個体と考えられる体部(154)である。胎土は暗黄灰色をなし、讃岐方面からの搬入品と考えられる。壺F(145)は筒状に立ち上がった頸部から一旦水平近く広がり、屈曲して短く直立する口縁部を有すものである。口縁部外面には鋸歯文が配される。播磨方面からの搬入品の可能性が高い。

甕Aでは総数15点のうち、aタイプの口縁形態が8点、bタイプが6点、cタイプが1点ある。また、体部の張りが強いもの(157・161・167・168)や小型品(155・159・160・162)などが認められる。甕Bには、河内方面からの搬入品と考えられるもの(171)に加え、播磨方面からの搬入品の可能性のあるもの(172)などが認められるが、地元の胎土と考えられるもの(173・174)などもある。うち、174は球形の体部をなす小型品である。甕E1の中には、複合口縁の屈曲部が明瞭な

もの(177・178・180～182・184)、やや不明瞭なもの(179・183)、不明瞭なもの(186)がある。明瞭なものにも上段が直立気味のもの(180)と強く外傾するもの(177・178・181・182・184)がある。なお、全形のわかる177・184では、底部は尖底気味となっている。また、184は浅身の体部を有する。甕E 2とした185は口径23.8cmの大型品である。

鉢A(188)、鉢B(189～191)はともにナデによって仕上げられるものである。有孔鉢A(193)は、外面にタタキが施される。台付鉢B(194・195)は、いずれも内湾気味に口縁が立ち上がる椀形の鉢部にハの字状に下がる脚台を付すものである。

高杯Aには、口縁部の外反度の強くないもの(199)、強く外反して広がるもの(197・198)、直線的に大きく広がるもの(196)がある。高杯C(201～205)は、杯部がゆるやかに屈曲して口縁部へいたる。

器台C(206)は、口縁部を拡張し、擬凹線文や棒状浮文で飾るもので、東海方面の影響を受けたものと考えられる。また、破片であるが、杯部内面に突帯があり装飾器台と考えられるもの(215)や、この脚台と考えられ、端部付近が屈曲し、屈曲部上方に円形のスカシが巡るという装飾性に富んだ脚台部(216)がある。小型器台A(212)は口縁端部が屈曲し上方へ立ち上がるもの、同B(213・214)は断面がくの字状となるものである。

このほか、甕底部の192は羽状タタキが認められるもの、211は東海方面の影響をうけた「S」字状口縁の甕(台付き甕)の脚台部と考えられるものである。また、208～210は脚台部である。

### 第3節 古墳時代中期末～後期初頭

この時期の遺物はきわめて少ない。ここでは、B地区で検出した2基の竪穴式住居跡から出土したものに加え、その周辺の包含層から出土したものの中から、この時期に属すると考えられるものを図示した(図版第35)。須恵器では、杯身・杯蓋・甕、土師器では杯身・高杯・広口壺・甕があり、このほかには石製品として双孔円盤などがある。このうち、土師器広口壺(223)は竪穴式住居跡SH02、土師器高杯(226)は竪穴式住居跡SH03から出土したものである。

須恵器杯蓋(217)は、丸みのある天井部からゆるやかに屈曲して口縁部へ至り、口縁部は垂下気味にさがる。口縁部と天井部の境は断面三角形の突帯状の段がめぐり、口縁端部は下方に面をなす。口径12.6cm・器高4.2cm(いずれも復原)を測る。

須恵器杯身(218・219)は、丸みのある底部から上外方へ立ち上がった体部が、受け部を経て内傾して立ち上がる口縁部へとつづく。口縁部の立ち上がりは高く、端部は内側に内傾する面を有する。218は口径11.2cm・器高5cm、219は口径10.6cm・器高4.8cmを測る。

土師器杯(220)は、丸みのある底部、内湾気味に立ち上がった体部、内傾する口縁部からなる。口縁端部内外面とも強くナデを施し、端部は内傾する面をなす。口径12.4cm・器高5.6cmを測る。

土師器広口壺(223)は、体部中位に最大径をもつやや扁球状の体部から、「ハ」の字状に広がる口縁部が立ち上がる。口径10.4cm・器高15.2cmを測り、体部外面にハケメが観察される。

土師器高杯(224～226)は、明瞭な段をなして2段に立ち上がる杯部を有す大型の高杯(226)、

杯部は2段に立ち上がるが屈曲部がゆるやかな小型のもの(224)、椀形の杯部を有するが、小型のもの(225)の三者がある。

土師器甕(221)は、「ハ」の字状に外反する口縁部を有するもので、口縁端部は外方へつまみ出され、上方に面をなす。外面には縦方向のハケ目、口縁部内面には横方向のハケ目が観察される。口径18.8cmを測る。

須恵器甕(227)は、球形の体部から短く外反する口縁部を有し、口縁端部は玉縁状とする。体部外面にはタタキ後のカキ目が、内面には同心円タタキが認められる。口径19.6cm・器高28.8cmを測る。

#### 第4節 飛鳥時代～平安時代

この時期の出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器・古瓦・石製品などがある。また、器種別にみると、須恵器では、杯身・杯蓋・皿・鉢・壺・甕が、土師器では杯身・皿・鉢・甕・鍋が、そして緑釉・灰釉陶器では椀・皿・壺、黒色土器では椀・鉢などがある。以下では、記述の簡略化のため、主に飛鳥時代～奈良時代の須恵器・土師器に関して器種分類を行う。

##### 1. 器種分類(第7～9図)

###### (1)須恵器(第7図)

蓋 須恵器蓋には、杯・皿類の蓋と壺の蓋がある。このうち、杯・皿類の蓋には、口縁端部内面にかえりを付すものと付さないもの、さらに古墳時代以来の立ち上がりのある杯身の蓋などがある。

蓋A：口縁端部内面に反りを付す杯もしくは皿類の蓋。口径10cm前後のものから口径15cm前後のもの、さらに17cmをこえるものなどがある。17cmをこえるものは、高台を付す皿(後述する皿B)とセットをなすと考えられる。

蓋B：口縁端部内面にかえりを付さない杯もしくは皿類の蓋。形態的には、器高が低く平らなもの、傘形をなし天井部から口縁部へとただらかに下るもの、平らな天井部から下がる口縁部が端部付近で一旦屈曲するものなどがある。

蓋C：形態的には蓋Bとかわりはないが、環状つまみを付すもの。後述する稜椀タイプの杯身(杯C)とセットをなすものと考えられる。

蓋D：平らな天井部から屈曲して口縁部へ至り端部が小さな玉縁状をなすもの。1点のみ確認された。口径18.6cm前後でやや大型品である。

蓋E：古墳時代以来の立ち上がりのある杯とセットをなすもの。後述するが、今回出土した同タイプのものの多くは杯身と判断している。これを蓋と判断した理由は、溝SD08という限られた遺構から立ち上がりのある杯身とともに出土したことによる。

蓋F：平らな天井部から垂下する口縁部を有するもので、短頸壺(後述する壺C)とセットをなすもの。

**杯身** 須恵器杯身は、基本的に、高台を付すもの、付さないもの、さらに古墳時代以来の立ち上がりのある杯身、そしてこの杯身の蓋の形態を踏襲する椀形の杯身の四者が主体をなす。このほかに、高台を付す杯身では、口縁部中位に稜をめぐらす、いわゆる稜椀が1点認められた。

**杯A**：高台を付さない杯身である。時期的な面を考慮すると、飛鳥・藤原編年などにおいて杯Gとされているものが混在することとなる。その区別は、口径(10cm前後)や口縁部の形態(立ち上がりが比較的直立気味)などをもとにすれば可能とも考えられるが、ここでは、これらを一括した。

**杯B**：高台を付す杯身である。

**杯C**：体部下半に稜がめぐる、いわゆる稜椀タイプの杯身である。

**杯D**：古墳時代以来の立ち上がりのある杯身。

**杯E**：上記の杯Dの蓋の形態をもつもの。これについては、杯身と理解すべきか蓋と理解すべきか区別が困難である。先述のとおり、ここでは杯Cと理解される個体が、限られた遺構から1点出土しているにとどまっていること、それ以外では、これとセット関係をなす杯身は全く認められず、逆に口径10cm前後の蓋Aが数点認められたことなどから、杯身と判断した。

**皿** 須恵器皿に関しても、高台を付すもの、付さないものの二者がある。また、高台を付さないものは、丸みのある底部と外側へ強くつまみ出す口縁部からなるものなどがある。

**皿A**：高台を付さないもので、平らな底部から屈曲して口縁部が立ち上がるもの。

**皿B**：高台を付すもの。

**皿C**：丸みのある底部からゆるやかに屈曲して口縁部が立ち上がり、端部はわずかに外側につまみだされ、内傾する面をもつもの。浅身(C1)のものと深身(C2)のもの二者がある。

**皿D**：口径が10.5cmとやや小型で、口縁端部を外側へつまみ出すもの。

**鉢** 分厚く作られた底部から上外方へ直線的に立ち上がる口縁部をもつもの。

**高杯** 須恵器高杯には、低脚の高杯の脚台部を1点確認している。口縁部は、先の杯Aとほぼ同様の形態をなしていると考えられるが、破片ではその区別が困難である。

**壺** 須恵器壺には、短頸壺・長頸壺などがあり、それぞれを細分した。また、底部付近の破片も確認される。

**壺A**：肩のはった体部からラッパ状に大きく立ち上がる口頸部を有する長頸壺。

**壺B**：口径8cm前後・器高4cm前後の小型品で扁球状の体部に、短く直立もしくは外反する口頸部を有する短頸壺。

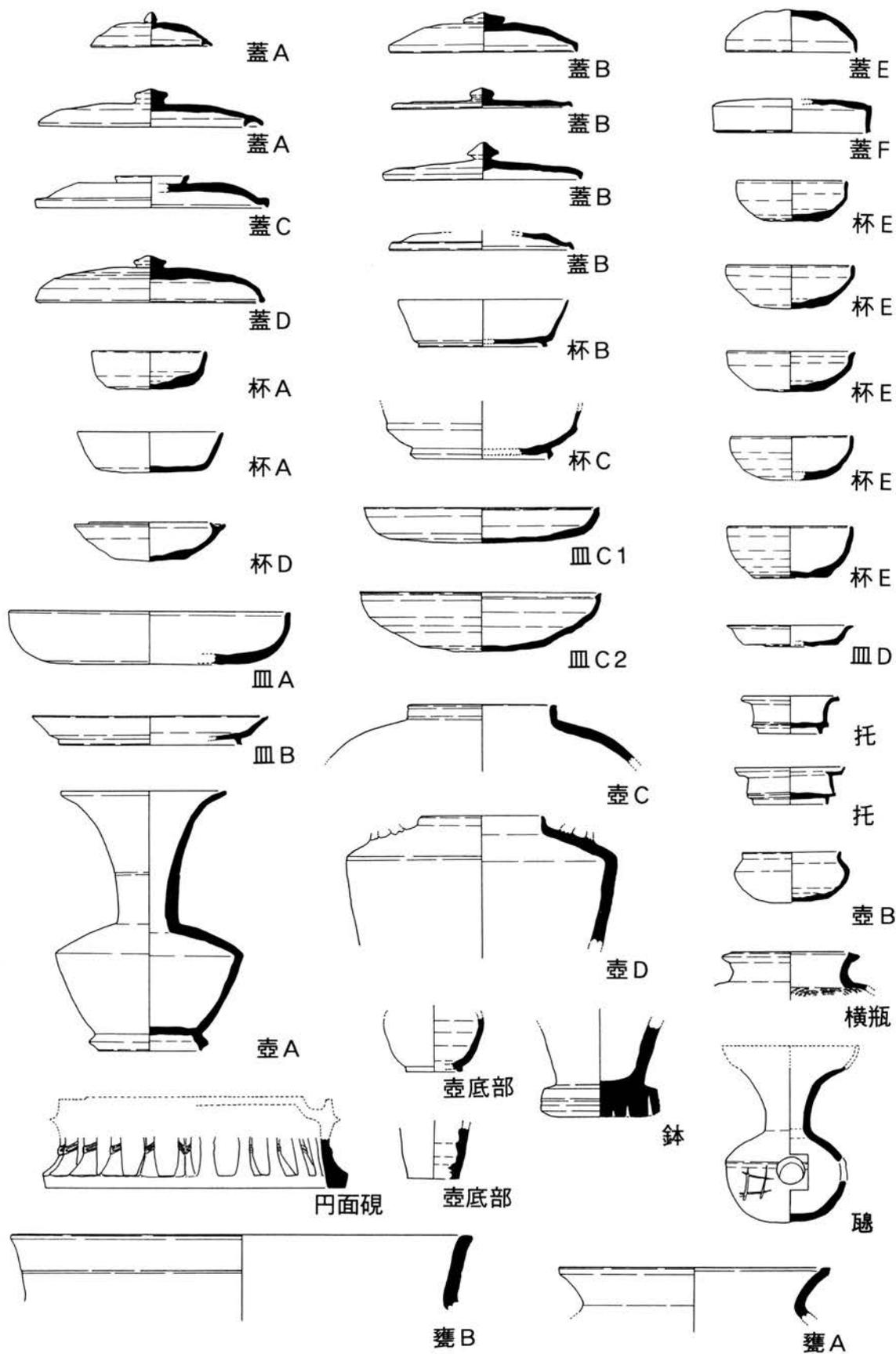
**壺C**：球形の体部に短く直立する口頸部を有する短頸壺。

**壺D**：円筒状の体部に、短く直立する口頸部を有する短頸壺。

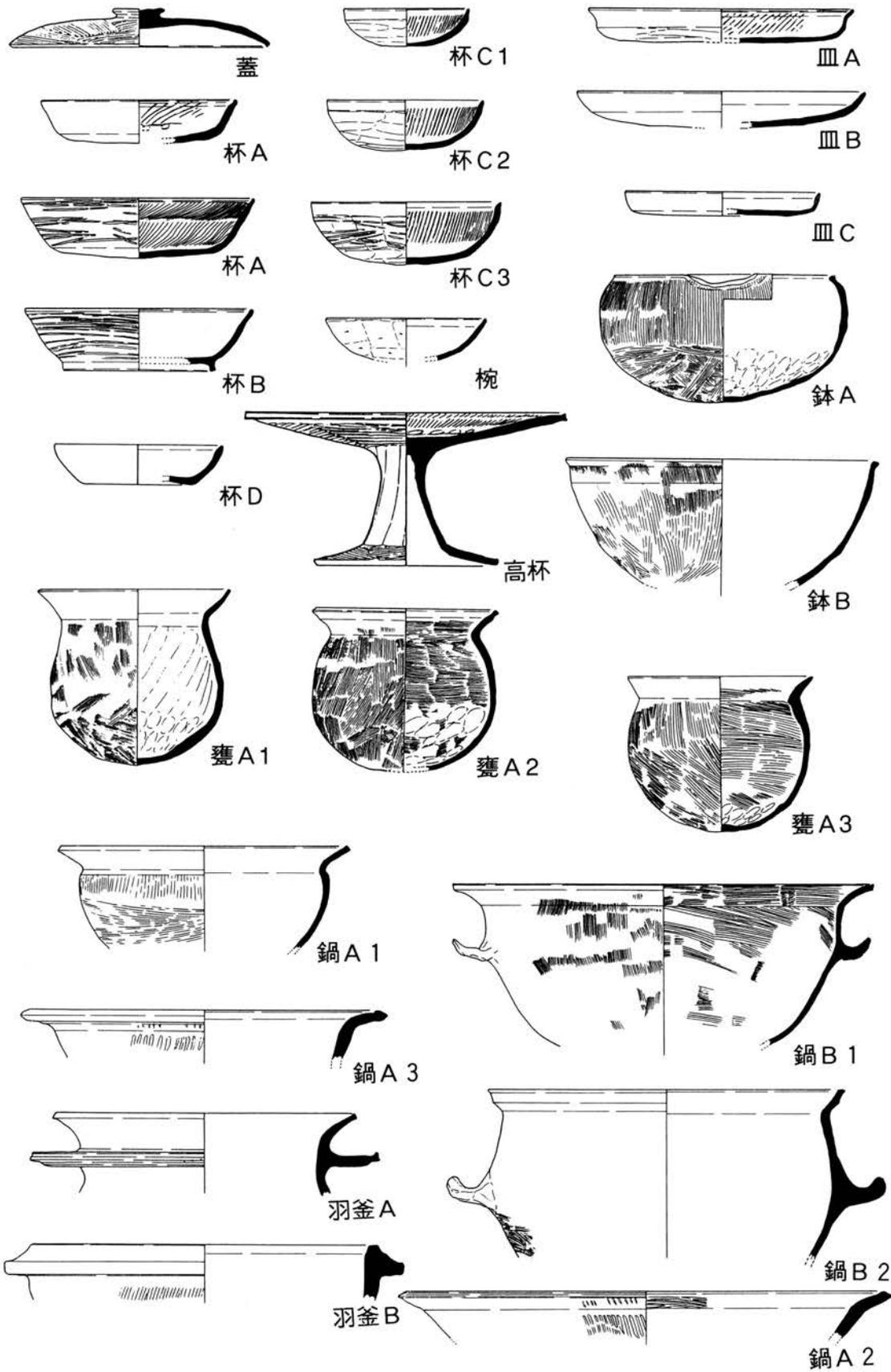
**壺底部**：丸味のあるものある体部に高台を付すものや円筒状の体部に平底のものが認められた。

**甕** 須恵器甕には、口縁部のみを残す破片が多い。ここでは、その形態から大きく二者が認められる。

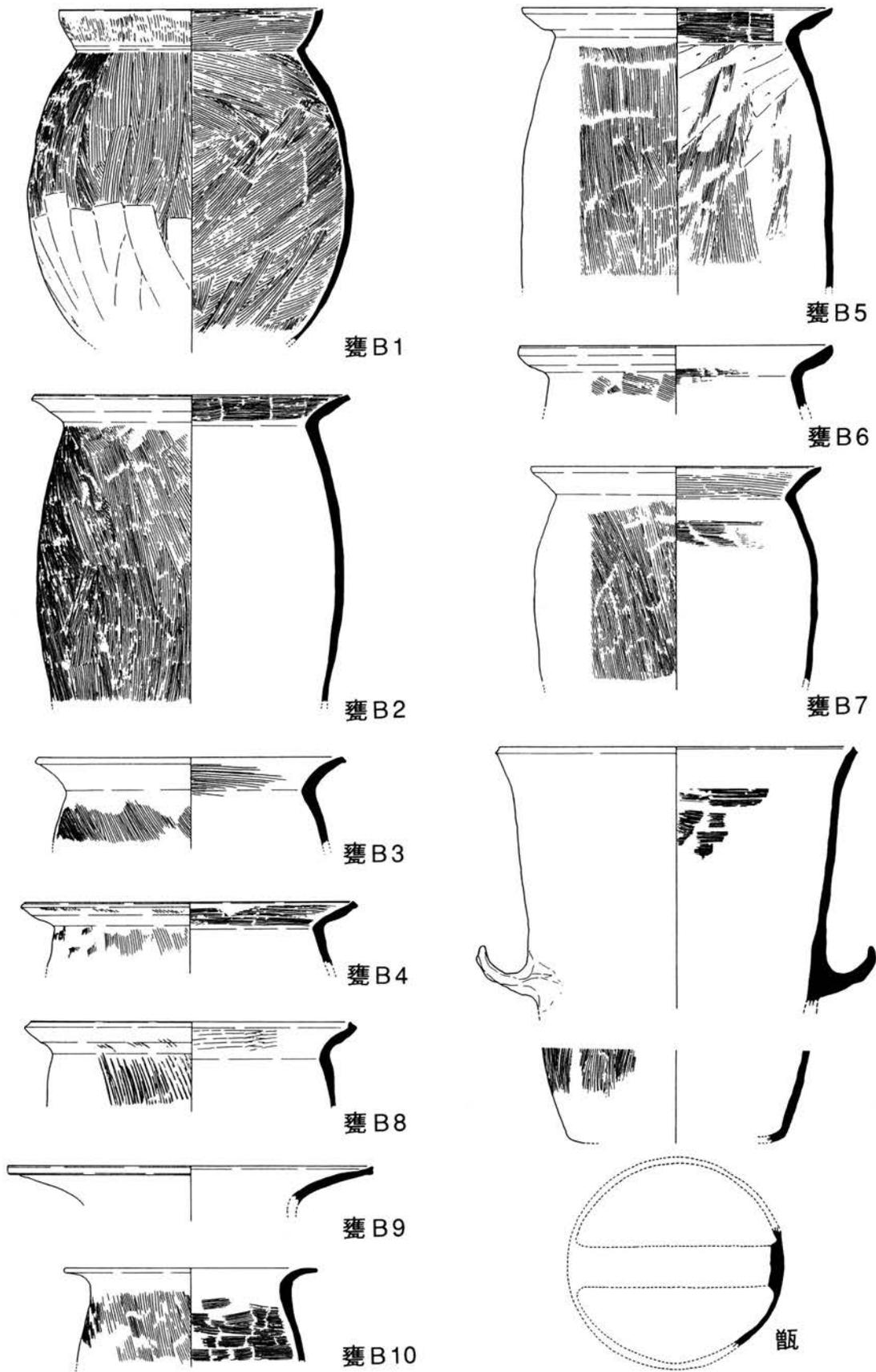
**甕A**：短く外反し、端部が玉縁状を呈するもの。



第7図 器種分類図(4) 1/5



第8圖 器種分類圖(5) 1/5



第9図 器種分類図(6) 1/5

甕B：直立気味に立ち上がる口縁部を有するもの。

その他 以上のほかに、横瓶・甕・円面硯などが確認された。

(2)土師器(第8・9図)

蓋 土師器蓋は、杯蓋が1点認められたにすぎない。

杯身 杯は形態から4種類に大別される。

杯A：平らな底部から上外方へ口縁部が立ち上がり、口縁端部を内側に折り返すもの。口縁部の立ち上がりが大きく、内面に2段に暗文を施すもの、暗文が一段のもの、暗文が省略され外面をヘラケズリで仕上げるものなどがある。

杯B：高台を有するもの。

杯C：丸みのある浅身の椀形の体部を有するもの。口径が14.5cmをこえる大型品(C3)、12～13cmの中型品(C2)、口径が10cm前後の小型品(C1)の三者に細分される。

杯D：平らな底部から内湾気味に口縁部が立ち上がるもの。

椀 丸味のある底部から内湾気味に口縁部が立ち上がるもの。

皿 皿には4タイプを認めた。

皿A：平らな底部と口縁端部が短く上外方へ立ち上がるもので、先の杯Aタイプの浅身のもの。

皿B：やや丸みのある底部から短く上外方へ口縁部が立ち上がるもの。

皿C：平らな底部から垂直気味に口縁部が立ち上がるもの。

高杯 土師器高杯は、1点のみ確認した。形態は、浅身の椀形を呈すものである。ただし、包含層中からの出土であり、その形態は、古墳時代まで遡る資料の可能性をもつ。

鉢 鉢は、口縁部付近が内傾するものと、しないものの二者に区分した。ただし、前者には、薄手で直立気味の口縁部のみが確認されるものがあり、さらに細分すべきかもしれない。

鉢A：扁球状の体部を有し、口縁部付近が内傾するもの。

鉢B：丸みのある底部から上外方へ内湾気味の口縁部が立ち上がるもの。

甕 土師器甕には、小型品・大型品の二者がある。さらに大型品には、長胴の体部を有するものと扁球状の体部をもつものがある。うち、扁球状の体部を有するものは、鍋として区別した。

甕A：小型甕を甕Aとして一括した。口縁部の形態から、さらに細分される。内湾気味に口縁部が立ち上がるもの(A1)、口縁端部付近を上下方から強くナデ、端部は上外方に面をなすもの(A2)、短く外反する口縁部を有すもの(A3)の三者である。

甕B：長胴の体部を有すものを甕Bとした。これも口縁部の形態からさらに細分される。口縁部が内湾して立ち上がるもの(B1)、口縁端部付近を上下方から強くナデ、端部は上外方に面をなすもの(B2)、口縁端部を下外方へつまみ出すもの(B3)、口縁端部を上方へつまみ出すもの(B4)、口縁部下端を強く横ナデし、短く外反した口縁は端部が上外方へつまみ出されておわるもの(B5)、短く外反する口縁部は、内湾気味にのび、肉厚となるもの(B6)、短く外反する口縁の端部が丸くおわるもの(B7)、口縁端部を内側へ折返し断面三角形状をなすもの(B8)、口縁部は大きく開いた後、端部をわずかにつまみ上げるもの(B9)、口縁部は強く外反し、端部付

近で水平気味にのびるもの(B10)、である。

鍋 扁球状の体部を有し、これに短く外反する口縁部をもつものを鍋とした。把手の有無によってA・Bに分類し、さらに口縁部の形態によりこれを細分した。

鍋A：把手をもたないもの。口縁端部の形態から、上方へつまみ上げて終わるもの(A1)、内面へ折返し断面三角形をなすもの(A2)、内面へ折返し玉縁状をなすもの(A3)の三者に細分した。

鍋B：把手を付すもの。やはり口縁端部の形態から、上方へつまみ上げるもの(B1)、口縁部が内湾して立ち上がるもの(B2)の二者に細分した。

羽釜 羽釜には大きく形態の異なる二者があり、A・Bとした。

羽釜A：外反する口縁部を有し、口縁部直下に幅広の羽を付すもの。

羽釜B：口縁部直下にタガ状の羽を付すもの。

甌 甌は3点を確認したが、口縁部の遺存している例は2点である。外反気味の口縁部を有するものと、直立気味におわる口縁部を有するもので、いずれも底部は2孔である。ここでは、これらに関しては分類せずに記述する。

## 2. 胎土からみた分類

土師器類には、胎土の面から大きく3群の土器の存在が確認される。淡赤褐色ないしは茶褐色を呈するもの(I群)、淡黄褐色ないしは乳灰色を呈するもの(II群)、暗赤褐色を呈するもの(III群)の三者である。この胎土の差異は、微妙な形態や調整の差異に対応し、その生産地の違いを反映しているものと判断される。

I群の土器は、赤色を意識して生産されたものと考えられ、鉢B類のなかには、赤色顔料を塗布したのではないかと考えられるものなども存在する。こうした胎土の製品は、飛鳥時代から奈良時代の杯類(A・B・C)、皿類(A・B・D)、鉢類(B)に顕著に認められる(奈良時代には若干黄色系が強くなり、淡黄褐色の製品が多くなる)。都城出土の土師器とされるものに近似し、杯・皿類におけるヘラミガキやヘラケズリなどのありかたや、内面の暗文の状況は、これに一致する。

II群の土器は、飛鳥時代の甕類の大半を占め、杯C・皿B・鉢などの一部にも、わずかながらその存在が確認できる。甕類の大半を占めることが示すように、これらは地元産であると考えられる。飛鳥時代の杯C類などでは、形態こそ前者(I群土器)に近似するものの、ヘラミガキ・ヘラケズリは比較的省略が顕著であり、かつ暗文は粗く施されている。

III群の土器は、奈良時代(8世紀後半頃)の土器群中に数点認められる程度である。明確な形態上の差異は確認されないが、その胎土の色調から選別は容易である。上記のI群とは異なった生産地からの搬入品ではないかと考えている。

なお、この分類については、観察表の胎土の項にI～IIIで表記している。

## 3. 出土遺物

## ①溝S D08出土遺物(図版第39)

須恵器では杯D、蓋Eが、土師器では鉢A、甕A 3・B 4がある。以下に報告するこの時期の遺構出土土器の中では、杯Dや蓋Eを含む点で、最も古く位置づけられると考えるものである。

**須恵器** 杯D(407)は口径12.5cm、同蓋E(406)は口径11cmを測り、セット関係をなすものと考えられる。底部ないし天井部はともにヘラ切り未調整である。

**土師器** 鉢A(411)は、口径24.2cmを測る大型品である。甕A 3(408)は口径15cm・器高13cmを測る。体部外面上半に縦方向、下半には斜め方向のハケメ、内面は横方向のハケメ調整を施す。甕B 4の409は、体部外面に縦方向のハケ目、口縁部内面に横方向のハケメを施す。また、410は、体部外面に斜め方向、口縁部内面に横方向のハケメを施し、体部内面はヘラケズリを施す。

## ②溝S D53出土遺物(図版第36～38)

S D53出土遺物は、ここに報告する遺構出土遺物の中では、最も量が多い。須恵器では蓋A・B 2、杯A・B・E・F、壺C、高杯、甕Aが、土師器では杯A・C(1～3)、皿A・B、鉢A・B、高杯、甕A・B 1・B 2・B 3・B 4・C、甗がある。

**須恵器** 須恵器蓋には、蓋A(301～309)と蓋B(310・311)がある。蓋Aは、乳頭状のしっかりとしたつまみを付し、口縁端部のかえりは、口縁部より下方へ下がるものはない。口径11cm前後で、丸みのある天井部から口縁部が下がるもの(301～303)、口径15cm前後で、扁平気味の形態をなすもの(305～309)の2者に分かれる。蓋B(310・311)は、傘形をなすものである。量的には、蓋Aが圧倒的に多く、蓋Bは2点を認めたにすぎない。

須恵器杯身(312～347)では、口径8.6～12cmの杯Eが大半を占め(口径は9～10cmが中心)、杯Aならびに杯Bはわずかに認められるにすぎない。この杯Eも、細かに観察すると、口縁部が内挽気味にのびて端部へと至り、杯蓋か杯身か全く区別がつかないもの(317・319・327～329・336～338)、底部から一旦上外方へ立ち上がったあと、屈曲して口縁部が直立ないしは内傾気味に大きく立ち上がるもの(313～316・321～326)、その口縁端部がわずかに外反するもの(312・318・320・331・335)、口縁端部付近がわずかに内傾するもの(330・332～334)、平らな底部から口縁部が内湾気味に大きく立ち上がるもの(339・340・344～347)の5種類に細分される。杯身Aでは、347・348のように、口径約12cm・器高3.5cmのものほか、口径10～11cmで平らな底部からゆるやかに屈曲して口縁部が立ち上がるもの(341～343)がある。杯Bでは、口径10cm前後のもの(350)、16cm前後のもの(351)、20cmをこえるもの(352)の三者がある。

須恵器壺B(353)は、口縁部付近の破片で、短く上方へ立ち上がる口縁を有する。高杯(354)は脚部の破片で、大きくハの字状に開き、端部は下外方に面を有す。

甕A(404・405)は球形の体部から短く外反する口縁部を有すもので、404は端部上面に面を有し、405は端部を玉縁状とする。

**土師器** 杯Aと認識できる資料は少なく、3点(371～373)を認めるのみである。いずれも外面に粗いヘラミガキ、内面に2段の放射状暗文を認める。杯C(355～370)は、16点を確認した。先

述の通り、法量面では、C I (口径14.5cm以上：364～370)・C II (口径12～13cm：356～363)・C III (口径10.3cm：355)の三者が認められる。径高指数は30前後である。概して、外面口縁部付近のヘラミガキは少なく、存在しても大雑把である。一方、外面体部下半はヘラケズリもしくはナデ調整を施すものが中心をなす。内面は、磨滅が著しく観察が行えない資料を除き、ほぼ全てにおいて放射状の暗文が認められる。なお、杯Cのうち、内面の暗文が稚拙な357・358・360はII群の胎土を呈する。

皿A (374)は1点を確認した。体部内面には放射状暗文を認める。皿B (375～377)は3点を認めた。377は器壁の磨滅が著しく調整等を観察できないが、375は底部外面にヘラミガキ、内面に放射状の暗文が、376は内面に放射状の暗文がそれぞれ観察される。

高杯(382)は、丸味のある杯底部と直立気味の口縁部からなる。

鉢A (378～380)は3点を確認した。体部外面はヘラケズリもしくはその後ヘラミガキを施し、内面には放射状暗文を認める。口径は17.5～19cmを測るもので、鉢としては小型品である。鉢B (381)は1点を確認した。口径25.4cmを測り、口縁端部を外側へつまみだす。

甕A (383～387)は5点を認めた。甕A 1が2点(386・387)、甕A 2が3点ある(383～385)。

甕B (388～398)では、甕B 1が2点(390・391)、甕B 2が4点(392・393・397・398)、甕B 3が2点(388・389)、甕B 4が1点(384)、甕B 6が2点(395・396)ある。鍋は、把手を付すタイプの鍋B 1 (402)・鍋B 2 (403)がそれぞれ1点ずつある。甌(399～401)は、口縁部がやや外反気味となるもの(399)と、直立するもの(401)がある。底部を残す(400)では、2孔であることが確認される。

土坑S K 11出土遺物(図版第40・464～478) 須恵器では、杯B・E、皿C 1・C 2、壺Bが、土師器では、杯A・C (I・II)、皿Cがある。

須恵器 杯B (469)は、口径18cm・器高4cmを測る、器高が低い大口径の個体で、皿Bとすべきかもしれない。杯Eには、口径約10～11cmのもの(464・465・467)と、口径12cm以上で器高3cm以下と扁平となったもの(466・468)の二者がある。皿Cには、浅身のもの(C 1：470)と、深身のもの(C 2：471)がある。壺B (472・443)は、ほぼ同形・同大で、扁球状の体部に短く外反する口縁部を有する。

土師器 杯CにはC I・C IIの二者が確認される。杯C Iの476は、口径19.3cm・器高5cmで外面には下半にヘラケズリが観察される。内面は磨滅のため暗文の有無を確認できない。また、475は、口径16cm・器高4cmで、外面上半にはヘラミガキ、下半にはヘラケズリが観察され、内面には放射状の暗文が確認される。杯C IIの474は、口径13.2cm・器高3cmで、外面はナデによって仕上げられ、内面には放射状暗文が認められる。土師器杯A (477)は口縁部の破片であるが、口径19.3cmに復原され、内面には二段の放射状暗文が観察される。皿B (478)は、底部外面にヘラミガキ、内面には二段の放射状暗文が観察される。

### ③溝S D 16出土遺物(図版第40・440～463)

須恵器では、蓋A (440～443)・B (444・445)・D (446)・F (447)、杯A (448～450)・B (451)・

452)、壺A(453)が、土師器では、蓋(454)、杯A(455)、皿A(456)・鉢A(461・462)・B(463)、高杯(457)・甕A(458・459・460)がある。

**須恵器** 蓋Aでは、口径が13cmを測る小型品(440)、口径19cm前後のもの(441・442)、口径24cmの大型品(443)の三者がある。443は、口径の大きな皿Bとセットをなすものであろう。蓋Bには、傘形の器形をなすもの(444)と平らな天井部からなだらかに下がって口縁部へいたるもの(445)がある。蓋D(446)は、口縁付近のみでは皿との区別がつかないものである。蓋F(447)は、つまみ部を欠くが、口径13cmを測る。

杯A(448~450)では、口径10.6cmのもの(448)、口径13cmのもの(449)、口径16cmのもの(450)の三者がある。杯B(451・452)は外反気味に立ち上がる口縁部を有し、外方へ踏ん張る高台が付く。壺A(453)は口縁部を欠くが、外下方へ踏ん張る高台、肩の張った体部、細長く立ち上がる頸部からなる。

**土師器** 土師器蓋(454)は、口径21cmを測り、扁平なつまみと傘形の体部からなる。杯A(455)は口径18cm・器高3.3cmを測り、内面には放射状の暗文が施される。皿A(456)は、口径22cm・器高2.3cmを測り、同様に内面には放射状の暗文が観察される。高杯(457)は直線的に外方へ開く杯部を有し、脚部は六角形に面取りされる。甕A(458・459・460)は口縁部がいずれも短く外反して丸くおわる甕A3である。鉢A(461・462)は、461が口径15cm前後、器高10cmで球形の体部をなすのに対し、462は口径31.4cmの大型品である。鉢B(463)は、口径34.2cmを測り、口縁端部は上方に面をなす。体部内面には放射状暗文を2段に配す。

#### ④溝S D 33出土遺物(図版第39・412~433)

須恵器では、蓋A(412・413・414)・B(415、416・417・418)、杯A(419・420)・B(421・422)、甕(434)が、土師器では、杯C(423~427)、皿A(428)、甕A(429・430)・B(431~433)がある。

**須恵器** 蓋Aでは、口径11cm前後のもの(413・421)と口径16cmのもの(414)がある。蓋Bでは、傘形をなすもの(415~417)と、平らな天井部から口縁部がなだらかに下がるもの(418)がある。

杯A(419・420)は、口径12.5cm前後・器高5cm前後を測り、やや丸みのある底部から上外方へ直線的に口縁部が立ち上がる。杯B(421・422)のうち、421は、口径19cm・器高5.2cmを測り、やや深身の体部を有し、外下方へ踏ん張る高台を付す。須恵器甕(434)は口縁部を欠くが、やや扁球状の体部に大きく開く頸部を有す。体部中位に「井」字形状のヘラ記号を認める。

**土師器** 杯C(423~427)のうち、423は口径約10cmを測るC1である。424~427は、口径12~14cmを測るC2であり、いずれも外面はナデによって仕上げられる。内面の暗文は磨滅のため確認できないものもある。甕A(429・430)は2点あり、いずれも甕A3である。甕B(431~433)では、431が甕B10、433が甕B7、432が甕B2である。

#### ⑤井戸S E 02出土遺物(図版第39・435~438)

須恵器では、杯A(436)、壺A(435)、土師器では、鉢A(439)、甕A(437・438)がある。

**須恵器** 杯A(436)は、底部外面に墨書(意味不明)が認められる。須恵器壺A(435)は、外下方

へ踏ん張る高台、肩の張った体部、細長く立ち上がり、ラッパ状に開く口縁部からなる。

土師器 鉢A(439)は、口縁の一部を外側へつまみ出し、片口状とする。甕A(437・438)では、437が甕A 2、438が甕A 3である。このうち、437は、体部外面に縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目が施されるが、口縁端部付近が強く横方向にナデられているため、その中位で二重口縁状にわずかに屈曲するように見える。

⑥その他の遺構(図版第41)

溝S D 51 須恵器蓋A(483・485)、杯A(484)・B(486)、土師器甕(487)が出土している。須恵器蓋A(483)は扁平な器形をなし、体部外面に×状のヘラ記号を認める。杯B(486)は、外反気味に立ち上がる口縁部と外側へ踏ん張った高台を特徴とする。

土坑S K 20 須恵器蓋B(481)、杯A(479)・B(480・482)が出土している。蓋B(481)は、傘形をなす。杯B 480・482は、ともに外方へ踏ん張った高台を付すとともに、直線的に上外方へ立ち上がる口縁部を有する。

土坑S K 23 須恵器杯B(492)、土師器杯A(490)・C(488・489)、皿A(491)、鍋A 1(493)が出土している。須恵器杯Aは、高台部を残す細片である。土師器杯Cも磨滅が著しく調整などは観察できない。いずれも口縁14.8cmを測る杯C 1である。土師器杯Aは体部外面にヘラミガキが、内面には放射状の暗文が2段に認められるが、土師器皿Aでは、放射状の暗文は1段である。

土器溜まりS X 03 土師器杯A(494・495)が出土している。両者とも、内面には放射状の暗文が認められる。

土器溜まりS X 22 土師器杯A(496・498)、皿A(497・499)が出土している。杯Aはともに口縁部付近の小片である。499は、口径21.4cmに復原され、内面には放射状の暗文が認められる。

柱穴等 500～510には、柱穴の掘形内から出土した土器を示した。

500・507は、S B 16を構成する柱穴から出土したものである。500は土師器杯C 1であるが、磨滅のため調整などは観察できない。507は、甕B 3である。501・502・510は、S B 15を構成する柱穴から出土したものである。501・502は土師器杯A、510は鍋A 2である。501・502はともに、内面に暗文は認められない。503・506は、S B 12を構成する柱穴から出土したものである。503は土師器杯Bで、口縁部は直線的に上外方へと立ち上がり、端部を内側へ折り返す。体部外面にはヘラミガキが観察される。506は甕B 8である。509は、S B 18を構成する柱穴から出土した鍋B 1である。

その他、504・505・508は、建物を復原できない柱穴から出土した。504・505は、墨書土器片である。いずれも、書かれている文字は判読できない。504は須恵器杯Bの底部片で、底部外面に墨書が認められる。505は須恵器杯Aで、やはり底部外面に墨書が認められる。508は甕Bで、外反度が強いものだが、甕B 4である。

⑦包含層出土遺物(図版第42～47)

須恵器では、蓋A・B・C・F、杯A・B・C・E、皿A・B・C・D、壺A・B・C・D、その他の壺底部、甕A・B、円面硯・横瓶がある。また、土師器では、杯A・B・C・D、皿

A・C、椀、甕A・B、鍋A1・A2・A3、羽釜A・B、製塩土器がある。またこのほかに、黒色土器の杯、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、土製品として土鈴がある。

**須恵器** 蓋A(511~523)には、口径が10~11cmのもの(511~520)と、口径が16cm前後のもの(521~523)の二者がある。蓋Bでは、扁平な形態をなすもの(524~531)のうち、530は外面に自然釉が付着している。形態などからみても猿投方面の製品であろう。傘形をなすもの(532~537)では、537が口径が22.5cmと大きく皿類の蓋と思われる。口縁端部付近で屈曲するもの(538~544)は、いずれも口縁部付近の破片であり、蓋C(543)との区別が困難である。蓋F(545)は、口径11.1cmを測り、口縁部はやや内傾して下がる。

**杯** 杯E(546~554)は、口径が9.5~11cmのものがあり、先にSD53で見た5つのタイプすべてのものが認められる。杯A(555~559)には、口径が10cm前後のもの(555・556)のほか、口径12cm・器高3.5cmのもの(557)、口径13.8cm・器高3.6cmのもの(558)、口径15.8cm・器高3cmのもの(559)などがある。杯B(560~577)は、口径が10~12cm・器高3.5~4.5cm前後のもの(560~564)、口径が13~14cm・器高4cm前後のもの(565~570)、口径15~16cm・器高4~5cmのもの(571~576)、口径18cm以上・器高5.4cmのもの(576)に大別される。ただし、高台の位置やその形状をみると、底部と口縁部との境からやや内側に付され、外側へ踏ん張るタイプのものが大半を占めるなか、境付近に付されたもの(563・574)など、新しい様相を示すものがある。杯C(578)は体部下半から底部を残す破片を1点確認したにすぎない。

**皿** 皿A(583・584)は、口径23cm以上の大型品で2点を確認した。皿B(585)は口縁部が外反気味に大きく開くものである。皿Cには、浅身のもの(579~581)と深身のもの(582)があるが、前者にはさらに口径16.2cmのもの(579)と、口径20cm前後のもの(580・581)の2者が認められた。皿D(586)は1点のみが確認された。口径10.5cmを測る小型品である。

**鉢** 鉢(608)は、分厚い円盤状の底部から開き気味に口縁部が立ち上がるもので、底部外面には計0.3mm程度の小孔が多数穿たれているものである。ここでは、底部片を1点確認した。

**壺** 壺Aは、ラッパ状に大きく立ち上がる口縁部を有する長頸壺であるが、ここでは、口頸部を欠くものを1点確認した(601)。肩部の屈曲はやや丸みを帯びその直下に刺突文をめぐらす。高台は外下方へ大きく広がり、端部は拡張され面をなす。壺B(602)は、口縁部が短く外反する小型品である。壺C(603)は、肩の張った体部から短く口縁部が立ち上がる壺である。壺B(604)は、円筒状の体部にやはり短く口縁部が立ち上がるものである。607は、横瓶の口縁部片である。短く外反した口縁部は端部を拡張し、上方に面をなす。その他の壺としては、底部片を2点図示した。605は「ハ」の字状に外反する口縁部を有し、端部が玉縁状をなす小型の壺の底部と考えられる。また、606は円筒状の体部から「ハ」の字状に開く口縁部を有す小型の壺の底部と考えられる。

**甕** 甕A(610・611)では、610が口縁端を外方へつまみだすもの、611は玉縁状とするものである。甕B(612)は短く直立する口縁部を有する大型品であるが、口縁部の破片である。

このほか、円面硯(609)は、獸脚状の脚台部の破片を確認した。また、613は土鈴である。

**施釉陶器** 589～592・598・599は、緑釉陶器碗である。589～591・599は平高台を有するもので、599は小型品である。また、592は蛇の目高台を、598は輪高台を有する。593・594・595は緑釉陶器皿である。597・600は灰釉陶器碗、596は同皿である。

**土師器** 杯A(630～638)・杯B(646)・杯C(614～621・623～629)・D(622)、碗(645)、皿A(639～644・647)・C(648・649)、鉢A(652)・B(650・651)、甕A(679・680)・B(653～671・676)・鍋A 1(677・678)・A 2(673)・A 3(672)、羽釜A(675)・B(674)、製塩土器(681～690)がある。

**杯** 杯Cには、口径が10～11cmのC 3(614～617)、口径が12～13.3cmのC 2(618～621)、口径が16cm以上のC 1(623～629)がある。器壁の磨滅が著しいものが多く、調整などを良好に観察できないが、外面にはナデ調整の痕跡を残すものが、内面には放射状暗文が、それぞれ多く認められる。ただ、なかには626・627のように、外面上半にヘラミガキ、下半にヘラケズリが確認されるものや、629のように内外面ともにヘラミガキの痕跡を認めるものなどがある。630～638は杯Aである。630は、口縁部の立ち上がりが大きく、内面には二段の放射状暗文が施される。631～633は、平らな底部から外反して立ち上がる口縁部を有するもので、内面には放射状暗文が観察される。634～638は、内面に暗文が認められないものである。このうち、634は、やや丸みのある底部から口縁部が外反気味に大きく立ち上がるもの、636～638は平らな底部から外反気味に口縁部が立ち上がるものである。635は、底部から口縁部への屈曲が鈍く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面にはヘラケズリが観察される。646は杯Bである。外面にはヘラミガキが施され、内面に暗文は認められない。

**皿** 639～644・647は皿Aである。640・641・643・644・647には内面に放射状の暗文が認められる。648・649は皿Cである。648は口径16cmの小型品、649は口径18.9cmの大型品である。

**鉢** 650・651は鉢Bと把握しているが、その形態は飛鳥時代の杯Aとすべき要素を備える。650は、直立気味に立ち上がる口縁部の破片で、外面はヘラミガキ、内面には放射状暗文が認められる。651は、内湾気味に立ち上がる口縁部片で、外面上半にはヘラミガキ、下半にはヘラケズリが施される。また、内面には放射状暗文が認められる。652は鉢Aである。口径19.6cmの小型品で、外面上半にはヘラミガキ、下半にはヘラケズリが施され、内面には放射状暗文が観察される。

**甕** 653～672は甕Bである。653・654は甕B 1、655・657・659・661は甕B 2、658は甕B 3、656・660・669は甕B 4、664は甕B 5、665～668は甕B 6、662・663は甕B 7、671は甕B 8、670は甕B 9、676は甕B 10である。672～675は鍋である。672は鍋A 3、673は鍋A 2、677・678は鍋A 1である。674・675は羽釜である。674は羽釜Bであり、675は羽釜Aである。679・680は甕Aである。679は甕A 1、680は甕A 3である。

**製塩土器** 681～690は製塩土器である。製塩土器(焼塩壺)は細片となって出土している。量的には、破片数で約100片(コンテナに1箱程度)である。細片のため、全形を復原できるものはなく、図化しうるものも少ないが、ここには主な口縁部片を10点示した。口縁部が内傾するもの

(681)、内湾気味のもの(682・686・688)、直立気味もしくは直線的にやや開き気味に立ち上がるもの(683～685・687・689・690)などがある。

**筒形土製品** B地区包含層中から出土した、ほぼ同形態をなす2点の筒形土製品である。一見、埴輪様に見えるが、後述するように、その諸特徴から明らかに異なった目的で使用されたものと判断している。

上端は、円頭部の一方に丸窓を穿つという、弥生時代後期～古墳時代初頭に認められる手焙形土器の覆いに類似した「覆い状」部をなし、一条の「タガ状」の突帯をへて円筒状の体部へといたる。下端部は厚手となり、やや外方へ広がり気味となっておわる。基本的に、内外面とも、ハケメが施され(外面は縦方向、内面は横方向)、下端部の内外面および覆い部内面はナデによって仕上げられる。また、最も特徴的な点として、両者とも内面は多量の煤が付着している。

691は、「覆い状」部から「タガ状」部そして体部の上端部を残す破片・体部片・下端部片が認められた。それぞれに接合部が認められなかったことから全長を復原することはできないが、ここでは約5cm程度の間隔をあけて配置した(これで全長50～60cm程度に推定復原される)。体部は断面やや楕円形を呈し、長径約16cm・短径約14cmを測る(低部は破片のため正円としての図上復原によるが約18cmとなる)。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

692は、「覆い状」部から「タガ状」部を経て体部の上端部を残す破片と、体部の破片が確認された。691のように底部片などは無く、その全形を推測することはできない。ただ、691と比べやや小型品であることが確認されるほか、細部で多少の差異が認められる。「覆い状」部内面のナデは粗く、そこには幅約2cmの粘土帯を積み上げた痕跡が明瞭に確認される。穿たれた円窓部は、691に対してやや上方を向いており、「タガ状」の突帯も高さ約2cmと、同1.2cm程度であった1に対して高い。体部は、径約13.5cmのほぼ正円をなす。

その用途であるが、上述したように土製品は、一見、形像埴輪に似ている。ただ、ここで最も明瞭に用途に関する痕跡を示すものとして、内面に認められた煤の付着があげられるであろう。これは、明らかに円筒状部内を煙が通った痕跡といえる。また、上端の「覆い状」部は、手焙り形土器でもいわれるように、その下方にあるもの(火)に上方からの雨や風の影響を及ぼさないために付設されたものといえることができる。すなわち、この筒状土製品は火を使用した竈ないしは小規模な窯に伴った煙突として使用されたものと想像されるのである。

#### ⑧井戸SE04出土遺物(図版第48)

土師器皿・杯・鍋、黒色土器碗・鉢、須恵器杯身・壺、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器碗・皿、土馬などがある。おおむね、10世紀中葉頃を主体とするが、9世紀段階の遺物が混入する。

693～706には、土師器皿ないしは杯・碗類を図示した。693は土師器皿で、口径11.6cm・器高1cmを測る。形態的には、平らな底部から上外方へ口縁部が開き、端部付近で、一旦外反したあと端部を上方へつまみ返しておわる。694～697および700・701も693と同様の口縁部形態をなす杯である。694・695・700は口径13～14cm・器高2cm前後、696・697・701は口径16cm前後・器高2.5cm前後を測る。699は、短く立ち上がった口縁部が、端部付近でわずかに外反したあと端部を

上方へつまみあげる。702は、口縁部が直線的に上外方へのび、端部をわずかに上方へつまみあげるもので、底部内面にハケ目調整を認める。697は、口縁部付近をわずかに外反させる碗である。703～706は、口縁部付近を強く外反させる碗の一群である。

715～718は黒色土器碗である。715・716は口径13.5～14cm・器高4.5cm前後、717は口径14.8cm・器高5.2cm、718は口径17cm・器高5.4cmをそれぞれ測る。内面には密にヘラミガキが施され、外面はナデ調整によって仕上げられる。

707～711は緑釉陶器の碗・皿である。707は口縁端部付近を外反させる碗口縁部片、708は平高台の碗底部片、709は輪高台を有する皿、710はその底部片、711は蛇の目高台の碗底部片である。いずれも京都近郊産と考えられる。712～714は灰釉陶器碗・皿である。712・714は碗底部片、713は皿である。

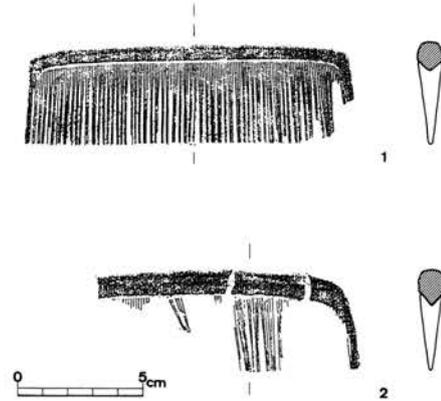
724は須恵器杯身(杯A)の底部片で、底部外面に墨書(判読不能)が認められる。725～730は壺底部片である。うち、726・727は灰釉陶器壺で、727は環状の把手を付す。

719～723は黒色土器甕である。719～721は球形の体部に外反気味の口縁部が立ち上がるもので、722は口縁端部を玉縁状とし、上端に内傾する面をなす。

732～734は土師器羽釜である。器壁は厚く、口縁直下に突帯状のタガをめぐらす。

731は土馬である。小型品で胴体部分を残すのみである。

第10図には、S E 02から出土した横櫛を図示した。1は肩部が角張っており、幅13.1cm・高さ4cmを測る。2は、肩部にやや丸味をもつもので、残存幅10.5cm・高さ4cmを測る。



第10図 井戸S E 02出土横櫛

### ⑨古瓦類(図版第51・52)

A・B地区の調査では、包含層中から古瓦類がわずかながら出土している。量的にはコンテナ3箱程度であり、破片数で約100片ある。多くは平・丸瓦であるが、中には軒丸瓦片も1点含まれている。細かな時期を検討できる資料ではないが、大まかに分類してこれらの概略を報告する。

**軒丸瓦(図版第51-1)** 瓦当外縁部の一部を残す細片である。外区外縁部に線鋸歯文帯、内縁に蓮子文帯を配するもので、外縁部の断面は三角形に近い。内区の文様が不明なため、型式名を明らかにすることはできない。ただ、こうした外区部の文様構成から、両型式の軒丸瓦に近い時期、8世紀中葉から後半でも古い段階に属する平城京式の軒丸瓦である可能性は高いものと判断している。

**平瓦** 平瓦には凸面の調整痕からみて、凸面のタタキ痕跡をナデ消すもの、凸面に縄タタキを施すものの大きく2種類があり、さらに後者は縄目の粗密から3種類に分かれる。

**平瓦I類(図版第51-2～5)** 凸面をナデによって仕上げるもので、叩きの痕跡は確認されない。凹面には細かな布目が観察されるとともに、桶の枠板の痕跡と考えられる約3cm間隔の段が確認される。また、側面の角度などを加味すると、このタイプの平瓦は桶巻作りであった可能性

が高い。焼成はややあまく、灰白色から淡灰青色を呈するものが多い。

平瓦Ⅱ類(図版第51-6・7) 凸面に縦位の縄タタキを施すもので、縄の数が2cmあたり8本前後と細かなものをⅡ類とした。凹面には細かな布目が観察され、側面は凸面側から幅約1.5cm程度の面取りをするものもある。凹面には桶巻作り特有の桶の杵板痕跡は確認されず、側面の角度などを加味して、一枚作りによるものと思われる。焼成はややあまく、灰白色から乳灰色を呈するものが多い。

平瓦Ⅲ類(図版第51-8・9) 凸面に縦位の縄叩きを施すもので、縄の数は2cmあたり6～7本とⅡ類に比べやや粗いものである。凹面には布目が確認されるが、なかには凹面にナデを施し布目を消すものもある。側面は面に沿ってヘラケズリを施すが、面取りを行わない。一枚作りによるものである。焼成は良く、黒灰色を呈するものが多い。

平瓦Ⅳ類(図版第51-10) 凸面に縦位の縄タタキを施すもので、縄の数は2cmあたり4～5本と最も粗い一群である。凹面には布目が確認される。一枚作りによるものと思われる。焼成はやや甘く、暗灰色を呈するものが多い。

丸瓦 丸瓦は、全て凸面のタタキが消され、玉縁式である。分類は困難で、辛うじて、焼成がややあまく淡黄褐色を呈する一群と、焼成が良く淡黒灰色を呈する一群の2種類に大別されるにとどまる。焼成等から考えると、焼成があまりものが先の平瓦Ⅰ類に、焼成の良好なものが平瓦Ⅲ類に対応するのではないかと考えている。

丸瓦Ⅰ類(図版第52-11～14) 焼成がややあまく淡黄褐色を呈する一群。細片が多いが、玉縁部の破片が確認されることから玉縁式の丸瓦と考えられる。

丸瓦Ⅱ類(図版第52-15～17) 焼成が良く淡黒灰色を呈する一群。細片が多く、端部を残す破片は少ないが、こちらも玉縁式と考えている。なお、なかに横方向にハケ状工具の痕跡をとどめるもの(図版第52-7)が認められた。

## 第5節 平安時代末～鎌倉時代

平安時代末～鎌倉時代の出土遺物としては、先に述べたように、井戸SE03出土遺物と、包含層からの出土遺物を示した。

### 1. 井戸SE03出土遺物(図版第49・50)

出土した遺物には、土師器皿、瓦器碗・皿、白磁碗、須恵器鉢がある。このうち、土師器皿は非常に多く認められた。その廃棄段階で、これらを用いた何らかの祭祀が行われたようである。

土師器皿は、明らかに混入品と判断される時期の大幅に遡る資料を除き53点を図示した。735～769・788～791は口径8～11cmの小皿、770～787・792は口径が14～16cmの大皿である。小皿は、いずれも口縁部付近にヨコナデを施し、底部を粗いナデで仕上げる。形態的には、丸味のある底部から上外方へ短く立ち上がる口縁部をなすが、その中に、口縁端部をわずかに外方へつまみ出すもの(749～756)、上方へつまみ出すもの(757～761)などが認められる。大皿は、やはり口縁部にヨコナデ、底部に粗いナデを施すもので、形態的には、やや丸みのある底部から屈曲して上外

方へ口縁部が立ち上がるものが大半を占める。なお、これらのうち788～791の小皿および792の大皿には底部中央付近に小孔が穿たれている。小孔は焼成後に穿たれたもので、小皿(788～791)は径1cm前後、大皿(792)は径0.5cm前後を測る。

793～804は瓦器碗である。ほぼ全形の確認できる793～795・798は、口径15.5～16cm・器高5.5～6cmを測るもので、断面三角形の高台を付し、内湾して立ち上がる口縁部は端部付近でわずかに外反する。口縁端部内面には、一条の沈線がめぐり、体部内面には密にヘラミガキが、見込みにはらせん状の暗文が施されている。体部外面は、摩滅のため遺存状況は悪いが、分割性のやや乱れたヘラミガキが認められる。これらは、大和型瓦器碗とされるものの特徴を備えている。これに対し、口縁部片として図示した796・797・799・800は、口縁端部は外反せず、楠葉型瓦器碗と認識されているものと考えられる資料である。なお、底部片である801～804には、断面三角形に近い高台を付すもの(801・804)と台形に近い高台を付すもの(802・803)があるが、いずれもらせん状の暗文が認められた。

806は、瓦器皿である。その形態や大きさは、先の土師器小皿に近似し、そのなかでも、平らな底部から短く立ち上がる口縁部を有すタイプに近い。見込みには、ジグザグ状の暗文を施している。

805は、山茶碗の底部片である。底面(輪高台の内側)に「佛」の墨書が確認される。807～809は、白磁碗である。807は、口縁部が直線的に上外方へのびる口縁部片および底部片、808は、玉縁状口縁をなす口縁部片である。809は、輪高台をなす底部片である。810・811は須恵器鉢である。両者とも、ほぼ同様の大きさ・形態をなすが、口縁端部の形状がやや異なり、810は口縁が上外方に面をなし、端部が内側に突出するもので、811は同様に口縁部は面をなすが、端部は上下にわずかに膨らむ形態をなす。

## 2. 包含層出土遺物

この時期の遺物包含層と認識される土層は、先にもふれたように、中世から近世にわたって一帯で盛んに行われた島島造成に伴い、大幅に削平されていた。このため、ここに示した遺物は、島島と島島との間の低地部分(水田として利用)に、近世以降に堆積した土層中から出土したものの中から、主なものを抽出し、図示したものである。

812～814は土師器皿で、812・813は小皿、814は大皿である。812は、口径8cm・器高1.4cmを測り、丸みのある低部から短く口縁部が立ち上がる。813は、口径9.8cm・器高1.6cmを測り、平らな低部から短く口縁部が立ち上がるものである。いずれも口縁部にはヨコナデを、底部には粗いナデを施す。814は、口径13.8cm・器高2.1cmを測り、口縁端部がわずかに外反気味となる。815・816は瓦器皿である。口径9.5cm前後・器高1.2cm前後を測るもので、内面見込みにはジグザグ状の暗文を施す。818～820は瓦器碗である。818は、口径15.2cm・器高5.2cmを測り、断面台形に近い高台を付す。見込みにはジグザグ状の暗文が認められる。819は、口径14.2cm・器高5.6cmを測り、断面三角形の高台を付す。見込みにはらせん状の暗文を施す。820は底部片であるが、

818とほぼ同様の特徴を示すものである。821は、口径13.2cm・器高4.3cmを測り、低平な高台を付す。体部内面には粗くヘラミガキが施されるが、見込みには暗文は認められない。822～824は白磁碗である。822はⅧ類、823・824はⅣ類とされるものである。817は土師器羽釜である。断面三角形に近いタガ部から内傾して立ち上がる口縁部を有すものである。

#### 第5節 石器・石製品 (図版第53)

多くの土器に混じって石器・石製品の出土をみたが、わずか6種12点の出土でしかない。

石帯(1) A地区第1遺構面の北東部、総柱建物群周辺の遺物包含層から出土した丸靱である。幅3.4cm・高さ2.4cm・厚さ0.7cmを測る。表面は特に平滑に仕上げ、光沢を放つ。裏面は簡単な調整のまま終えている。裏面の3か所に2個一対の糸止め孔が存在する。

双孔円盤(2) 滑石製である。最大幅2.1cm・厚さ4mmで不定形な円板である。表裏両面の研磨は弱く、一部に自然面を磨き残す。周縁部の研磨はていねいに施すが、特に整形にこだわる状況にはない。板面中程に小さな円孔を穿つ。円孔間は9mmを測る。

管玉(3～5) 淡緑色の碧玉製管玉であり、3点の出土をみた。いずれも軟質である。直径5mm・長さ2.5cmを測る。4はB地区第2面遺物包含層、5はS D39下層、5は包含層からの出土である。

打製石鏃(6・7) 2点とも大形のサヌカイト製打製石鏃である。ともに基部の形状は凸基式であり、左右対称形で整えられている。石鏃2は残存長4.0cm・残存最大幅2.1cmを測る。基部の一部を欠くが、元の重量に大きな影響を与えるものではない。石鏃3は長さ4.0cm・最大幅1.7cmを測る。

砥石(8～10) 方柱状の砥石である。いずれの砥石も4面を砥石面として使用する。各砥石面は中央部の摩滅が進行し、使用頻度の高さを物語る。完形でやや小さな砥石(10)は、長さ9.4cm・中央部幅2.6cm・厚さ1.6cmを測る。砂岩製でありB地区中世水田部から出土した。9は砂岩製であり、A地区包含層から出土した。8は粘板岩製で、B地区井戸S E04から出土した。

磨製石斧(11・12) 2点とも太形蛤刃磨製石斧である。11はA地区第4遺構面(下層水田面)から出土した。全長15.7cm・刃部幅3.9cm・最大厚3.6cmを測る。刃部と基部の幅がほぼ同じであり、中央部はやや幅広となる。石斧は肉厚で、断面が楕円形である。表面はていねいに研磨され、均整な形状に仕上げられる。ゆるやかな曲線を描く刃部は、表裏両面からの研磨によって滑らかに仕上げられている。12は刃部と基端部を欠損している。横断面形は厚みのある楕円形を呈する。幅5.6cm・厚さ4.1cmを測る。残存長は9.3cmである。

## 第5章 総括

### 第1節 水田遺構

今回報告する防賀川左岸のA・B地区では遺構面で約3,000m<sup>2</sup>の発掘調査を実施し、このうちの約2/3を占める約2,200m<sup>2</sup>で、弥生時代後期末～古墳時代初頭の水田跡を検出することができた。水田跡は、20～30cmの洪水砂層をはさみ、上下2面の水田跡が存在した。上層水田跡の上にも厚い洪水砂が堆積している。洪水砂は淡黄灰色系の細砂であり、現木津川に堆積する砂と酷似する。このような状況から、内里八丁遺跡で検出した洪水砂は木津川の氾濫に伴うものと判断する。洪水砂中に石を含まないことから、当地にはオーバーフローにより砂のみが運ばれ堆積したとみている。水田跡を検出したA・B地区は、現地形に残る田畑の形状や畦畔の動きから、古くは木津川の河道部分に含まれていたことが読みとれる。調査地と調査地の西方に所在する内里集落との間、約50～80mが旧木津川の河道部と推測され、A・B地区検出の水田跡は旧河岸の微高地縁辺部から旧河道部分に広がる状況にある。痕跡として残る旧木津川河道は、この水田跡の検出から弥生時代後期より以前の流路であることが明らかである。

**水田遺構と集落** 内里八丁遺跡集落は木津川旧河道右岸に形成された自然堤防の微高地上に営まれた集落である。旧河道部分は、木津川の後背低地として残り、弥生時代後期末には水田として開発された状況にある。水田面の海拔高はおよそ上層水田跡が10.8～11.1m、下層水田跡は10.6～10.8mに位置する。水田跡は南のA地区からB地区の南部にかけて広がる。同時期の集落は、次回報告となる防賀川対岸のC・D地区を中心に広がる状況にある。水田よりやや後の時代のB地区北端の竪穴式住居跡SH03では、床面の海拔高が11m付近にあることから、当時の集落が立地した微高地は、海拔12mを越えることはなかったと判断する。A地区上層水田跡が海拔11m付近の数値を示すことから、水田と集落の比高差は高くても1m前後と判断してよからう。

調査では、集落の営まれた微高地と水田間に水路の存在が確認できなかった。特に水田域と集落域の境界付近となるB地区で精査と壁面観察を実施したが、調査地内に境界等を示す遺構は確認できなかった。B地区検出の水田跡は、A地区検出の下層水田に対応することが出土遺物の検討からうかがえる。B地区では、水田跡の上層に埋葬主体部(SX12)に代表される墓域が広がり、A地区上層水田に対応する水田は存在しない。A地区上層水田跡の北端部境界は、A・B地区の間であって未調査となった現道下に位置すると判断せざるをえない。下層水田跡北端は明確ではないが、B地区での稲株痕跡・水田畦畔の分布範囲がほぼ重なることから、下層水田の広がりと同地区の南1/3の範囲で終わったものと判断する。

水田に対する引水については、上層水田・下層水田とも灌漑水路が調査範囲内に存在しないことから不明な点が多い。上層水田跡は土壌の状態から半乾田とみており、特に引水が重要な要件

となる。集落域との境界に幹線水路が確認できない現時点では、上層水田68枚への引水を行った幹線水路は、高所側となるA地区以南の調査地外にあると判断せざるを得ない。上層水田跡では水田間の畦畔を切る水口が3か所存在したが、水路からの配水を受けた水口とは認めがたい。検出水田跡は埋没時点での状況を示し、米作りの各課程で変化する水田の状況全体をあらわすものではない。各水田への配水については、上部水田から下部水田に水をオーバーフローさせて順次配水する、「田越し灌漑」または「かけ流し灌漑」と呼ばれる方法が実施されたと考えられる。

下層水田は、水田土壌が強グライ土壌であることから、排水に主目的を置く灌漑水路の存在が不可欠である。地形的に調査地の西方に幹線水路の存在が考えられる。排水を行うには、各水田畦畔に水口を切ることで可能となる。わずかな枚数の下層水田を検出したなかであって、水口が上層水田に比べ2倍を越えて存在する事実は、排水を目的とした水口と判断する根拠の1例として重要であろう。

今回の調査で検出した水田跡は小区画水田に分類される。水田は、微高地縁辺から低湿地にかけてのゆるやかな傾斜地を利用していることがうかがえる。一定の湛水を傾斜地の水田に与えるためには、等高線に沿って主畦畔を配置し、必要に応じて仕切り畦畔を間に配置することになる。傾斜が大きくなるにつれて、主畦畔の間隔は狭まり、小区画水田が形成される状況にある。内里八丁遺跡では、A地区の上層水田跡に同様な成因とみる水田跡が存在する。調査地中央部には谷状の傾斜地が存在し、等高線に沿った主畦畔の配置状況が確認される。南北の谷地形約50m間で、比高差が30cm未満の比較的ゆるやかな傾斜地であるにも関わらず、谷地形を最大限に利用した水田の営みはその姿から読みとれる。内里八丁遺跡の水田範囲・労働力がどの程度であったか不明であるが、傾斜地の1枚の水田に広さを求めるならば、大量の労力を用いて造成などの土木事業を行わざるを得ない。内里八丁遺跡の水田跡の姿は、大規模な土木作業を伴わない、地形状況に応じた効率的な水田の営みを示していると考えられる。

小区画水田の場合、畦畔に用する面積が増え、水田の面積は逆に減少することになる。水田面積の減少は収穫量に連動し、生産効率の悪化を招くことになる。内里八丁遺跡では稲株痕が良好に遺存しており、稲株痕は水田面のみならず畦畔上にも認められた。これは米作りの場が水田面に限定されるものでなく、畦畔を含めた水田域の全体で米作りを行っていたことを物語る。検出した畦畔は小規模畦畔であり、水田面が湛水している段階では、畦畔部分にも十分に水分が補給されていたとみられる。現在でも水田畦畔上で豆類や雑穀類を植える事例があり、畦畔上から米の収穫が得られたことは想像に難くない。内里八丁遺跡では、他の遺跡例にみられる大規模畦畔が検出されていないことから、大規模畦畔部分でも米を作っていたかは現時点では不明である。水田の形状による生産効率の増減について大差が認められない場合、少ない労力を投じて米作りを行うのが効率的である。内里八丁遺跡では特にゆるやかな傾斜地でも、微妙な地形に応じた小区画水田を作り出している。下層水田跡については、ほとんど平坦地に近い地形であるが、狭小な区画の水田が作られている。下層水田跡は、形状のわかる水田の検出範囲がわずかであり全体の様相が把握できないが、上層水田跡にみられた地形に応じた水田区画とは別の要因が、水田区

画の形態に影響を与えたとみられる。土壌・水利・耕作単位などの要因が考えられるが、現段階では不明といわざるを得ない。

**稲株痕** 内里八丁遺跡では、水田土壌である粘質土上面に残る小穴内に異質な洪水砂が充満し、明瞭に判別することが可能であった。また、特に水田面が半乾燥状態の場合、小穴内の砂は水田土壌より乾燥の度合いが早く、遠目においても目につく状況であった。小穴には、水田を覆った細粒の洪水砂が稲株の腐食に伴って窪みに落ち込み、最終的には稲株と洪水砂が置き換わった状態で検出される。洪水を被った時点では水田上に稲株があり、その後の水田復旧が実行されることなく放棄されたことで、稲株痕が残ったと考えられよう。全国で300例を超える水田遺構の検出があるが、稲株痕が検出された例はほんのわずかである。多数の稲株痕の検出例としては、岡山県百間川原尾島遺跡<sup>(注12)</sup>(弥生時代後期)・群馬県中村久保田遺跡<sup>(注13)</sup>(江戸時代)などが挙げられる。近隣では大阪府上田町遺跡<sup>(注14)</sup>(弥生時代後期)・滋賀県服部遺跡<sup>(注15)</sup>(弥生時代前期)でも稲株痕の検出が認められる。

内里八丁遺跡では、水田面と畦畔の区別無く、いたるところに稲株の痕跡(小穴)が分布する状況にある。百間川原尾島遺跡例では、畦畔部分に稲株痕が認められるが、裾部に集中する傾向にあり、畦畔に規制された水田面に稲の移植が行われている。また同例では、およそ7名による「田植え」を行っていた状況が、整然と並ぶ正条的な稲株痕の分布から読みとれる。同報告では、10～12個の小穴で構成される幅約80cmの小穴列(弧状)が存在し、1人の稲の移植単位と判断されている。

内里八丁遺跡においても、幅約80cm前後・5小穴の移植単位が読みとれるが、正条的な田植えを行っていた状況にはない。また、中には幅40cm前後・3小穴で構成される移植単位も一部にみられるが、アランダムな移植状況のなかにあっては判別困難な点が多い。移植列は畦畔や水田の形に規制されることなく、あらゆる方向に移植されている。水田面の所々に移植されていない小空間が認められるが、全体の傾向として水田の空間を一定に埋めるべく稲の移植を実施したと考えられる。また、百間川原尾島遺跡例では小穴の間隔が10cm前後と密植されるが、内里八丁遺跡では20cm前後の間隔を保つ例が多い。

内里八丁遺跡の稲株痕には小穴内の洪水砂の状況から2種の稲株痕が確認され、切り合い関係にあるものも多数存在した。全体の傾向として、A種(砂)がB種(粘質土と砂)を切る状況にある。切り合い関係にある小穴は、時期差を示していることが明白である。2種の小穴の異なる点は埋土が異なるのみで、形状・規模などに特に変異点は認められない。同一水田面で検出された状況と時期差のある稲株痕の存在を考慮するならば、水田は耕起作業を行っていないか、もしくは耕起作業が表層部にとどまり、深耕しなかったと推測せざるを得ない。B種の場合、土壌に含まれる粘質土は水田土壌より明色となる状況にある。この稲株痕内の粘質土は、稲株が腐植するにつれ水田土壌と入れ替わっていく過程で変質したとも考えられよう。B種の小穴内に存在する砂については、洪水時に稲株が腐植しながらも痩せた株がわずかに残り、A種と同様の過程を経て置き換わったものとみている。

第2表 内里八丁遺跡水田跡観察表(括弧内の数値は検出数値)

番号	地区；面	形態	主軸	規模(長×短：m)	面積(m <sup>2</sup> )	海拔高(m)	備考
1	A；3	不明	不明	(1.5)×(1.5)	(1.1)	10.85	
2	A；3	不明	南北	(4.3)×(4.0)	(10.7)	10.91	
3	A；3	長方形	東西	10.0×(4.1)	(31.4)	10.81	
4	A；3	長方形？	東西？	5.7×(3.7)	(19.6)	10.93	
5	A；3	方形？	南北？	(4.5)×3.8	(14.1)	11.03	
6	A；3	長方形？	東西？	(4.0)×(2.5)	(7.2)	11.15	
7	A；3	不明	東西？	5.8×(5.7)	(19.7)	10.90	
8	A；3	多角形	南北	5.9×4.2	23.6	10.87	
9	A；3	長方形	東西	(7.5)×(4.4)	(22.1)	10.86	
10	A；3	長方形	東西	6.8×3.6	24.5	10.91	
11	A；3	長方形	東西	7.0×4.6	28.7	11.04	
12	A；3	長方形	南北	4.8×2.3	10.9	11.15	
13	A；3	不明	東西？	(4.8)×(2.4)	(9.2)	10.88	
14	A；3	長方形	東西	7.3×3.3	22.8	10.89	
15	A；3	長方形	東西	5.4×3.8	18.2	10.87	
16	A；3	長方形	東西	7.0×3.9	27.3	10.88	
17	A；3	長方形	東西	8.9×3.7	27.0	10.92	
18	A；3	方形	北東	4.1×3.7	13.3	10.87	
19	A；3	長方形	東西	8.3×4.0	29.8	10.90	
20	A；3	長方形	東西	7.1×2.7	19.1	10.91	水口3
21	A；3	多角形	南北？	(7.5)×(3.4)	(18.2)	10.94	
22	A；3	不定形	東西	10.3×7.9	64.9	10.94	
23	A；3	方形	東西	6.3×5.6	25.6	10.94	
24	A；3	長方形	東西	7.9×3.8	26.1	10.93	
25	A；3	長方形	東西	(6.2)×(3.9)	(22.4)	10.79	
26	A；3	不定形	東南	(5.4)×(4.1)	(15.6)	10.98	
27	A；3	長方形	東西	5.7×4.5	21.5	10.92	
28	A；3	方形	東西	4.2×2.8	11.8	10.93	
29	A；3	方形	東西	3.6×2.4	8.6	10.88	
30	A；3	長方形	東西	8.2×3.8	22.4	10.91	
31	A；3	長方形	東西	(6.8)×(4.4)	(25.1)	10.77	
32	A；3	長方形	東西	6.3×4.0	21.8	10.90	
33	A；3	方形	東西	6.8×5.5	22.0	10.89	
34	A；3	方形	東西	(7.7)×5.8	(42.1)	10.91	
35	A；3	長方形	東西	(6.0)×(4.8)	(22.9)	10.91	
36	A；3	不定形	東西？	(8.5)×(6.6)	(48.6)	11.03	
37	A；3	方形	南北	4.4×4.2	15.4	10.87	
38	A；3	方形	東西	4.9×4.3	20.8	10.86	
39	A；3	方形	東西	4.4×4.4	19.4	10.86	
40	A；3	長方形	東西	(7.6)×4.3	(31.3)	10.89	

41	A ; 3	長方形	南北	6.4×3.2	16.4	10.87	
42	A ; 3	不定形?	南北	6.2×(3.3)	(14.0)	10.89	
43	A ; 3	不明	南北?	(4.7)×(3.2)	(7.4)	11.02	
44	A ; 3	不定形	東西	(7.4)×(5.4)	(27.8)	11.03	
45	A ; 3	方形	東西	4.6×2.9	13.1	10.90	
46	A ; 3	方形	東西	5.1×2.9	14.8	10.87	
47	A ; 3	方形	東西	4.9×3.6	15.1	10.89	
48	A ; 3	長方形	東西	7.5×3.9	25.7	10.85	
49	A ; 3	長方形	東西	7.4×3.5	22.8	10.89	水口1
50	A ; 3	長方形	東西	7.7×3.5	23.0	10.87	
51	A ; 3	長方形	東西	8.7×3.2	27.8	10.90	
52	A ; 3	不定形?	南北?	4.9×(1.8)	(7.3)	10.89	
53	A ; 3	不明	南北?	(8.1)×(7.6)	(37.1)	10.92	
54	A ; 3	長方形	南北	(7.5)×4.8	(24.1)	10.90	水口1
55	A ; 3	長方形	南北	(7.6)×3.8	(28.2)	10.89	
56	A ; 3	長方形	南北	9.9×4.9	48.4	10.88	
57	A ; 3	長方形	南北	9.3×4.3	30.2	10.92	
58	A ; 3	長方形	南北	(9.5)×3.6	(27.4)	10.88	
59	A ; 3	不明	南北?	(5.6)×(3.6)	(12.2)	10.91	
60	A ; 3	不明	南北?	(4.6)×(2.9)	(16.3)	10.93	
61	A ; 3	不明	不明	(2.1)×(1.4)	(2.8)	11.14	水口2
62	A ; 3	不明	南北?	(0.9)×(2.6)	(1.2)	11.12	水口2
63	A ; 3	不明	東西?	(0.7)×(2.7)	(1.0)	11.04	
64	A ; 3	長方形?	東西?	(1.7)×(2.4)	(3.3)	10.97	水口3
65	A ; 3	不明	不明	(4.1)×(2.7)	(5.9)	10.92	
66	A ; 3	不明	不明	(4.3)×(0.7)	(1.5)	10.89	
67	A ; 3	不定形?	不明	(4.8)×(0.7)	(3.1)	10.91	
68	A ; 3	不明	不明	(2.0)×(0.4)	(0.7)	10.91	
69	A ; 4	不明	不明	(2.7)×(1.8)	(2.4)	10.74	
70	A ; 4	長方形?	南北?	(3.6)×(3.2)	(7.7)	10.71	
71	A ; 4	長方形?	南北	6.4×(2.6)	(8.5)	10.71	
72	A ; 4	長方形?	南北	7.3×(1.3)	(4.7)	10.73	
73	A ; 4	長方形?	南北	8.9×2.7	23.4	10.70	水口4
74	A ; 4	不明	南北?	5.8×?		10.71	水口4
75	A ; 4	不明	東西?	4.0×?		10.69	水口5
76	A ; 4	長方形	東西	(5.8)×1.7	(9.9)	10.69	水口5・6
77	A ; 4	長方形	東西	(7.5)×1.8	(13.5)	10.71	
78	A ; 4	長方形	東西	(7.5)×1.8	(13.5)	10.68	水口7
79	A ; 4	長方形	東西	(7.0)×1.7	(11.9)	10.69	水口7
80	A ; 4	長方形	東西	(8.6)×1.8	(14.9)	10.68	水口8
81	A ; 4	長方形	東西	(8.8)×1.9	(16.7)	10.70	水口8
82	A ; 4	長方形	東西	(8.8)×1.6	(14.0)	10.70	

83	A ; 4	長方形	東西	(5.3)×1.6	(8.5)	10.68	
84	A ; 4	長方形	東西	(6.0)×0.8	(9.2)	10.69	
85	A ; 4	長方形	東西	(6.0)×1.0	(5.7)	10.67	
86	A ; 4	長方形	東西	(6.5)×0.7	(5.9)	10.69	
87	A ; 4	長方形	東西	(6.5)×1.0	(6.5)	10.68	
88	A ; 4	長方形?	東西?	(4.8)×(1.8)	(4.3)	10.70	
89	B ; 4	長方形?	南北	(3.6)×(1.8)	(6.3)	10.82	水口9
90	B ; 4	長方形	南北	(3.4)×1.8	(6.1)	10.82	水口9・10
91	B ; 4	不定形	南北	(2.8)×1.2	(1.7)	10.80	水口10
92	B ; 4	不定形	南北?	(14.1)×(5.2)	(58.8)	10.78	水口11
93	B ; 4	不定形	南北	(10.6)×0.9	(5.4)	10.76	水口11
94	B ; 4	長方形?	南北	(5.6)×4.9	(26.9)	10.79	
95	B ; 4	不明	不明	(2.5)×(1.9)	(4.8)	10.76	
96	B ; 4	不明	不明	(2.5)×(1.0)	(2.5)	10.81	
97	B ; 4	長方形?	南北	(5.7)×2.0	(11.4)	10.83	
98	B ; 4	長方形?	南北	(5.0)×(4.1)	(20.5)	10.82	水口12
99	B ; 4	長方形	南北	5.9×4.3	25.4	10.80	水口12
100	B ; 4	不明	南北	(4.8)×(4.3)	(20.6)	10.78	
101	B ; 4	長方形?	南北	(13.2)×4.3	(39.1)	10.81	

以上、内里八丁遺跡の水田と稲株痕について、簡単ながらも検討を行ったが、まだまだ不十分な内容にあるのが現状である。次回に報告となるE地区でも水田跡・稲株痕が検出されている。内里八丁遺跡の水田跡に関して、全体的な検討は、後の報告機会に譲ることとする。

## 第2節 弥生時代後期末～古墳時代初頭の出土遺物と遺構の変遷

この時期の出土遺物は、先にも記したように、A地区の遺構出土遺物、B地区の水田上面に堆積していた洪水砂をはじめとする各土層からの出土遺物、この土層掘削中に土器溜まり状に出土した遺物(SX04・05・07～10)、その他の土層掘削中に出土した遺物の四者がある。

A地区の遺構から出土した遺物は、溝SD39のように古墳時代前期(いわゆる布留式期)の土器がまとまって出土したものもあるが、多くは、少量の土器が出土したにとどまるものが多い。一方、B地区の水田上の各土層(洪水砂ほか)や、土器溜まり出土遺物は、良好に分層ができたり、遺構としての確認ができたものではなく、これまでの報告段階の位置づけでは、出土層位からみて問題を有するものもある。

**時期的把握** これら出土資料の時期的な把握に関しては、当地域において、弥生時代後期末から古墳時代初頭(いわゆる庄内並行期から布留式初頭)にかけての良好な一括資料が不足しているため、十分に検討できる段階には達しておらず、現時点で細かな時期的把握を行うことは難しい。近年、山城地域の当該期の土器編年案を提示している國下多美樹氏によっても、山城北部と南部地域での様相の差異などを含めた検討には及んでおらず、資料不足の感は否めない。

こうしたなか、上記の國下氏の編年によれば、今回報告したうちのS X05資料が氏のいう庄内Ⅱ式の基準資料とされている。今回報告した資料中には、このS X05資料に近似した時期の資料を、さらにいくつか認めることができる。その一つはS X07資料である。S X07資料では、東海～近江系の影響を受けた器台や高杯が認められ、高杯では杯部上半はあまり発達せず、また脚台部はなだらかに下がって端部へいたる。器台も小型品が存在しないなどの特徴が認められる。また同様に、A地区水田跡直上の洪水砂出土品中には、S X05に見られた丹後・丹波系の器台より古相を呈するものなども認められ、弥生時代後期終末(庄内併行期)でも古相(國下氏のいう庄内Ⅰ～Ⅱ)を示す段階からの資料が存在するものと判断される。

こうした資料に対し、S X10資料は、口縁部が2段に立ち上がる壺(図版第27-48)の底部は、すでに丸底となっているなど、より新しい要素を示す資料と理解される。

包含層中の資料には、いわゆる庄内甕とされる甕Bが6点認められたが、そのうち生駒山西麓産と判断される資料は3点(図版第27-55・30-110・33-171)ある。これに対して、いわゆる播磨西部産とされるものに近い形態を示すものも2点認められる(図版第53-172・1732)。このうち、172は胎土もこれに近い状況をなすが、173の胎土は地元産の特徴を備える。先の國下氏によれば、庄内併行期でも氏のⅣ期になると庄内甕を模倣した製品が生産されたようであり、庄内式期の終わりから布留式期のはじめにかけて、播磨産の庄内甕が搬入されるとされている。172・173などはこうした事例を示すものと考えられ、先の新しい要素を備える土器群の存在を示しているといえるだろう。

時期的な把握が比較的明瞭に行なえるといわれる高杯A類をみると、杯部上半が外反して立ち上がるが、その外反度があまり大きくないもの(13・85・199)、比較的大きいもの(197・198)、直線的にのびるもの(196)がある。庄内Ⅲ期とされる時期には、比較的大きく直線的にのびるものが多くなると考えられており、こうした意味では、13・85・199は古相を呈する一群に相当するものと考えられるだろう。なお、出土資料中多くを占める甕類の中でも、その大半をしめる甕Aに関しては、十分にその時期的変遷を把握できていないのが現状である。また、甕Eとした丹波系の甕類に関しても同様であり、擬凹線文を施す例がほとんど認められない点で、丹波方面との時期的接点を把握することも可能かとも思われるが、細かな点までは検討できていない。

こうした現状をみるかぎり、今回報告した資料では、弥生時代後期終末(庄内式併行期)でも比較的古相を呈する一群と、新相から古墳時代初頭(布留式期初頭頃)に位置づけられる一群が混在しているといったものと考えておきたい。

**器種構成と他地域の影響** 器種構成といっても、個々の土器溜まり資料では限られた器種しか認められず、全体的に概観せざるをえない。しかし、先述のとおり、ここには、比較的時期幅の認められる資料が混在しており、これを大前提として出土資料の多寡を概観するほかはない。以下、こうした現状を念頭において、主な器種について気付いた点を記す。なお、時期的な細分を前提とした器種構成などに関しては、改めて報告を予定しているC～F地区の資料整理が終了した段階に改めて検討したいと考えている。

壺類は、全体に出土数は少なく、出土比率といった面から、注目されるものはない。ただ、このなかで、他地域の影響をみると、山陰方面の影響をもつと考えられるもの(壺A3)、播磨方面の影響をもつもの(壺F)、讃岐方面の影響と考えられるもの(壺G)、東海方面の影響をもつと考えられるもの(壺E2)などが認められる。

甕類では、基本的には、甕Aとした口縁部が「く」の字状に外反し、体部に粗いタタキを施したものが大半を占めるが、これに次ぐ比率を示すのは甕Eとした一群である。これは、丹波方面さらに山陰方面の影響を受けたものを含むが、破片数で見ると、これらが、甕全体のなかで30%近くを占めることになる。このうち、34などは北陸方面からの、E2とした121や185などは山陰方面からの搬入品である可能性が高い。また、甕Bとしたものに河内(生駒西麓産)と判断される製品が3点、播磨産と考えられるものが1点認められた。116は、吉備産(足守川流域)と判断される製品である。

鉢には、小型品に属す鉢A・Bや、甕の器高の低いタイプのものである鉢C・Dを含んでいるが、この時期の資料にしてはやや少ない感を受ける。鉢Cは丹波方面の、受け口状口縁をなす鉢Dは、近江方面の影響(搬入品か)の認められるものである。

高杯では、高杯Aとした杯部が平らな底部から口縁部が外反して立ち上がるタイプのもものが最も多く認められた。この中には、口縁部の外反度が少ないものが最も多く認められるようであり、外反度の強いものや、直線的に開くものは少ない。こうした状況は、時期的な面を反映していると考えられ、いわゆる庄内式併行期でも古い段階の資料が多いことを示している。また、布留式期以降のものと判断される高杯Cも一定量認められる(包含層中)。このほか、高杯Gなどは東海方面の影響を受けたもの、口縁部が小さな複合口縁状をなす高杯Fなどは庄内式期に盛行する丸底鉢の影響と考えられる。

器台Bは、その出土点数は少ないものの、特に大型の器台では、近江～東海方面の影響を認めるもの(器台A)と丹波～丹後方面の影響を認めるもの(器台B)が目につく。特に前者は、ダイレクトに製品が移動してきた可能性が高いものである。

以上、今回の資料においては、各器種とも他地域産と判断されるものがわずかながら認められるが、おおむね、丹波～丹後方面、近江～東海方面の影響を認めるものが比較的目につくといった状況であった。なかでも前者は、甕や器台において一定比率を占めており、製品の移動が確認されるものや、影響を受けて当地で生産されたものを含む。これに対し、後者は、壺・器台において、製品の移動といった面が目立っている。近年、南山城地域では、弥生時代後期段階までは、近江～東海方面の影響が非常に強く認められるものの、庄内併行期になるとかなりその色彩が薄れるといわれる。今回の資料では、近江～東海方面の影響も根強く残しつつ、丹波・丹後系の影響が急激に増してくるといった様相を指摘することができるものとする。

遺構の変遷に関して 今回報告したA・B地区、特にA地区においては、当該期の遺構面が少なくとも3面確認された。最下層の遺存状況の悪い水田跡、第3遺構面とされた良好な水田跡、第2遺構面とした方形周溝墓や溝が確認された遺構面である。第2遺構面で検出された溝S D39

が布留式期に位置付けされており、これ以下の二面の水田面は、これを遡る時期のものと判断される。先にみた庄内併行期の出土遺物が示す大まかな2時期をこれに対応させれば、下層の水田跡が庄内期でも古相の時期に埋没したものであり、上層の水田跡は庄内期でも新相の時期から布留式期初頭頃のものとして判断される。なお、B地区水田跡に関しては、その直上で新相を示す遺物が出土しているが、これを覆う砂層中の土器溜まりSX05やSX07などからは、古相を示す土器群が出土している。現状ではA地区下層水田に対応するものと判断しておきたい。

以上、簡単なが今回報告を行った土器資料並びに検出遺構の位置付けなどについて検討を行ったが、資料の制約などの問題もあり、十分なことは行えていないのが現状である。ただ、この時期の土器群は、当遺跡C～E地区の調査でも大量に出土している。これら資料は、引き続き整理・報告を予定しており、ここで十分に検討できなかった点についてはその際に改めて行うこととしたい。

注1 三好博喜・荒川 史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和60年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注2 注1に同じ

注3 荒川 史・竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注4 竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注5 竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要(内里八丁遺跡・口仲谷古墳群)」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注6 竹原一彦「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注7 竹原一彦「京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注8 鳥居治夫『山城国久世郡綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察』 1986

注9 八幡市教育委員会 八十島豊成氏のご教示による。

注10 辻本和美・奈良康正・河野一隆ほか「一般地方道富野庄八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注11 今回報告している、A・B地区に続いて調査を実施した、C～F地区での調査成果である。詳細は、年次ごとに刊行している概報を参照されたい。

注12 高畑知巧他「百間川原尾島遺跡」2(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県文化財保護協会) 1984

注13 『中村久保田遺跡現地説明会資料』 渋川市教育委員会 1991

注14 『上田町遺跡発掘調査現地説明会資料』 松原市教育委員会 1991

注15 辻 広志「前期水田址」(『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会) 1979

第3表 内里八丁遺跡出土遺物観察表

## 図版第25 (上) B地区SX07

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
3	壺 E 3	13.3	10.9	ヘラミガキ	口縁部 ヘラミガキ 体部ナデ	密	淡橙褐色	良	
4	壺 D	12.8		ヘラミガキ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
5	甕 A	15.2		タタキの後、 ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
6	甕 A	17.2		タタキの後、 ハケメ	ハケメ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
7	甕 A	16.8		タタキの後、 ハケメ	ナデ	密	淡黄灰色	良	
8	甕 D	16.6	26.3	タタキの後、 ハケメ	ハケメ	密	淡黄灰色	良	
9	甕 G	12.5		ハケメ	ハケメ	やや粗	淡茶褐色	良	
10	鉢 C	19.0	8.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
11	器台 A	17.6	14.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ 脚部ハケメ	密	淡黄褐色	良	円形スカシ 三方向二段
12	器台 A	18.2	14.6	ハケ目の後、 ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
13	高杯 A	21.7	17.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	円形スカシ 三方向二段

## 図版第25 (下) B地区SX05

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
14	壺 D	11.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
15	小型 器台 B	12.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡茶褐色	やや軟	
16	器台 B	19.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡茶褐色	良	円形スカシ 三方向
17	甕 E 1	13.2	14.5	ハケメ	ヘラケズリ	やや粗	淡茶褐色	やや軟	
18	甕 E 1	17.0		タタキ後、ハケ メ	ヘラケズリ	やや粗	淡茶褐色	良	
19	甕 E 1	17.7	24.5	ハケメ	ハケメ (板状工具に よるナデか)	やや粗	暗茶褐色	やや軟	

## 図版第26 (上) B地区SX09

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
20	甕 E 1	27.2		磨減	磨減	やや粗	淡黄褐色	良	
21	甕 A	15.8	26.0	タタキ後、ハケ メ	ハケメ	密	淡黄灰色	良	
22	甕 A	15.4	24.2	タタキ	ハケメ	密	淡黄灰色	良	
23	甕 E 1	8.0		ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
24	甕 E 1	13.4		ハケメ	ヘラケズリ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
25	甕 F	17.4	26.7	タタキ後、ハケ メ	ヘラケズリ	密	淡黄褐色	やや軟	
26	甕 底部			タタキ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	

27	壺 底部			ヘラミガキ	ナデ	密	淡橙褐色	やや軟	
28	甕 底部			タタキ	ナデ	密	暗橙褐色	良	
29	甕 体部			ハケメ	ヘラケズリ	やや粗	暗橙褐色	やや軟	

図版第26 (中) B地区SX04

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
30	壺 A4	14.3		磨減	磨減	やや粗	淡黄灰色	良	
31	壺 D	17.0		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
32	壺 B	21.0		磨減	磨減	粗	淡橙褐色	良	櫛描き直線文 と円形浮文
33	甕 A	16.6	18.3	体部タタキ	ハケメ (板状工具に よるナデ)	密	淡灰色	良	
34	甕 E1	15.2	16.0	口縁部に擬凹線 文、体部ハケメ	ヘラケズリ	密	淡褐色 スス付着	良	北陸方面から の搬入品か

図版第26 (下) B地区SX08

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
35	壺 E2	8.5	14.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
36	台付 鉢C	12.8	12.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
37	有孔 鉢B	15.1	9.2	ハケメ	口縁ハケメ ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	
38	鉢 B	9.7		口縁部ナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ナデ 体部ヘラミガキ	密	淡黄灰色	良	
39	台付 鉢A	12.0	8.5	ナデ 頸部指押さえ	ナデ	粗	赤茶褐色	やや軟	

図版第27 (上) B地区SX10

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
40	小型 壺	1.6		ナデ	口縁部ミガキ 体部タタキ	密	茶褐色	やや軟	
41	小型 壺	7.8	9.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
42	甕 A	14.0		タタキ	ナデ	密	黄褐色 体部～底部 暗茶褐色	やや軟	
43	甕 D	18.0	(23.2)	タタキ	ハケメ	密	淡橙褐色	良	
44	甕 E1	19.0		ハケメ	ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	
45	甕 E1	16.4		ハケメ	ヘラケズリ	密	暗褐色 スス付着	良	
46	甕 底部	底径 2.8		ハケメ	ヘラケズリ	密	暗褐色 スス付着	良	
47	甕 E1	16.2	22.0	ハケメ	体部ケズリ	やや粗	暗褐色 スス付着	やや軟	
48	甕 E1	13.2	26.6	ヘラミガキ	ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	
49	鉢A	17.2		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡黄褐色	やや軟	
50	有孔 鉢A	17.4	8.8	ナデ	ハケメ	やや粗	淡灰褐色	やや軟	

図版第27 (下) A地区SD39

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
51	壺 D	10.0		磨滅	磨滅	密	淡灰褐色	やや軟	
52	小型 丸底 壺B	9.6		体部下半ハケメ	体部下半ヘラケ ズリ	密	淡茶褐色	やや軟	
53	小型 丸底 壺B	8.6	8.9	ヘラミガキ 体部下部ケズリ 後、ヘラミガキ	口縁部ミガキ	密	淡茶褐色	良	
54	小型 丸底 壺C	10.4	13.5	ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡赤褐色	良	
55	甕B	16.4		タタキ	ヘラケズリ	密	灰黄褐色	良	
56	甕C	14.0		ハケメ	ヘラケズリ	密	淡赤褐色	良	
57	甕C	16.1		ハケメ	ヘラケズリ	密	淡黄茶褐色	良	
58	甕 E 1	16.0		ハケメ	ヘラケズリ	密	赤茶褐色	やや軟	
59	小型 器台 A	2.8		ヘラミガキ	ナデ	密	淡茶褐色	良	円形スカシ 三方向
60	高杯 C	18.0	16.1	杯部ケズリ後、 ヘラミガキ 脚部ヘラミガキ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
61	甕C	15.8	25.9	ハケメ	ヘラケズリ 底部指押さえ	密	黄茶褐色	良	

図版第28 B地区水田上洪水砂

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
62	壺 D	16.2		磨滅	ナデ	密	暗茶褐色	やや軟	
63	壺 B	19.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	橙褐色	良	口縁外面に波 状文・円形浮文 内面に波状文
64	壺 A 2	15.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	乳褐色	やや軟	
65	壺 A 2	17.8		磨滅	ハケメ	密	黄褐色	良	
66	甕A	14.0		タタキ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
67	甕A 体部	3.4		タタキ	ハケメ	密	淡橙褐色	良好	
68	甕A	14.8	18.9	タタキ後、ハケ メ	ハケメ	密	淡赤褐色	やや軟	
69	甕A	16.7		タタキ	ナデ	やや粗	褐色	良	
70	甕A	16.7		体部上半タタキ 体部下半タタキ 後ハケメ	ハケメ	密	淡褐色	良	
71	甕A	14.4		タタキ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	
72	甕A	15.0		タタキ	ナデ	密	暗茶褐色	良	
73	甕A	17.8		タタキ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
74	甕A	16.7		矢羽タタキ	ハケメ	密	淡赤褐色	良	
75	甕A	17.6		タタキ	ハケメ (板状工具に よるナデか)	密		やや軟	
76	甕 E 1	12.6		ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ 体部ヘラケズリ	やや粗	淡黄褐色	良	
77	甕 E 1	12.9	15.7	ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ 体部ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	
78	甕D	15.6		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	

79	鉢 D	16.2		ナデ	ハケメ	密	淡褐色	良	口縁部刺突文 肩部直線文・ 刺突文
80	有孔 鉢A	12.4	7.9	ナデ	ハケメ	密	淡黄褐色	やや軟	
81	有孔 鉢A	17.4	10.4	タタキ	ハケメ	密	淡茶褐色	良	
82	台付 鉢A	14.8	8.1	ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
83	高杯	20.9		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡橙褐色	良	
84	高杯 F	14.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡茶褐色	良	
85	高杯 A	16.8	10.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	円形スカシ 四方向
86	高杯 脚	12.8		ヘラミガキ	ハケメ	密	赤黄褐色	良	円形スカシ 三方向
87	器台 A	16.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	乳褐色	良	
88	器台 B	18.8	18.3	ヘラミガキ 脚部下半ハケメ	上半ヘラミガキ 下半ハケメ	密	淡橙褐色	良	円形スカシ 四方向

図版第29 B地区洪水砂上茶褐色粘質砂

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
89	壺 D	12.2		磨減	ナデ	密	淡橙褐色	やや軟	
90	壺 D	15.6	31.1	口縁部ナデ 体部はタタキ後 ヘラミガキ	口縁部ナデ 体部はヘラミガ キ	密	淡黄褐色	良	
91	壺 B	18.8			ヘラミガキ	密	淡橙褐色	良	口縁部内外面 に櫛描き波状 文と直線文
92	小型 壺	8.8	8.9	体部ミガキ 底部付近ハケメ	口縁部ナデ 体部ハケメ	やや粗	淡茶褐色	良	
93	底部	5.3		ヘラミガキ	ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
94	甕 A	14.8	19	タタキ	体部、ハケメ (板状工具によ るナデ)	密	淡黄褐色	良	
95	甕 E 1	13.9		体部ハケメ	体部ハケメ	密	淡黄褐色	良	
96	甕 F	16.2	22.8	体部ハケメ	体部ハケメ	やや粗	淡黄褐色	良	
97	甕 E 1	14.6		体部タタキ後ハ ケメ	体部上半ヘラケ ズリ後ハケメ	密	淡黄褐色	良	
98	鉢 C	35.8		磨減	磨減	密	淡黄褐色	良	
99	鉢 C	19.2		体部タタキ	ナデ	密	淡灰褐色	良	
100	鉢 C	20.6		体部タタキ後ハ ケメ	ナデ	やや粗	淡灰褐色	良	
101	高杯 D	19.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	橙褐色	良	
102	脚台	12.6		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	

図版第30 A地区包含層

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
103	小型 丸底 壺A	9.2		磨減	磨減	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
104	小型 丸底 壺B	9.0	9.6	体部下部ハケメ	体部下部ヘラケ ズリ	密	淡褐色	良	
105	甕 A	14.8		体部タタキ後ハ ケメ	体部ケズリ	やや粗	淡灰黄色	良	

106	甕A	12.7		体部タタキ	体部ハケメ	密	灰黄褐色	良	
107	甕A	18.0		体部タタキ	体部ハケメ	密	淡茶褐色	良	
108	甕E1	19.7		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡灰黄色	良	
109	甕B	18.8		体部タタキ	体部ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	
110	甕B	13.9		体部タタキ後ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗茶褐色	良	
111	甕C	15.4		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡黄灰色	良	
112	甕C	14.0		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡黄褐色	やや軟	底部に刺突文
113	甕C	14.0		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
114	甕C	13.4	22.1	体部ハケメ	体部ヘラケズリ 底部指オサエ	密	淡茶褐色	良	
115	甕C	14.8	24.2	体部ハケメ	体部ヘラケズリ 底部指オサエ	密	赤茶褐色	良	
116	甕E3	14.6		体部タタキ後ハケメ	体部ヘラケズリ	密	茶褐色	良	吉備方面からの搬入品
117	有孔鉢C	15.4	6.2	体部下部分タタキ	ナデ	密	淡茶褐色	やや軟	口縁端部に刻目文
118	鶏形土製品					密	淡黄褐色	良	

図版第31 (上) A地区水田直上

図面番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
119	甕A	17.2	15.1	体部タタキ	ナデ	密	赤茶褐色	良	
120	甕E1	11.6		体部タタキ後ハケメ	体部ハケメ	密	淡黄褐色	良	口縁部に擬凹線
121	甕E2	12.0		ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
122	甕E1	16.2		磨減	磨減	やや粗	淡茶褐色	良	
123	甕E1	17.0		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	良	
124	甕E1	16.2		磨減	体部ヘラケズリ	やや粗	淡灰褐色	良	
125	甕E1	13.6		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	やや粗 砂粒多	淡灰褐色	良	
126	甕E1	16.0		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	やや粗 砂粒多	茶褐色	良	
127	器台B	19.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
128	器台脚	15.6		ヘラケズリ	ヘラケズリ	密	淡黄褐色	良	円形スカシ三方向
129	甕A	20.0	12.5	体部ハケメ	体部上半ハケメ 体部下半ヘラケズリ	やや粗 砂粒多	濃茶褐色	良	
130	有孔鉢A	15.6	10	ハケメ	ハケメ	やや粗 砂粒多	淡灰褐色	良	
131	甕体部	底径 4.8		ハケメ	ヘラケズリ	やや粗	淡茶褐色	やや軟	
132	高杯A1	18.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡橙褐色	良	
133	高杯F	11.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	
134	蓋	6.9	16.4	ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
135	蓋	14.4	5.8	ヘラミガキ	ナデ	密	淡赤褐色	良	
136	高杯脚	11.1		ヘラミガキ	ナデ	やや粗 砂粒多	淡黄褐色	良	

図版第31～35 A・B地区包含層

図面 番号	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
137	小型丸底壺A	9.0	5.9	ヘラミガキ	ハケメ	密	橙色	良	
138	小型丸底壺A	11.0	5.8	横ナデ 体部ミガキ	口縁部ミガキ	密	赤茶褐色	良	
139	小型丸底壺A	10.0		ナデ 体部ミガキ	口縁部ハケメ ナデ	密	橙色	やや軟	
140	小型丸底壺A	11.7	7.85	ヘラミガキ	ヘラミガキ 口縁部に暗紋	密	赤茶褐色	良	
141	小型壺	5.8		ハケメ	体部下半ハケメ	密	淡赤褐色	良	
142	壺E1	17.2		ミガキ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
143	壺E1	17.2		ヘラミガキ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	暗褐色	堅	
144	壺H	15.1		ハケメ	ハケメの後ナデ	密	赤褐色	良	
145	壺F	20.7		ヘラミガキ	ナデ	密	淡褐色	軟	口縁部外面に鋸歯文あり
146	壺A1	19.0		口縁部ヘラミガキ 頸部ハケメ	ヘラミガキ	密	黄茶褐色	やや軟	口縁外面波状文と円形浮文 内面波状文
147	壺A1	21.2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	やや密	淡黄褐色	やや軟	口縁外面波状文と竹管文
148	壺A2	20.6		摩滅	摩滅 ハケメ	密	黄褐色	やや軟	
149	壺D	17.0		ナデ	ナデ 体部ケズリ	密	淡黄褐色	やや軟	
150	壺D	14.4		摩滅	摩滅	密	淡茶褐色	やや軟	
151	壺A3	22.0		摩滅	ハケメ	やや粗	淡茶褐色	やや軟	
152	壺B	21.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	良	口縁外面波状文と竹管文 内面波状文
153	壺G	22.0		ハケメ	ハケメ	密		良	
154	壺G 体部			ハケメ	ハケメ	やや粗	暗黄灰色	良	
155	甕A	14.4	14.9	体部タタキ	ナデ	密		軟	
156	甕A	14.6		体部タタキ	ハケメ	密	乳褐色	良	
157	甕A	15.4		体部タタキの後 ハケメ	ハケメ	粗	淡褐色	軟	
158	甕A	15.0		体部タタキ	ハケメ	やや粗	灰茶褐色	良	
159	甕A	12.6		体部タタキ	体部上半ハケメ	やや粗	淡褐色	やや軟	
160	甕A	12.6		体部上半タタキ 体部下半タタキ 後ハケ	ハケメ	やや粗	赤褐色	良	
161	甕A	15.8		体部タタキ	体部ヘラケズリ	やや粗	淡茶褐色	やや軟	
162	甕A	13.2	14.8	体部タタキ	ナデ	やや粗	淡黄茶 暗茶褐色	良	
163	甕A	17.8	5.5	体部タタキ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
164	甕A	13.7		体部タタキ	ナデ	密	淡黄褐色	軟	
165	甕A	12.8		体部タタキ	ナデ	密	淡黄茶褐色	軟	
166	甕A	15.5		体部タタキ	ナデ	密	淡桃褐色	軟	
167	甕A	18.0		体部タタキ	口縁部ハケメの 後ナデ 体部ナデ	密	淡黄茶褐色	軟	
168	甕A	13.6		体部タタキ	ナデ	密	暗黄褐色	やや軟	
169	甕A	16.4		体部タタキ	ナデ	密	淡茶褐色	やや堅	
170	甕A	14.8		体部タタキ	ナデ	密	赤茶褐色	やや軟	
171	甕B	15.4		体部タタキ	口縁部タタキ 体部ケズリ	密	暗茶褐色	良	

出土遺物観察表

172	甕B	15.2		体部タタキ	ナデ ケズリ	密	淡黄白色	良	
173	甕B	14.5		体部タタキ	口縁部ナデ 体部ケズリ	密	淡灰白色	良	播磨方面から 搬入品か
174	甕B	11.6	14.3	体部上半タタキ 体部下半タタキ 後ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡黄茶褐色	やや軟	
175	甕C	14.0		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡茶褐色	やや軟	
176	甕C	10.8		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡赤褐色	やや軟	
177	甕E 1	15.2	22.1	体部ハケメ	体部ヘラケズリ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
178	甕E 1	15.8		ナデ	ナデ	やや粗	淡茶褐色	良	
179	甕E 1	16.6		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	粗	黄茶褐色	やや軟	
180	甕E 1	15.6		体部ハケ	体部ヘラケズリ	粗	淡橙褐色	やや軟	
181	甕E 1	9.0		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	粗	淡黄茶褐色	やや軟	
182	甕E 1	15.6		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	やや粗	淡黄灰色	やや良	
183	甕E 1	16.4		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡褐色 スス付着	やや軟	
184	甕E 1	17.0	14.8	体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡黄褐色	やや軟	
185	甕E 2	23.8		体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡黄茶褐色	やや粗	
186	甕E 1	15.0	11.8	体部ハケメ	体部ヘラケズリ	密	淡黄褐色	やや軟	
187	甕D	14.5		ハケメ後タタキ	ナデ	密	黄褐色	やや軟	
188	鉢A	15.4	9.6	ナデ	ナデ	やや粗	茶褐色	やや軟	
189	鉢B	10.9	6.0	ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
190	鉢B	11.8	7.9	ナデ	ナデ	密	褐色	やや粗	
191	鉢B	10.4	8.5	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
192	底部	3.2		ハケメ	ナデ	良	淡茶褐色	やや軟	
193	有孔 鉢A	14.3	6.3	タタキ	磨滅	密	淡褐色	やや軟	
194	台付 鉢B	13.6		杯部上半ナデ 杯部下半・脚部 ヘラミガキ	ハケメ	密	暗黄褐色	良	
195	台付 鉢B	12.0		杯部上半ナデ 杯部下半・脚部 ヘラミガキ	ナデ	密	淡乳褐色	やや軟	
196	高杯 A	25.6		摩滅	摩滅	密	淡黄褐色	軟	
197	高杯 A	25.0		ハケメ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	やや軟	
198	高杯 A	28.8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄茶褐色 橙褐色	やや軟	
199	高杯 A	19.8		ヘラミガキ 頸部ミガキ	ヘラミガキ	密	淡黄褐色	やや軟	
200	高杯 B	28.0		ハケメ	摩滅	やや粗	赤黄褐色	やや軟	
201	高杯 C	17.1		ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色	良	
202	高杯 C	17.1		ハケメ	摩滅	密	淡橙褐色	良	
203	高杯 C	17.0		摩滅	摩滅	密	淡褐色	やや軟	
204	高杯 C	16.8		ハケメ後ナデ	ナデ	良	淡黄橙褐色	良	
205	高杯 D	13.8		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	良	淡赤褐色	やや軟	
206	器台 C	18.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄褐色	やや軟	口縁部に擬凹 線紋・棒状浮文
207	器台 B	18.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	淡褐色	軟	
208	脚	14.1		ヘラミガキ	ナデ	密	淡赤褐色	良	

209	脚	16.0		ヘラミガキ	ナデ	やや粗	淡黄茶褐色	やや軟	円形透し 二段三方向
210	脚	13.4		ヘラミガキ	ナデ	やや粗	淡黄茶褐色	やや軟	
211	脚	10.9		ナデ	ナデ	粗	淡褐色	やや軟	
212	小型器台A	8.7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黄褐色	やや軟	
213	小型器台C	6.8	8.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	赤茶褐色	良	
214	小型器台C	8.9	7.9	ヘラミガキ	受け部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ	密	黄褐色	良	
215	器台	11.4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	褐色	やや軟	口縁端刻目文 口縁内列点文 体部上列点文
216	脚	17.4		ヘラミガキ	ナデ	密	淡橙褐色	軟	

図版第36~38 SD 5 3

図面番号	種類	器種	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
301	須恵器	蓋A	8.3	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
302	須恵器	蓋A	10.0	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
303	須恵器	蓋A	20.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
304	須恵器	蓋A		2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
305	須恵器	蓋A	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
306	須恵器	蓋A	13.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
307	須恵器	蓋A	14.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
308	須恵器	蓋A	14.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
309	須恵器	蓋A	14.9		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
310	須恵器	蓋B	15.5	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
311	須恵器	蓋B	18.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
312	須恵器	杯E	8.3	3.2	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
313	須恵器	杯E	9.4	3.4	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
314	須恵器	杯E	9.6	3.5	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
315	須恵器	杯E	9.2	3.6	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
316	須恵器	杯E	10.2	3.6	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	良	青灰色	良	
317	須恵器	杯E	10.6	3.6	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
318	須恵器	杯E	10.1	3.0	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	口縁部に 自然釉付着
319	須恵器	杯E	9.6		ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	

出土遺物観察表

320	須恵器	杯E	9.75	3.3	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
321	須恵器	杯E	8.8	2.9	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
322	須恵器	杯E	9.0	3.5	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
323	須恵器	杯E	9.05	3.5	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
324	須恵器	杯E	9.2	3.5	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
325	須恵器	杯E	9.8	3.9	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
326	須恵器	杯E	9.3	4.0	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
327	須恵器	杯E	10.0	3.6	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
328	須恵器	杯E	16.5	4.1	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
329	須恵器	杯E	10.8	3.9	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
330	須恵器	杯E	9.6	3.2	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
331	須恵器	杯E	9.25	3.3	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
332	須恵器	杯E	10.0	3.9	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
333	須恵器	杯E	10.5	3.7	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
334	須恵器	杯E	10.9	3.4	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
335	須恵器	杯E	10.6	3.4	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
336	須恵器	杯E	9.5	3.5	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
337	須恵器	杯E	10.0	3.7	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
338	須恵器	杯E	11.0	3.6	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
339	須恵器	杯E	9.3	3.2	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
340	須恵器	杯E	10.4	3.1	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	青灰色	良	
341	須恵器	杯A	10.1	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
342	須恵器	杯A	10.1		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	

343	須惠器	杯A	9.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
344	須惠器	杯E	10.7	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
345	須惠器	杯E	10.2	4.4	ロクロナデ 底部へラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
346	須惠器	杯E	10.2	4.3	ロクロナデ 底部へラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
347	須惠器	杯A	11.9	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
348	須惠器	杯A	11.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
349	須惠器	杯B	8.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	外面自然油 付着
350	須惠器	杯B	10.3	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
351	須惠器	杯B	17.8	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
352	須惠器	杯B	21.1	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
353	須惠器	短頸壺	8.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
354	須惠器	高杯脚	9.9		ロクロナデ	ロクロナデ	良	青灰色	良	
355	土師器	杯C1	10.0	3.1	上半ヨコナデ 下半ケズリ	放射状暗文	密	淡黄灰色 II群	良	
356	土師器	杯C2	11.6	3.7	上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	やや粗	赤茶褐色 I群	やや軟	
357	土師器	杯C1	10.7	3.4	上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	密	乳灰色 II群	やや軟	
358	土師器	杯C1	11.0	3.5	上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	やや密	茶褐色 I群	軟	
359	土師器	杯C2	11.9	3.6	上半ヨコナデ 下半指押さえ	放射状暗文	密	赤褐色 I群	良	
360	土師器	杯C2	11.7		上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	やや密	暗茶褐色 I群	良	
361	土師器	杯C2	12.4	3.5	上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	やや密	赤茶褐色 I群	良	
362	土師器	杯C2	12.6	4.2	上半ヨコナデ 下半ケズリ	放射状暗文	密	赤茶褐色 I群	良	
363	土師器	杯C2	12.5	4.0	上半ヨコナデ 下半ケズリ	放射状暗文	密	淡茶褐色 I群	良	
364	土師器	杯C2	15.2		へラミガキ	放射状暗文	密	茶褐色 I群	良	
365	土師器	杯C3	15.8	7.6	上半ヨコナデ 下半ケズリ	放射状暗文	密	淡褐色 I群	良	
366	土師器	杯C3	14.3		上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	密	茶褐色 I群	やや軟	
367	土師器	杯C3	14.3		上半ヨコナデ 下半ナデ	放射状暗文	密	茶褐色 I群	良	
368	土師器	杯C3	15.1		上半ヨコナデ 下半ナデ	磨滅	密	茶褐色 I群	やや軟	
369	土師器	杯C3	16.2		上半へラミガキ 下半ケズリ	放射状暗文	やや粗	茶褐色 I群	やや軟	
370	土師器	杯C3	15.4	5.2	上半ヨコナデ 下半へラケズリ 後へラミガキ	放射状暗文	密	赤褐色 I群	良	
371	土師器	杯A	16.0		へラミガキ	二段放射状暗文	密	茶褐色 I群	やや軟	
372	土師器	杯A	16.9	5.1	へラミガキ	二段放射状暗文	密	赤褐色 I群	良	
373	土師器	杯A	19.1		へラミガキ	二段放射状暗文	密	茶褐色 I群	良	
374	土師器	皿A	21.8	2.8	磨滅	磨滅	やや密	淡茶褐色 I群	やや軟	

出土遺物観察表

375	土師器	皿 B	23.1	3.3	口縁 ヨコナデ 底部ヘラミガキ	放射状暗文	やや密	淡茶褐色 I群	やや軟
376	土師器	皿 B	23.4	2.3	口縁 ヨコナデ 底部ヘラミガキ	放射状暗文	密	淡褐色 I群	良
377	土師器	皿 B	13.4	3.0	ナデ	ナデ	密	淡茶褐色 I群	やや軟
378	土師器	鉢 A	17.95	4.5	ヘラミガキ	放射状暗文	密	淡茶褐色 I群	良
379	土師器	鉢 A	17.6	6.8	ヘラミガキ	放射状暗文	密	茶褐色 I群	良
380	土師器	鉢 A	19.2		上半ヘラミガキ 下半ヘラケズリ	放射状暗文	密	乳灰色 II群	両
381	土師器	鉢 B	15.8		ハケメ	ナデ	密	茶褐色 I群	やや軟
382	土師器	高杯	13.4		ナデ	ナデ	密	赤茶褐色 I群	良
383	土師器	甕 A 2	15.0		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ハケメの後 ナデ	やや粗	暗黄灰色 II群	良
384	土師器	甕 A 3	15.0		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ナデ	やや粗	暗黄灰色 II群	良
385	土師器	甕 A 2	10.8	13.8	口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ナデ	密	暗黄灰色 II群	良
386	土師器	甕 A 1	14.4	6.0	口縁ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色 II群	やや軟
387	土師器	甕 A 2	17.2	6.2	口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメの後 ナデ 体部ヘラケズリ	やや粗 砂粒多	淡茶褐色 II群	やや軟
388	土師器	甕 B 3	13.8		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良
389	土師器	甕 B 3	13.6		口縁ハケメの後 ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良
390	土師器	甕 B 1	22.0	10.5	口縁ハケメの後 ナデ 体部ハケメ	口縁ナデ 体部ハケメ	密	淡黄褐色 II群	やや軟
391	土師器	甕 B 1	21.4		口縁ハケメ 体部上半ハケメ 下半ヘラケズリ	口縁ハケメ 体部ハケメ	やや粗	淡褐色 II群	良
392	土師器	甕 B 2	20.6	4.8	口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ナデ 体部ハケメの後 ナデ	やや粗	淡黄褐色 II群	やや軟
393	土師器	甕 B 2	24.0		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色 II群	やや軟
394	土師器	甕 B 4	23.0		ナデ	口縁ハケメ	やや粗	淡褐色 II群	やや軟
395	土師器	甕 B 6	23.0		ナデ	口縁ハケメ	やや粗	淡桃褐色 II群	やや軟
396	土師器	甕 B 6	25.4		ナデ	ナデ	やや粗	暗褐色 II群	やや軟
397	土師器	甕 B 2	26.4		口縁ナデ 体部ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色 II群	やや軟
398	土師器	甕 B 2	25.0		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ナデ 体部ハケメの後 ヘラケズリ	密	淡黄褐色 II群	良
399	土師器	甕	29.0		磨滅	ハケメ	密	淡茶褐色 I群	やや軟
400	土師器	甕 底部	17.4		底径 ハケメ	磨滅	密	淡茶褐色 I群	やや軟
401	土師器	甕 口縁	21.6		ハケメの後 ナデ	ハケメ	密	淡茶褐色 I群	やや軟
402	土師器	鍋 B 1	29.6		ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色	良
403	土師器	鍋 B 2	29.2		ハケメ	ナデ	密	淡赤褐色	やや軟
404	須恵器	甕 A	18.8		カキ目	同心円タタキ	密	淡灰色	やや軟

405	須惠器	甕 A	18.6		タタキ後カキ目	同心円タタキ	密	淡青灰色	良	
-----	-----	-----	------	--	---------	--------	---	------	---	--

図版第39 SD 1 8

406	須惠器	蓋 E	11.0	3.5	ロクロナデ 天井部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
407	須惠器	杯 D	12.5	3.3	ロクロナデ 底部ヘラ切り 未調整	ロクロナデ	密	灰色	良	
408	土師器	甕 A 3	15.0	12.7	口縁ナデ 体部ハケメ	ハケメ 底部指オサエ	密	淡黄褐色 II群	やや軟	
409	土師器	甕 B 4	21.8		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ナデ	密	淡褐色 II群	やや軟	
410	土師器	甕 B 4	26.8		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ヘラケズリ	密	淡褐色 II群	良	
411	土師器	鉢 A	24.2		上半ナデ 下半ハケメ	ナデ	密 砂粒多	淡褐色 I群	良	

図版第39 SD 3 3

412	須惠器	蓋 A	10.4	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
413	須惠器	蓋 A	11.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
414	須惠器	蓋 A	15.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
415	須惠器	蓋 B	14.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
416	須惠器	蓋 B	15.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
417	須惠器	蓋 B	13.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
418	須惠器	蓋 B	19.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
419	須惠器	杯 A	12.4		ロクロナデ	ロクロナデ	粗	灰色	良	
420	須惠器	杯 A	12.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
421	須惠器	杯 B	19.2	5.25	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
422	須惠器	杯 B 底径	11.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
423	土師器	杯 C 1	10.4		ナデ	放射状暗文	やや粗	茶褐色 I群	良	
424	土師器	杯 C 2	12.0		ナデ	放射状暗文	密	茶褐色 I群	良	
425	土師器	杯 C 3	14.4		磨減	磨減	密	淡茶褐色 I群	やや軟	
426	土師器	杯 C 2	12.6	3.2	磨減	磨減	密	淡褐色 I群	やや軟	
427	土師器	杯 C 3	14.0		ナデ	ナデ	密	褐色 I群	良	
428	土師器	皿 A	19.2		ナデ	放射状暗文	密	茶褐色 I群	良	
429	土師器	甕 A 3	14.4		口縁ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡黄褐色 II群	やや軟	
430	土師器	甕 A 3	13.1		口縁ナデ 体部ハケメ	ナデ	密	淡黄褐色 II群	やや軟	
431	土師器	甕 B 10	19.4		口縁ナデ 体部ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良	
432	土師器	甕 B 2	21.0		口縁ハケメの後 ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメの後 ナデ 体部ナデ	密	黄褐色 II群	良	
433	土師器	甕 B 6	20.6		口縁ナデ 体部ハケメ	口縁ナデ 体部ヘラケズリ	密	淡黄灰色 II群	良	

434	須恵器	ハソウ	8.8	12.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	#状のヘラ記号
-----	-----	-----	-----	------	-------	-------	---	-----	---	---------

## 図版第39 S E 0 2

435	須恵器	壺A	13.8	21.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
436	須恵器	杯A	13.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部外面に墨書
437	土師器	甕A 2	15.2	12.2	口縁ハケメの後ナデ 体部ハケメ	口縁ハケメ 体部ハケメ 底部指オサエ	密	暗茶褐色 I群	良	
438	土師器	甕A 3	14.0	12.5	口縁ナデ 体部ハケメ	ナデ 底部指押さえ	密	暗茶褐色 I群	やや軟	
439	土師器	鉢A	18.0	10.5	ハケメ	ナデ 底部指押さえ	密	淡黄褐色 II群	良	

## 図版第40 S D 1 6

440	須恵器	蓋A	12.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
441	須恵器	蓋A	18.4	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
442	須恵器	蓋A	18.8	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
443	須恵器	蓋A	22.6	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
444	須恵器	蓋B	14.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
445	須恵器	蓋B	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
446	須恵器	蓋D	18.6	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
447	須恵器	蓋F	12.6	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
448	須恵器	杯A	10.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
449	須恵器	杯A	12.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
450	須恵器	杯A	15.2	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	軟	
451	須恵器	杯B	15.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
452	須恵器	杯B	17.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
453	須恵器	長頸壺	底径 8.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
454	土師器	蓋	20.8	3.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	茶褐色 I群	良	
455	土師器	杯A	17.6	3.3	ナデ	ヘラミガキ	密	茶褐色 I群	やや軟	
456	土師器	皿A	22.0	2.4	ヨコナデ	ヘラミガキ	密	茶褐色 I群	良	
457	土師器	高杯	15.2	10.1	杯部ヘラミガキ 脚ヘラケズリ	杯部ヘラミガキ	密	茶褐色 I群	良	
458	土師器	甕A 2	15.3		ハケメ	ハケメ	やや密	茶褐色 II群	良	
459	土師器	甕C 3	14.8		ハケメ	ハケメ	やや粗	茶褐色 II群	良	
460	土師器	甕A 3	17.8	17.7	ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色 II群	やや軟	
461	須恵器	鉢A	10.1	14.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
462	土師器	鉢A	31.4		ハケメ	ハケメ 指ナデ痕	密	淡褐色 II群	やや軟	
463	土師器	鉢B	34.2		ヘラミガキ	ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良	

図版第40・41 SK 1 1

464	須恵器	杯 E	10.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
465	須恵器	杯 E	11.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
466	須恵器	杯 E	11.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
467	須恵器	杯 E	10.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
468	須恵器	杯 E	11.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
469	須恵器	杯 B	18.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
470	須恵器	皿 C 1	19.6		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
471	須恵器	皿 C 2	20.2		ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
472	須恵器	壺 B	7.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
473	須恵器	壺 B	8.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
474	土師器	杯 C 2	13.2	3.0	ナデ	ナデ 暗文	密	茶褐色 I群	良	
475	土師器	杯 C 3	16.0	4.0	ミガキ 底部 ケズリ	ナデ 暗文	密	茶褐色 I群	良	
476	土師器	杯 C 3	19.3	5.0	口縁部 ナデ 下半 ケズリ	ナデ	密	黄褐色 II群	良	
477	土師器	杯 A	18.0		ナデ	暗文	密	茶褐色 I群	良	
478	土師器	皿 B	25.0		ヘラミガキ	暗文	密	淡黄褐色 II群	良	
479	須恵器	杯 A	9.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
480	須恵器	杯 B	15.5		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
481	須恵器	蓋 B	18.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
482	須恵器	杯 B	18.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
483	須恵器	蓋 A	12.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	×状のヘラ 記号
484	須恵器	杯 A	10.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
485	須恵器	蓋 A	16.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
486	須恵器	杯 B	14.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
487	土師器	甗	17.1		ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良	
488	土師器	杯 C 2	15.0		ナデ	磨滅	密	淡黄褐色 II群	良	
489	土師器	杯 C 2	15.3		ナデ	暗文	密	淡黄褐色 II群	良	
490	土師器	杯 A	19.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	茶褐色 I群	良	
491	土師器	皿 A	13.3		ナデ	暗文	密	淡茶褐色 I群	良	
492	須恵器	杯 B 底部	11.6	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
493	土師器	鍋 A 1	28.8		ハケメ	ハケメ	密	淡黄褐色	やや軟	
494	土師器	杯 A	15.6		ヨコナデ	暗文	密	茶褐色 I群	良	
495	土師器	杯 A	17.8		ヨコナデ	暗文	密	茶褐色 I群	良	
496	土師器	杯 A	17.5		ヨコナデ	磨滅	密	淡茶褐色 I群	やや軟	

497	土師器	皿A	17.1		ヨコナデ	ナデ	密	茶褐色 I群	良	
498	土師器	皿A	19.2		ナデ	ヨコナデ	密	淡茶褐色 I群	良	
499	土師器	皿A	21.4		ヨコナデ	ヨコナデ	密	茶褐色 I群	良	
500	土師器	杯C 3	14.7		ヨコナデ	磨滅	密	淡茶褐色 I群	良	
501	土師器	杯A	16.3		ヨコナデ 底部 ケズリ	ナデ	密	淡茶褐色 I群	良	
502	土師器	杯A	18.5		ヨコナデ	ヨコナデ	密	淡茶褐色 I群	良	
503	土師器	杯B	19.4		ヘラミガキ	ナデ	密	赤茶褐色 I群	良	
504	須恵器	杯B	10.8		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部に墨書の跡
505	須恵器	杯A	13.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	底部に墨書の跡
506	土師器	甕B 8	23.0		ハケメ	口縁部 ハケメ 体部 ナデ	密	黄褐色 II群	良	
507	土師器	甕B 3	24.7		口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ハケメ 体部 ナデ	密	淡黄褐色 II群	良	
508	土師器	甕B 3	25.5		口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ハケメ 体部 ヘラケズリ後有機物付着	密	黄褐色 II群	良	
509	土師器	鍋B 1	24.6		ハケメ	ハケメ	密	黄灰色 II群	良	
510	土師器	鍋A 3	42.4		ハケメ	ナデ	密	黄灰色 II群	良	

## 図版第42~47 B地区包含層

511	須恵器	蓋A	11.4	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
512	須恵器	蓋A	9.6	2.25	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
513	須恵器	蓋A	10.4	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
514	須恵器	蓋A	10.3	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
515	須恵器	蓋A	10.4	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
516	須恵器	蓋A	10.2	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
517	須恵器	蓋A	10.3	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
518	須恵器	蓋A	10.4	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
519	須恵器	蓋A	10.3	2.65	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
520	須恵器	蓋A	11.4	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
521	須恵器	蓋A	15.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
522	須恵器	蓋A	15.6	1.45	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
523	須恵器	蓋A	15.5	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
524	須恵器	蓋B	15.0	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
525	須恵器	蓋B	16.0	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
526	須恵器	蓋B	15.8	9.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
527	須恵器	蓋B	15.9	1.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
528	須恵器	蓋B	14.8	0.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	

529	須惠器	蓋B	18.0	0.65	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
530	須惠器	蓋B	16.5	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
531	須惠器	蓋B	17.0	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	外面に自然釉付着
532	須惠器	蓋B	13.9	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	外面に自然釉付着
533	須惠器	蓋B	15.6	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
534	須惠器	蓋B	14.4	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
535	須惠器	蓋B	15.8	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
536	須惠器	蓋B	18.2	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
537	須惠器	蓋B	22.5	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
538	須惠器	蓋B	12.6	1.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
539	須惠器	蓋B	15.4	1.45	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
540	須惠器	蓋B	15.6	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
541	須惠器	蓋B	19.0	1.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
542	須惠器	蓋B	19.8	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
543	須惠器	蓋C	19.6	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
544	須惠器	蓋B	18.5	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
545	須惠器	蓋F	11.1	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
546	須惠器	杯E	10.0	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
547	須惠器	杯E	10.7	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
548	須惠器	杯E	10.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
549	須惠器	杯E	9.5	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
550	須惠器	杯E	11.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
551	須惠器	杯E	10.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
552	須惠器	杯E	9.6	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
553	須惠器	杯E	10.4	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
554	須惠器	杯E	11.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
555	須惠器	杯E	9.6	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
556	須惠器	杯A	10.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
557	須惠器	杯A	12.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
558	須惠器	杯A	13.8	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
559	須惠器	杯A	15.8	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
560	須惠器	杯B	9.8	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
561	須惠器	杯B	10.4	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
562	須惠器	杯B	10.5	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	

## 出土遺物観察表

563	須恵器	杯B	11.0	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
564	須恵器	杯B	12.0	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
565	須恵器	杯B	12.6	3.65	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
566	須恵器	杯B	13.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
567	須恵器	杯B	13.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	粗	灰色	良	
568	須恵器	杯B	13.8	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
569	須恵器	杯B	14.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
570	須恵器	杯B	14.1	3.85	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
571	須恵器	杯B	15.0	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
572	須恵器	杯B	16.1	4.35	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
573	須恵器	杯B	15.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
574	須恵器	杯B	16.2	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
575	須恵器	杯B	15.8	4.35	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
576	須恵器	杯B	16.0	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
577	須恵器	杯B	18.75	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
578	須恵器	杯C1	11.2	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
579	須恵器	皿C1	16.6	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
580	須恵器	皿C1	19.5	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
581	須恵器	皿C1	20.5	3.3	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ	密	灰色	良	
582	須恵器	皿C2	20.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
583	須恵器	皿A	23.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
584	須恵器	皿A	23.3		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
585	須恵器	皿B	19.6	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
586	須恵器	皿D	10.5	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
587	須恵器	托形須恵器	7.9	3.15	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
588	須恵器	托形須恵器	9.15	3.15	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
589	須恵器	椀	13.8	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑油	良	
590	須恵器	椀	13.6	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑油	良	
591	須恵器	椀	7.6		ロクロナデ	ロクロナデ	良	灰色	良	
592	須恵器	杯身			ロクロナデ	ロクロナデ	良	灰色	良	
593	須恵器	椀	15.75		ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑色 内外面共 緑油施す	良	
594	緑油陶	杯身	14.2	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡緑色	良	

595	須惠器	皿B	15.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	密	外面淡黄茶褐色 内面淡緑茶褐色	良	
596	灰釉陶	皿	15.2	2.25	ロクロナデ	ロクロナデ	密		良	
597	灰釉陶	椀	13.7	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	密		良	
598	須惠器	底部	底径 6.5		ロクロナデ 底部 ナデ	ロクロナデ	良	内外面 緑 灰色 底部暗灰色	良	
599	灰釉陶	鉢	底径 4.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
600	緑釉陶	椀	底径 7.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
601	須惠器	壺A	底径 9.7		ロクロナデ 体部下ケズリ	ロクロナデ	良	灰色	良	
602	須惠器	壺B	7.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
603	須惠器	壺C	12.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑黄灰色	良	
604	須惠器	壺D	10.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
605	須惠器	底部	底径 4.6		ロクロナデ	ロクロナデ	良	灰色	良	
606	須惠器	底部	底径 4.4		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
607	須惠器	横瓶	9.8		ロクロナデ	青海波紋	密	灰色	良	
608	須惠器	鉢	底径 7.6		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
609	須惠器	円面 硯 脚部	底径 25.0		ロクロナデ	ロクロナデ	良	淡灰色	良	
610	須惠器	甕A	19.0		体部 タタキ	体部 青海波紋	緻密	青灰色	良	
611	須惠器	甕A	22.6		ナデ	ナデ	密	灰色	良	
612	須惠器	甕B	38.6		ナデ	ナデ	密	灰色	良	
613	土師器	土鈴		6.2	ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	やや軟	
614	土師器	杯身 C 1	10.4	3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	やや密	黄褐色 II群	やや軟	
615	土師器	杯身 C 1	10.8	3.4	口縁部ヨコナデ 体部 ナデ	暗文	密	茶褐色 I群	やや軟	
616	土師器	杯身 C 1	11.2	2.85	ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色 II群	軟	
617	土師器	杯身 C 2	12.0	3.5	ナデ	ナデ	やや粗	黄褐色 II群	やや軟	
618	土師器	杯身 C 2	12.1	3.3	体部指押さえ	磨滅著しい	やや粗	淡茶褐色 I群	やや軟	
619	土師器	杯身 C 2	12.5	3.7	口縁部 ミガキ 体部 指押さえ	暗文	やや密	淡黄褐色 II群	やや軟	
620	土師器	杯身 C 2	13.1	2.7	ヨコナデ	ヨコナデ 体部 暗文	密	淡黄褐色 II群	良	
621	土師器	杯D	13.3	3.1	体部指押さえ	ヨコナデ	密	茶褐色 I群	やや軟	
622	土師器	杯身 C 2	13.6	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	密	淡茶褐色 I群	やや軟	
623	土師器	杯身 C 3	15.8	3.5	口縁部ヨコナデ 体部 指押さえ	ヨコナデ 暗文	密	淡茶褐色 I群	良	
624	土師器	杯身 C 3	16.5	4.15	口縁部ヨコナデ 体部 指押さえ	ヨコナデ 暗文	密	淡茶褐色 I群	良	
625	土師器	杯身 C 3	16.9	3.8	ヨコナデ	暗文	密	淡茶褐色 I群	やや軟	
626	土師器	杯身 C 3	17.4	4.8	口縁部ミガキ 体部ケズリ	ミガキ後暗紋	密	茶褐色 I群	やや軟	

出土遺物観察表

627	土師器	杯身 C 3	17.9	3.75	口縁部 ミガキ 体部 ケズリ	暗文	密	淡黄褐色 II群	良	
628	土師器	杯身 C 3	20.3	5.1	口縁部 ミガキ	暗文	やや粗	淡黄褐色 II群	やや軟	
629	土師器	杯身 C 3	18.8	6.0	ハケメ	ミガキ後暗紋	やや密	淡茶褐色 I群	やや軟	
630	土師器	杯 A	16.6	4.9	ミガキ	暗文	密	淡茶褐色 I群	良	
631	土師器	杯 A	12.5	2.8	ヨコナデ	暗文	密	茶褐色 I群	良	
632	土師器	杯 A	15.0	3.0	口縁部ヨコナデ	ナデ	密	赤褐色 III群	やや軟	
633	土師器	杯 A	14.7		ナデ	暗文	密	淡茶褐色 I群	やや軟	
634	土師器	杯 A	20.4	2.8	ナデ	ナデ	密	淡茶褐色 I群	やや軟	
635	土師器	杯 A	15.5	3.6	ナデ ケズリ	ナデ	密	淡黄褐色 II群	良	
636	土師器	杯 A	17.0	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	粗	茶褐色 I群	軟	
637	土師器	杯 A	18.1		ナデ	ナデ	密	茶褐色 I群	やや軟	
638	土師器	杯 A	18.4	3.5	口縁部 ナデ 底部 未調整	ナデ	密	茶褐色 I群	やや軟	
639	須恵器	皿 A	16.0	1.8	ナデ	ナデ	密	赤褐色 III群	良	
640	土師器	皿 A	17.6	2.3	口縁部 ナデ 体部 未調整	ナデ 暗文	密	茶褐色 I群	やや軟	
641	土師器	皿 A	21.0	2.7	ナデ	ナデ 暗文	密	茶褐色 I群	やや軟	
642	土師器	杯 A	20.2		ナデ	ナデ	密	茶褐色 I群	良	
643	土師器	皿 A	21.0	2.7	口縁部 ナデ 底部 ケズリ	ナデ 暗文	密	茶褐色 I群	良	
644	土師器	皿 A	16.0	2.0	ヨコナデ	暗文	密	茶褐色 I群	良	
645	土師器	椀	12.9	3.5	ケズリ	ヨコナデ	やや粗	黄褐色 II群	良	
646	土師器	杯 B	18.6	5.1	ナデ後荒い ミガキ	ナデ	密	暗茶褐色 I群	やや軟	
647	土師器	皿 C	17.6	2.7	ミガキ	口縁部 ナデ 暗文	やや粗	茶褐色 I群	やや軟	
648	土師器	皿 C	23.8	2.05	ナデ	ナデ	やや粗	淡茶褐色 I群		
649	土師器	皿 C	18.9	1.9	ヘラミガキ	ナデ	やや粗	淡茶褐色 I群	良	
650	土師器	鉢 B	18.7	4.1	ミガキ	ヨコナデ	密	淡茶褐色 I群	やや軟	
651	土師器	鉢	11.0	4.8	口縁部 ミガキ 体部 ケズリ	ナデ 暗文	密	淡茶褐色 I群	良	
652	土師器	鉢 A	19.6	8.1	口縁部 ミガキ 体部 ケズリ	ナデ ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良	
653	土師器	甕 B 1	21.5		体部 ハケメ	体部 ハケメ	やや粗	淡黄褐色 II群	良	
654	土師器	甕 B 1	28.0		体部 ハケメ	ハケメ	やや粗	淡黄褐色 II群	やや軟	
655	土師器	甕 B 2	23.8		ナデ	ナデ	やや粗	茶褐色 II群	やや軟	
656	土師器	甕 B 3	23.3		体部 タテハケ	ナデ	密	淡黄褐色 II群	やや軟	
657	土師器	甕 B 2	24.5		ナデ	ナデ	粗	淡褐色 II群	やや軟	
658	土師器	甕 B 3	26.1		ハケメ	口縁部 ハケメ	やや粗	淡褐色 II群	やや軟	
659	土師器	甕 B 3	29.4		体部 ハケメ	ハケメ	やや粗	淡黄褐色 II群	やや軟	
660	土師器	甕 B 4	26.6		体部 ハケメ	口縁部ハケメ	密	淡黄褐色 II群	良	

661	土師器	甕 B 2	25.4		体部 ハケメ	口縁部 ハケメ	やや密	淡黄褐色 II 群	やや軟
662	土師器	甕 B 7	22.0		体部 ハケメ	ハケメ	やや密	淡黄褐色 II 群	やや軟
663	土師器	甕 B 7	23.8		体部 ハケメ	ハケメ	粗	淡黄褐色 II 群	やや軟
664	土師器	甕 B 5	25.4		体部 ハケメ	ハケメ	粗	淡黄褐色 II 群	良
665	土師器	甕 B 6	26.1		ハケメ	口縁部 ハケメ	やや粗	淡黄褐色 II 群	やや軟
666	土師器	甕 B 6	27.4		ハケメ痕	ハケメ	やや粗	淡黄褐色 II 群	やや軟
667	土師器	甕 B 6	29.4		体部 ハケメ	口縁部 ハケメ	やや粗	淡黄褐色 II 群	やや軟
668	土師器	甕 B 5	35.2		体部 ハケメ	摩滅	やや粗	淡黄褐色 II 群	軟
669	土師器	甕 B 4	27.2		口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ナデ 頸部 ハケメ 体部 ナデ	やや粗	淡黄褐色 II 群	やや軟
670	土師器	甕 B 9	29.8		口縁部 ナデ 頸部 ハケメ	ナデ	やや密	淡黄褐色 II 群	やや軟
671	土師器	甕 B 8	26.0		口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ハケメ 体部 回転ナデ	やや粗	淡黄褐色 II 群	良
672	土師器	鍋 A 3	30.0		口縁部 ナデ ハケメ	ナデ	密	淡茶褐色	良
673	土師器	鍋 A 2	39.0		ハケメ	口縁部 ハケメ	やや粗	茶褐色	良
674	土師器	羽釜 B	27.6		体部 ハケメ	ナデ	やや粗	淡褐色 一部スス	やや軟
675	土師器	羽釜 A	24.30		ナデ	ナデ	密	淡黄灰色	良
676	土師器	甕 B 10	20.25		口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ナデ 体部 ハケメ	密	淡乳黄色 II 群	良
677	土師器	鍋 A 1	11.5		体部 ハケメ	ナデ	粗	茶褐色	やや軟
678	土師器	鍋 A 1	23.4		体部上部タタキ 体部下部ハケメ	ナデ	粗	淡茶褐色	軟
679	土師器	甕 A 1	15.4	14.6	口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ナデ 体部 ケズリ 底部 指押さえ	密	淡黄褐色 II 群	やや軟
680	土師器	A 3	11.8	9.0	口縁部 ナデ 体部 ハケメ	口縁部 ハケメ	密	暗黄褐色 II 群	良
681	製塩土器		20.0		ナデ	ナデ	粗	淡黄褐色	やや軟
682	製塩土器		20.0		ナデ	ナデ	粗	橙褐色	やや軟
683	製塩土器		18.6		ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟
684	製塩土器		15.8		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟
685	製塩土器		12.0		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟
686	製塩土器		13.2		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟
687	製塩土器		10.2		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟
688	製塩土器		8.6		ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟
689	製塩土器		10.1		ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟
690	製塩土器		11.2		ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟
691	土師質	筒状土製品	15.1		ハケメ	ハケメ	密	淡茶褐色	良

692	土師質	筒状土製品	12.9		ハケメ	ハケメ	密	淡茶褐色	良	
-----	-----	-------	------	--	-----	-----	---	------	---	--

図版第48 SE04

図面番号	種	器形	口径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
693	土師器	皿	11.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
694	土師器	皿	13.0		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
695	土師器	皿	13.8		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	乳褐色	良	
696	土師器	皿	15.9		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	粗	淡黄褐色	やや軟	
697	土師器	皿	16.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
698	土師器	杯	11.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙色	やや軟	
699	土師器	皿	12.7		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	乳白色	良	
700	土師器	杯	13.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙色	やや軟	
701	土師器	杯	14.8		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
702	土師器	杯	13.3		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	口縁部 ナデ 底部 ハケメ	密	乳褐色	良	
703	土師器	杯	14.3		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	
704	土師器	杯	16.4		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
705	土師器	杯	13.7		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
706	土師器	杯	14.7		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	粗	淡黄褐色	やや軟	
707	緑釉陶器	椀	13.7		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗緑色	良	
708	緑釉陶器	椀	6.9	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗緑色	良	
709	緑釉陶器	皿	14.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗黄緑色	良	
710	緑釉陶器	皿	6.45	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	緑灰色	良	
711	緑釉陶器	椀	5.6	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	暗緑色	良	
712	灰釉陶器	椀	6.2	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
713	灰釉陶器	皿	16.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	内 淡緑色 外 淡灰色	良	
714	灰釉陶器	椀	7.0	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	内 緑色 外 青灰色	良	
715	黒色土器	椀	14.4		ナデ	ヘラミガキ	密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	
716	黒色土器	椀	13.1		ナデ	ヘラミガキ	密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	
717	黒色土器	椀	14.5		ナデ	ヘラミガキ	密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	
718	黒色土器	椀	17.0		ナデ 指押さえ	ヘラミガキ	密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	
719	黒色土器	鉢	12.9		磨減	磨減	密	内 黒灰色 外 淡黄褐色	良	
720	黒色土器	鉢	13.3		磨減	磨減	やや密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	
721	黒色土器	鉢	14.6		磨減	磨減	やや粗	内 黒褐色 外 淡黄褐色	軟	
722	黒色土器	鉢	16.9		磨減	磨減	密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	

723	黒色土器	鉢	27.4		磨減	磨減	密	内 黒褐色 外 淡黄褐色	良	
724	須恵器	杯A 底部	9.8	底径	ロクロナデ 底部へラ切り	ロクロナデ	密	白灰色	やや軟	底面に墨書あり
725	須恵器	壺 底部	4.0	底径	ロクロナデ 底部糸切り	ロクロナデ	密	灰色	良	
726	灰釉陶器	壺 底部	4.2		施釉 ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
727	灰釉陶器	壺	8.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	灰色	良	
728	須恵器	壺 底部	11.6	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
729	須恵器	壺 底部	6.9	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
730	須恵器	壺 底部	12.0	底径	ロクロナデ	ロクロナデ	密	淡灰色	良	
731	土師質	土馬	遺存長 約6.8cm 遺存高 約5.2cm (小型品)				密	暗褐色	良	
732	土師器	羽釜 B	20.1		体部 ハケメ	ナデ	密	暗褐色	良	
733	土師器	羽釜 B	28.6		体部 ハケメ	ナデ	密	淡橙褐色	やや軟	
734	土師器	羽釜 B	28.6		ナデ	ナデ	密	暗褐色	やや軟	

図版第49～50 SE07

735	土師器	小皿	7.8	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
736	土師器	小皿	8.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
737	土師器	小皿	8.6	1.4	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	
738	土師器	小皿	9.0	1.8	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄茶褐色	良	
739	土師器	小皿	9.1		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
740	土師器	小皿	9.0	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
741	土師器	小皿	9.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	良	
742	土師器	小皿	8.7	1.3	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
743	土師器	小皿	9.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
744	土師器	小皿	8.8	1.2	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
745	土師器	小皿	8.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
746	土師器	小皿	10.8		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙褐色 内面底部 淡褐色	良	
747	土師器	小皿	9.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	灰褐色	やや軟	
748	土師器	小皿	10.0	1.9	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄茶褐色	良	
749	土師器	小皿	8.6	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
750	土師器	小皿	9.3	1.7	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄茶褐色	良	
751	土師器	小皿	9.7	1.65	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄茶褐色	良	
752	土師器	小皿	9.5		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
753	土師器	小皿	9.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡灰褐色	良	
754	土師器	小皿	9.8	1.4	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	

出土遺物観察表

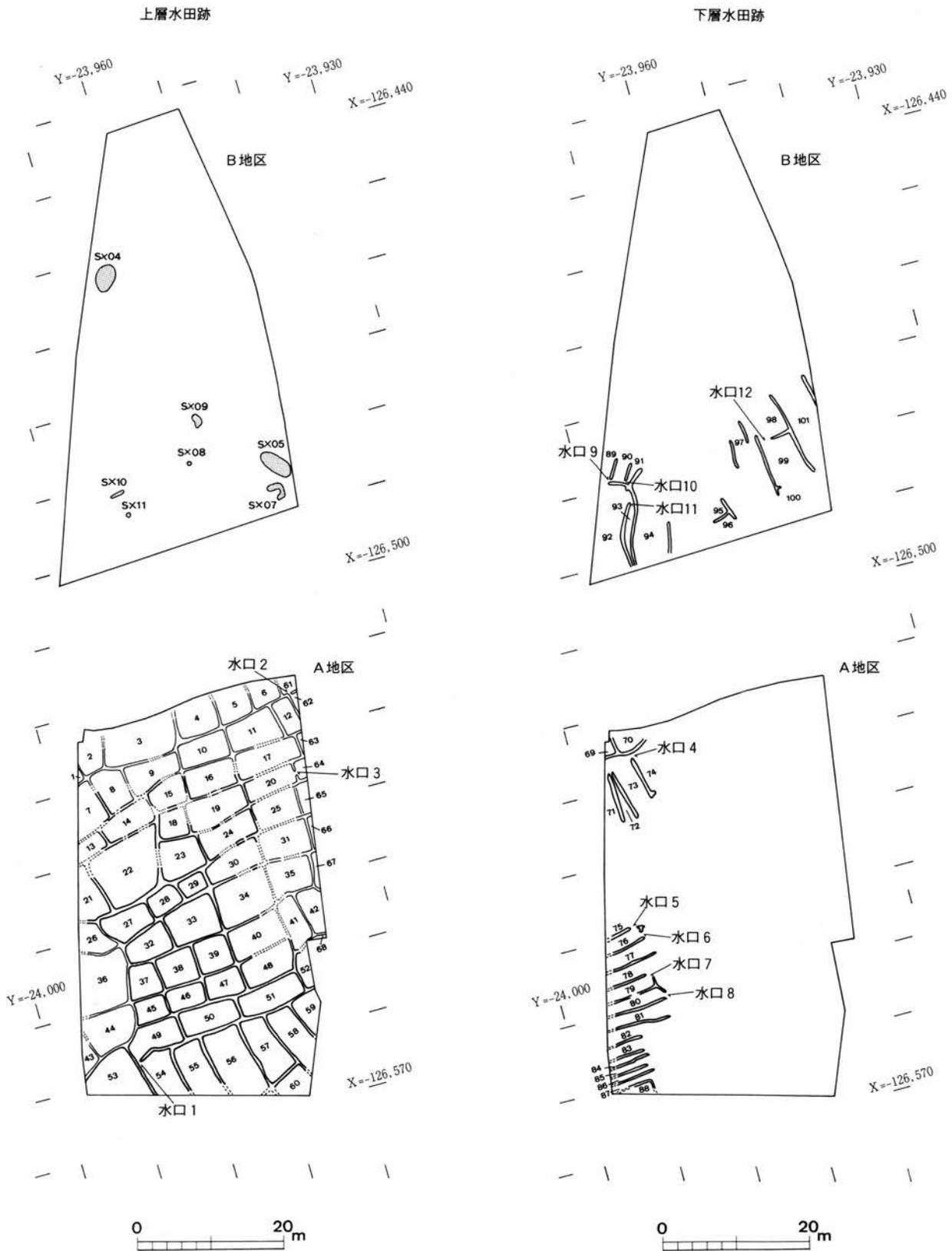
755	土師器	小皿	10.2	1.8	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	灰褐色	やや軟	
756	土師器	小皿	8.4		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
757	土師器	小皿	9.0	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
758	土師器	小皿	9.3		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
759	土師器	小皿	9.3	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
760	土師器	小皿	9.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	暗褐色	良	
761	土師器	小皿	10.0		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	粗	淡黄褐色	やや軟	
762	土師器	小皿	10.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	
763	土師器	小皿	8.0		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
764	土師器	小皿	8.8		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	やや軟	
765	土師器	小皿	8.8	1.5	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
766	土師器	小皿	8.9		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
767	土師器	小皿	9.2	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	赤茶褐色	やや軟	
768	土師器	小皿	8.9		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
769	土師器	小皿	9.7		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
770	土師器	大皿	13.5		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	暗褐色	良	
771	土師器	大皿	13.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
772	土師器	大皿	14.0	2.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
773	土師器	大皿	14.4	3.2	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡灰色	軟	
774	土師器	大皿	14.0		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
775	土師器	大皿	13.8		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
776	土師器	大皿	12.5		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡橙褐色	良	
777	土師器	大皿	13.0	2.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡茶褐色	良	
778	土師器	大皿	14.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	やや軟	
779	土師器	大皿	14.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
780	土師器	大皿	15.2		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
781	土師器	大皿	15.9	2.4	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
782	土師器	大皿	13.5		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡褐色	やや軟	
783	土師器	大皿	14.5		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡橙褐色	やや軟	
784	土師器	大皿	14.8		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
785	土師器	大皿	15.5		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	粗	淡黄褐色	やや軟	
786	土師器	大皿	15.7		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡褐色	良	
787	土師器	大皿	15.6		口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	淡黄褐色	やや軟	
788	土師器	小皿	9.0	1.7	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	灰白色	良	底部中央 穿孔

789	土師器	小皿	9.8	1.7	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡灰褐色	良	底部中央 穿孔
790	土師器	小皿	9.0	1.7	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	やや粗	赤茶褐色	良	底部中央 穿孔
791	土師器	小皿	9.3	1.6	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ		淡黄茶褐色	良	底部中央 穿孔
792	土師器	大皿	9.0	2.8	口縁部ヨコナデ 底部 ナデ	ナデ	密	淡灰褐色	良	底部中央 穿孔
793	瓦器	椀	15.7	5.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
794	瓦器	椀	15.4	5.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
795	瓦器	椀	16.0	5.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
796	瓦器	椀	16.1		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
797	瓦器	椀	13.7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
798	瓦器	椀	14.8	5.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
799	瓦器	椀	15.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
800	瓦器	椀	16.5		ヘラミガキ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
801	瓦器	椀 底部	5.6		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
802	瓦器	椀 底部	5.6		ナデ		密	黒灰色	良	
803	瓦器	椀 底部	5.1		ナデ		密	黒灰色	良	
804	瓦器	椀 底部	5.4		ナデ	ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
805	陶器	山茶 椀 底部	5.3		ナデ		密	暗灰色	良	
806	瓦器	皿	9.7	1.6	ナデ	ナデ	密	黒灰色	良	
807	白磁	椀	13.2		ヘラケズリ		密	灰白色	良	底部に 「佛」の 墨書あり
808	白磁	椀	14.5		ヘラケズリ		密	灰白色	良	
809	白磁	椀 底部	5.6		ヘラケズリ		密	灰白色	良	
810	須恵器	鉢	26.0		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	
811	須恵器	鉢	28.2		ロクロナデ	ロクロナデ	密	青灰色	良	

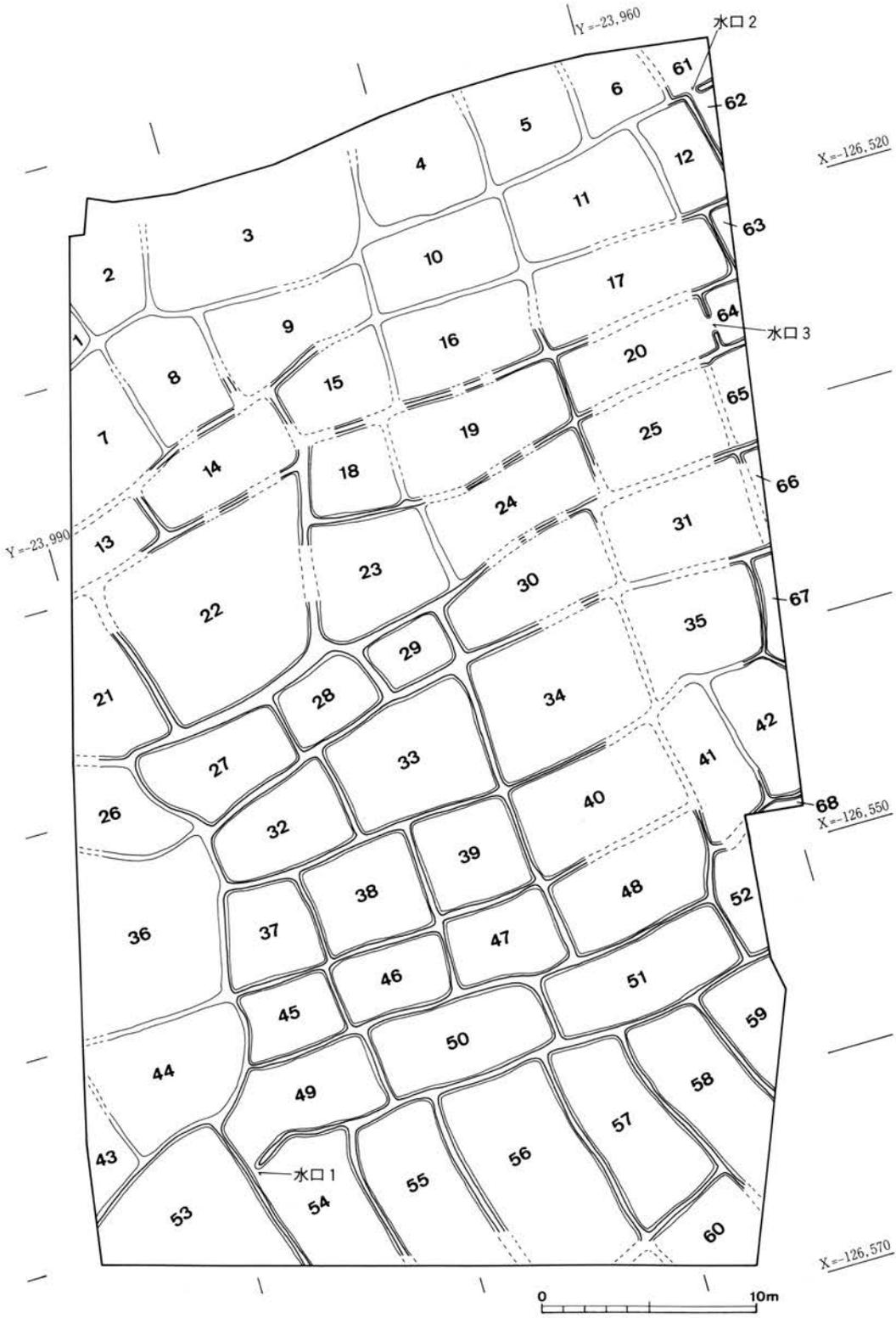
図版第50 包含層

812	土師器	小皿	8.1	1.4	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
813	土師器	小皿	9.6	1.5	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
814	土師器	大皿	17.7	2.7	ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
815	瓦器	小皿	9.2	1.4	ナデ	底部に暗紋	密	黒灰色	良	
816	瓦器	小皿	9.3	1.7	ナデ	底部に暗紋	密	黒灰色	良	
817	土師器	羽釜	25.0		ナデ	ナデ	密	淡黄褐色	良	
818	瓦器	椀	15.1	5.3	口縁部ヘラミガキ 体部 指押さえ	ヘラミガキ 暗文	密	黒灰色	良	
819	瓦器	椀	14.1	5.6	口縁部ヘラミガキ 体部 指押さえ	ヘラミガキ 暗文	密	黒灰色	良	
820	瓦器	椀 底部	9.0		ヘラミガキ	ヘラミガキ 暗文	密	黒灰色	良	
821	瓦器	椀	13.4	4.5	ナデ	暗文 ヘラミガキ	密	黒灰色	良	
822	白磁	椀	14.7		ヘラケズリ	ナデ	密	灰白色	良	
823	白磁	椀	15.6		ヘラケズリ	ナデ	密	灰白色	良	
824	白磁	椀	18.1		ヘラケズリ	ナデ	密	灰白色	良	

圖 版



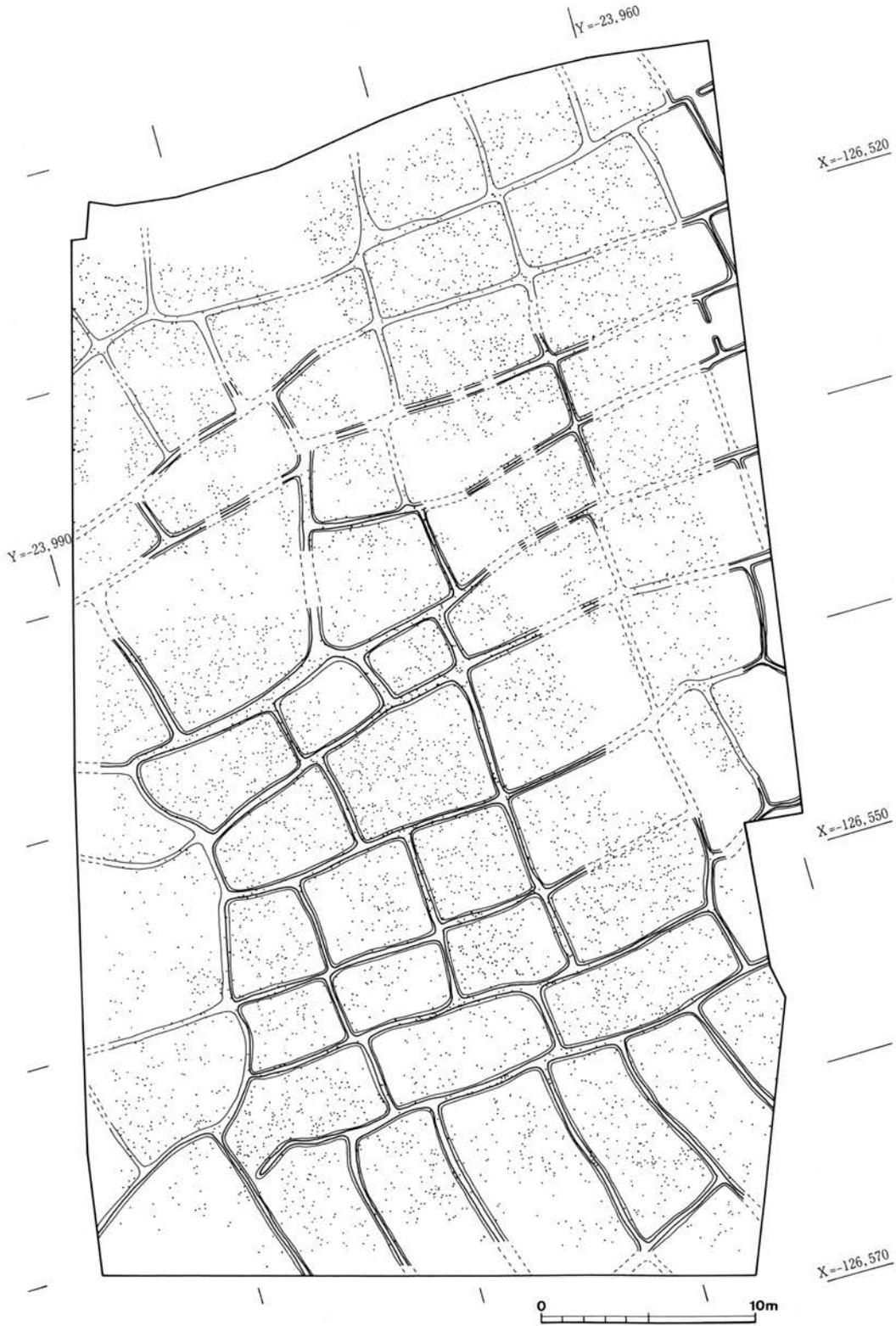
遺構平面図(1)



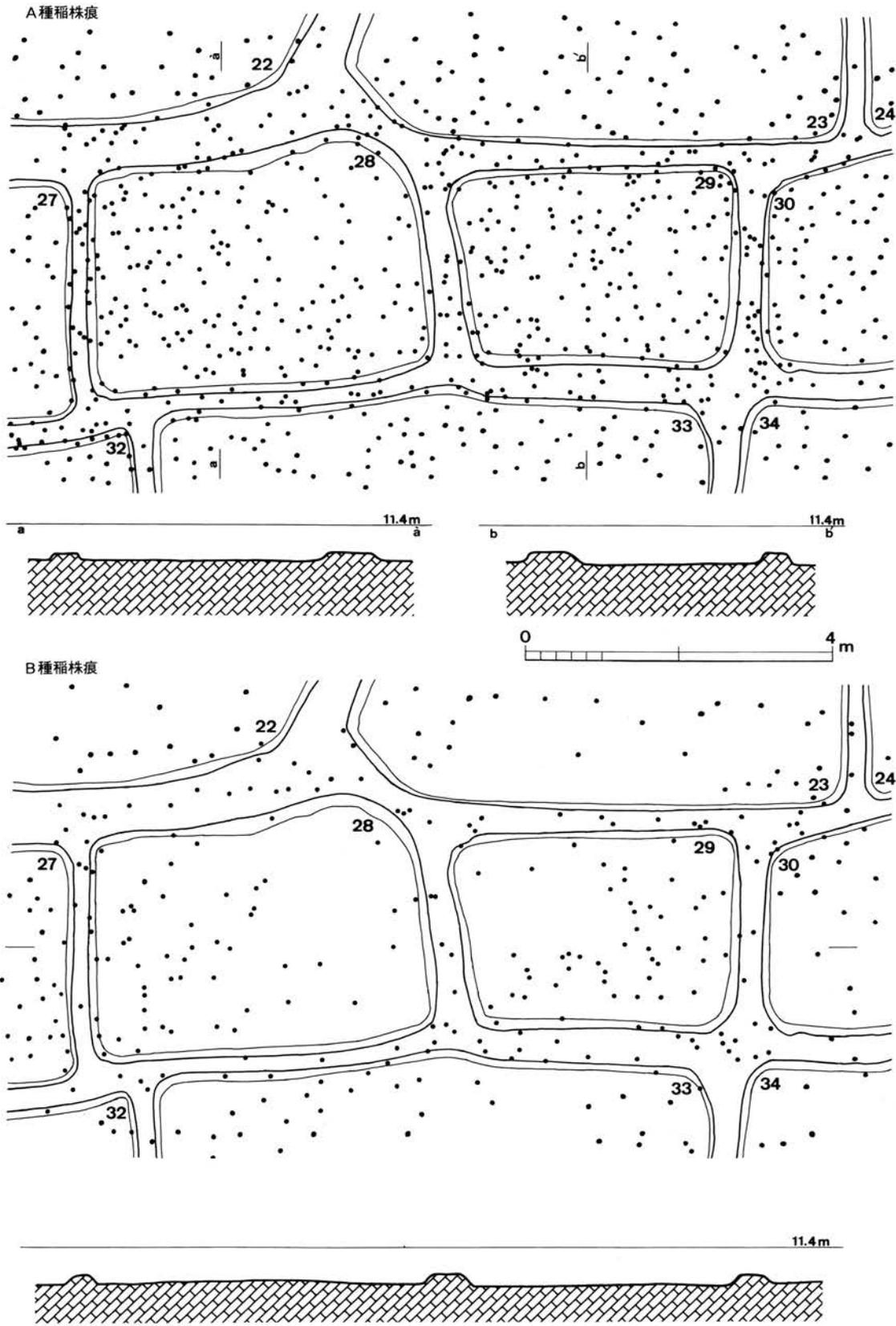
A地区上層水田跡平面図



A地区上層水田跡A種稻株痕分布図

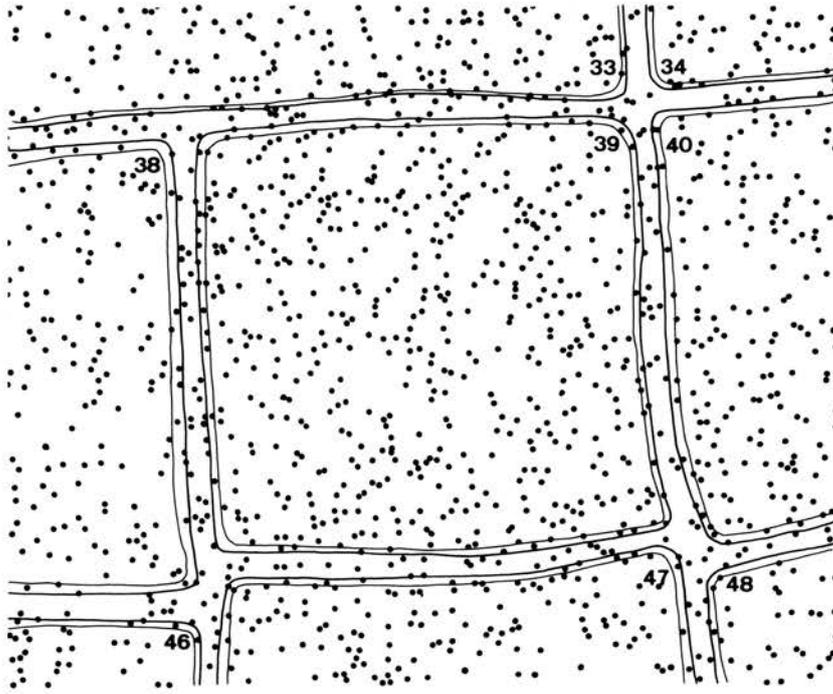


A地区上層水田跡B種稻株痕分布図

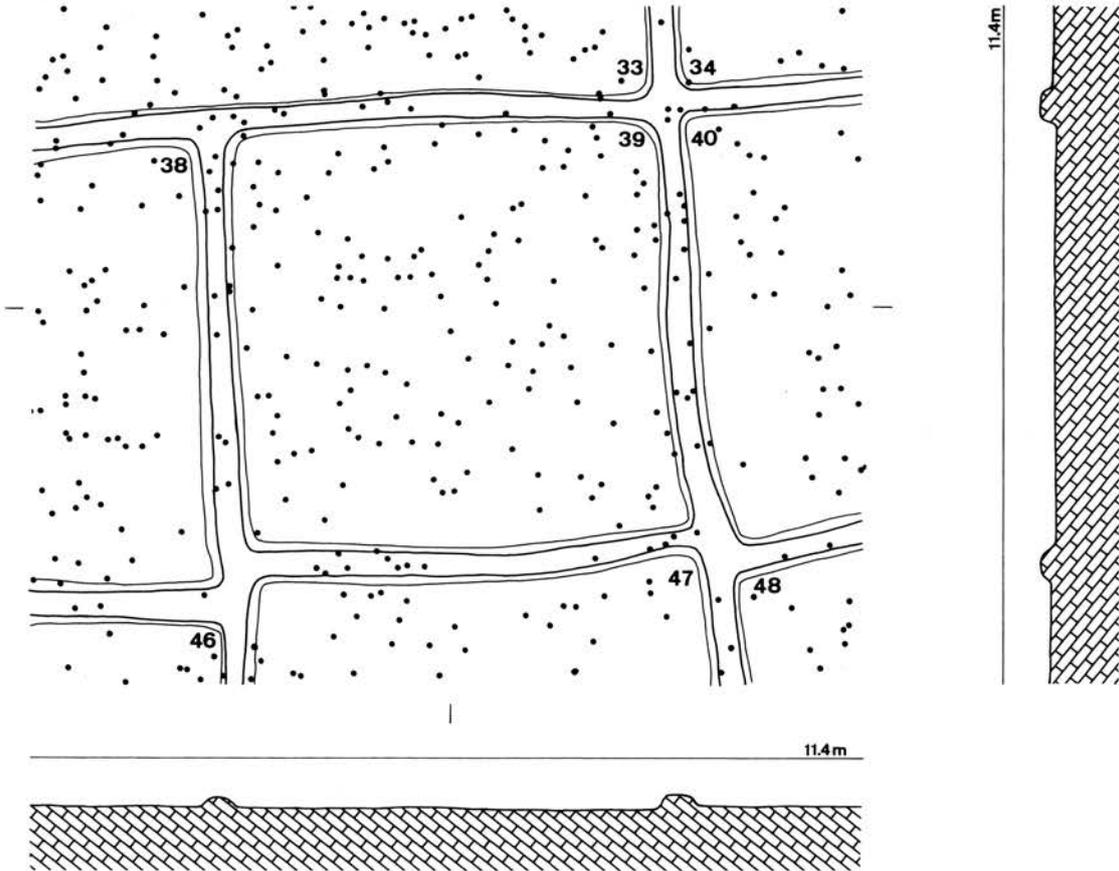


上層水田跡稻株痕分布状況図(1)

A種稻株痕

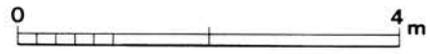


B種稻株痕

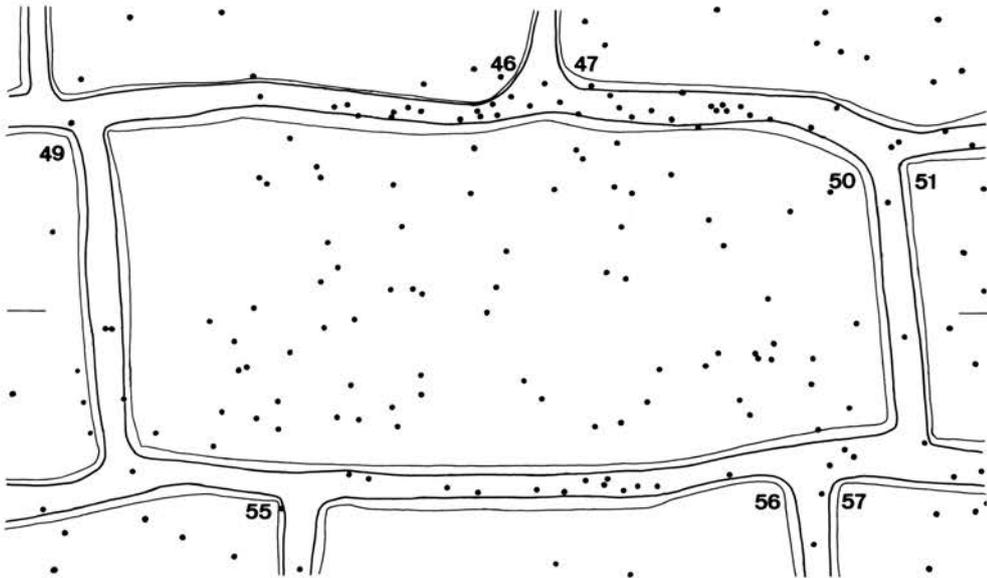


上層水田跡稻株痕分布状況図(2)

A種稻株痕



B種稻株痕



11.4m

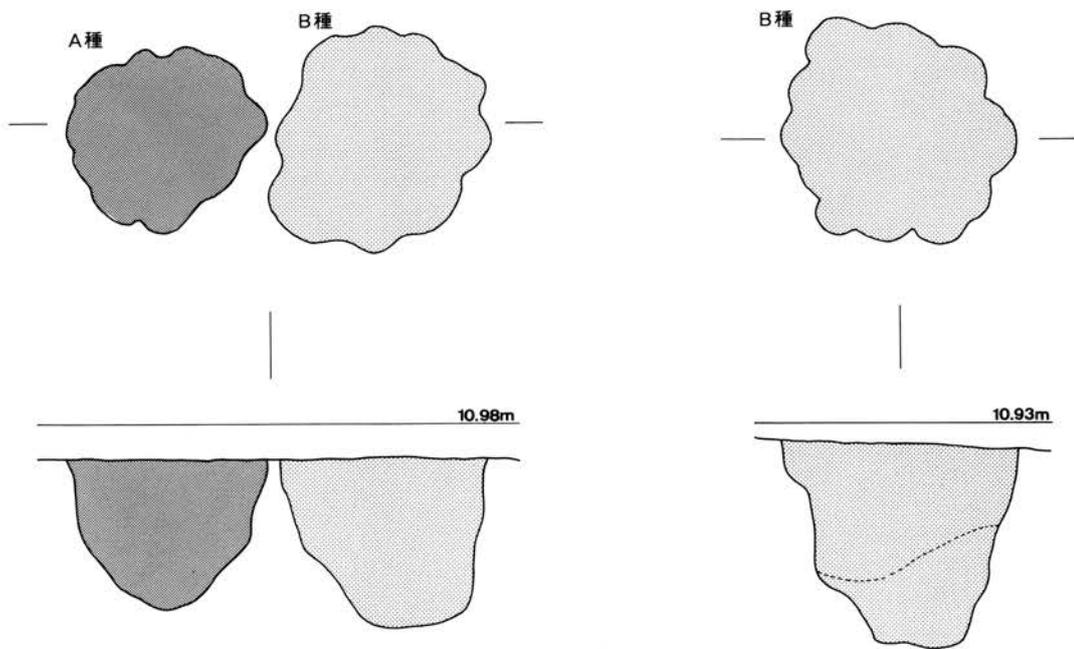
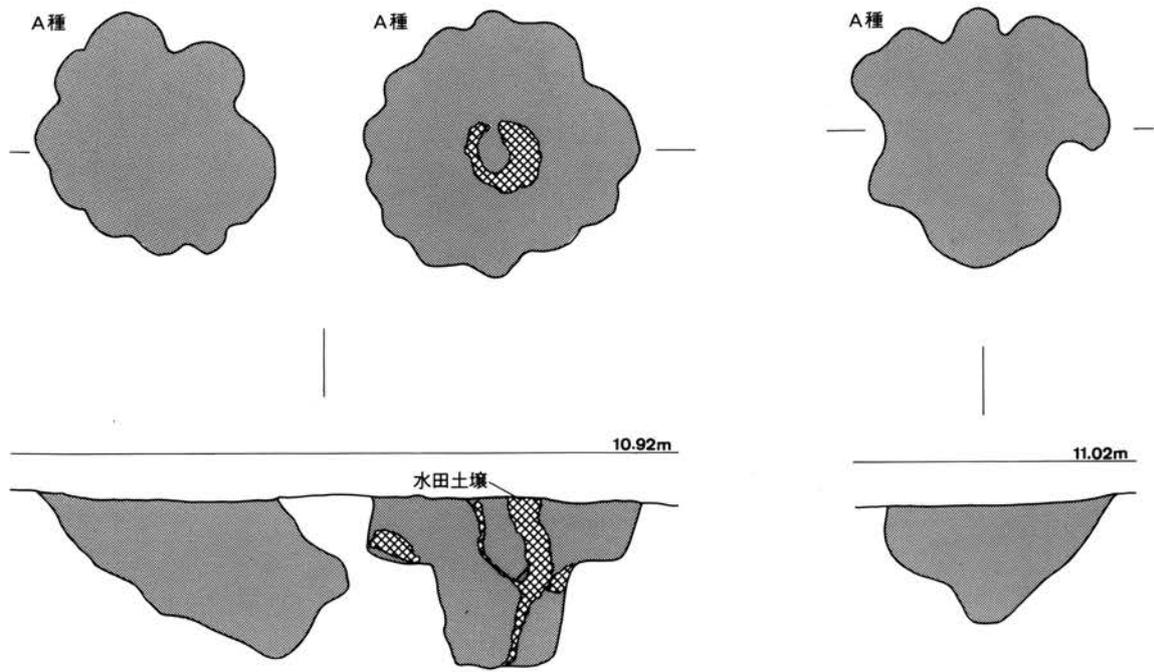


11.4m

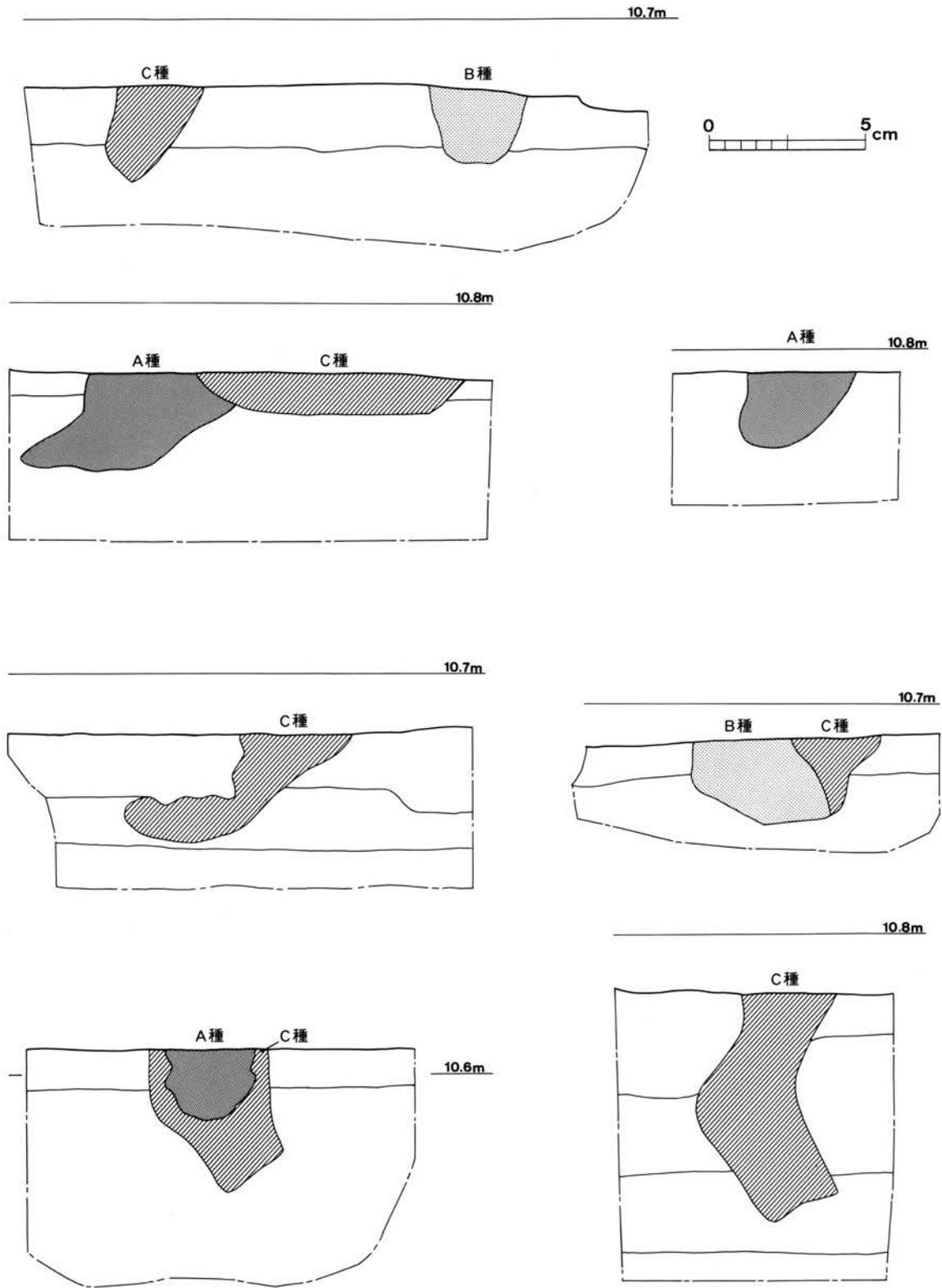


上層水田跡稻株痕分布状況図(3)

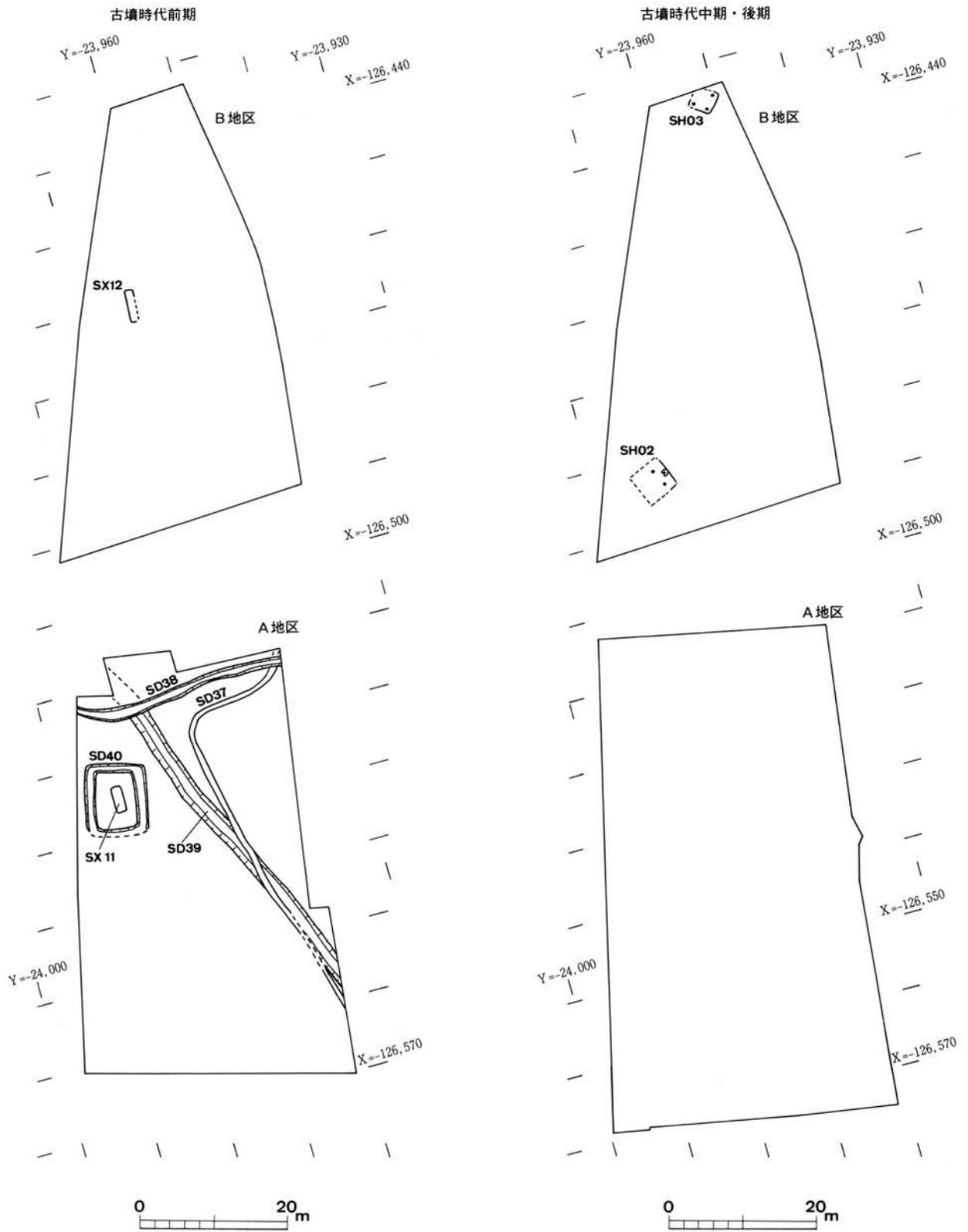
図版第八



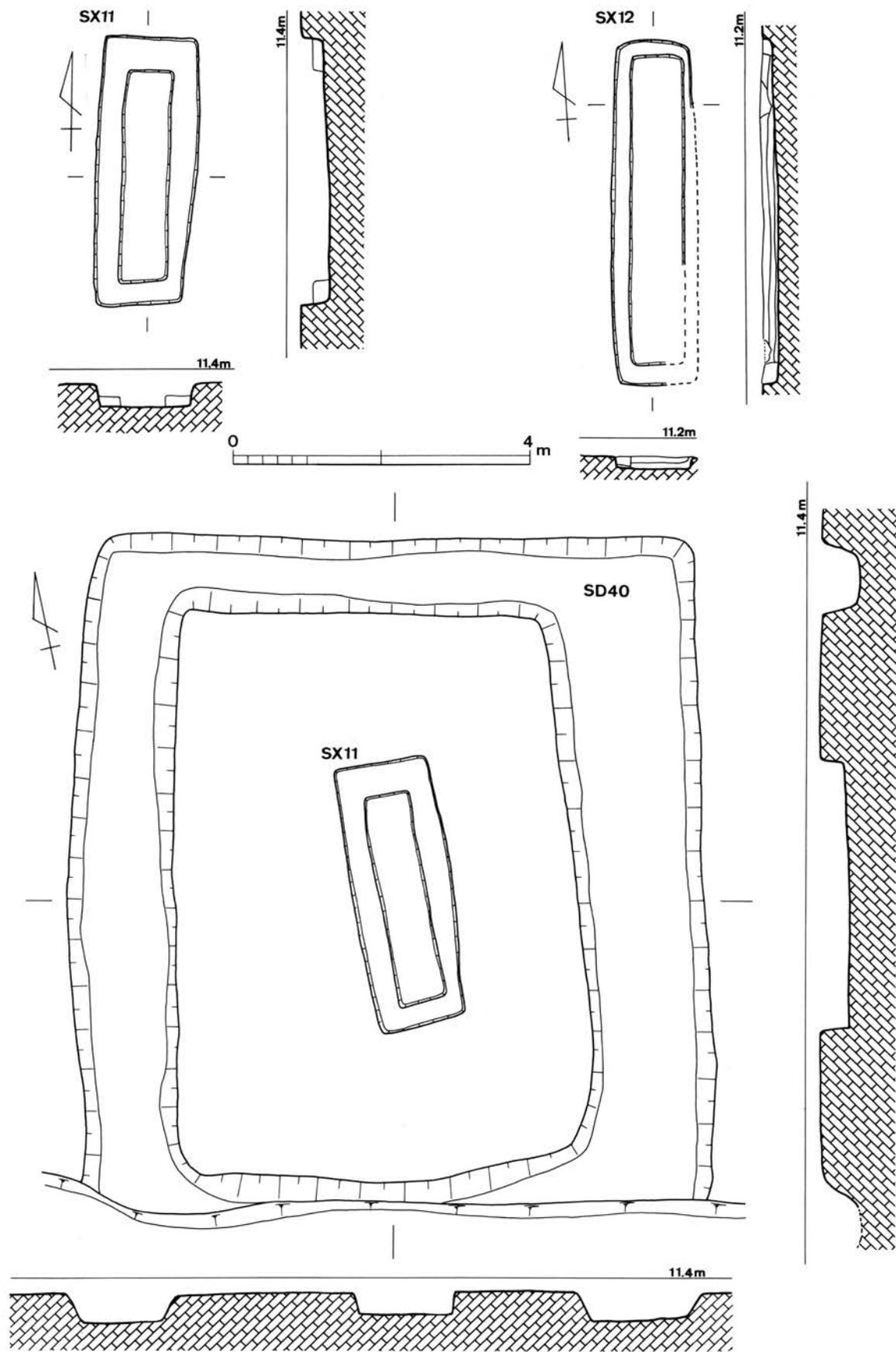
A地区上層水田跡稻株痕実測図



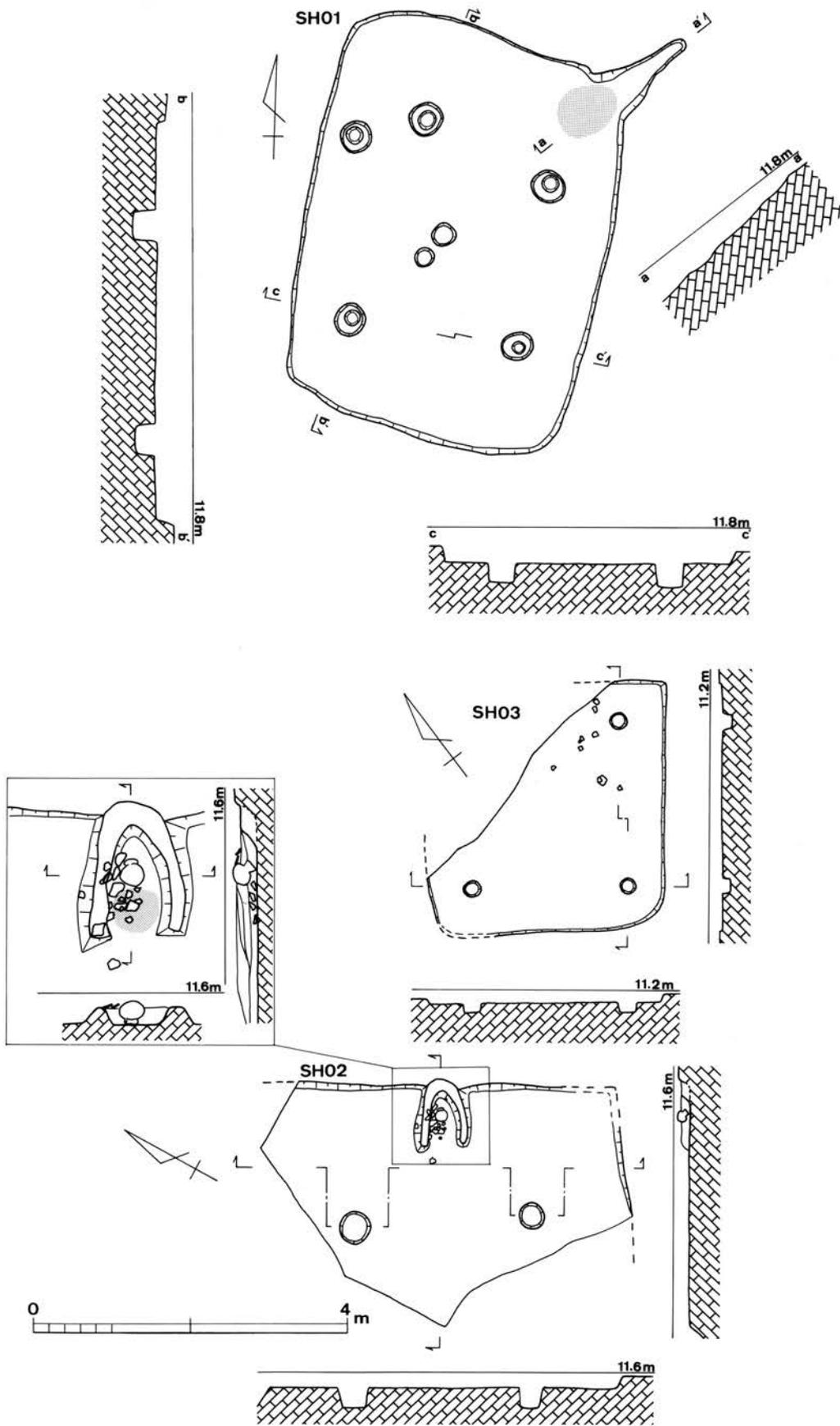
下層水田跡A種・B種稲株痕およびC種小穴断面図



遺構平面図(2)

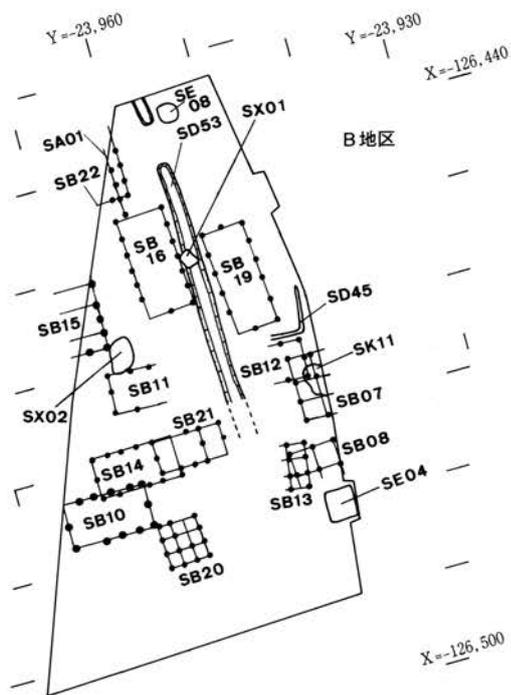


方形周溝墓・埋葬主体部実測図



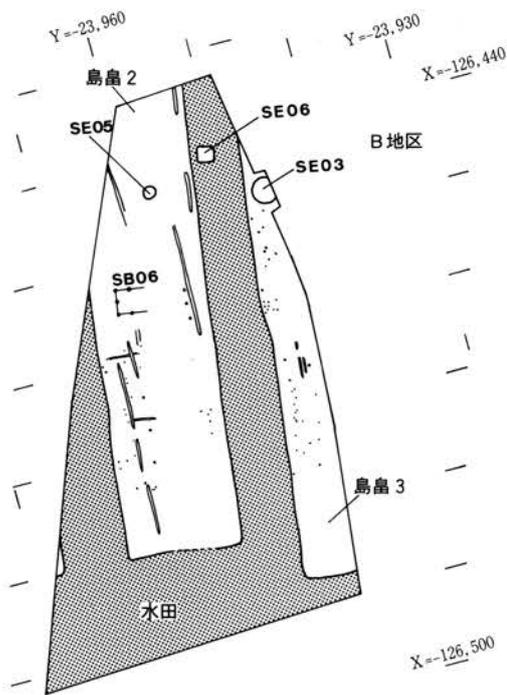
竖穴式住居跡実測図

奈良～平安時代

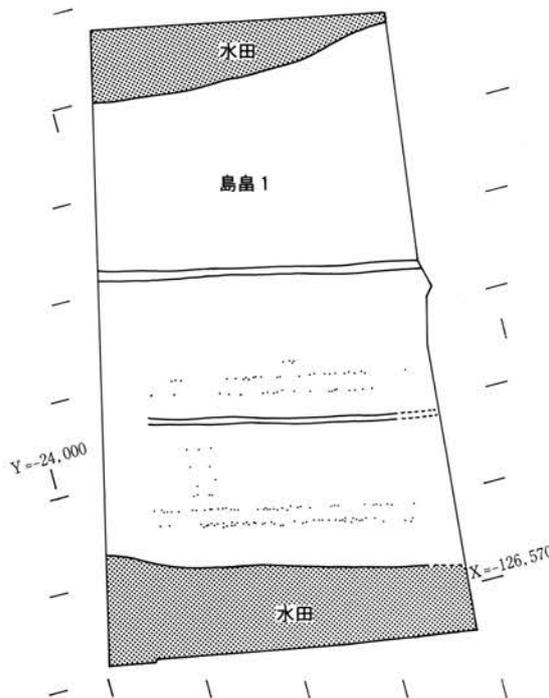
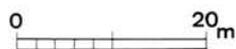
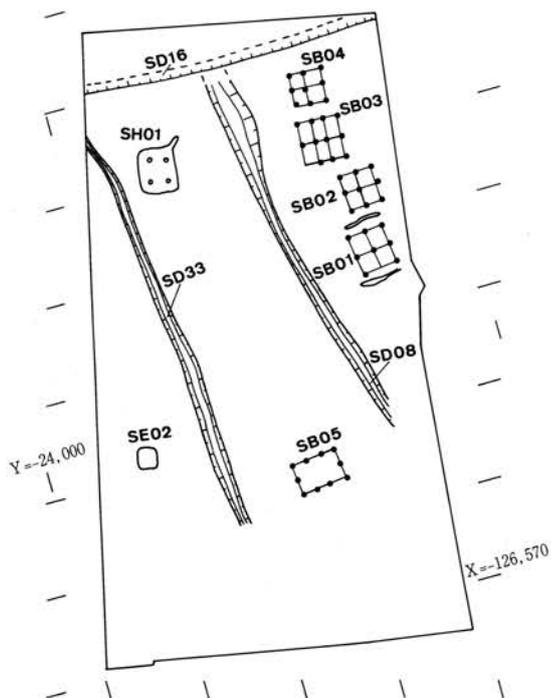


A地区

平安時代後期～鎌倉時代



A地区

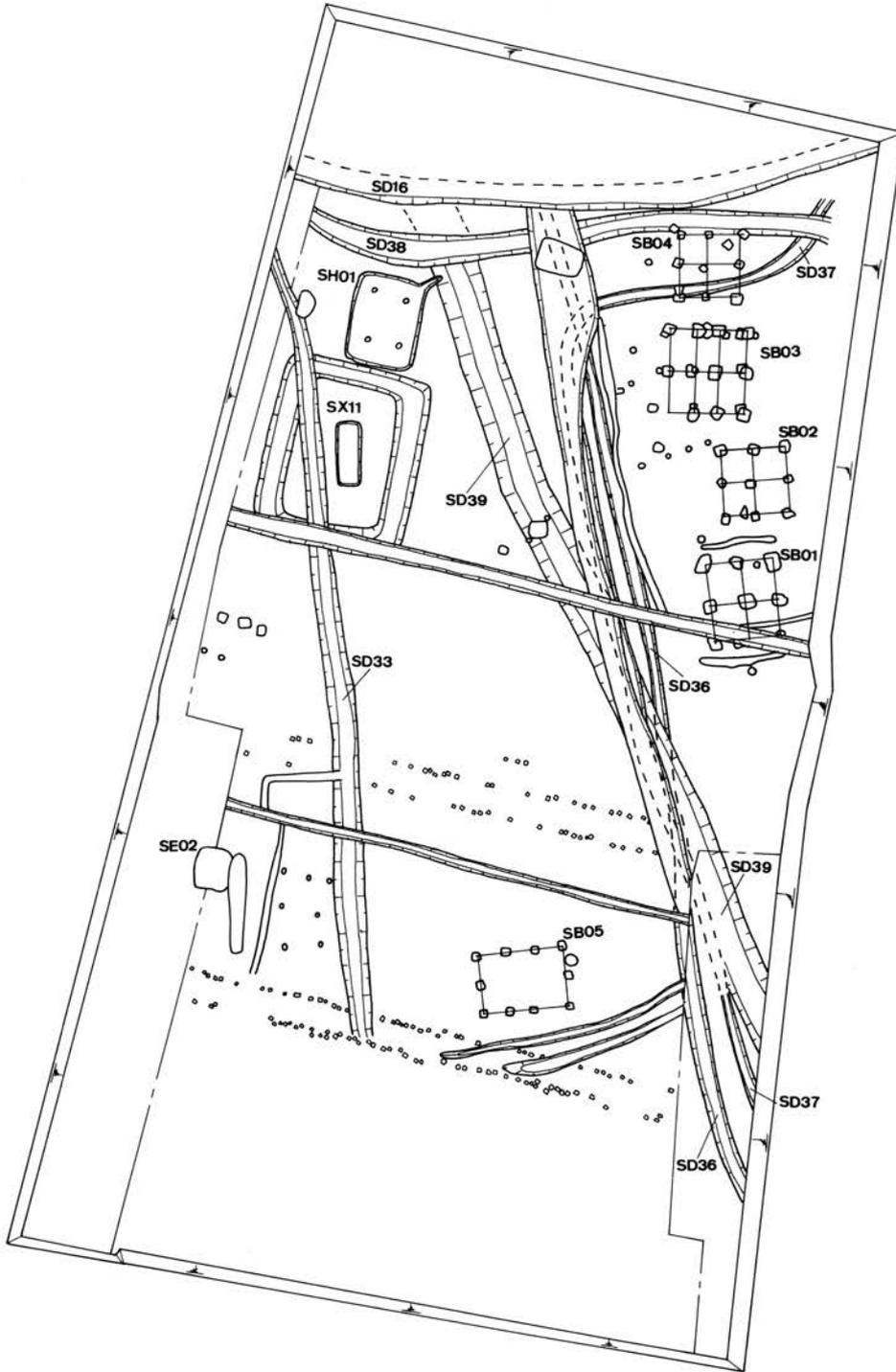


遺構平面図(3)

Y=-24,000

Y=-23,950

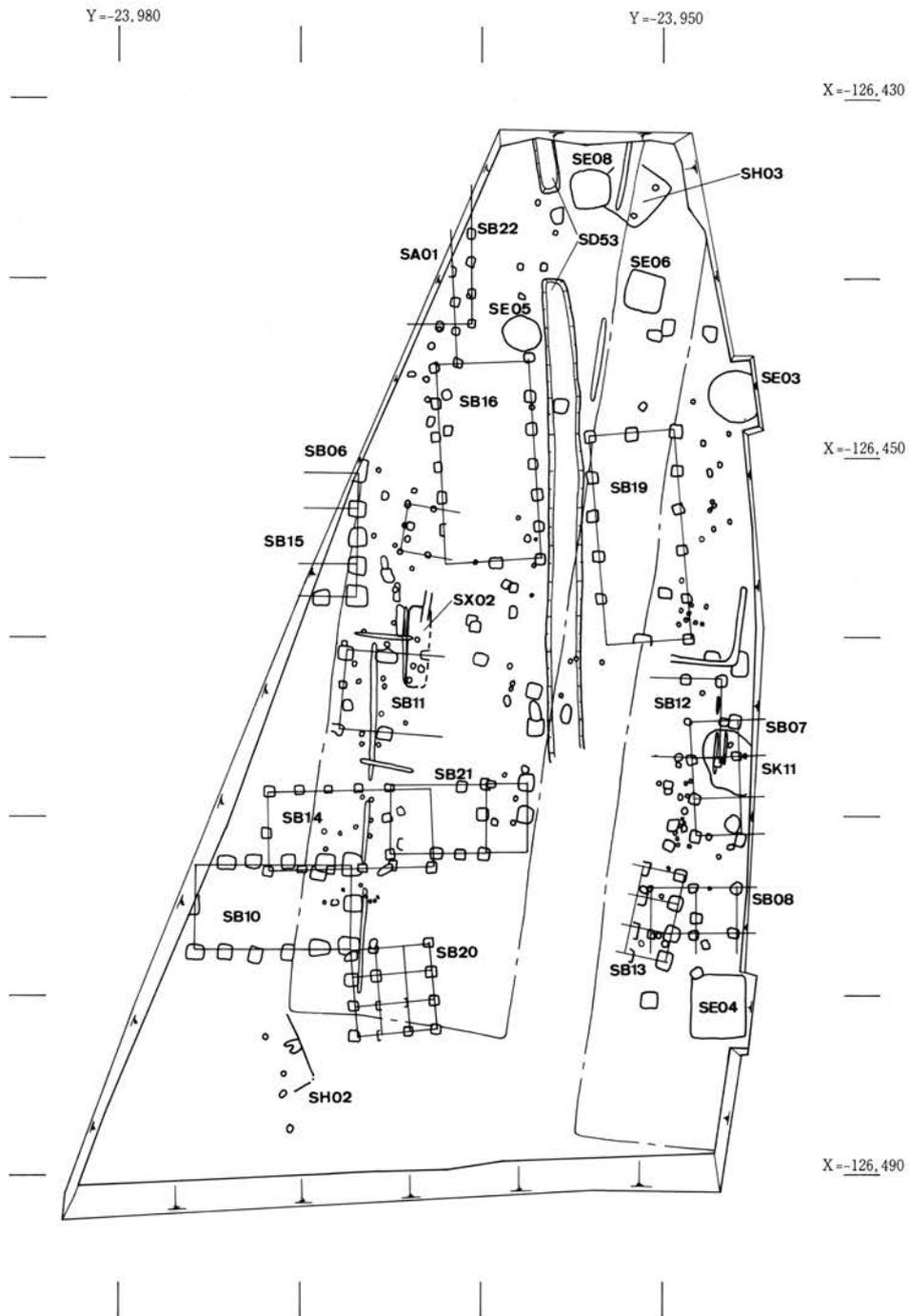
X=-126,500



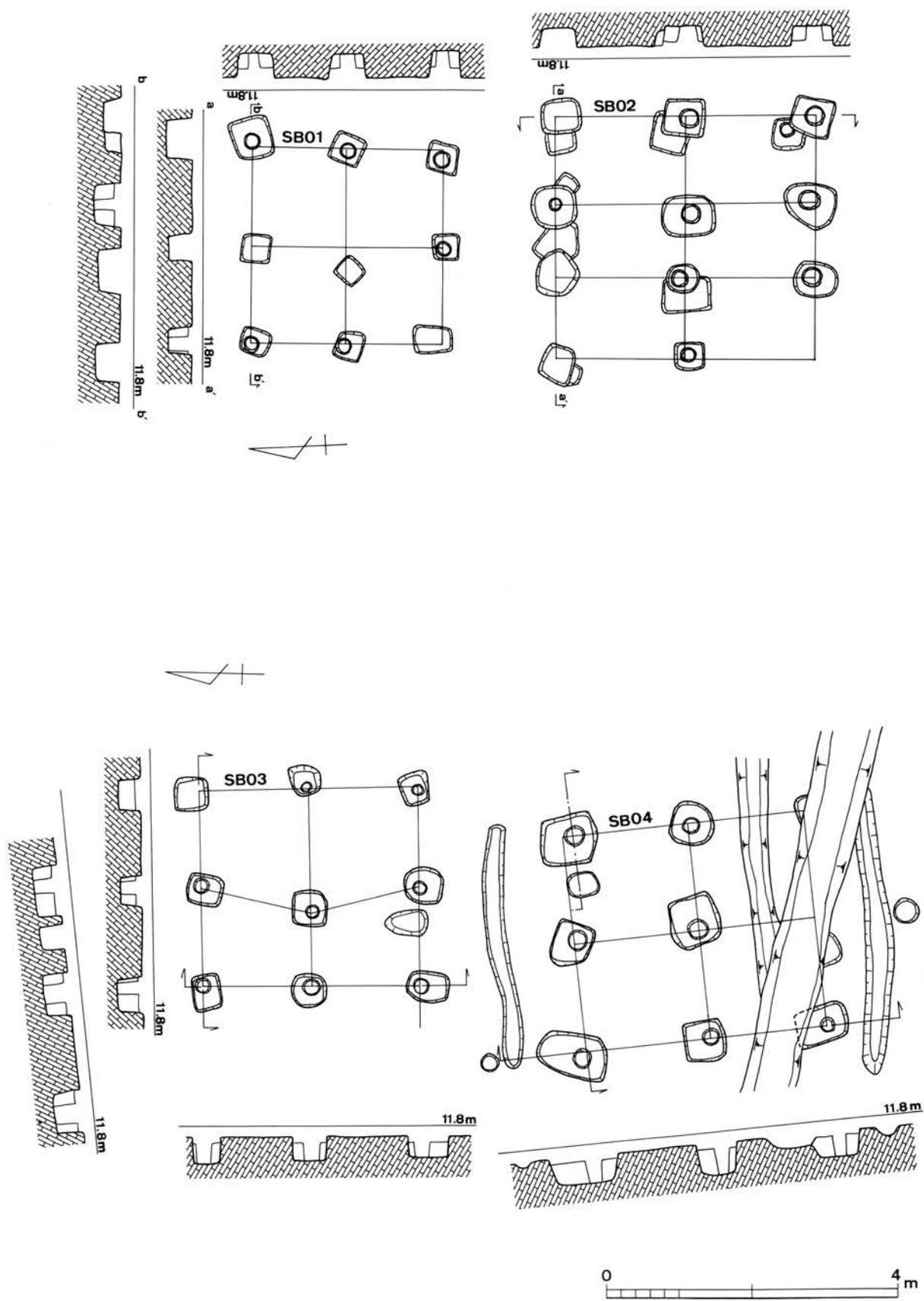
X=-126,550

X=-126,580

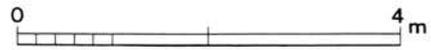
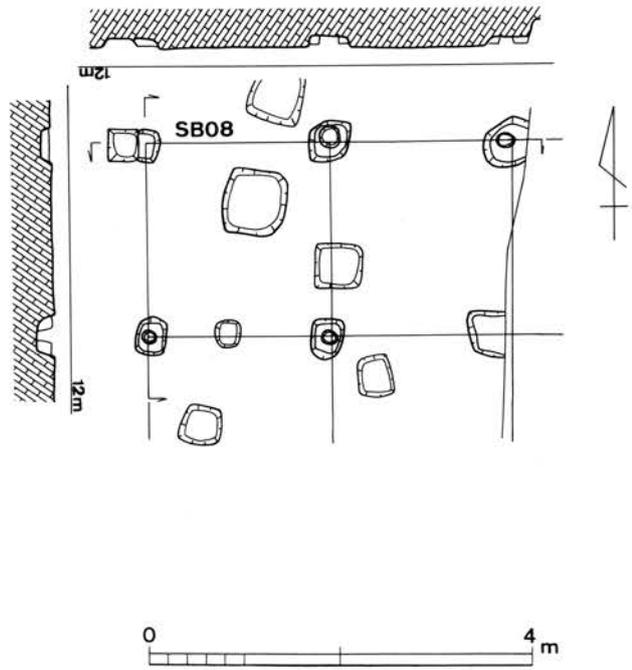
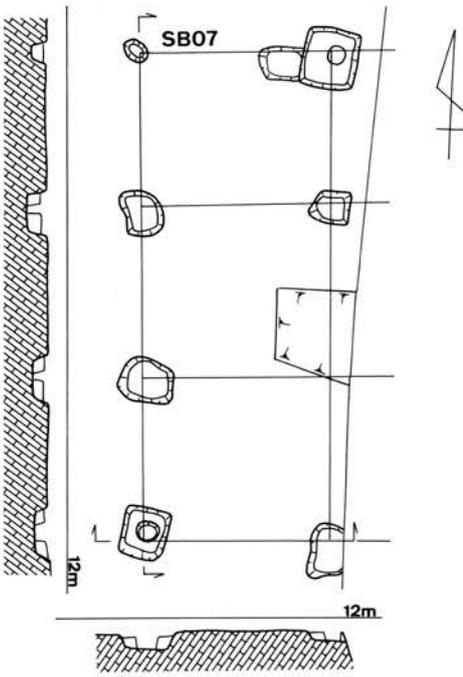
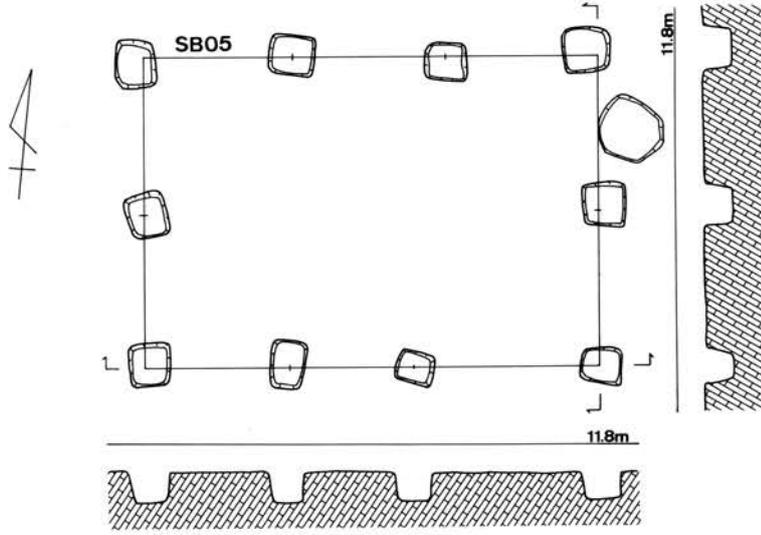
A地区検出遺構平面図



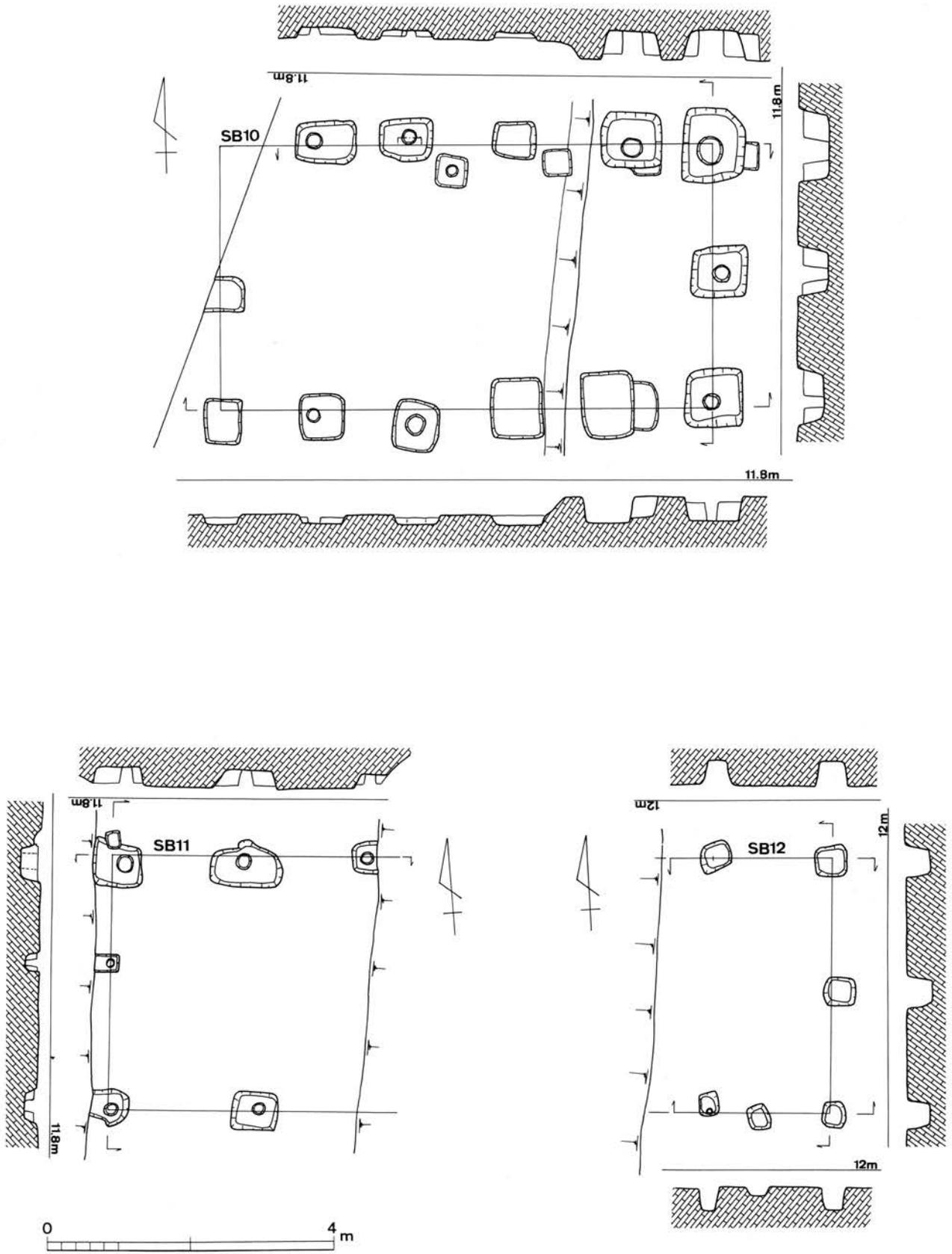
B地区検出遺構平面図



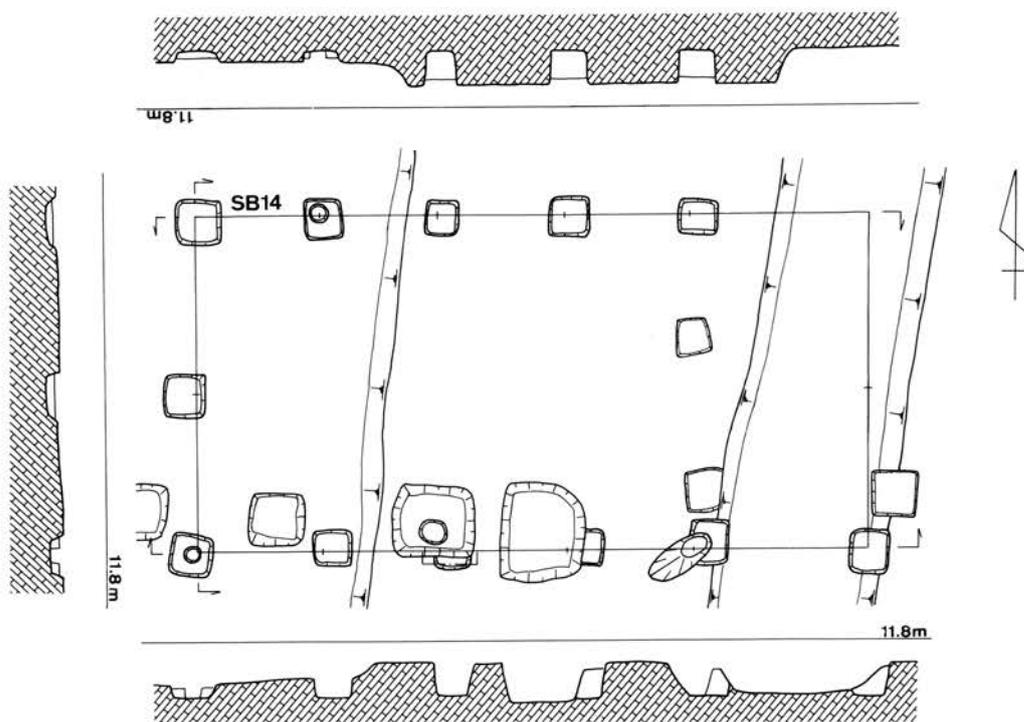
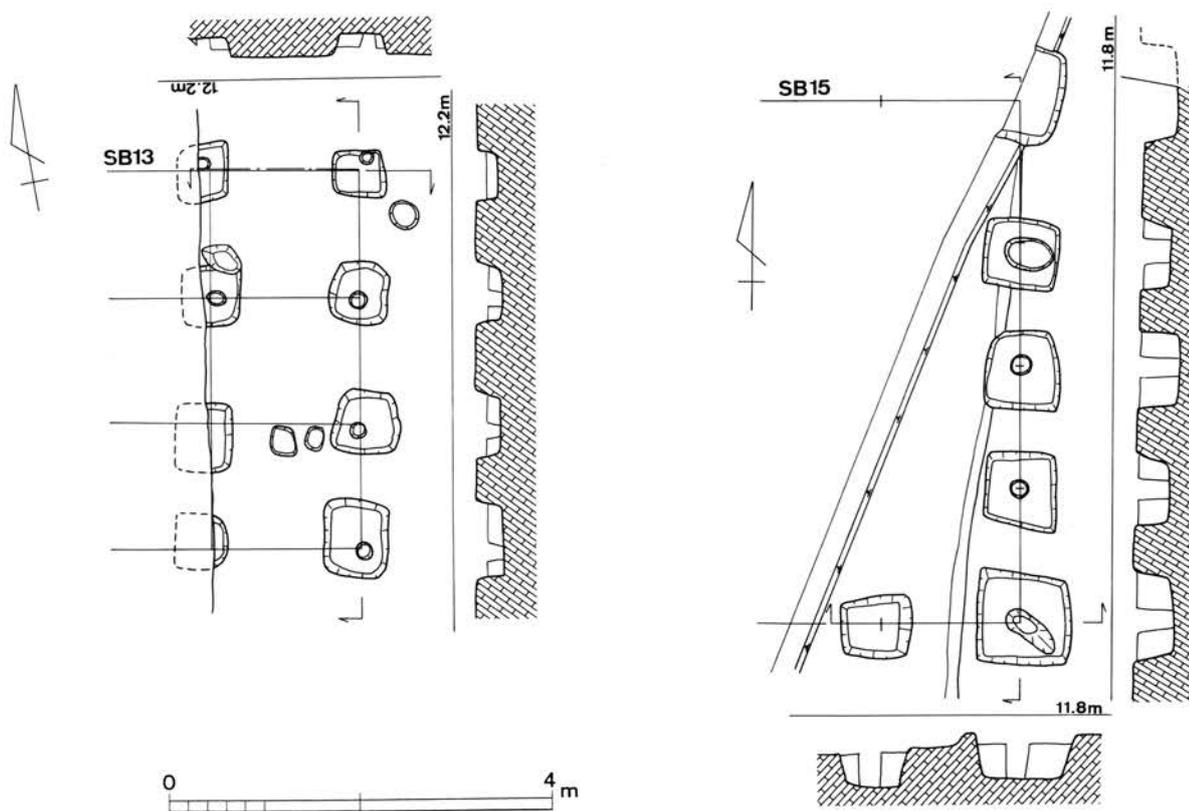
掘立柱建物跡実測図(1)



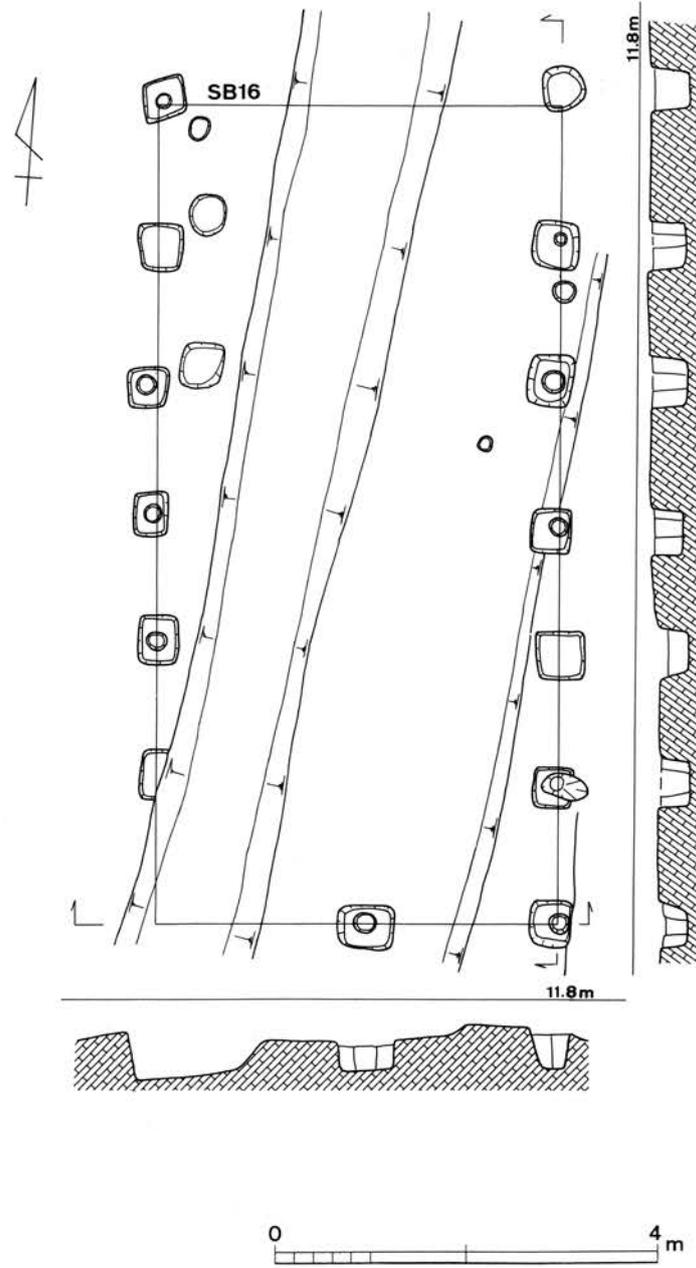
掘立柱建物跡実測図(2)



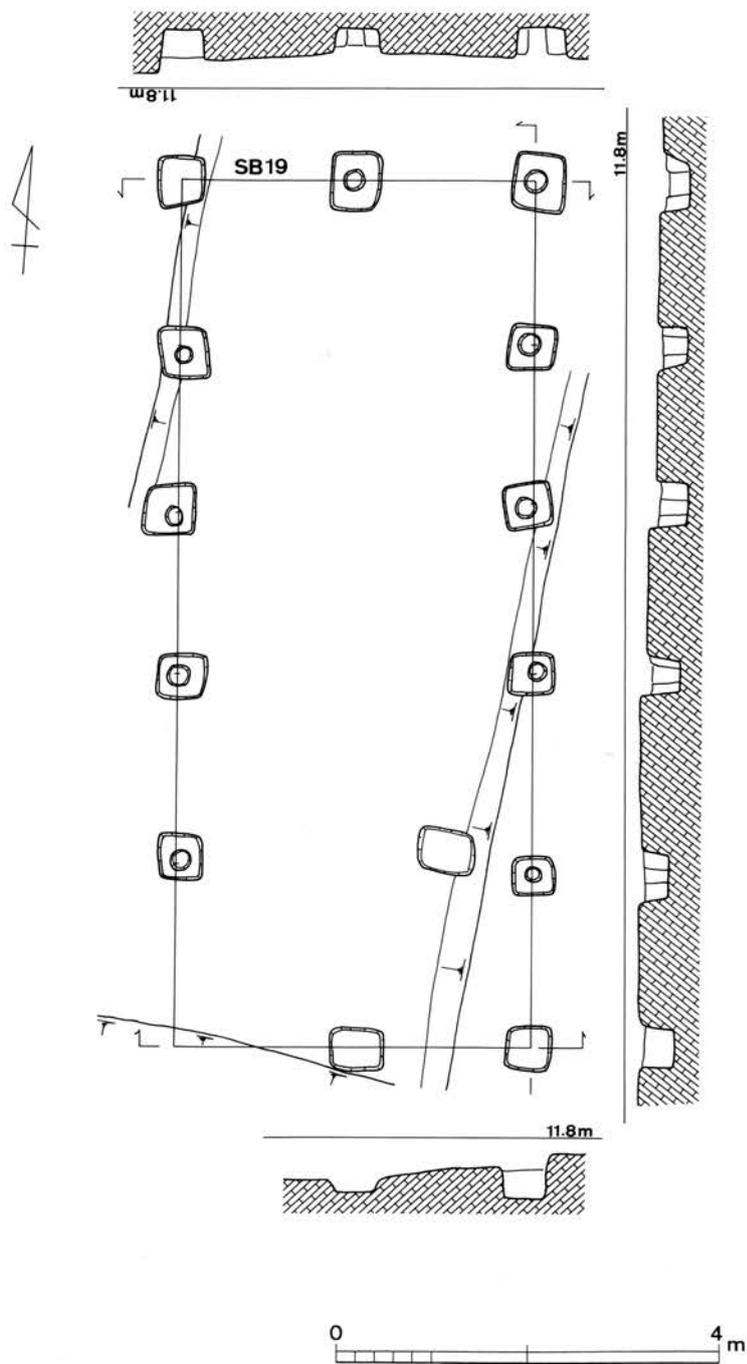
掘立柱建物跡実測図(3)



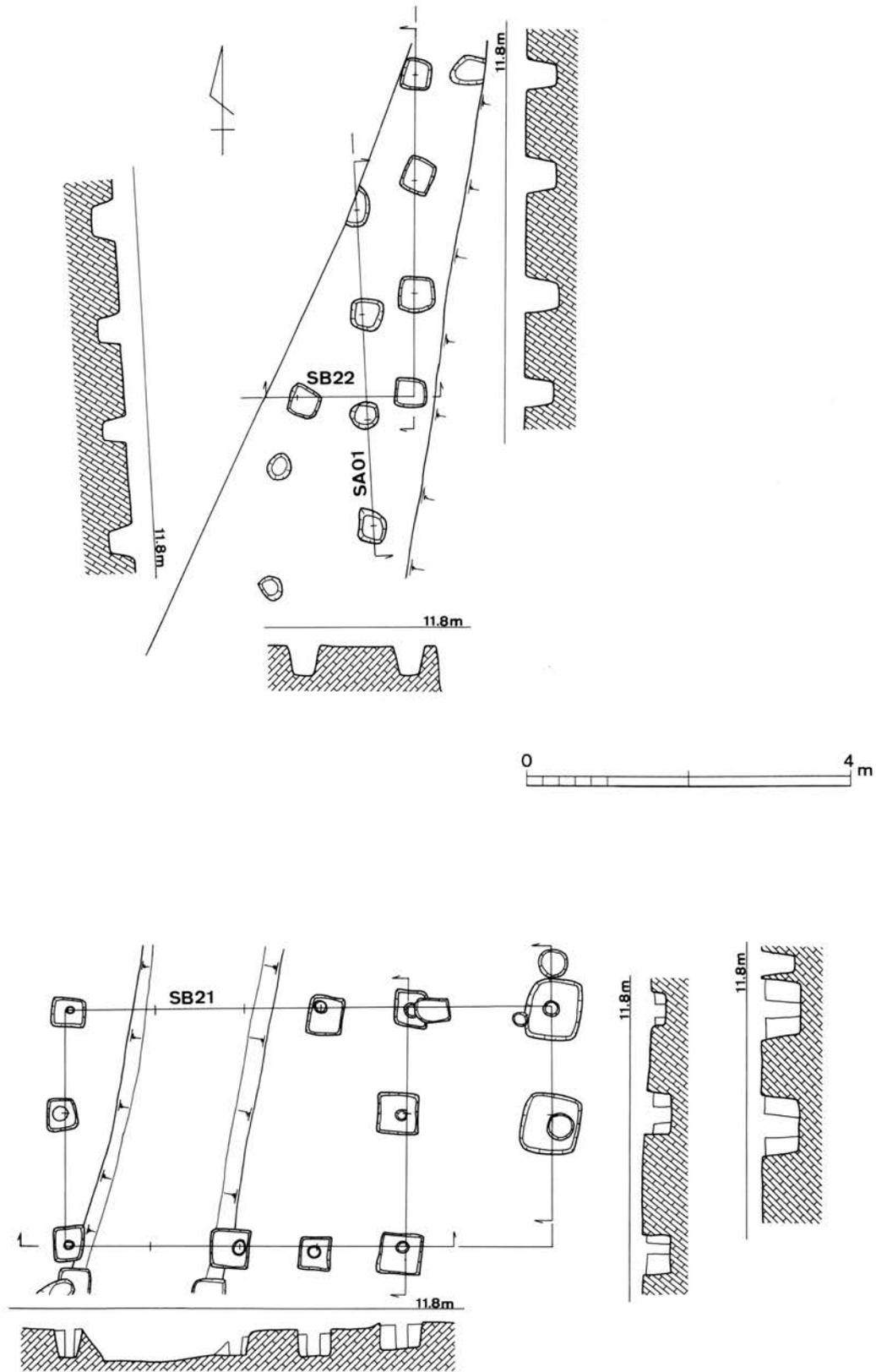
掘立柱建物跡実測図(4)



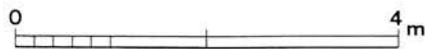
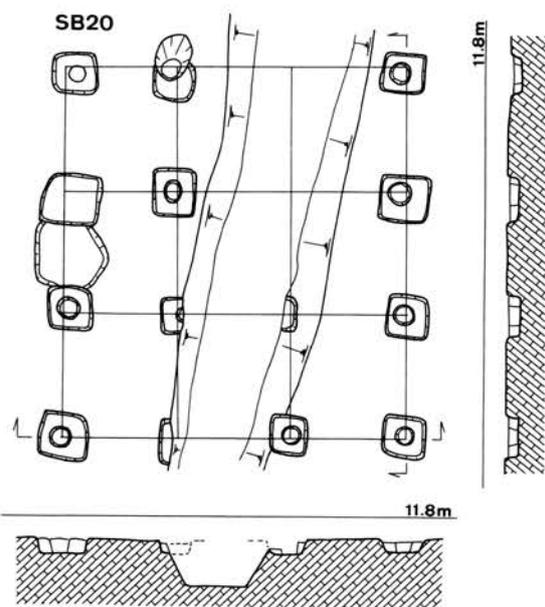
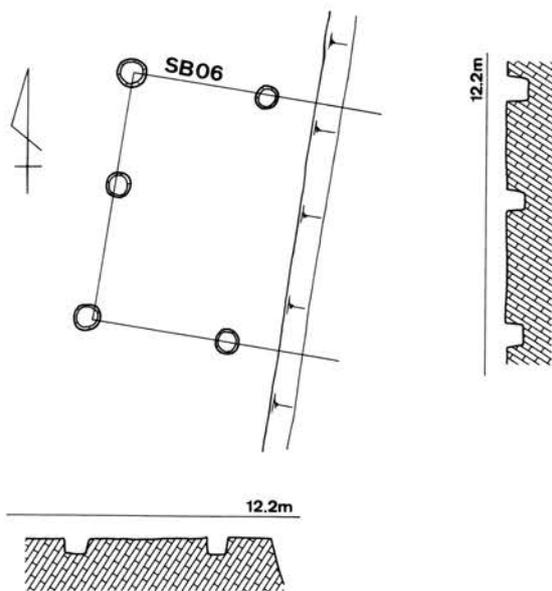
掘立柱建物跡実測図(5)



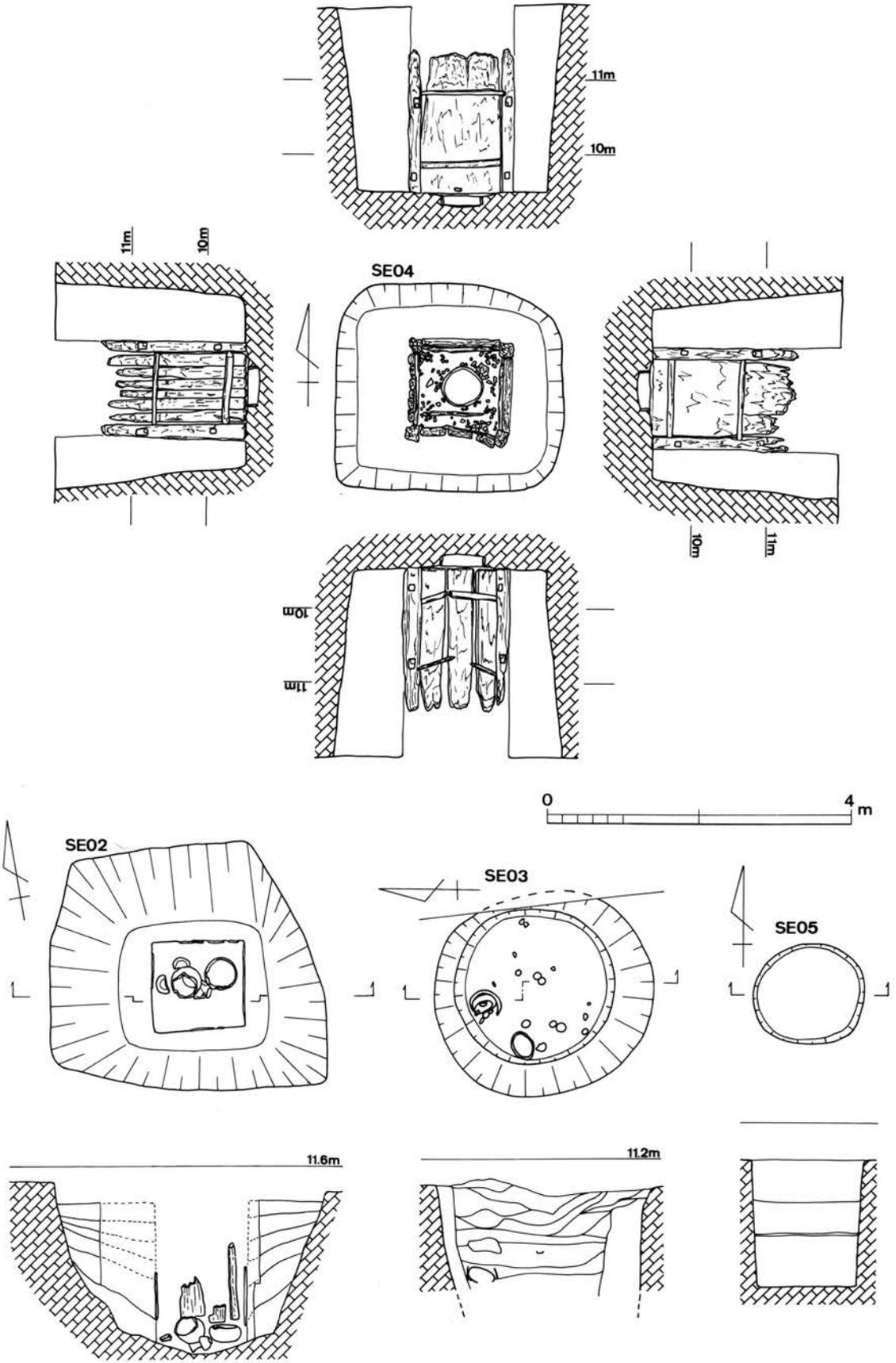
掘立柱建物跡実測図(6)



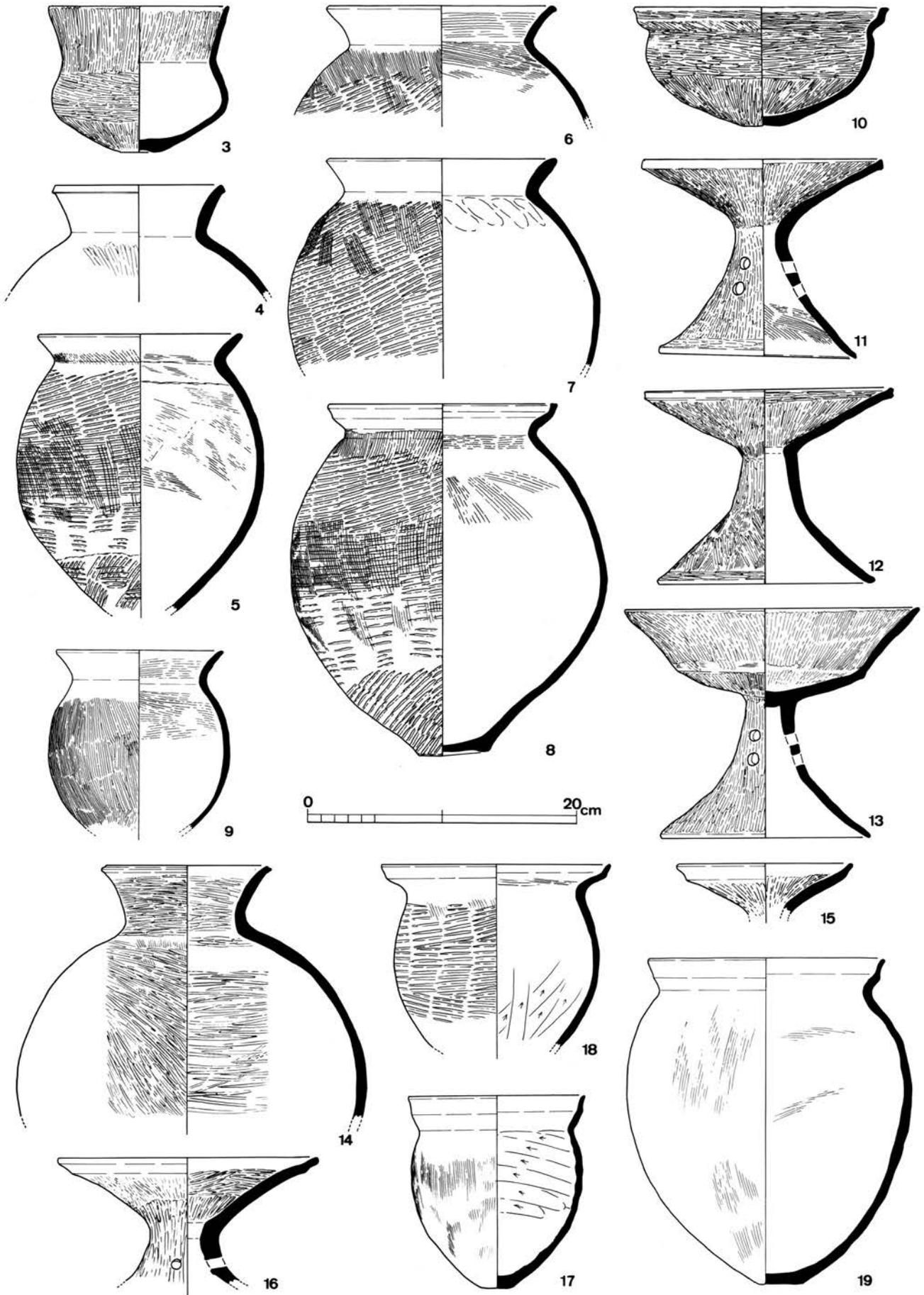
掘立柱建物跡実測図(7)



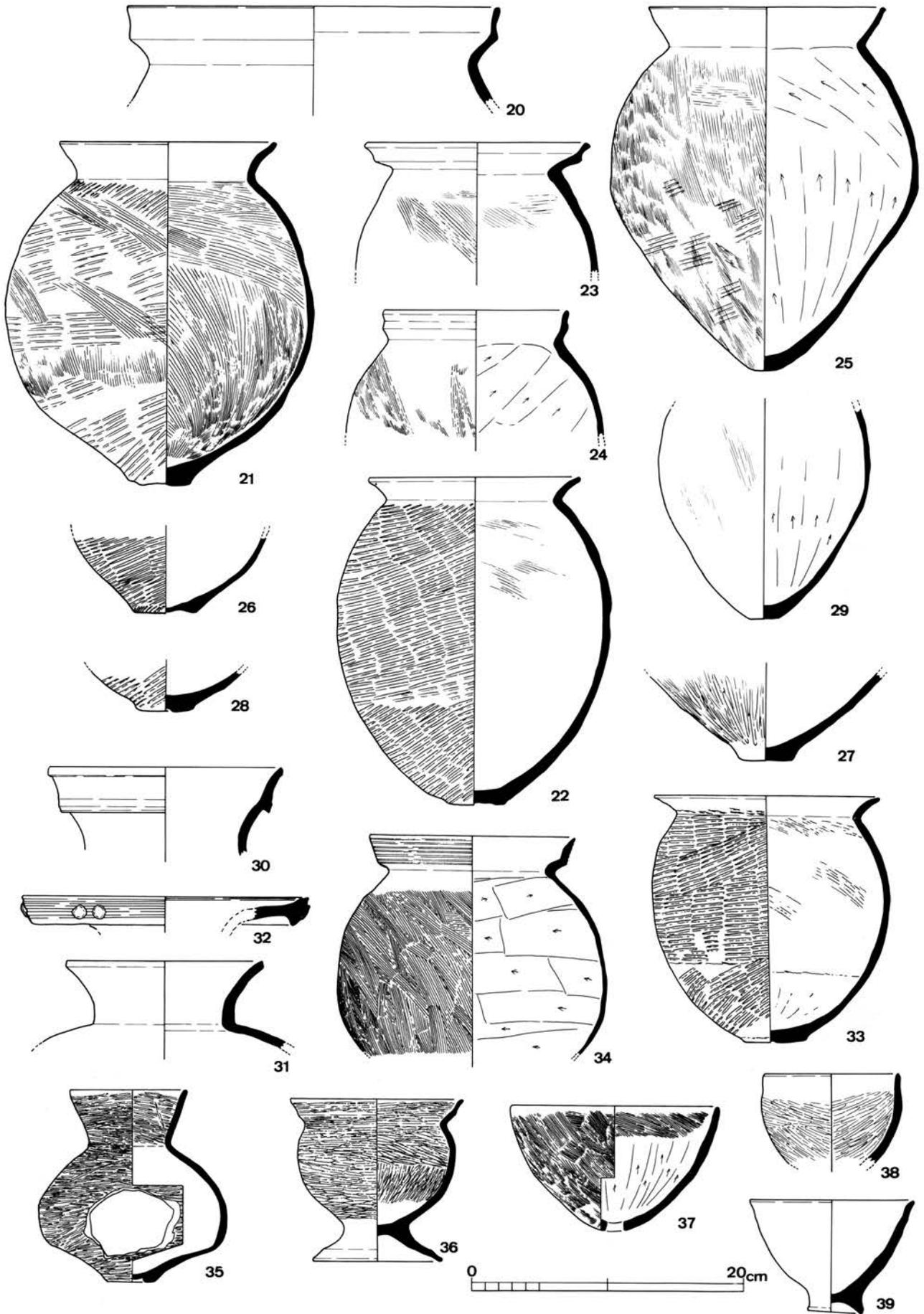
掘立柱建物跡実測図(8)



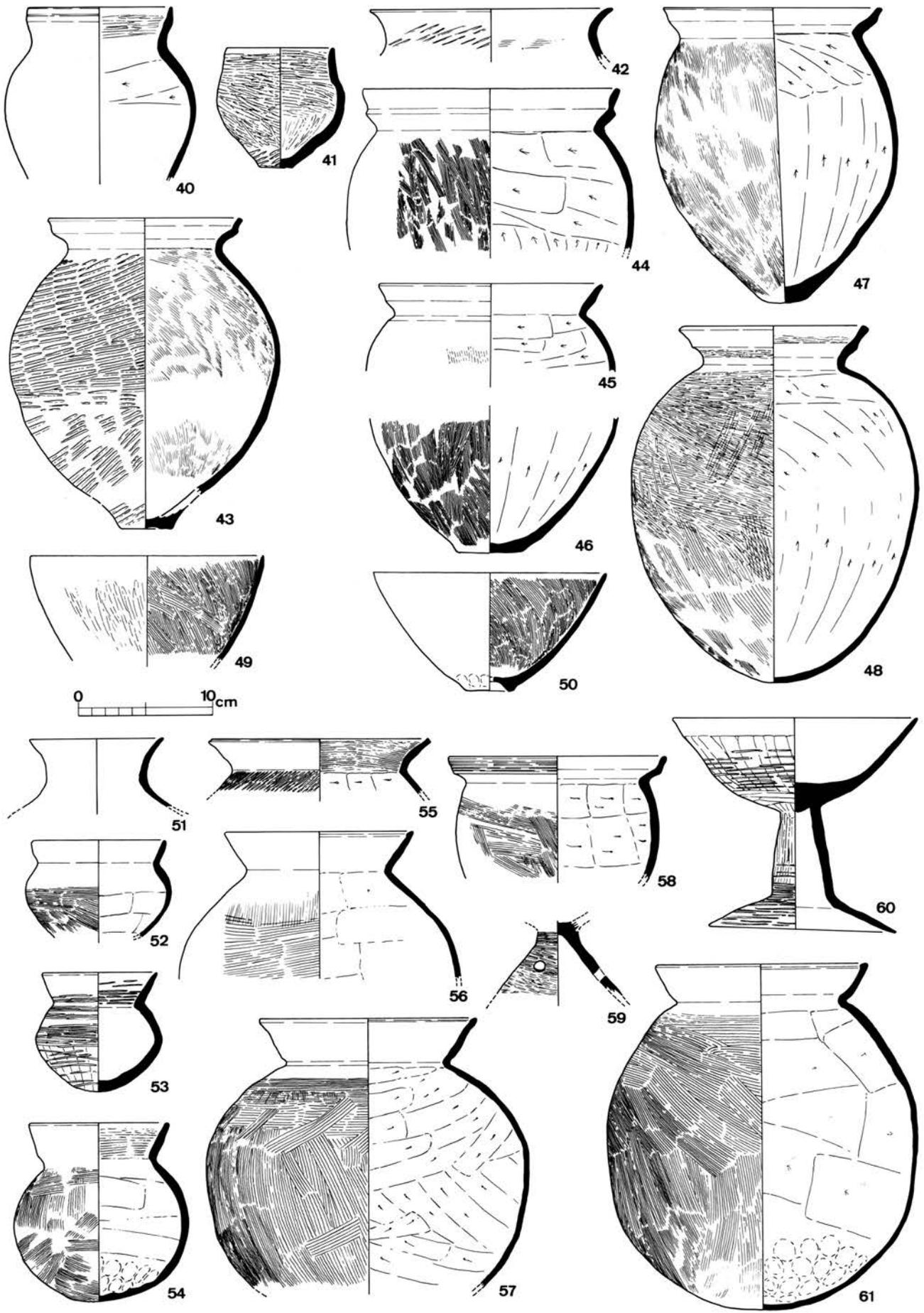
井戸実測図



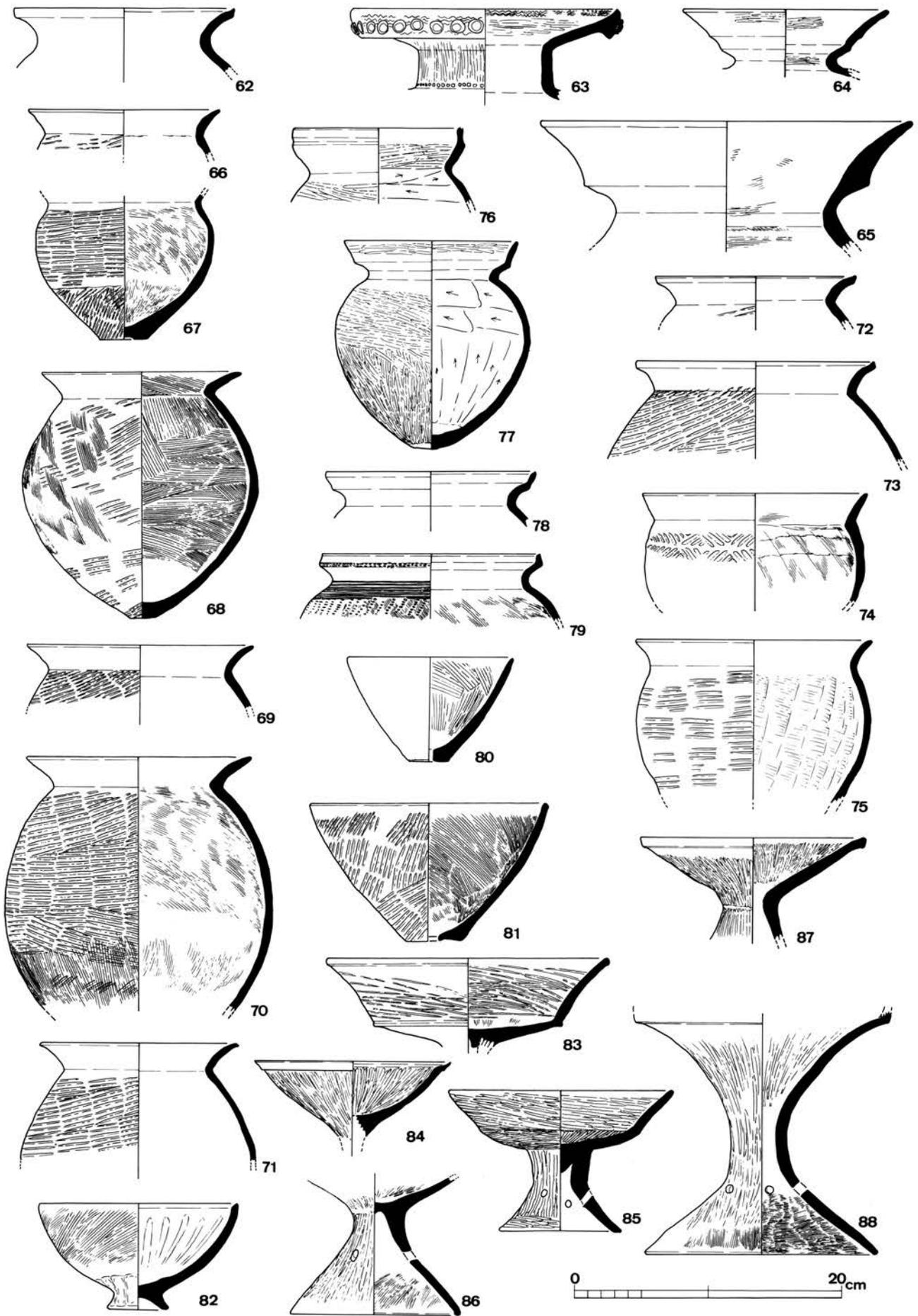
土器实测图(1)



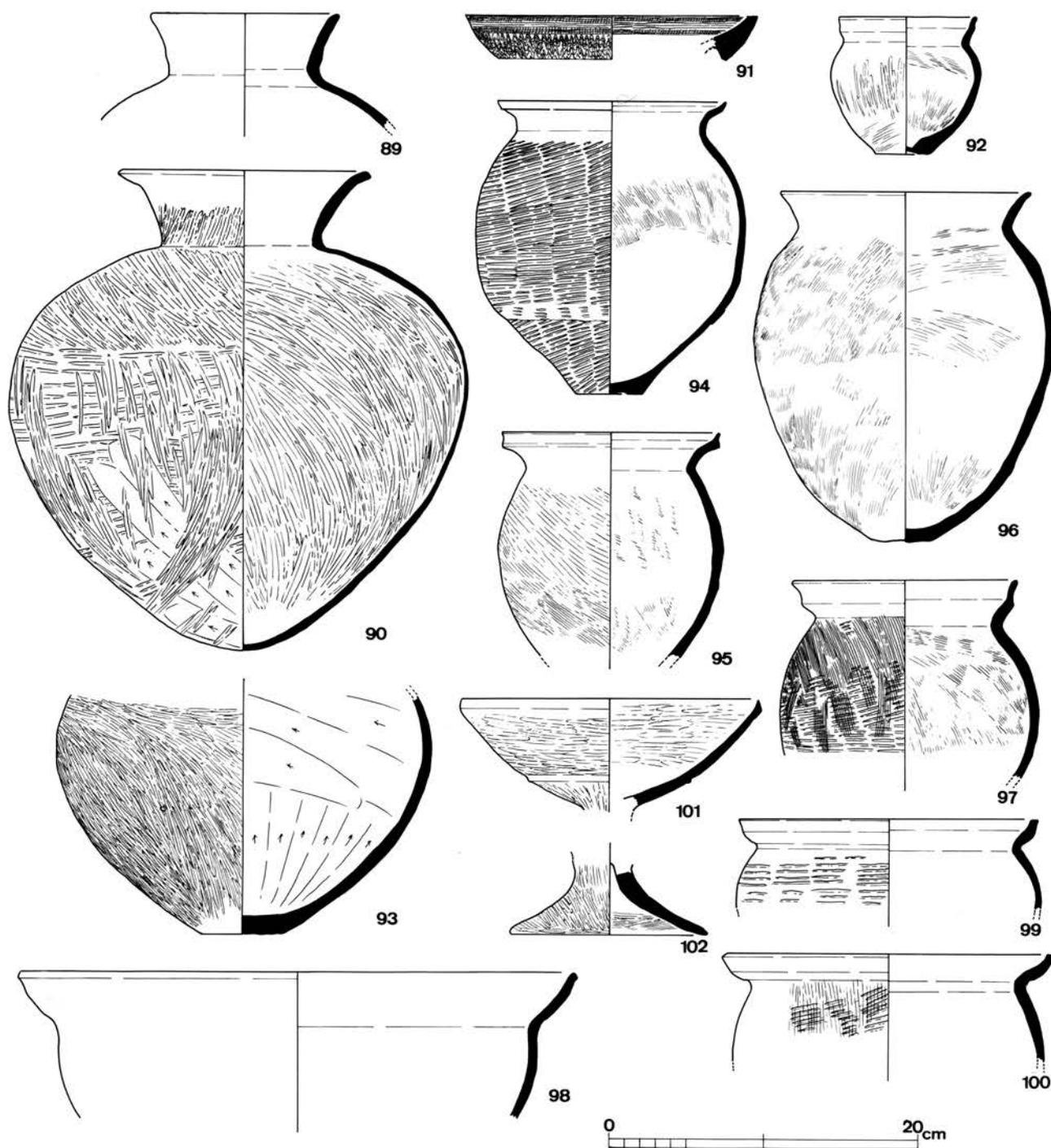
土器实测图(2)



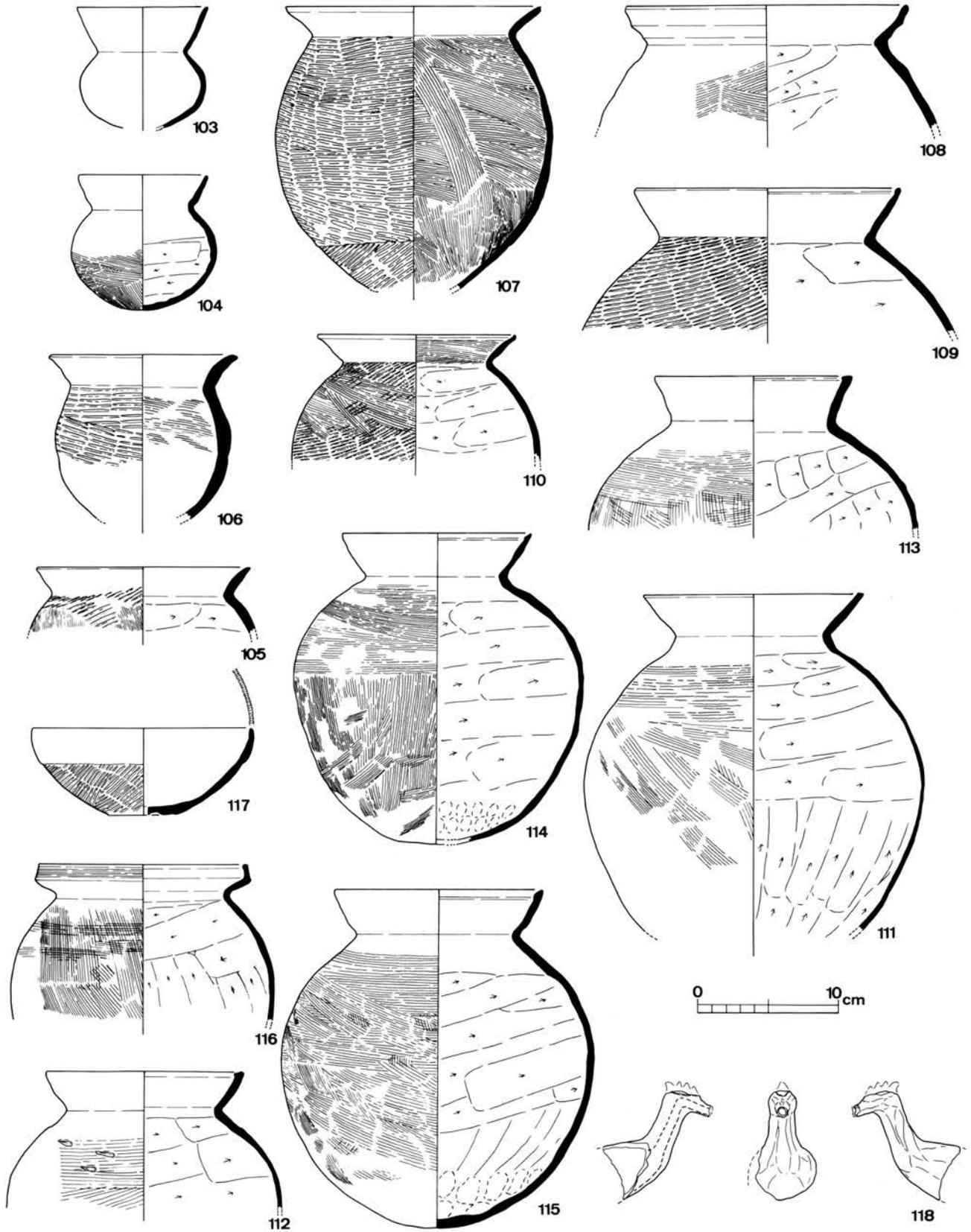
土器实测图(3)



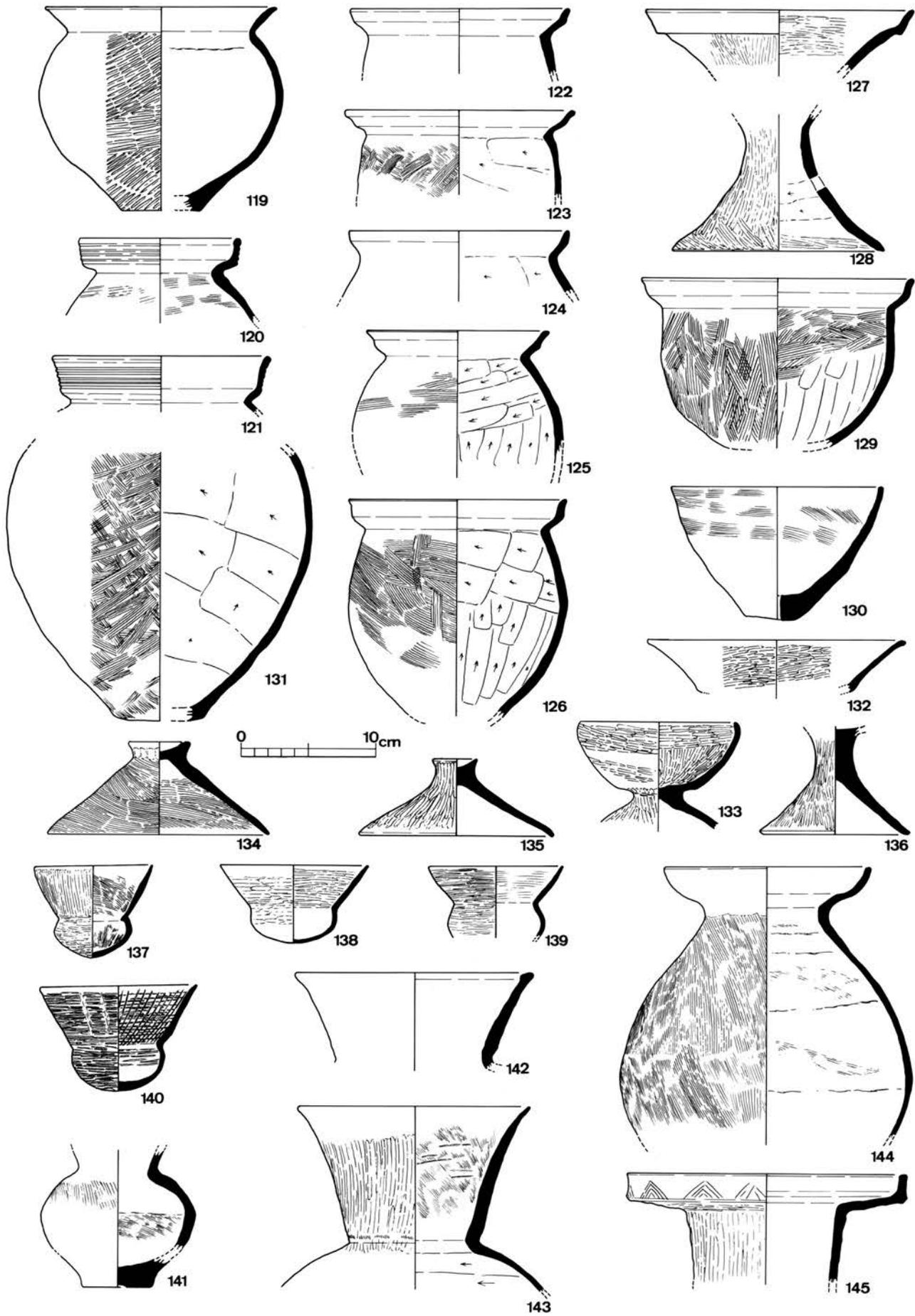
土器实测图(4)



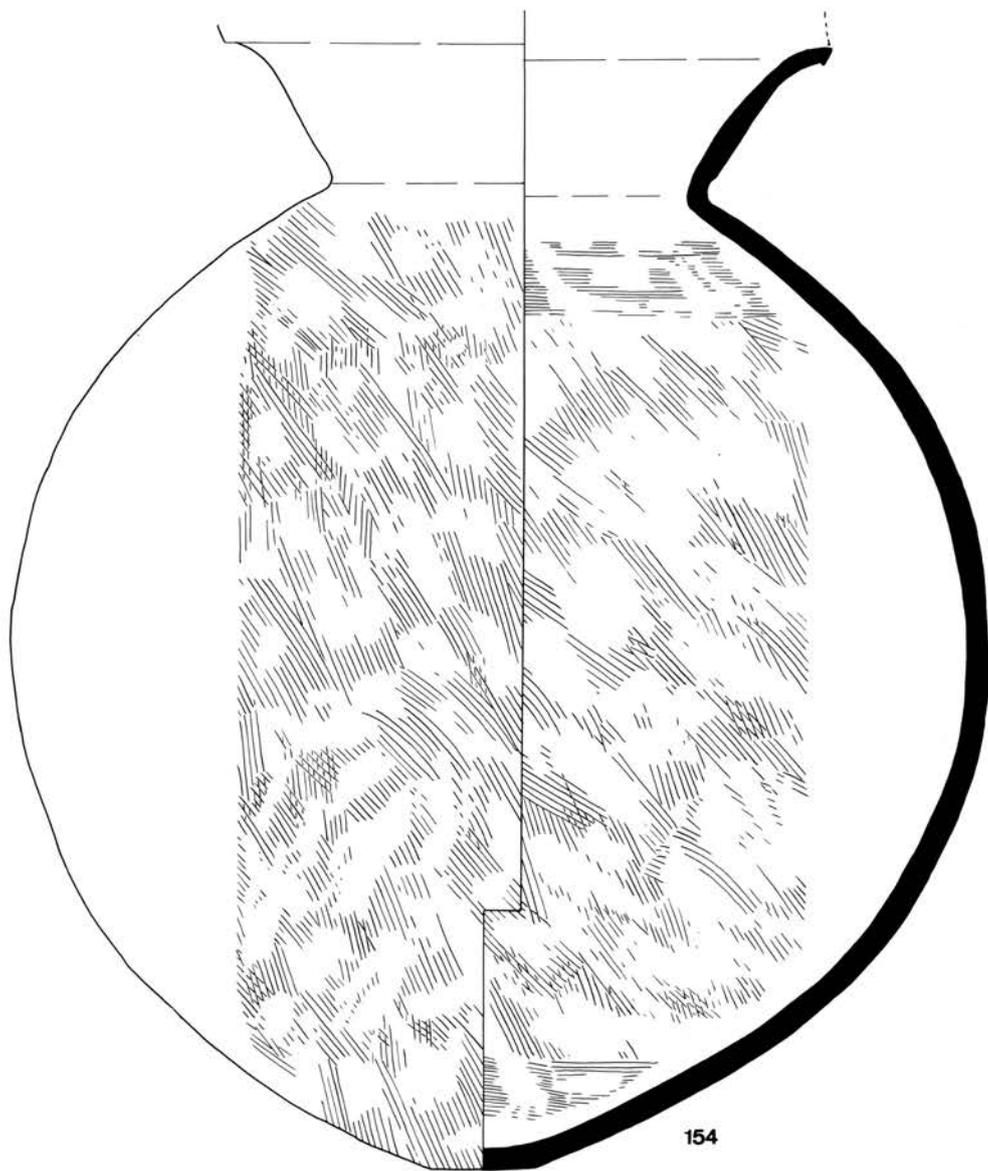
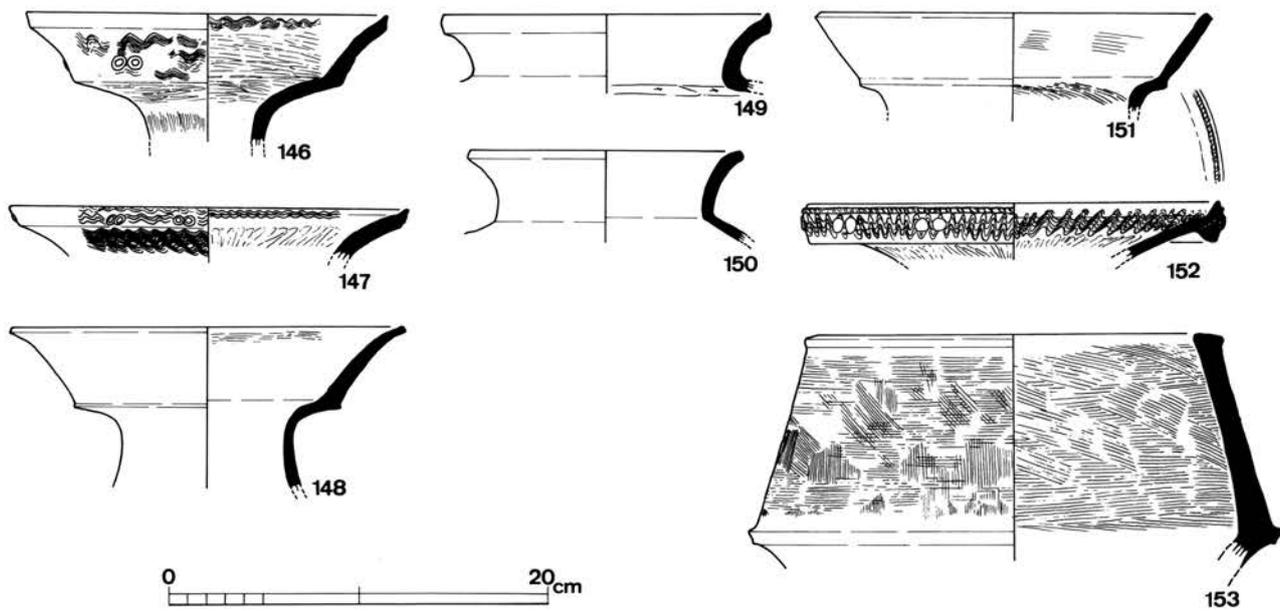
土器实测图(5)



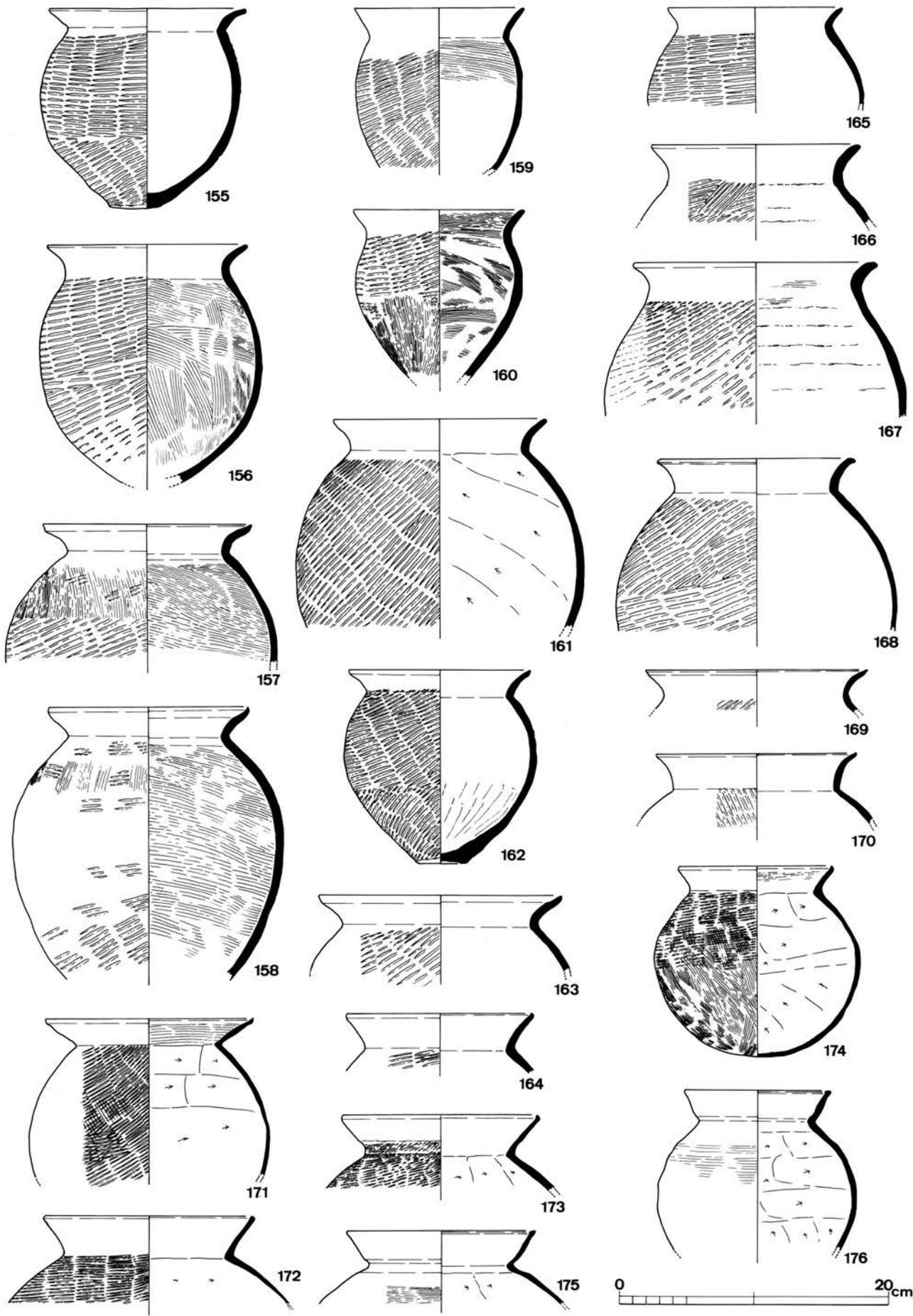
土器实测图(6)



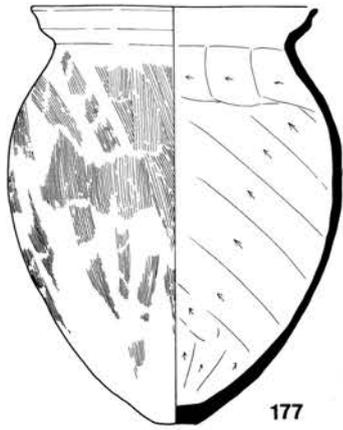
土器実測図(7)



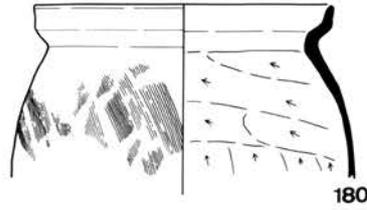
土器实测图(8)



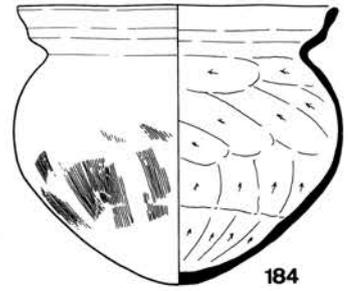
土器实测图(9)



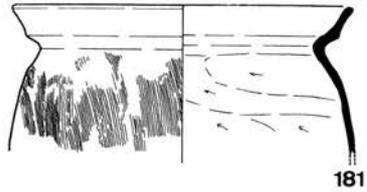
177



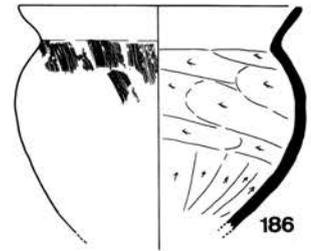
180



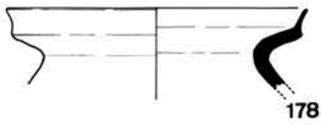
184



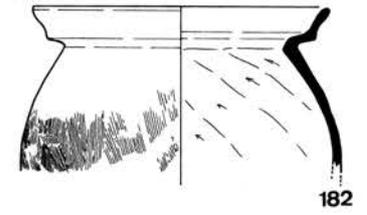
181



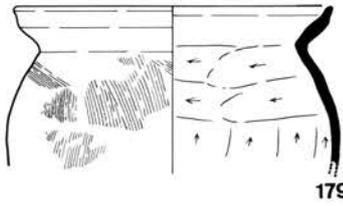
186



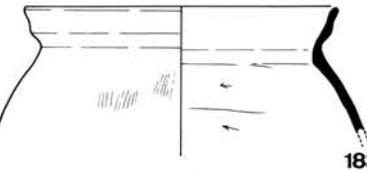
178



182



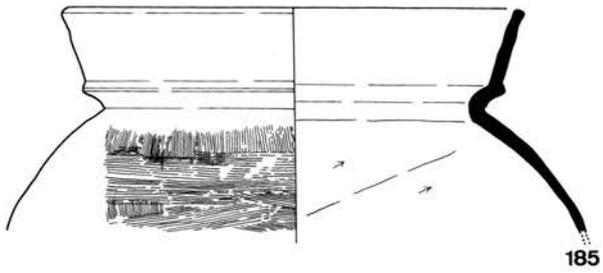
179



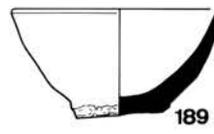
183



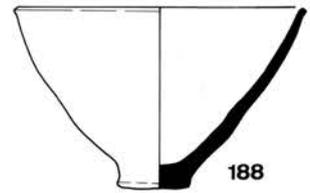
187



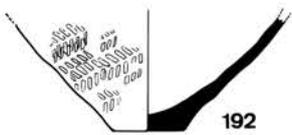
185



189



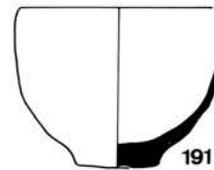
188



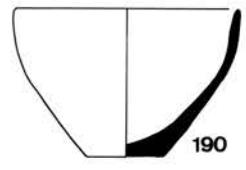
192



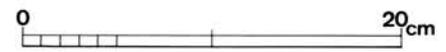
193



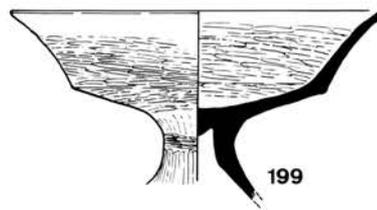
191



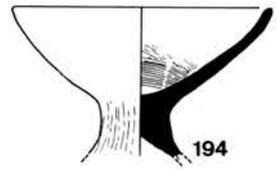
190



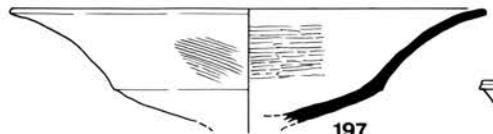
196



199



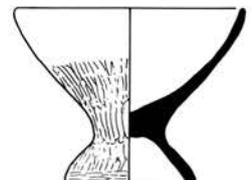
194



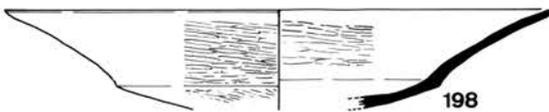
197



200

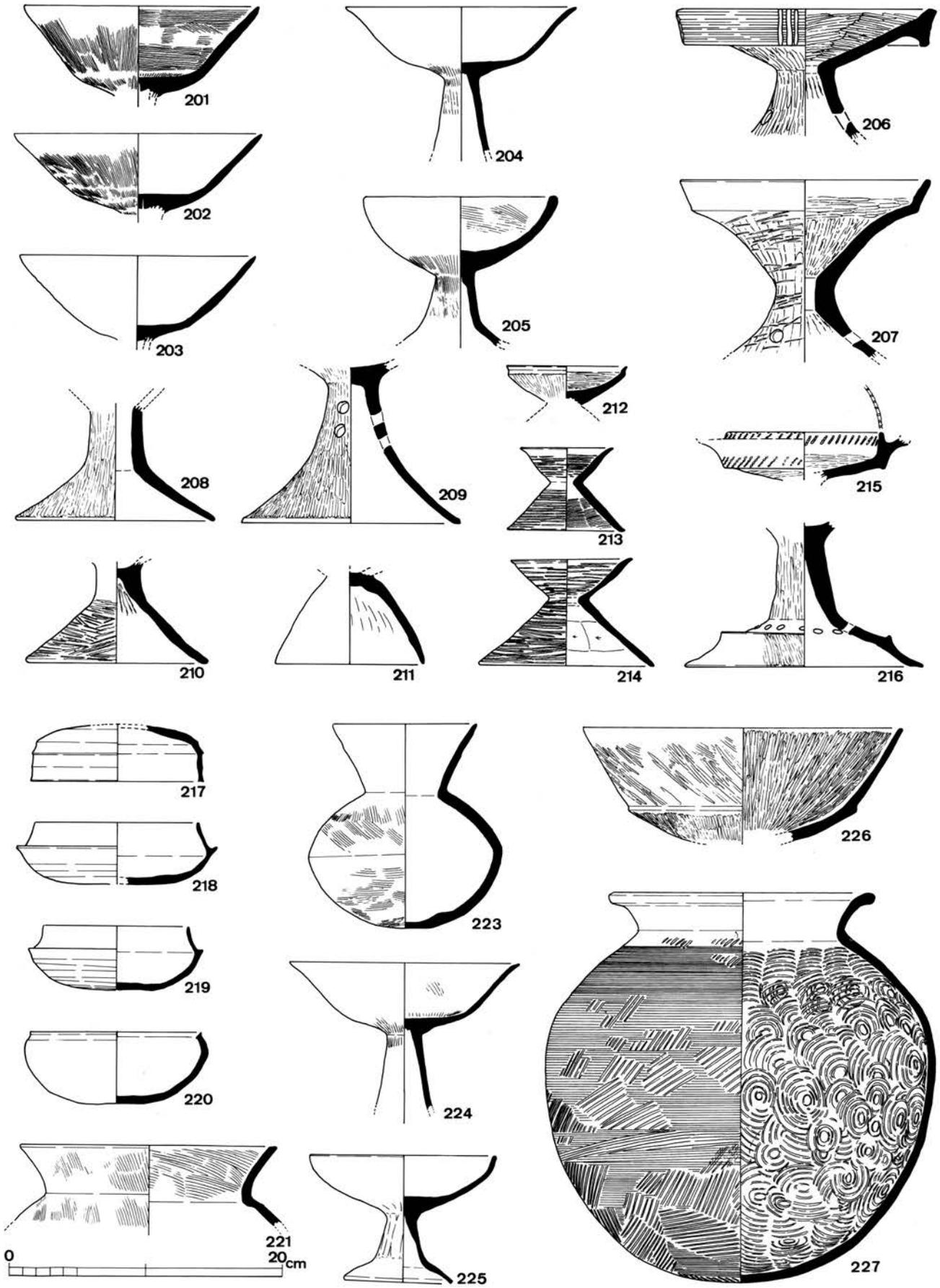


195

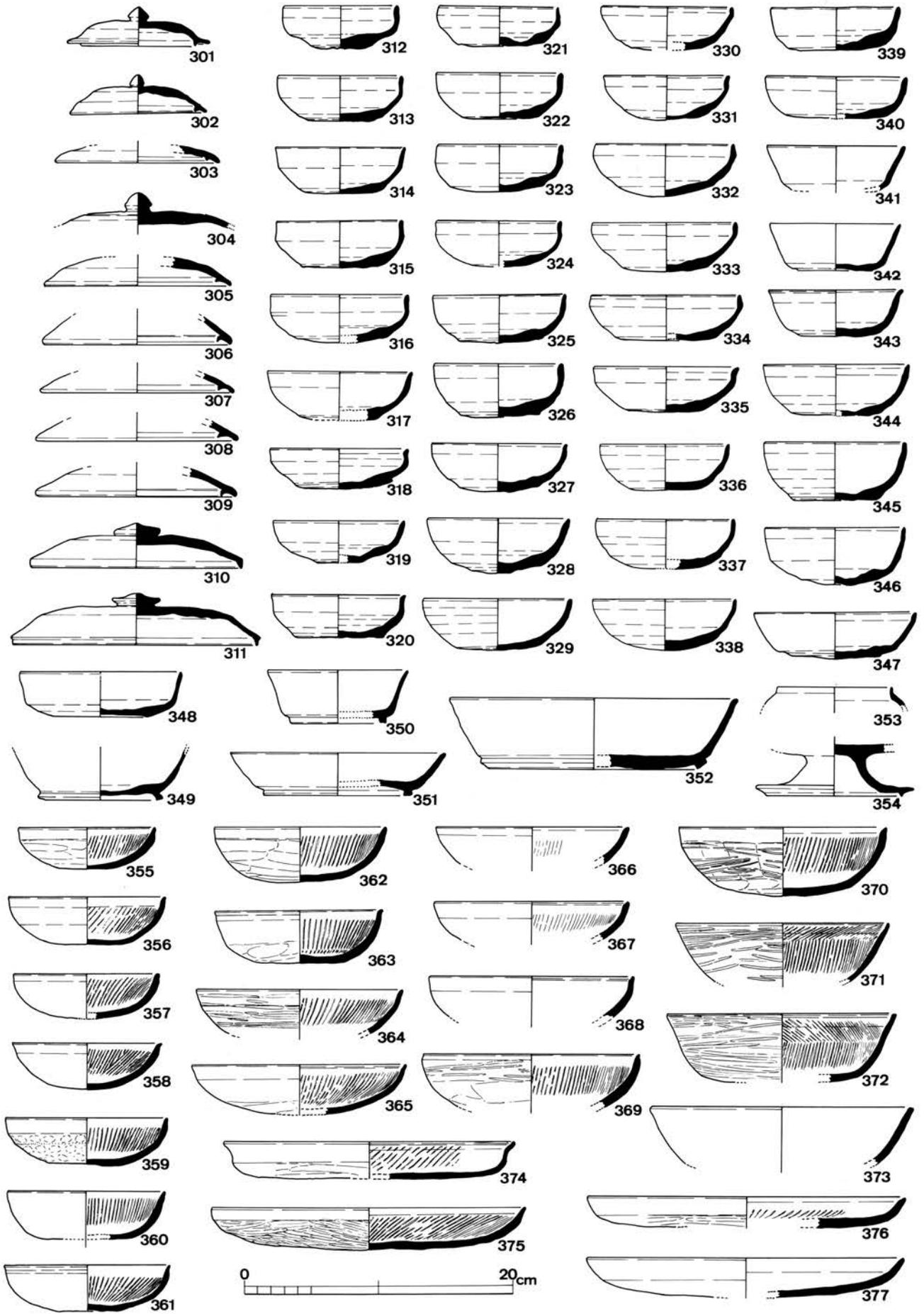


198

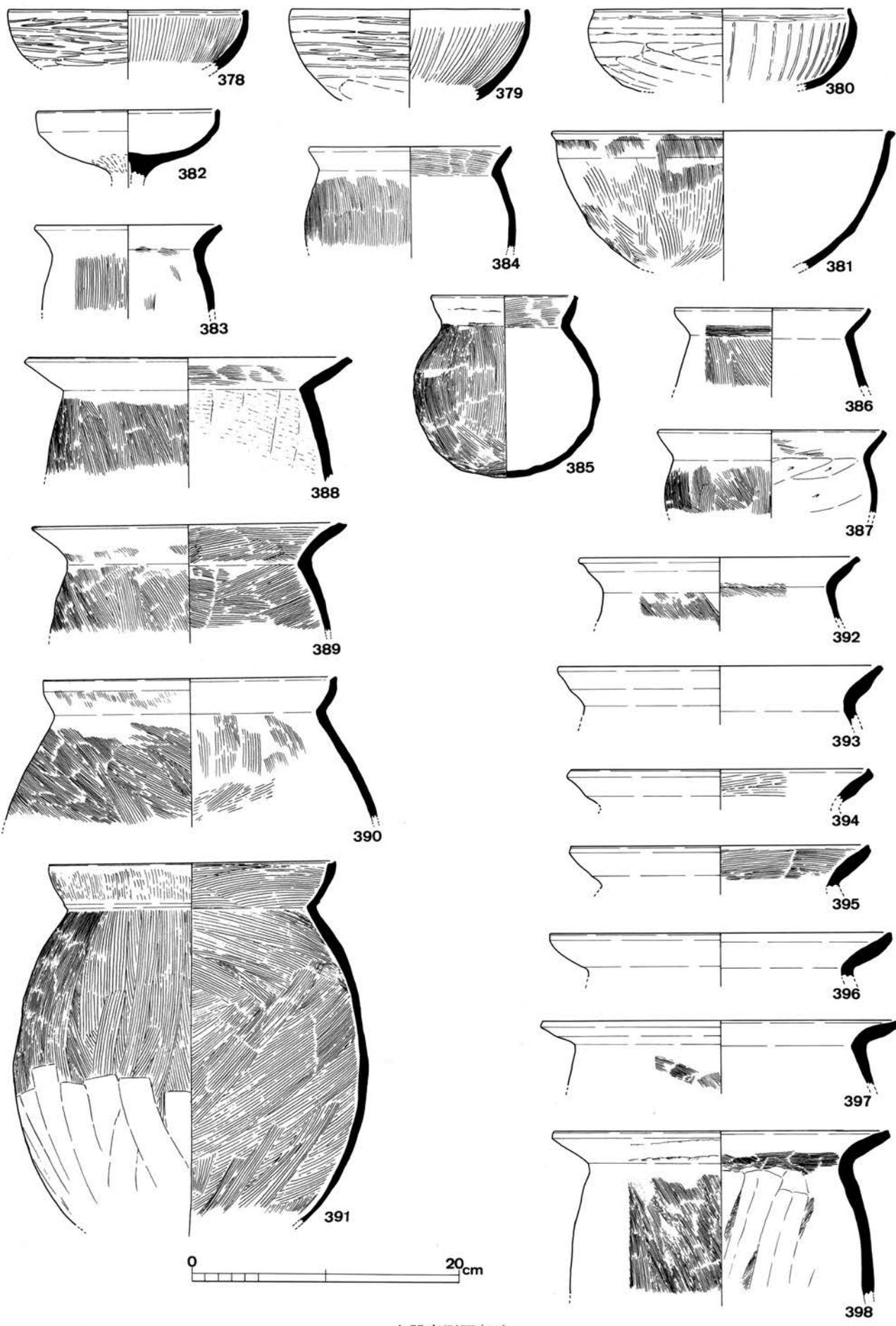
土器实测图(10)



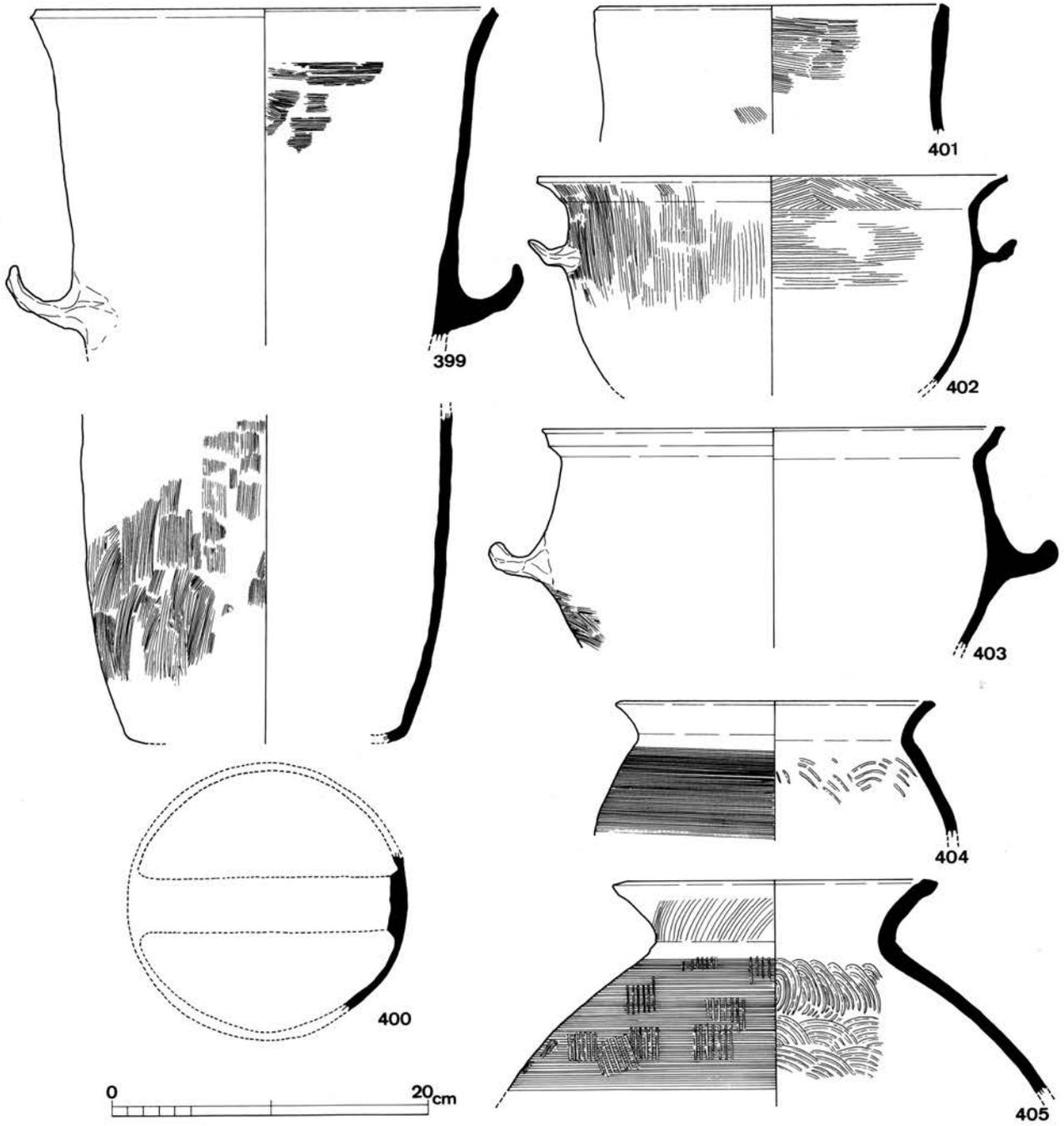
土器実測図(11)



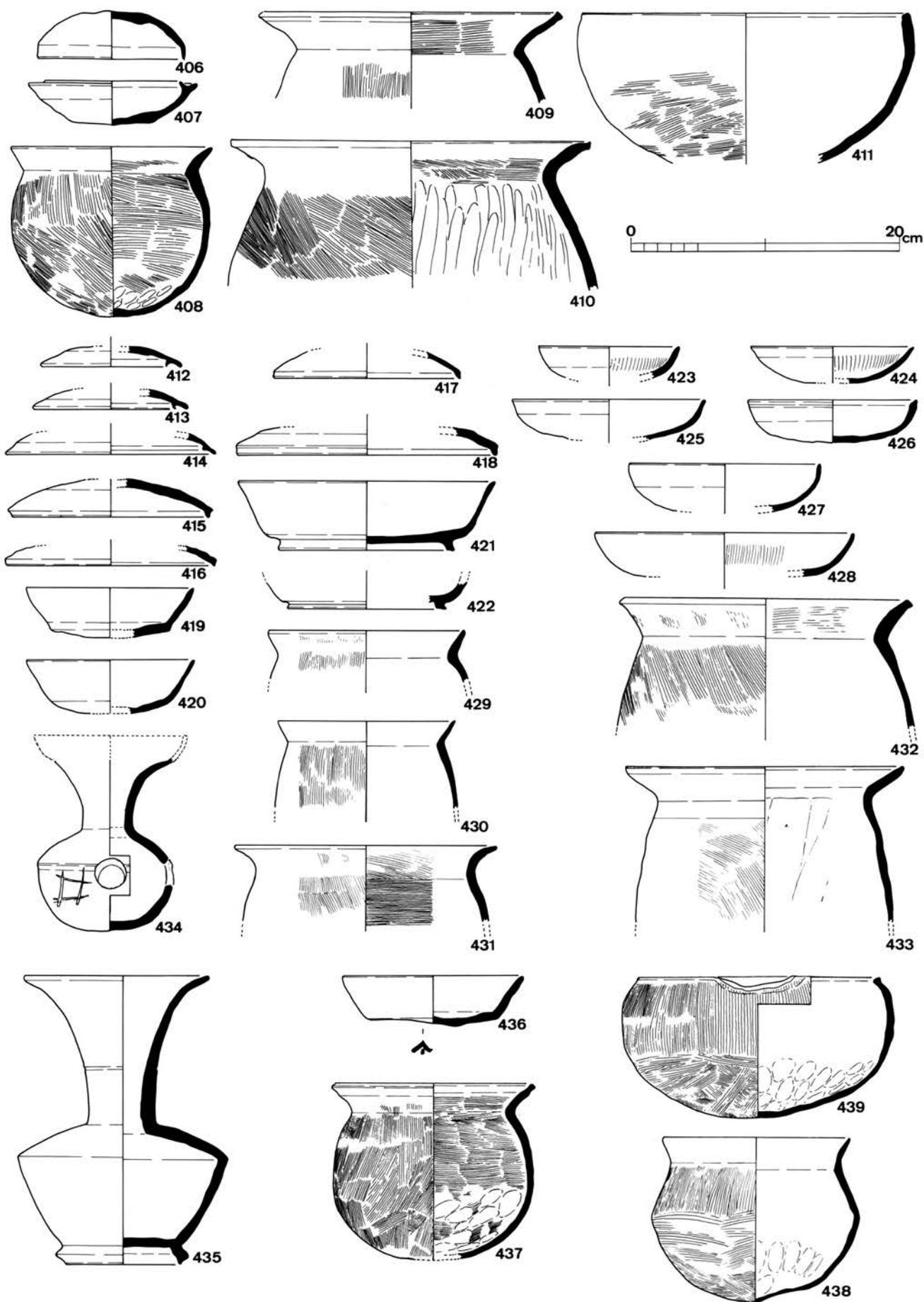
土器実測図(12)



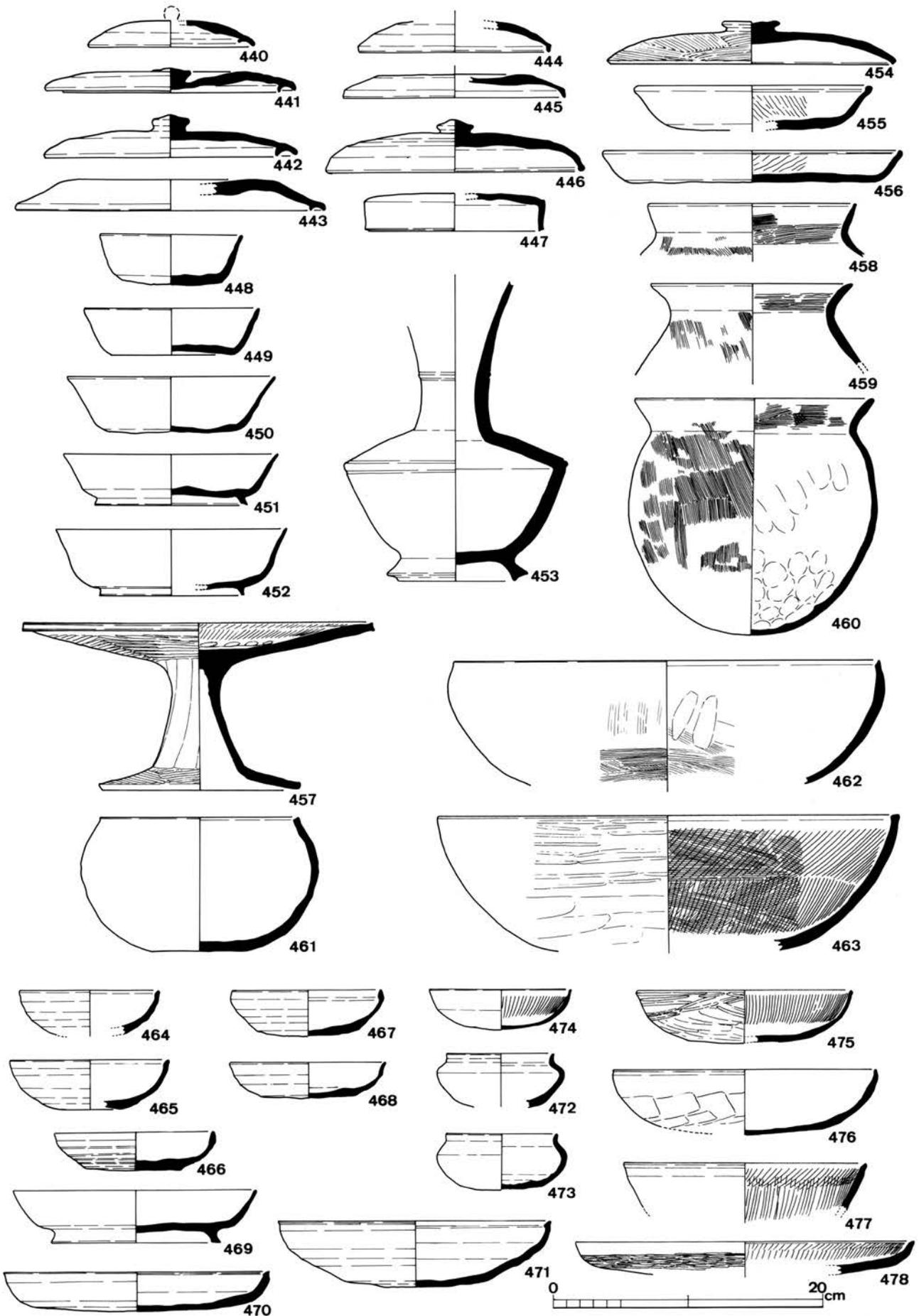
土器実測図(13)



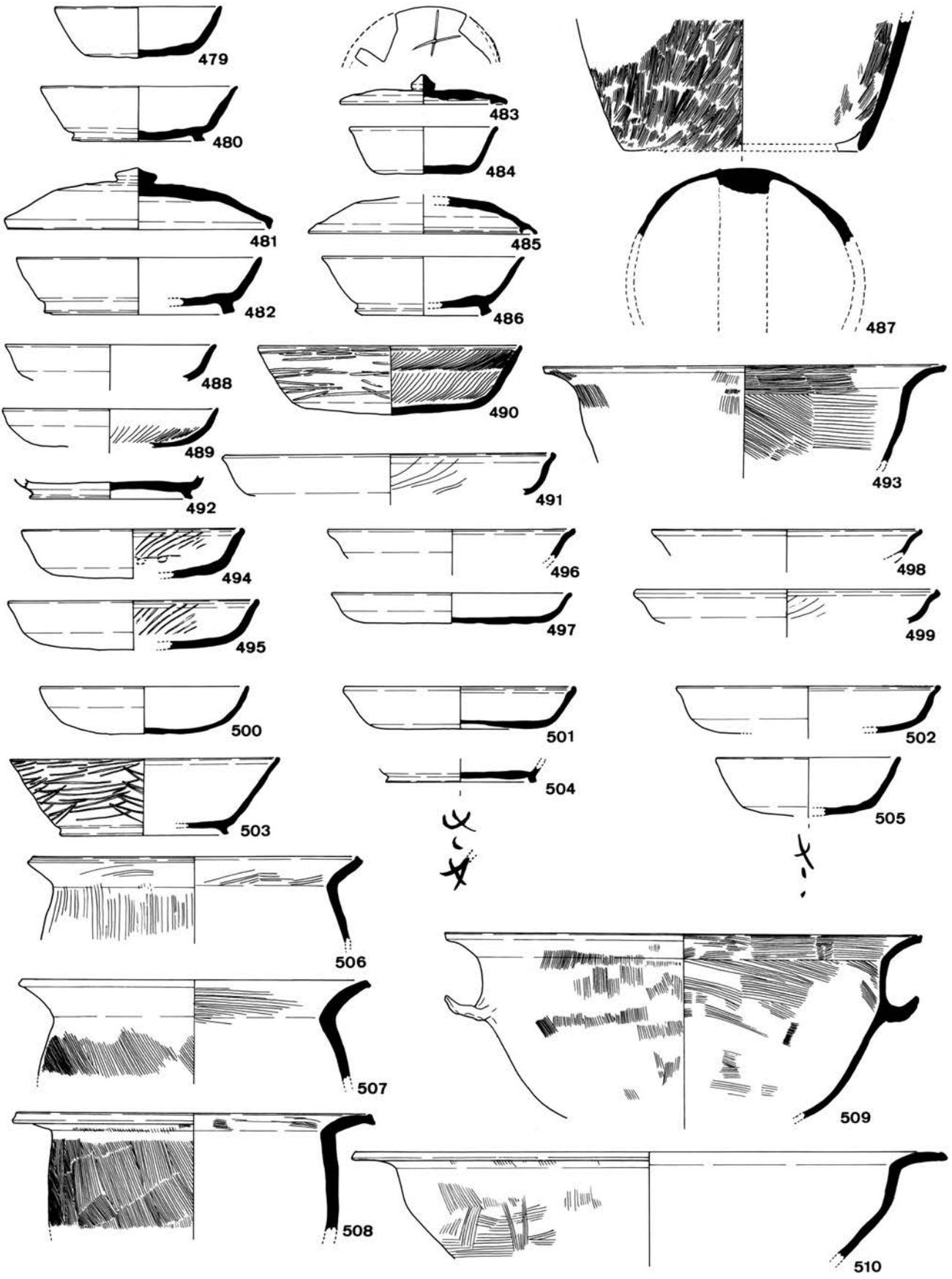
土器実測図(14)



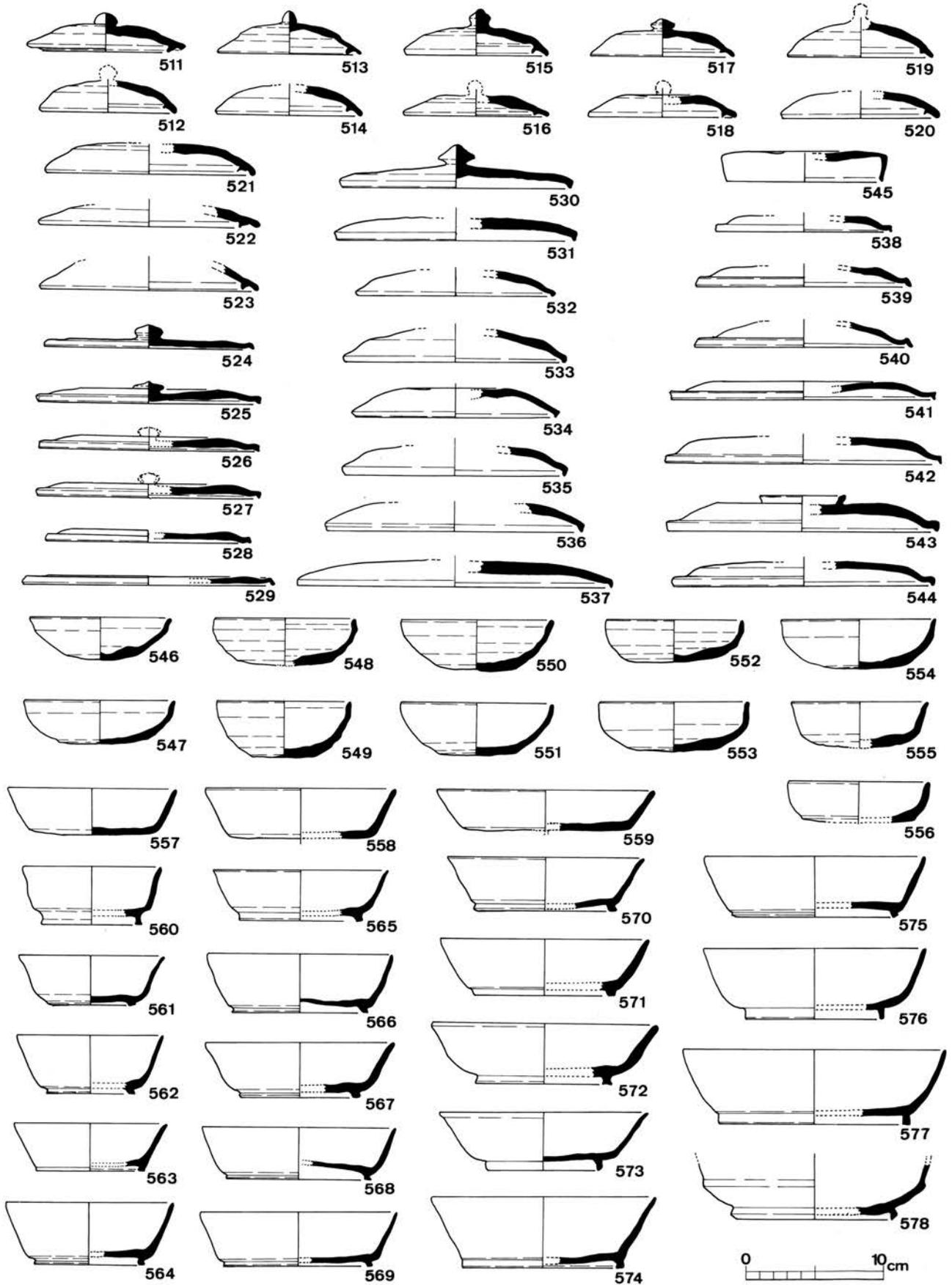
土器実測図(15)



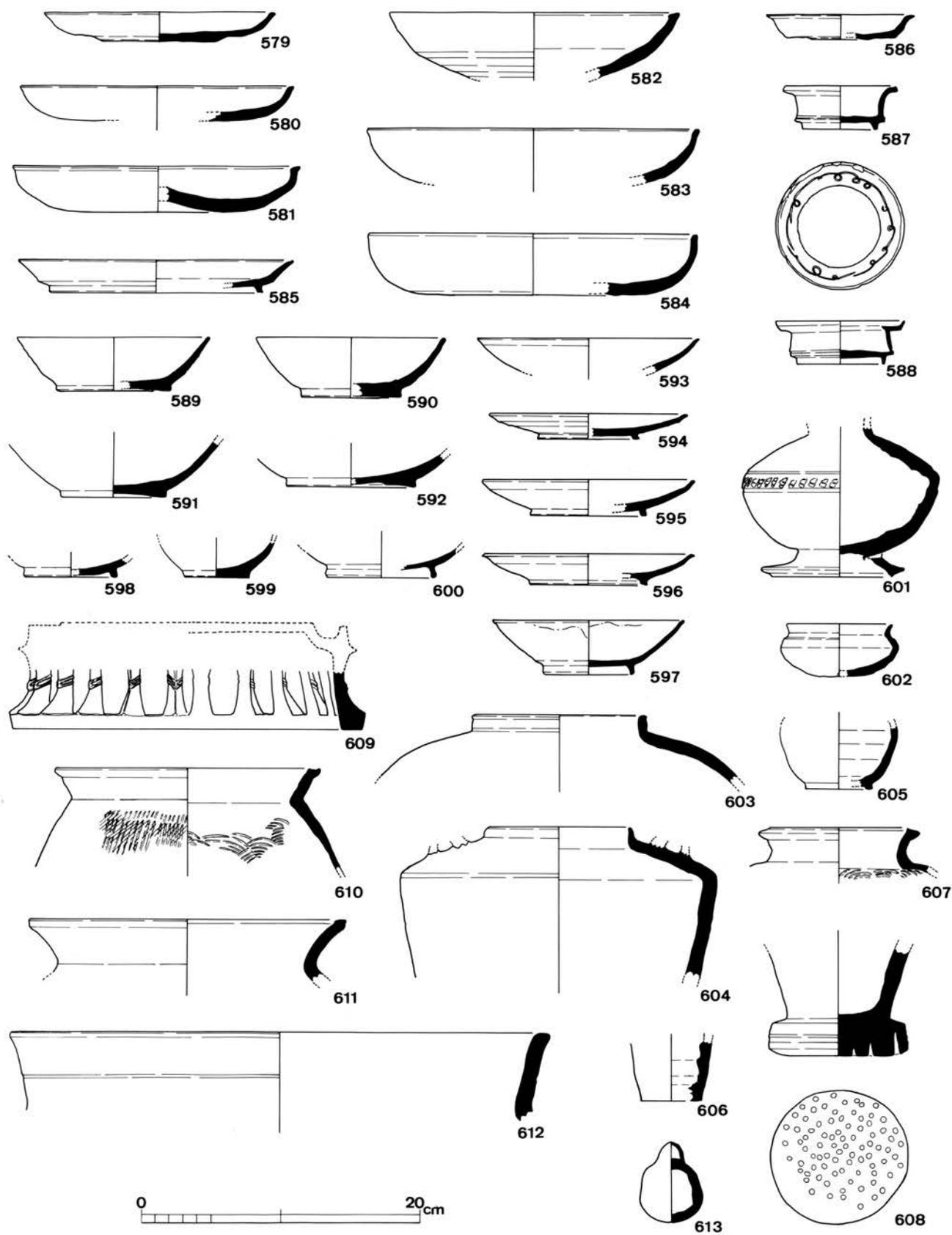
土器実測図(16)



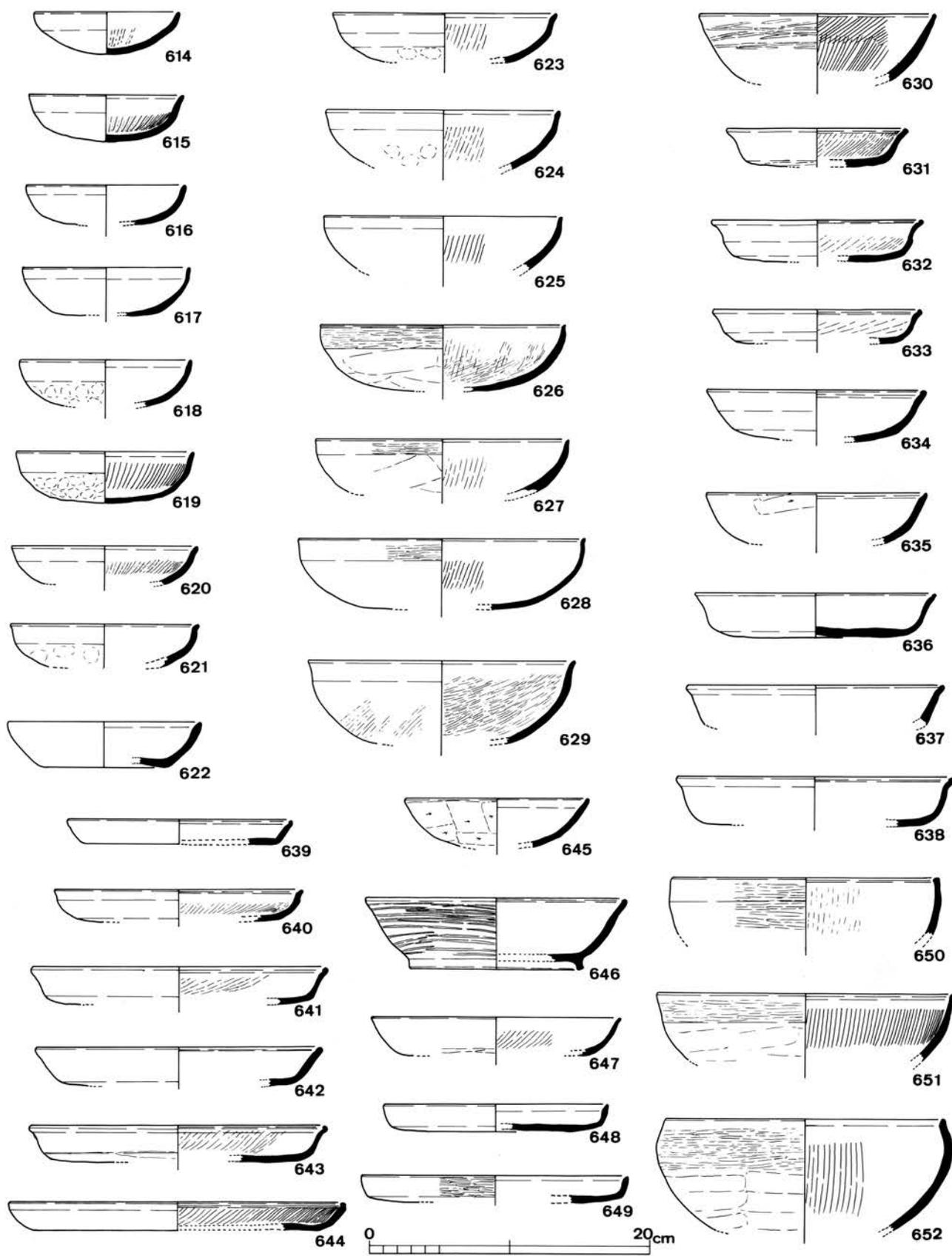
土器实测图(17)



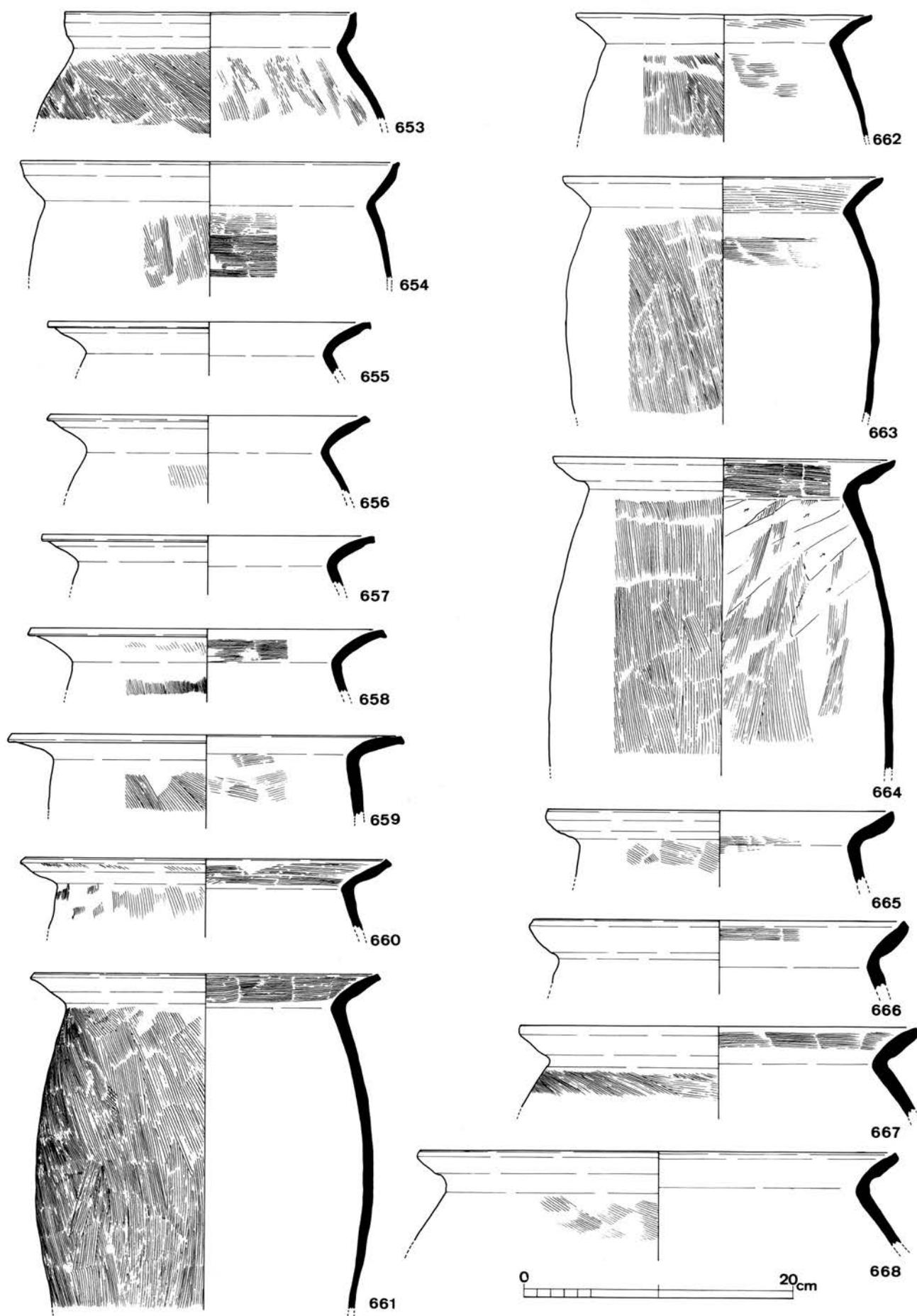
土器实测图(18)



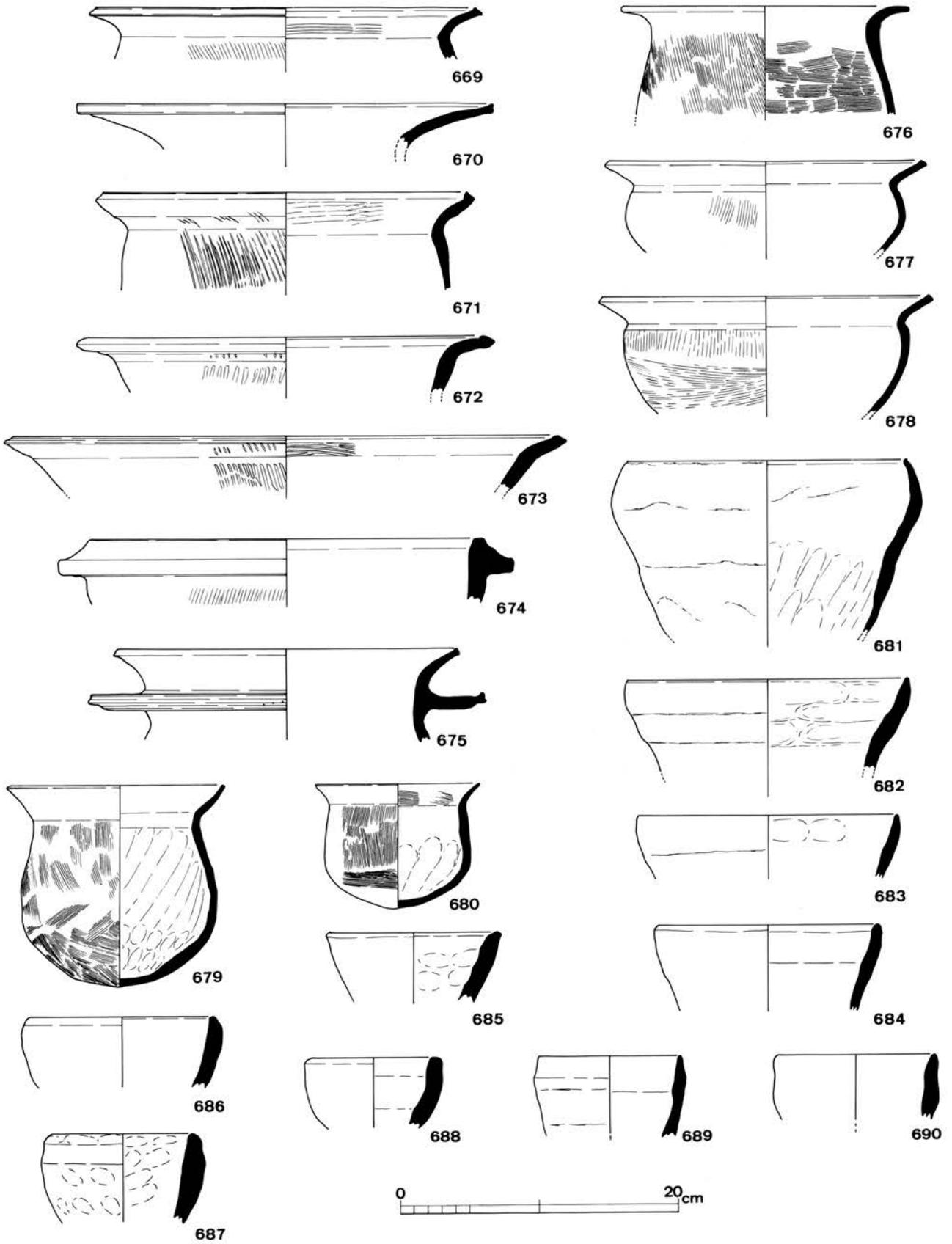
土器实测图(19)



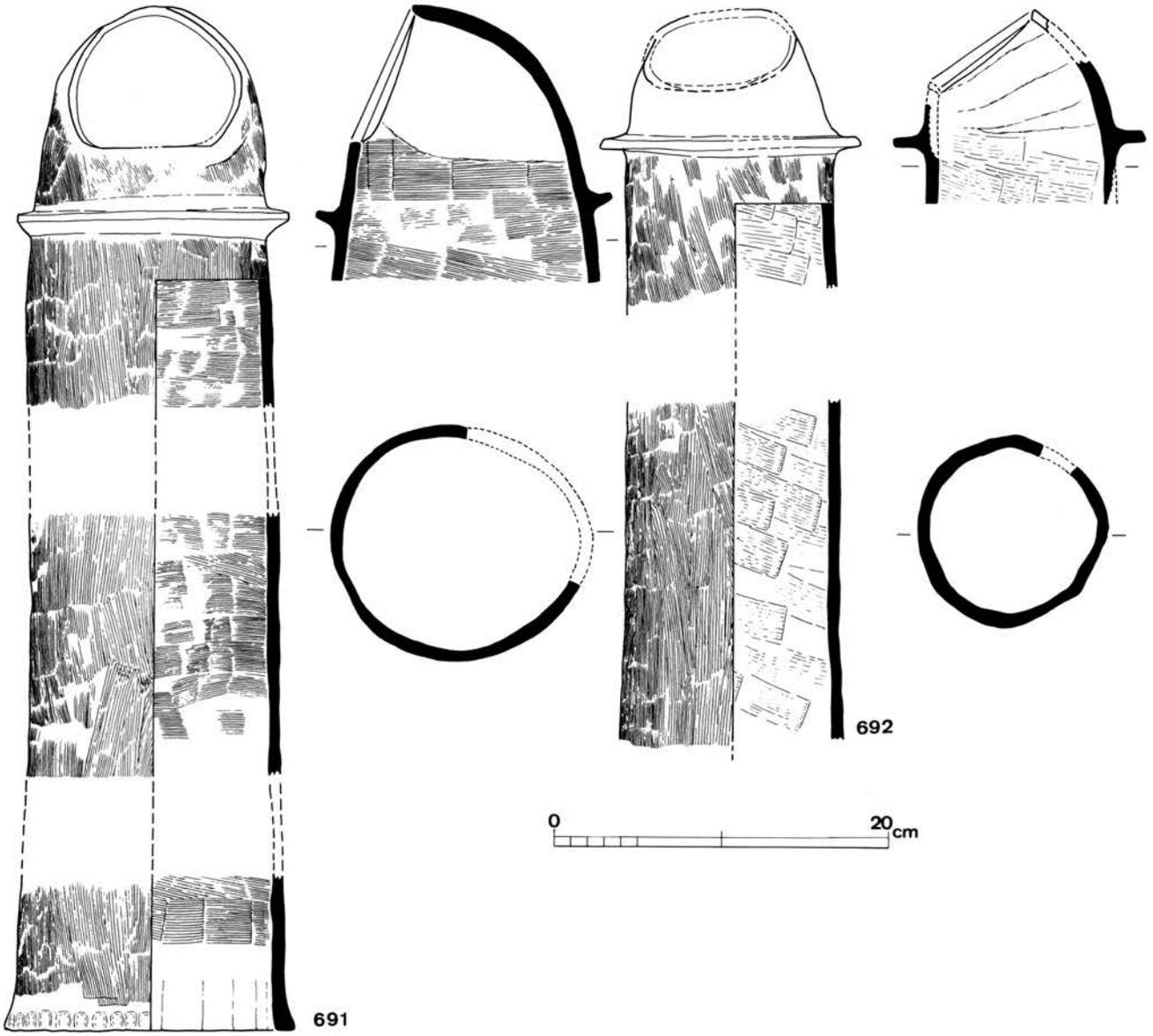
土器实测图(20)

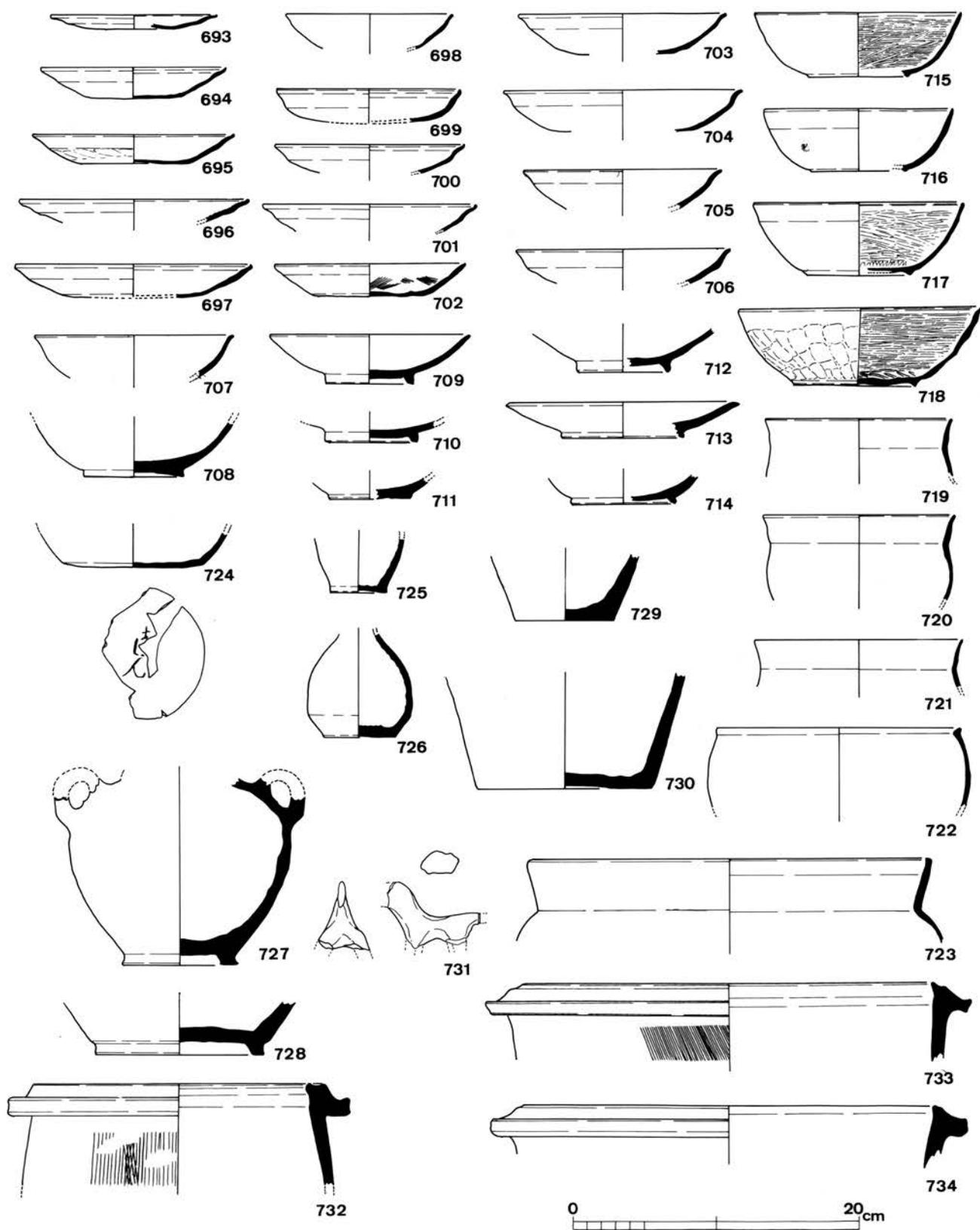


土器実測図(21)

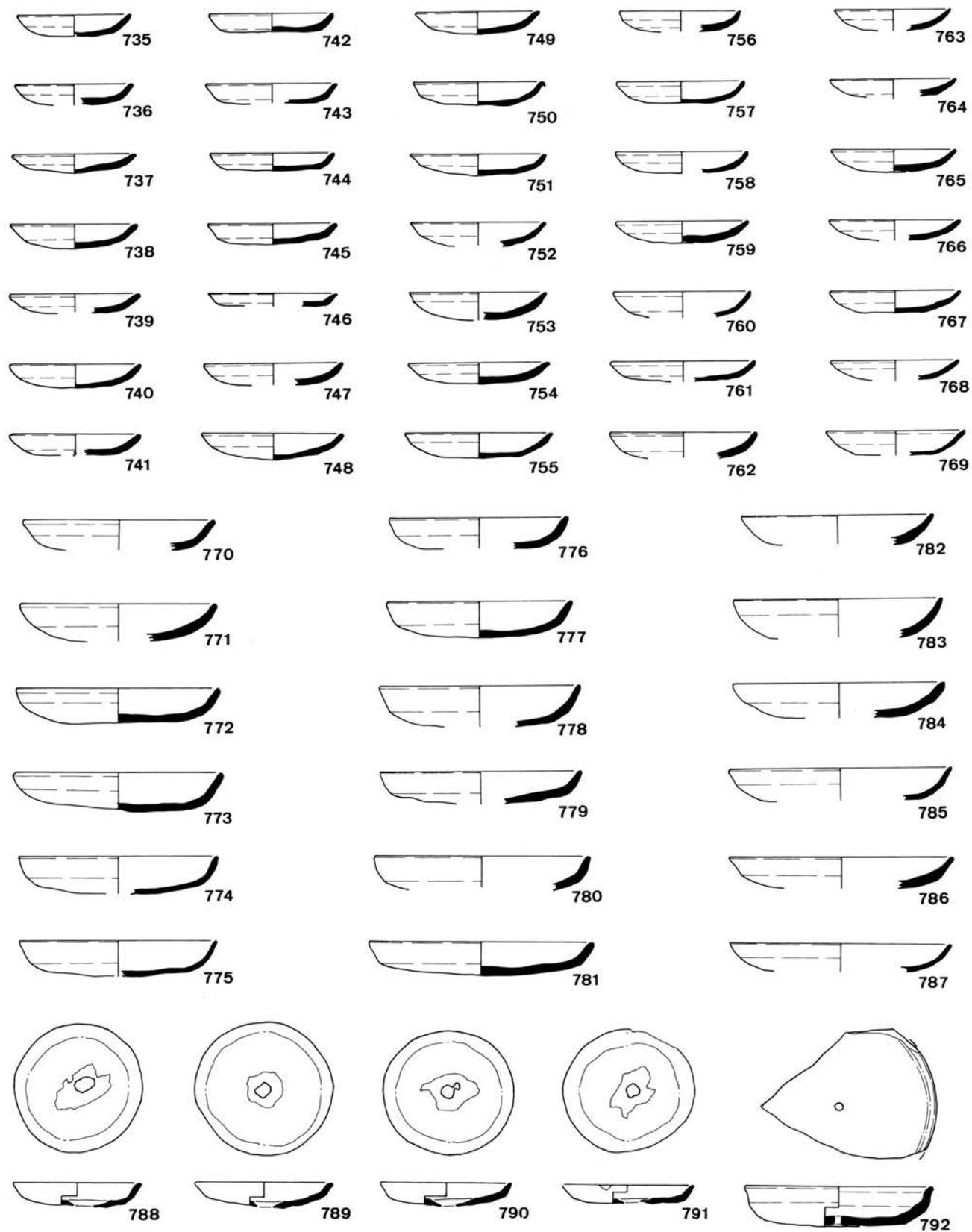


土器实测图(22)

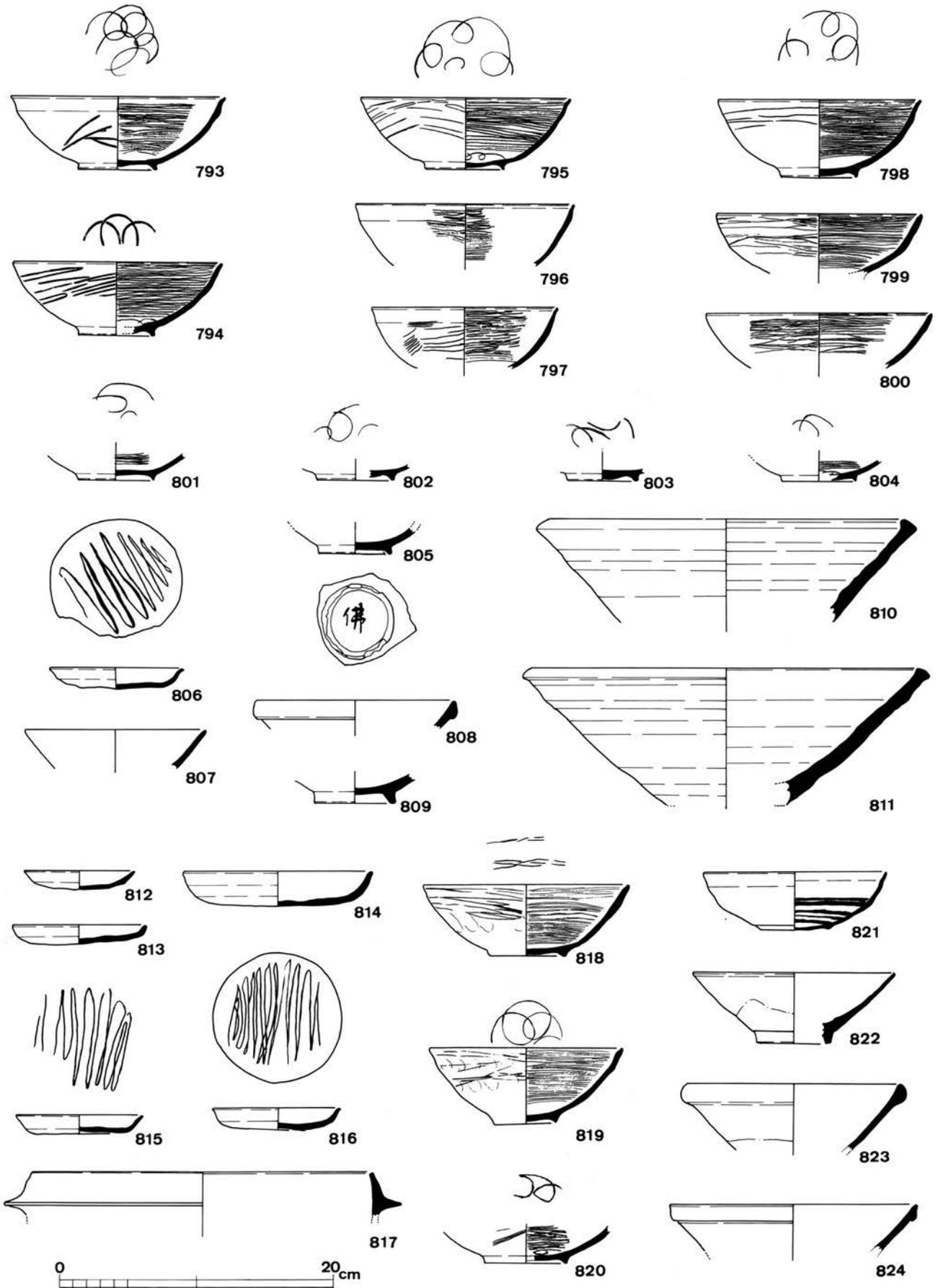




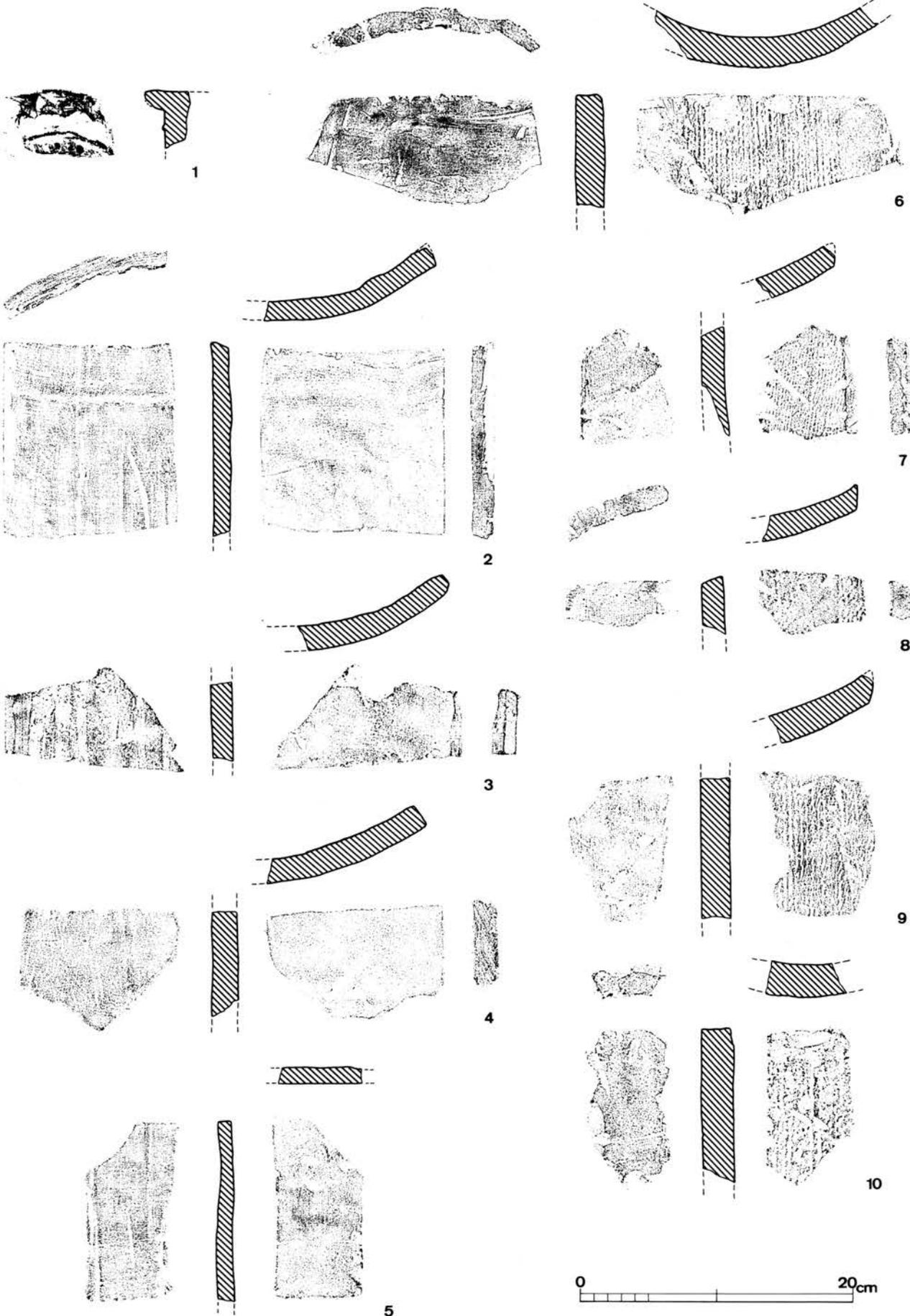
土器実測図(24)



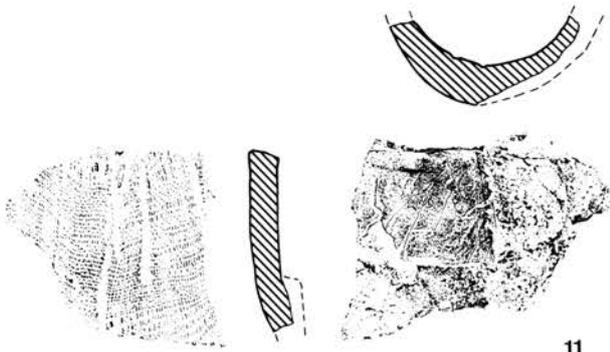
土器実測図(25)



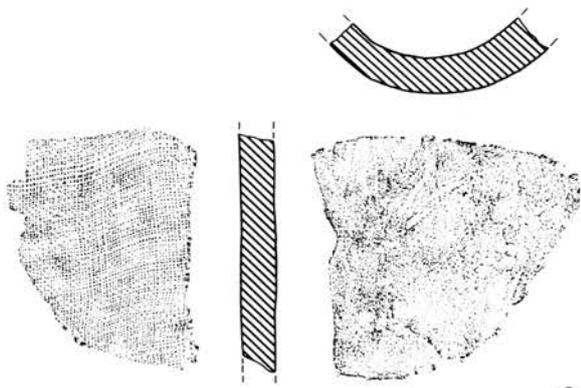
土器実測図(26)



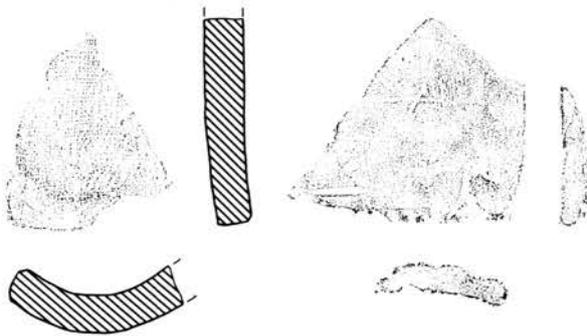
瓦類拓影圖(1)



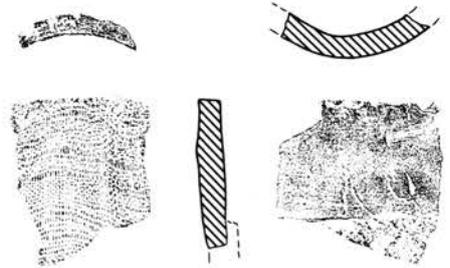
11



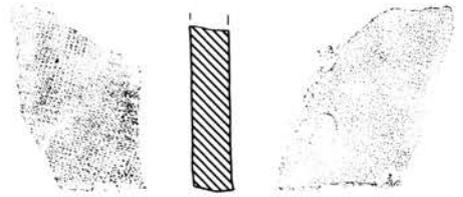
12



13



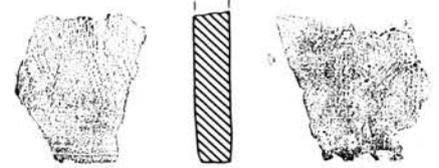
14



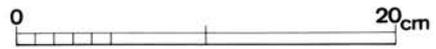
15

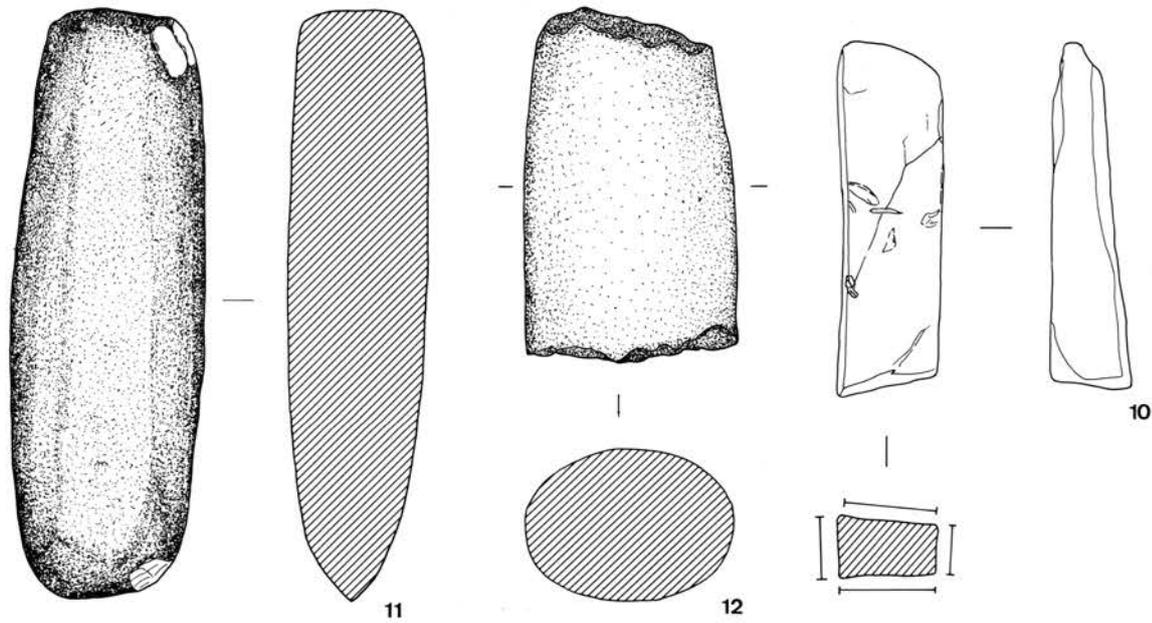
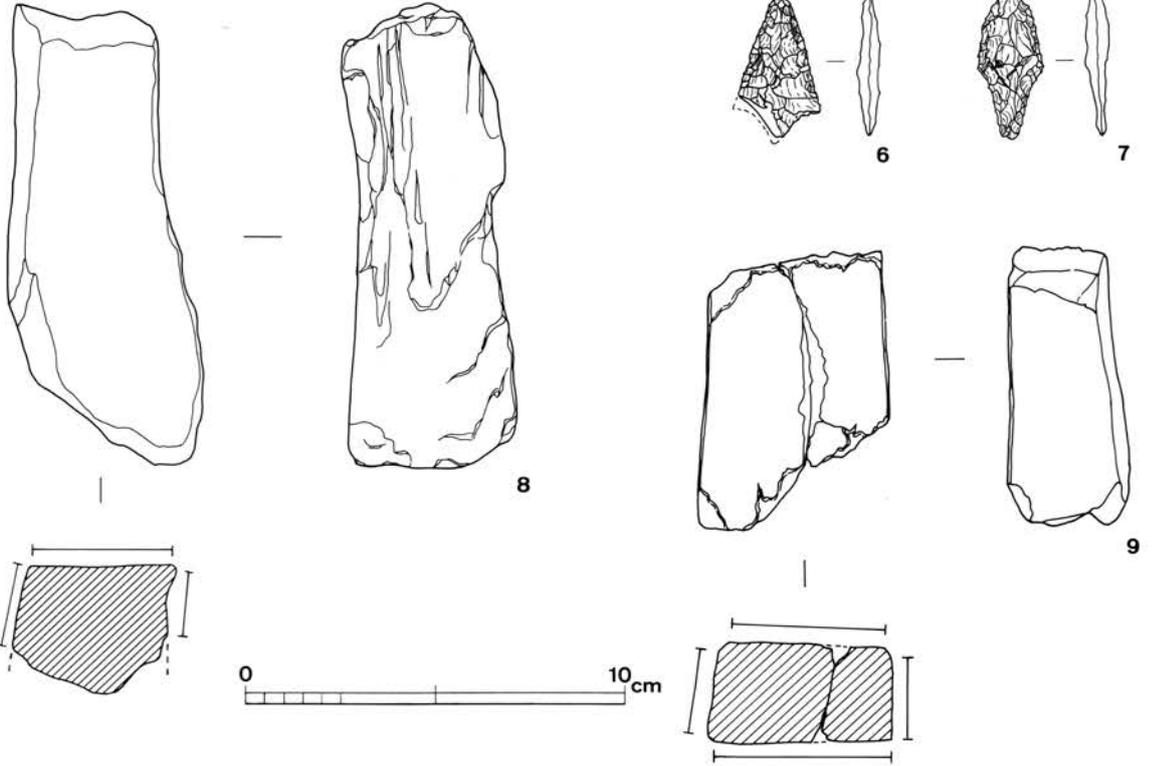
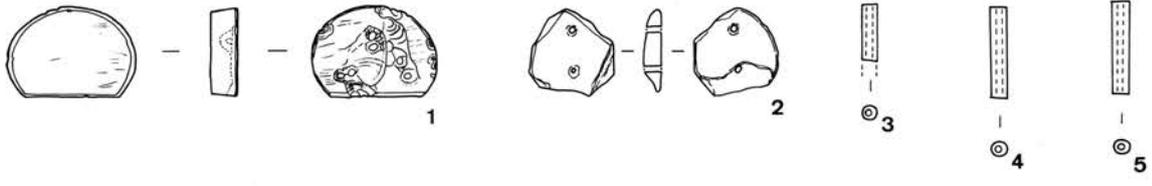


16



17





石器·石製品実測図



(1) 調査前遺跡遠景(南から)



(2) 調査前遺跡遠景(北から)



(3) A地区表土掘削風景(北西から)

(1) A地区上層水田跡検出  
作業風景(南東から)



(2) A地区上層水田39水田  
面検出作業風景(西から)



(3) A地区上層水田跡全景  
(南東から)





(1) A地区上層水田跡(南東から)



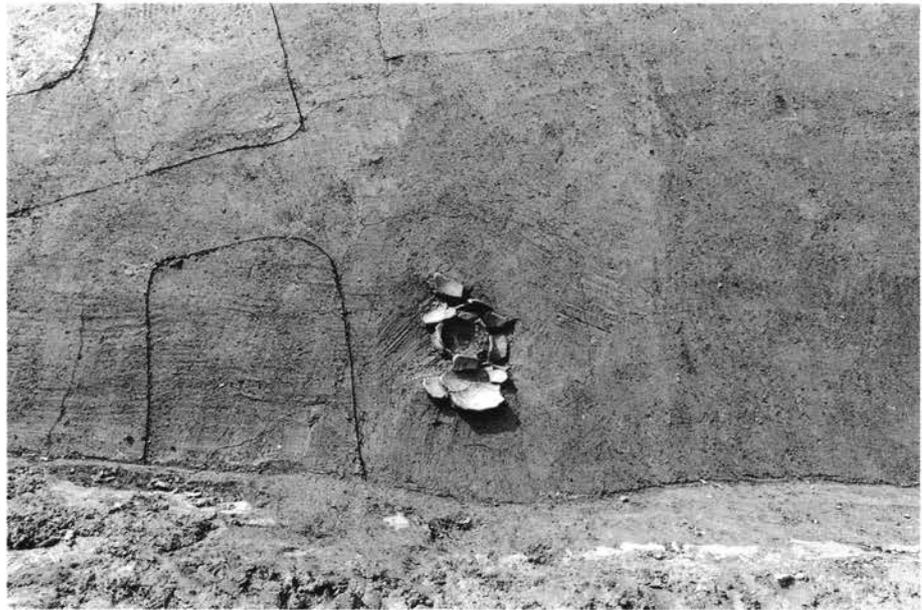
(2) A地区上層水田跡57～59(南から)



(3) A地区上層水田跡稲株痕調査風景(南から)



(1) A地区上層水田跡東部  
(北から)



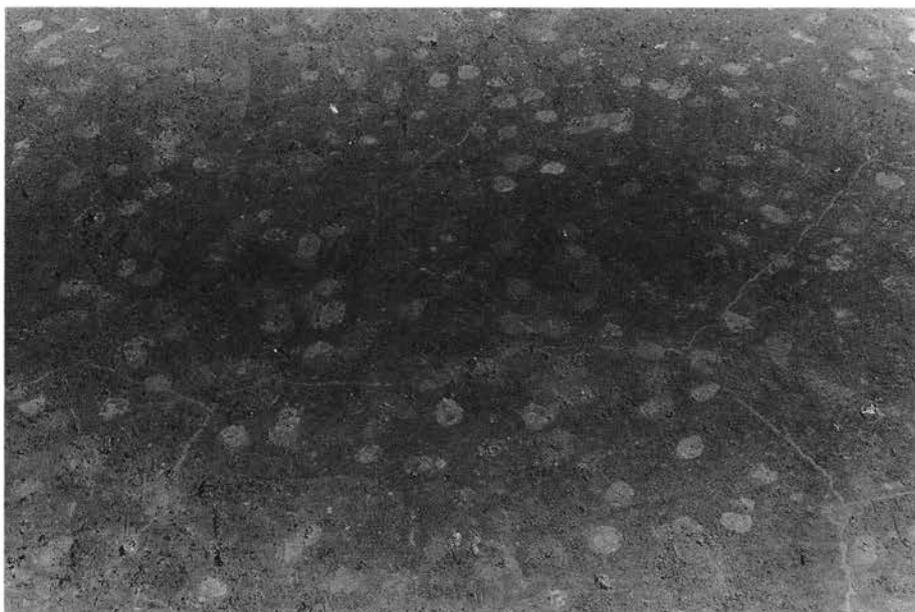
(2) A地区上層水田61南東  
部土器出土状況(東から)



(3) A地区上層水田跡洪水  
砂内土器出土状況



(1) A地区上層水田跡稲株痕

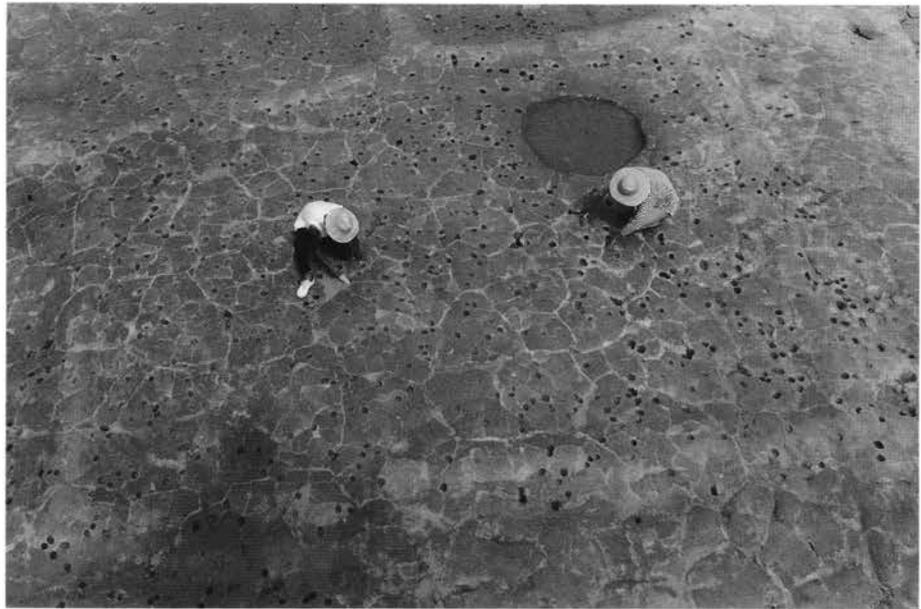


(2) 上層水田跡稲株痕



(3) 上層水田跡稲株痕(白色  
ペイント・東から)

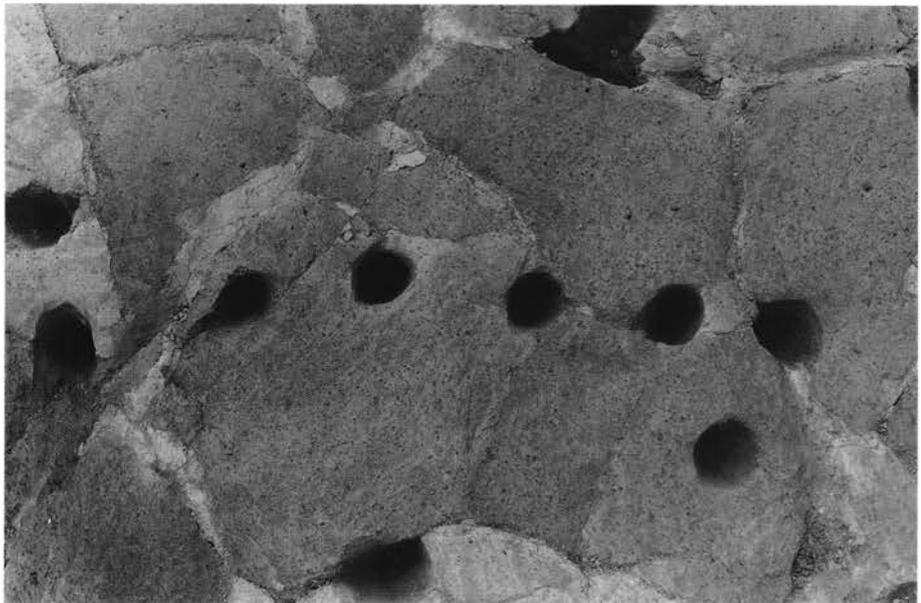
(1) A地区上層水田33稲株  
痕調査風景(南から)



(2) 水田33稲株痕調査風景  
(南から)



(3) 水田33稲株移植列  
(南から)





(1) A地区稲株痕測量調査  
風景(南東から)



(2) 上層水田57~60稲株痕  
測量調査状況(南西から)



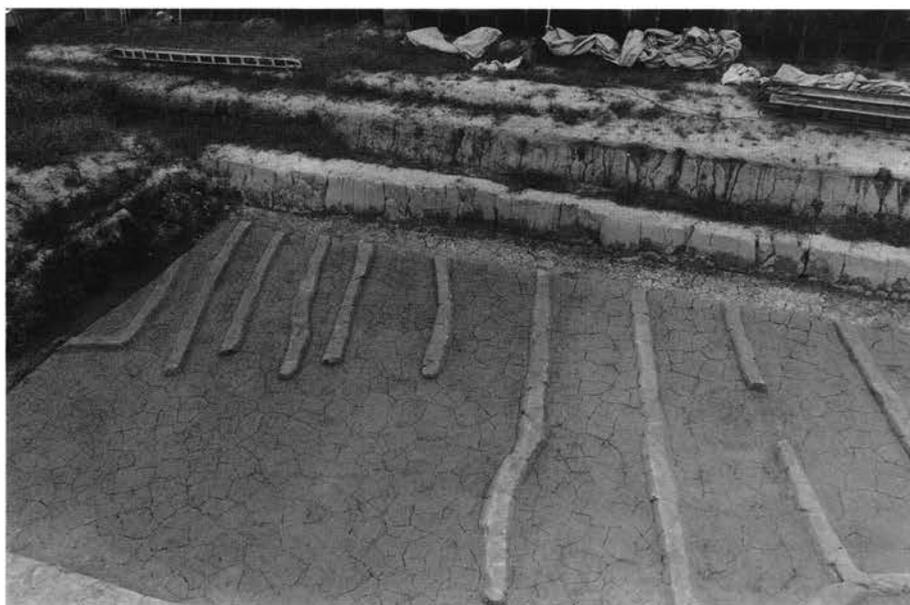
(3) 上層水田跡雨後滞水風  
景(南東から)



(1) A地区下層水田跡畦畔  
検出状況(南から)



(2) A地区下層水田跡全景  
(南東から)



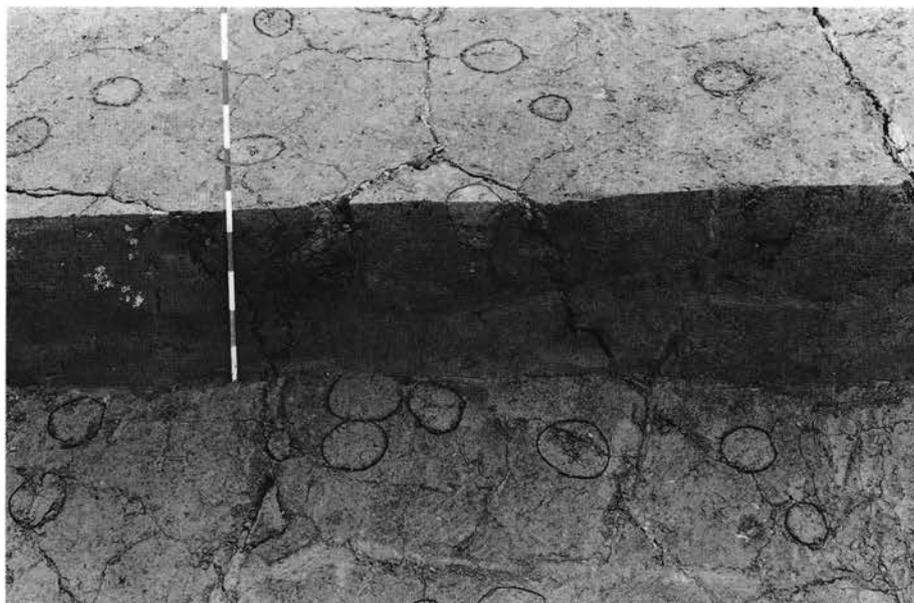
(3) A地区下層水田跡南西  
部(東から)



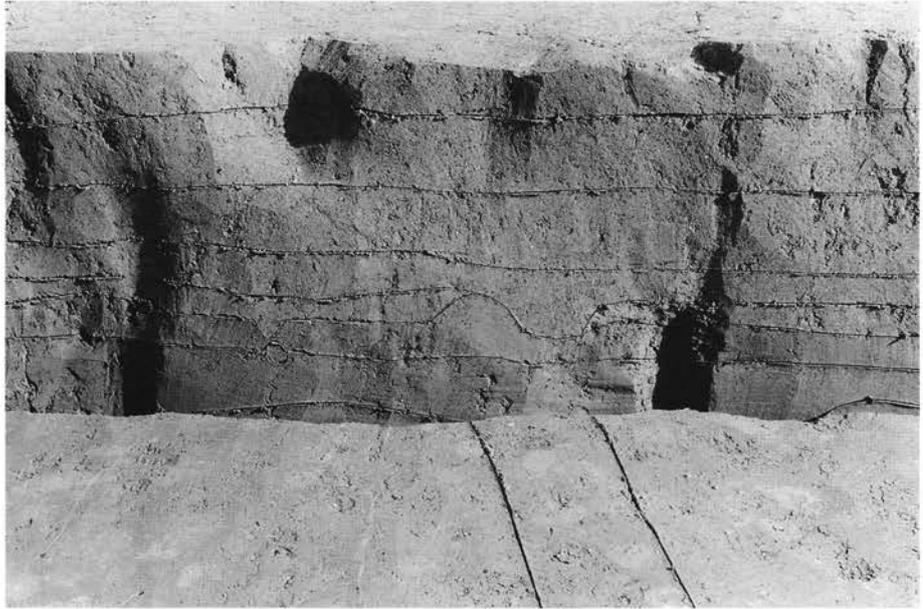
(1) A 地区下層水田跡77～84(東から)



(2) A 地区下層水田跡82～88(北東から)



(3) 上層・下層水田に残る  
稲株痕



(1) A地区上層水田跡畦畔断面(西から)



(2) A地区上層水田53東畦畔検出作業風景(北から)



(3) A地区東壁土層断面(西から)



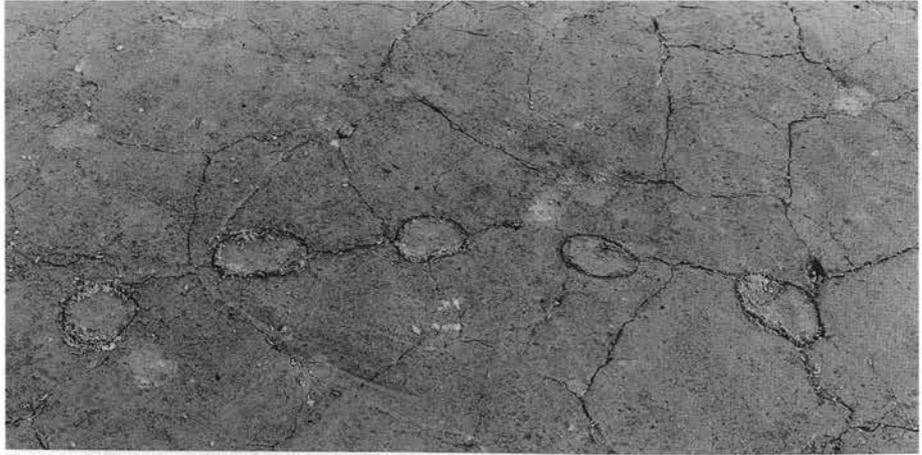
(1) B地区南東部水田跡  
(南から)



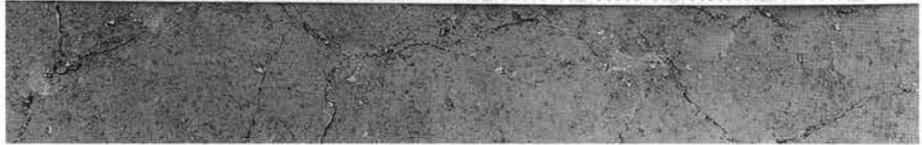
(2) B地区南西部水田跡  
(南東から)



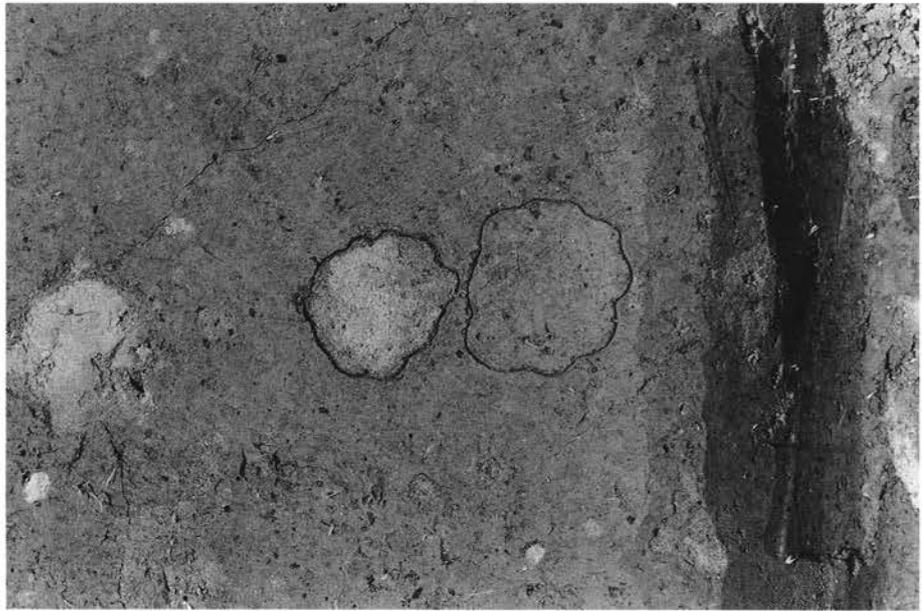
(3) B地区水田跡土器溜まり  
りS X10(南から)



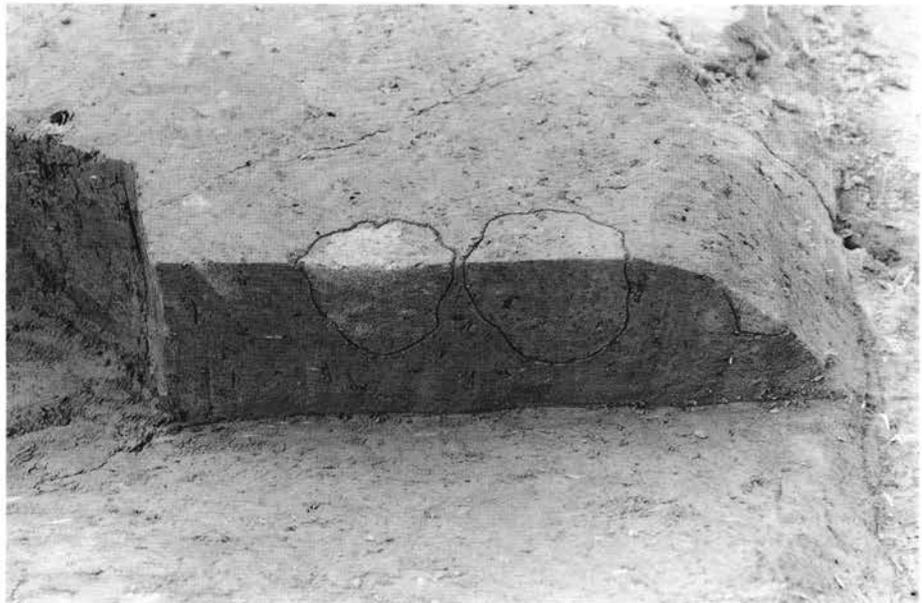
(1) A地区上層水田跡稻株移植列

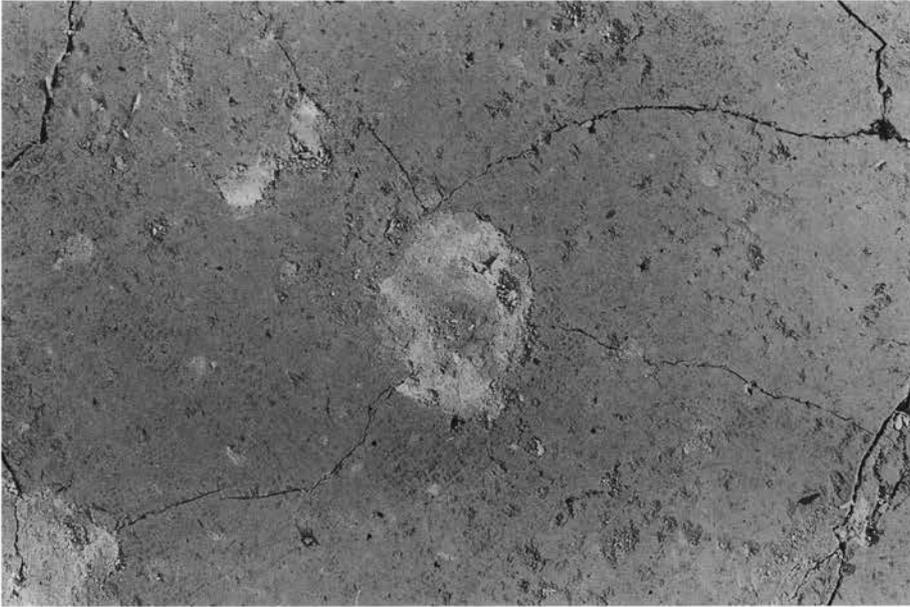


(2) A地区上層水田跡稻株痕(左:A種 右:B種)



(3)同上稻株痕断面

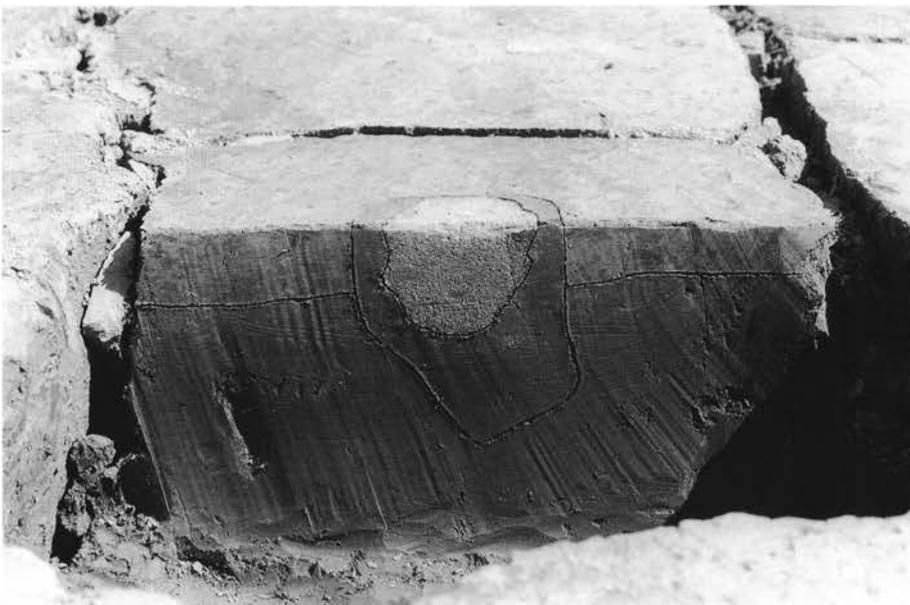




(1) A地区上層水田跡稻株痕A種

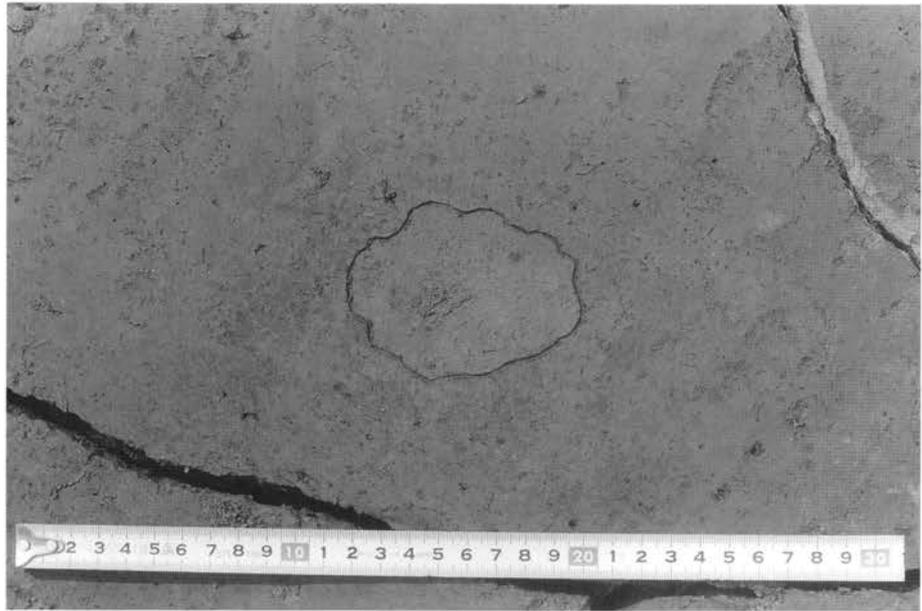


(2) A地区上層水田跡稻株痕A種・C種小穴

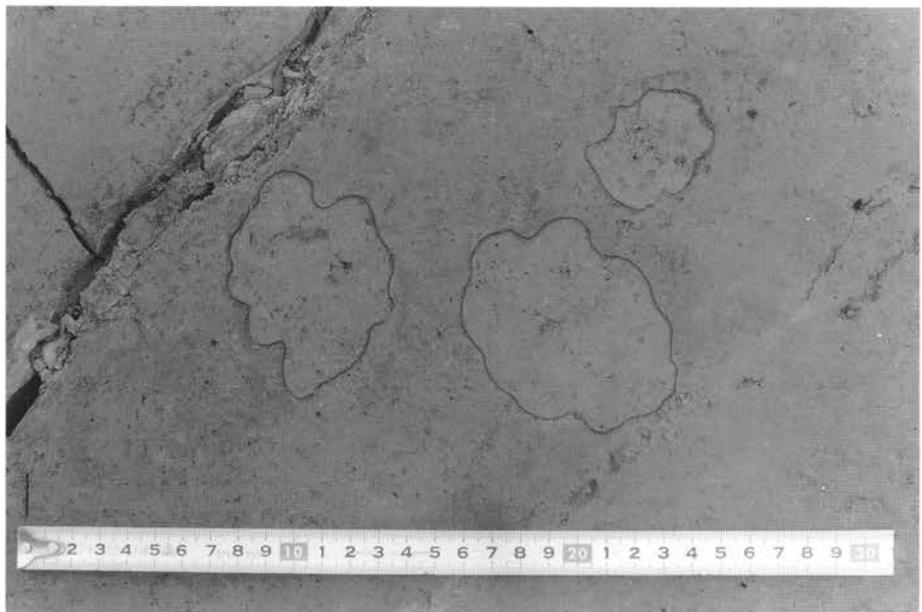


(3) 同上稻株痕断面

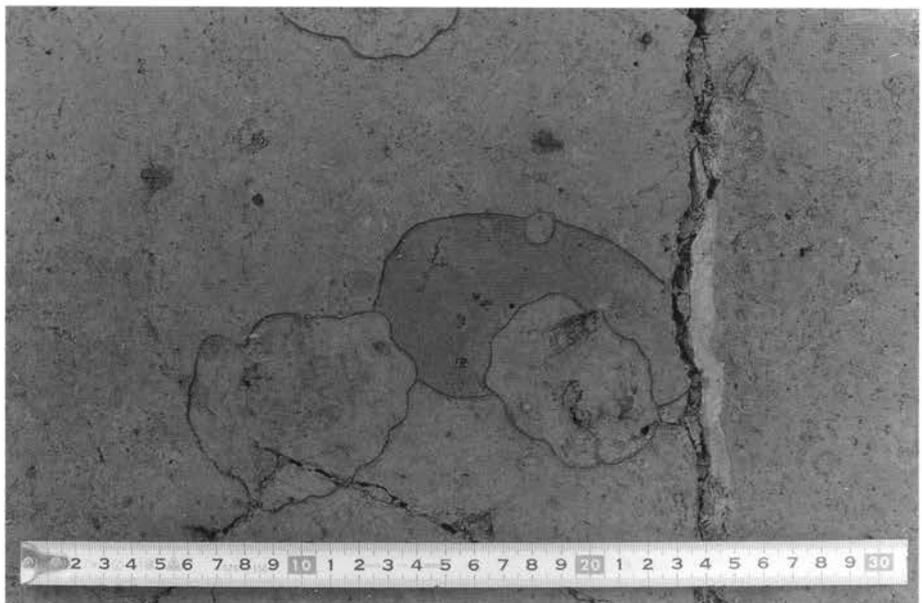
(1) A地区上層水田跡稻株痕B種



(2) 上層水田跡稻株痕B種

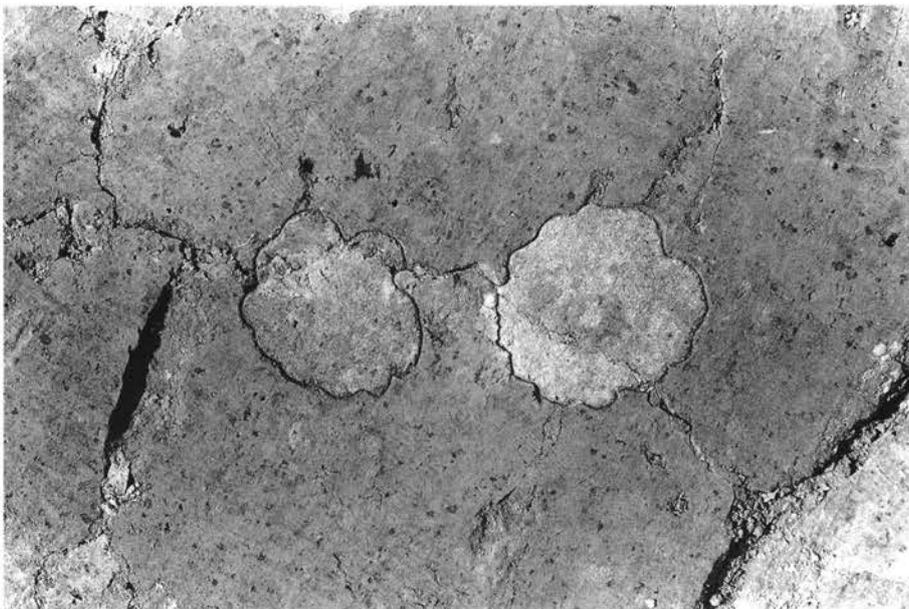


(3) 上層水田跡稻株痕B種・C種(中央)





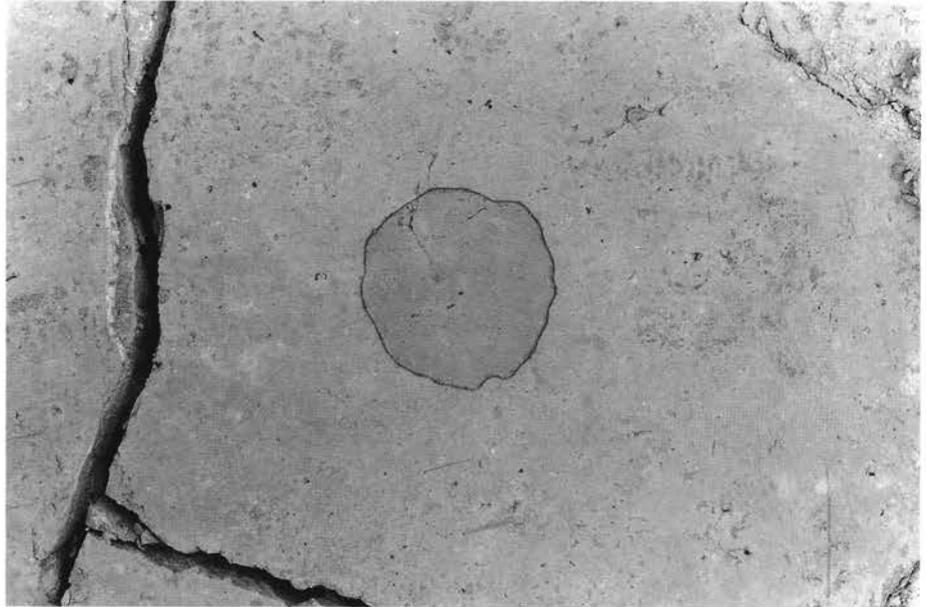
(1) 上層水田跡稲株痕 A 種  
断面



(2) 上層水田跡稲株痕 A 種



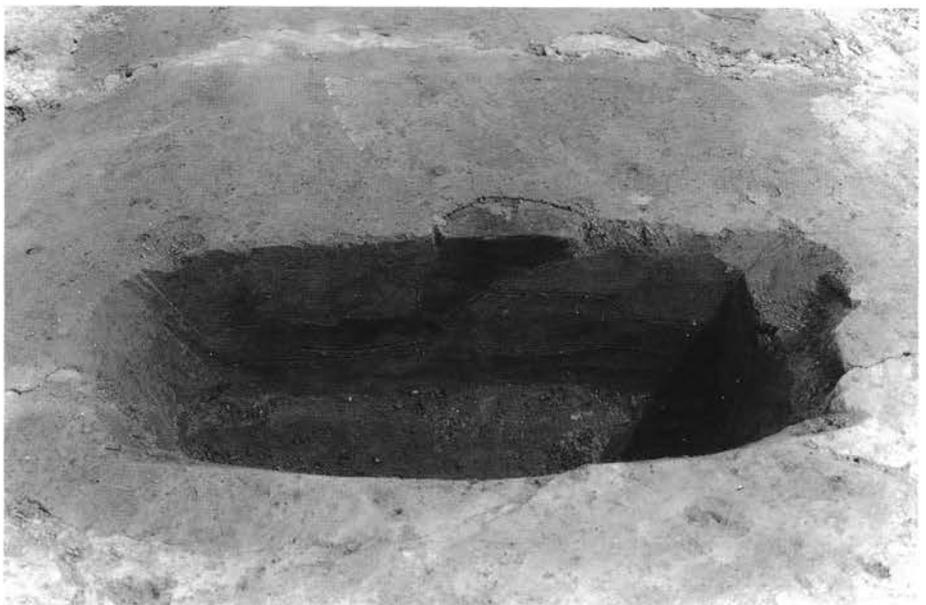
(3) 同上稲株痕断面



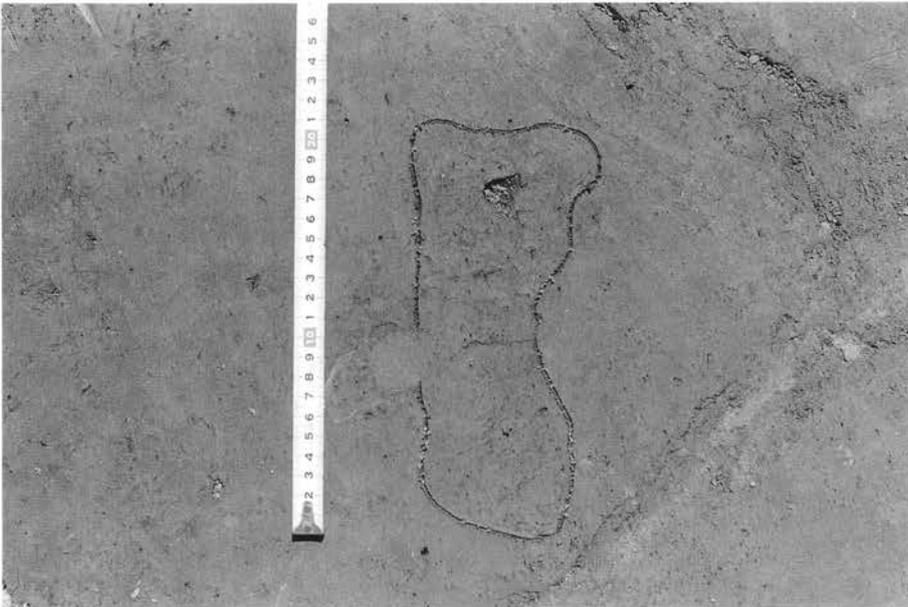
(1) A地区上層水田跡C種  
小穴



(2) 同上小穴断面



(3) A地区上層水田跡C種  
小穴断面



(1) A地区上層水田面に残る足跡



(2) 同上足跡完掘状況

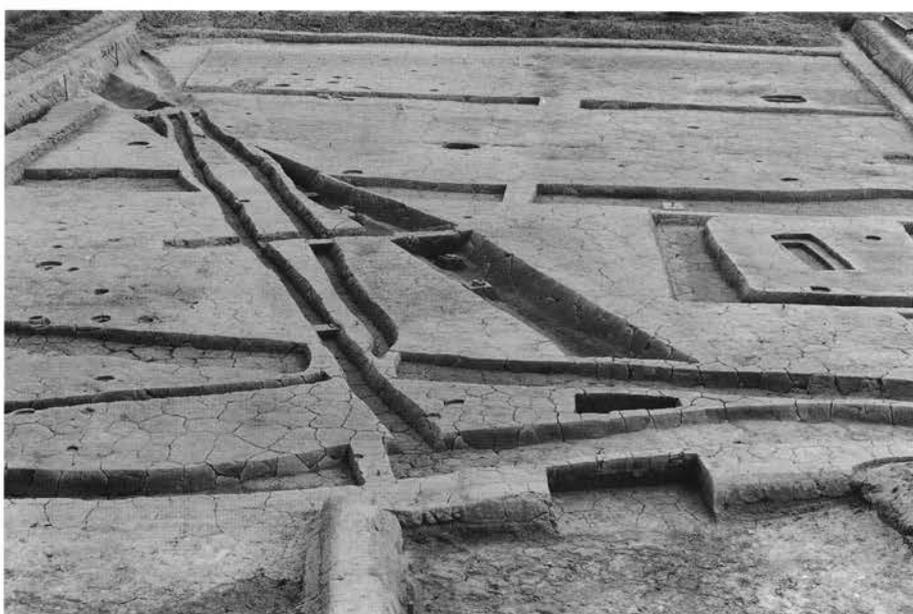


(3) A地区上層水田跡に残る足跡と稲株痕A種

(1) A地区第2遺構面全景  
(北から)



(2) A地区溝S D37~39全  
景(北から)



(3) 溝S D39土師器高杯出  
土状況(北から)





(1) A地区第2遺構面方形周溝墓調査風景(北西から)

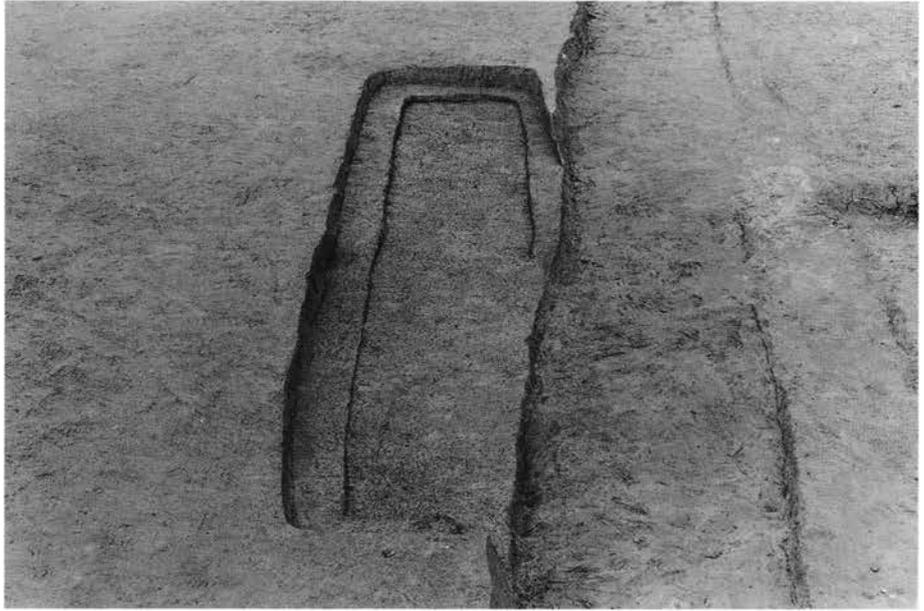


(2) 方形周溝墓全景(南から)



(3) 方形周溝墓埋葬主体部 S X11(南から)

(1) B地区埋葬主体部 S X  
12全景(南から)



(2) B地区土器溜まり S X  
05(南から)



(3) B地区土器溜まり S X  
09(南から)





(1) B地区土器溜まり S X  
07調査風景(西から)



(2) B地区土器溜まり S X  
07(北から)



(3) B地区土器溜まり S X  
08(東から)



(1) B地区竪穴式住居跡 S  
H02全景(南西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H02竈  
内遺物出土状況(南東から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S  
H03全景(南東から)



(1) A地区第1遺構面全景  
(南から)



(2) A地区第1遺構面全景  
(北から)



(3) A地区掘立柱建物跡S  
B01~04全景(南から)



(1) A地区掘立柱建物跡S  
B04(東から)



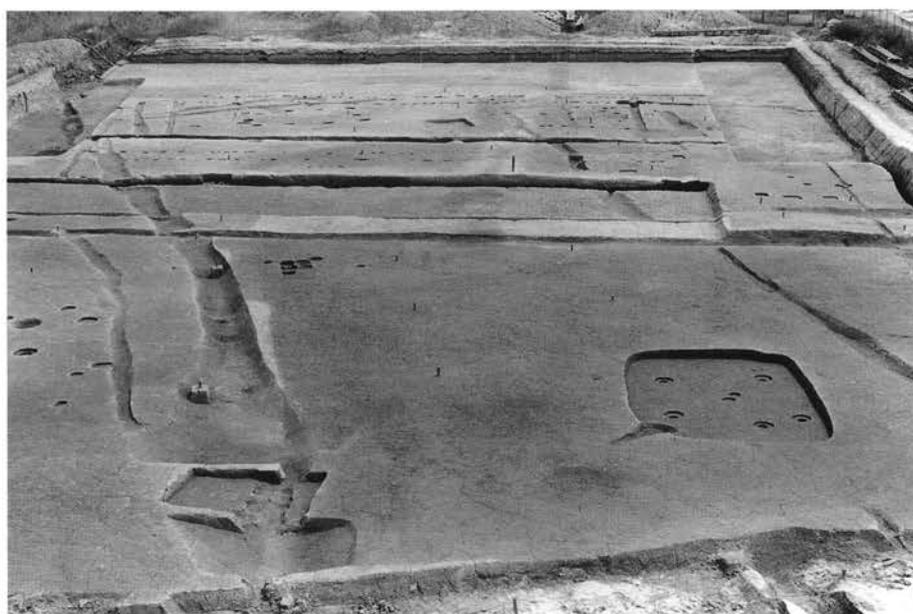
(2) 掘立柱建物跡S B03(東  
から)



(3) 掘立柱建物跡S B  
02(東から)



(1) A地区掘立柱建物跡S  
B01(東から)



(2) A地区第1遺構面(北  
から)



(3) A地区掘立柱建物跡S  
B05(東から)



(1) B地区第1遺構面北部  
(南から)



(2) B地区掘立柱建物跡S  
B19(南西から)



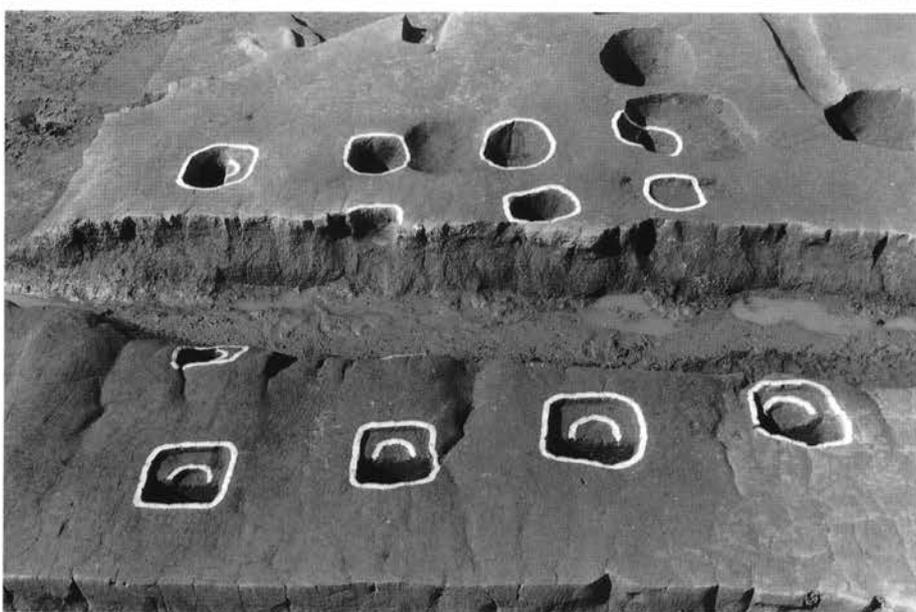
(3) B地区S D53遺物出土  
状況(北から)



(1) B地区掘立柱建物跡 S  
B10・14・15全景(南から)



(2) B地区掘立柱建物跡 S  
B07・08全景(西から)



(3) B地区掘立柱建物跡 S  
B20全景(東から)



(1) B地区掘立柱建物跡S  
B14(南から)



(2) B地区掘立柱建物跡S  
B15(東から)



(3) 掘立柱建物跡S B15柱  
穴断面(西から)



(1) A地区第1遺構面井戸  
S E02全景(南から)



(2) 井戸S E02遺物出土状  
況(南から)



(3) B地区井戸S E04全景  
(南から)

(1) B地区井戸 S E 03遺物  
出土状況①(西から)



(2) B地区井戸 S E 03遺物  
出土状況②(西から)



(3) B地区井戸 S E 03遺物  
出土状況③(西から)

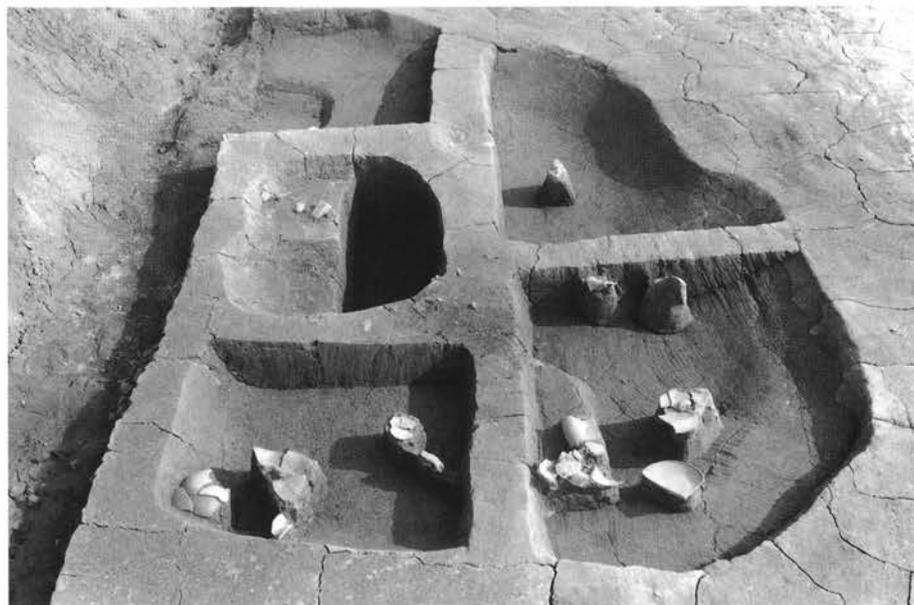




(1) B地区第1遺構面須恵器托出土状況(東から)



(2) 同須恵器托出土状況(南から)



(3) B地区第1遺構面土坑SK11(北から)



(1) B地区第1遺構面全景  
(南から)



(2) 同島畠遺構(南から)



(3) B地区掘立柱建物跡S  
B06(南から)



3



4



5



8



11



11



10



15



13



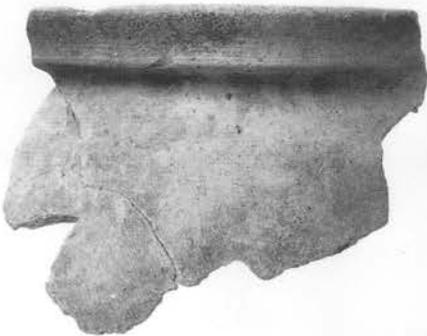
16



17



19



23



24



21



22



25



43



26



50



31



28



35



33



36



36



39



41



48



54



53



60



67



68



70



71



73



76



89



77



63



94



97



101



90



93



96



80



81



82



83



85



86



87



88



103



104



107



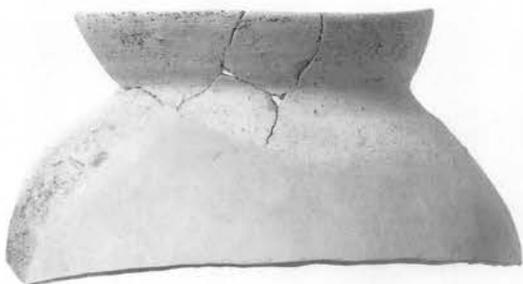
109



110



111



112



113



114



117



119



135



137



138



140



143



144



145



148



156



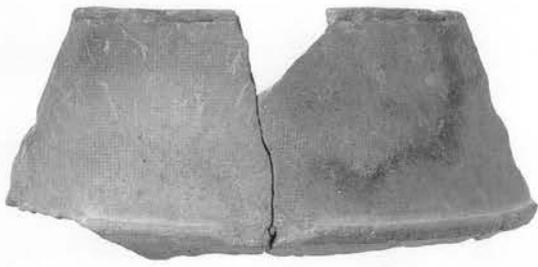
151



161



155



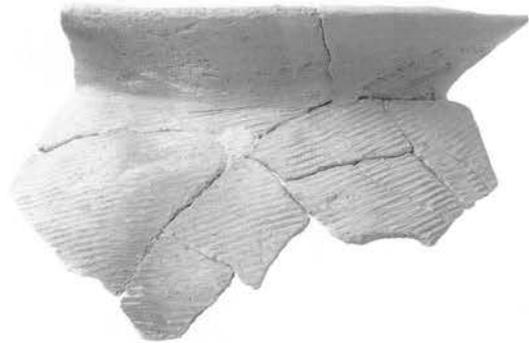
153



171



173



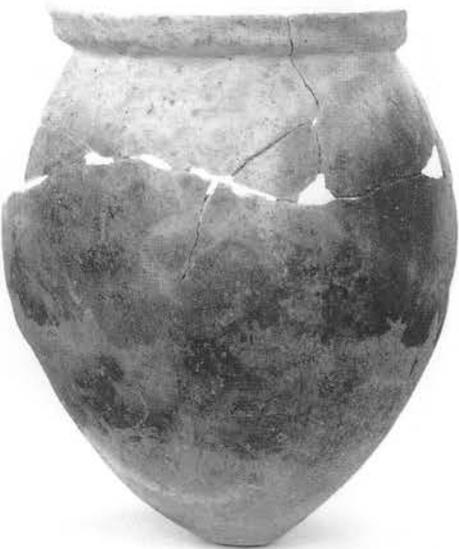
175



174



180



177



181



182



184



186



185



188



189



190



191





209



210



212



213



214



216



223



225



331



333



335



346



356



362



358



363



376



377



227



312



314



319



315



320



321



325



326



406



354



407



381



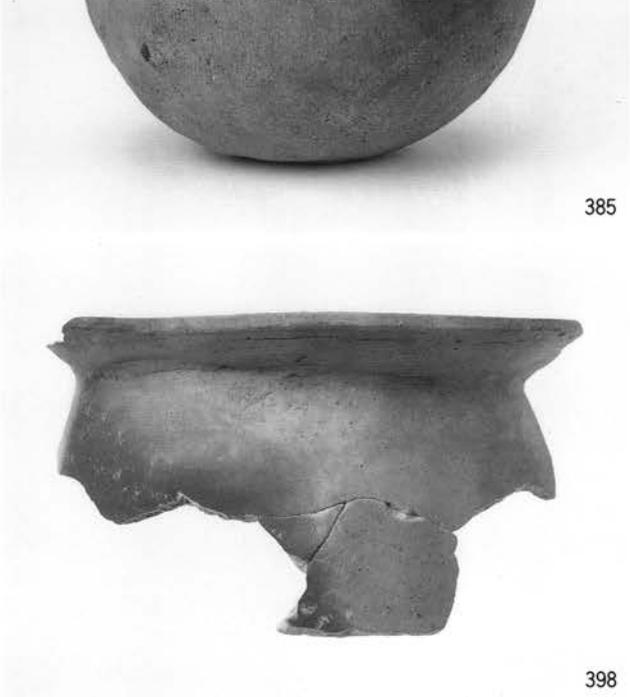
382



385



391



398



328



330



399



402



432



408



433



435



442



446



434



436



439



436



513



515



530



543



436



448



453



454



457



474



552



566



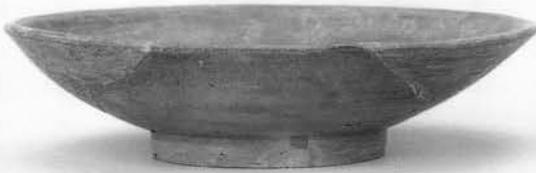
632



633



587



597



588



601



587・588



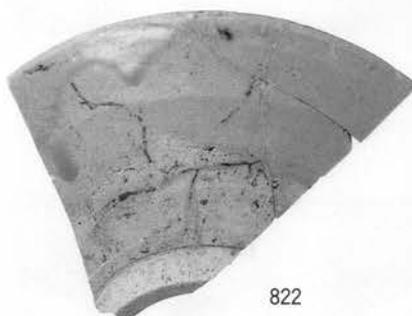
726



727



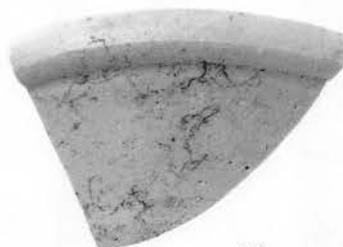
732



822



811



823



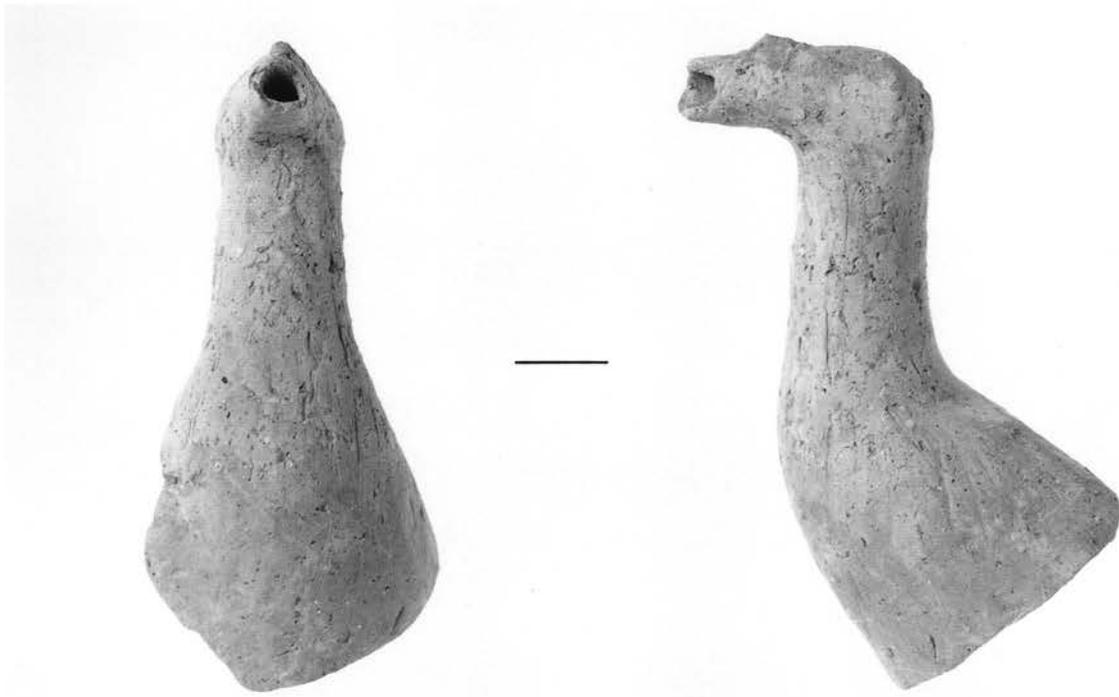
1



出土遺物(23)



2



118



6



7



3



4



5



11



12



8



10

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第26冊							
編著者名	竹原一彦・森下 衛							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1999 年 12 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 -	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちさとはっ ちよういせき 内里八丁遺 跡	やわたしおおあざう ちさとこあざはっ ちようほか 八幡市大字内里小 字八丁ほか	210	37	34° 51' 34"	135° 44' 17"	19890201 ~ 19950210	3,700	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
内里八丁遺 跡	集落・墳墓・水田	弥生時代後期末~ 古墳時代前期		水田跡・方形周溝墓		古式土師器・石器・ 管玉・鶏形土製品		稲株痕
		古墳時代中・後期		竪穴式住居跡		土師器・須恵器		
		飛鳥~平安時代		竪穴式住居跡・掘立柱建物 跡・井戸・溝		土師器・須恵器・石 帯・瓦・土馬		
		中世		鳥島・溝		土師器・瓦器・輸入 陶磁器		

京都府遺跡調査報告書 第26冊

平成11年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル  
Phone (075)441-3155 (代)

【京都府遺跡調査報告書】 第26冊 内里八丁遺跡Ⅰ 正誤表

項目	頁	場所	誤	正
本文目次	Ⅲ	下から6行目末	36	35
	〃	下から5行目	1. 器種分類～3. 出土遺物	<抹消>
検出遺構	12	下から10行目	27枚の水田跡	20枚の水田跡
	15	下から15行目	SD38	溝SD38
	〃	下から6行目	A地区	B地区
	16	上から12行目	第3遺構面	第4遺構面
	〃	上から14行目	(第62図3～10)	(図版第27上)
	〃	上から15行目	出土した土器に甕1点・小型壺1点・鉢1点を加える	
	19	下から9行目	東西2間(約1.8m)	東西2間(約4.65m)
	20	上から10行目	南から約16.5m	南から約1.65m
	21	上から15行目	SB04の西7m付近	SB05の西14m付近
	出土遺物	53	上から6行目	第5節
総括	54	下から8行目	B地区検出の水田跡～うかがえる。	<抹消>
	59	下から2行目	國下多美樹氏(論文 注16)を追加	
	60	上から13行目	(図版第53-172・1732)	(図版第33-172・173)
	62	注末尾	注16 國下多美樹「山城地域における古式土師器の様相」(『庄内式土器研究Ⅸ』庄内式土器研究会)1995 を追加	
出土遺物観察表	76	上段	図版第40・41 SK11	図版第40・41 各遺構出土遺物
図版第14		キャプション	誤SB04→正SB01、同SB03→SB02、同SB02→SB03、同SB01→SB04	
図版第15		〃	SX02	SX12
図版第16～23		スケール	4m	5m
図版第24		〃	SE02:4m	3m
図版第77		キャプション	(1) 誤SB04→正SB01、(2) 同SB03→SB02、(3) 同SB02→SB03	
図版第78		〃	(1) A地区掘立柱建物SB01(東から)	(1) A地区掘立柱建物SB04(東から)
図版第86		〃	左下 11	12
図版第89		〃	右上 28	47
〃		〃	右下 36	34
図版第92		〃	右中 93	92
図版第106		〃	右中段 436を図版第105の436上と入れ替、本図は449とする	